

茨城県教育財団文化財調査報告第413集

明石遺跡 2

主要地方道つくば真岡線バイパス
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県土浦土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第43集 石遺跡 2

茨城県教育財団文化財調査報告第413集

あけし 明石遺跡 2

主要地方道つくば真岡線バイパス
整備事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 28 年 3 月

茨城県土浦土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者からの委託を受けて、埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県土浦土木事務所による主要地方道つくば真岡線バイパス整備事業に伴って実施した、茨城県つくば市明石遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、平成9年度の調査に続き、弥生時代から平安時代の竪穴建物跡が確認でき、集落の様相がより明らかとなりました。これらの成果は、当地域の社会の成り立ちや歴史を知る上で、欠くことのできない貴重な資料となります。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県土浦土木事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成28年 3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は、茨城県土浦土木事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成24・25年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市明石686-2番地ほかに所在する明石遺跡^{あけし}の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査

平成24年度（Ⅷ区） 平成24年10月1日～平成24年10月31日

平成25年度（Ⅴ～Ⅶ区） 平成25年11月1日～平成26年1月31日

整理

平成27年9月1日～平成28年3月31日

- 3 発掘調査は、平成24年度が調査課長榎村宜行、平成25年度が調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。

平成24年度

首席調査員兼班長 稲田義弘

首席調査員 小林和彦

調査員 前島直人

平成25年度

首席調査員兼班長 酒井雄一

調査員 江原美奈子

調査員 佐藤一也

- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員江原美奈子が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、弥生土器については、（公財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 藤田典夫氏、亀田幸久氏に、土師質土器については、稲敷市立高田小学校長 川村満博氏に御指導いただいた。
- 6 第186号竪穴建物跡から出土した銅製品1点（匙カ）、第196号竪穴建物跡から出土した鉄製品2点（刀子、鏃）、第199号竪穴建物跡から出土した鉄製品1点（鎌）、第201号竪穴建物跡から出土した鉄製品1点（鐙）、遺構外から出土した鉄製品2点（刀子カ、鎌カ）の保存処理については、株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 20,120 \text{ m}$ 、 $Y = + 20,080 \text{ m}$ の交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3… とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, …o と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 調査区の呼称については、平成 9 年度調査分を調査 I～IV 区、平成 24 年度調査分を調査 VIII 区、平成 25 年度調査分を調査 V～VII 区としている。

3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。



遺構 P - ピット PG - ピット群 SB - 掘立柱建物跡 SD - 溝跡 SF - 道路跡 SI - 竪穴建物跡
SK - 土坑 SY - 炭窯跡 TP - 陥し穴
遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 N - 自然遺物 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器
土層 K - 攪乱

4 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・赤彩	 炉・火床面			
 竈部材・粘土範囲・黒色処理	 柱当たり・油煙・炭化範囲			
●土器	○土製品	□石器・石製品	△金属製品	- - - - 硬化面

5 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

6 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は () を、推定値は [] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

7 竪穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

8 今回の報告書で、整理作業の段階で遺構名を変更したものと及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SE 2 → SK273, SE 3 → SK274, SK250 → TP 9, PG 3-P 1 → SK275, PG 4-P 1 → SK276,
PG 4-P 2 → SK277

欠番 SI82・96・188

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
明石遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 縄文時代の遺構と遺物	11
陥し穴	11
2 弥生時代の遺構と遺物	16
(1) 竪穴建物跡	16
(2) 土器棺墓	22
3 古墳時代の遺構と遺物	24
(1) 竪穴建物跡	24
(2) 土坑	44
(3) 溝跡	46
4 奈良時代の遺構と遺物	47
(1) 竪穴建物跡	47
(2) 土坑	72
5 平安時代の遺構と遺物	73
(1) 竪穴建物跡	73
(2) 土坑	102
(3) 溝跡	104
6 鎌倉時代の遺構と遺物	106
(1) 掘立柱建物跡	106
(2) 土坑	107

(3) ピット群	108
7 江戸時代の遺構と遺物	110
炭窯跡	110
8 その他の遺構と遺物	114
(1) 竪穴建物跡	115
(2) 炭窯跡	116
(3) 土坑	118
(4) 溝跡	121
(5) 道路跡	126
(6) 段切遺構	127
(7) ピット群	128
(8) 遺構外出土遺物	130
第4節 まとめ	133
写真図版	PL 1～PL22
抄 録	
付 図	

あけし 明石遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

明石遺跡は、つくば市の北西部、桜川右岸の標高20～30mの舌状台地上に立地しています。つくば真岡線バイパス整備事業に伴い、遺跡の状況を図や写真に記録保存するため、茨城県教育財団が平成24・25年度に調査を行いました。調査面積は3,403㎡で、調査区は台地の先端部に位置し、台地上に広がる遺跡の中央部を南北に縦断するように位置しています。



調査の内容

調査によって、縄文時代（約1万年前）の陥し穴9基、弥生時代後期（約2,200年前）の竪穴建物跡2棟、土器棺墓2基、古墳時代前期（約1,700年前）の竪穴建物跡1棟、中期（約1,600年前）の竪穴建物跡1棟、後期（約1,500年前）の竪穴建物跡4棟、奈良時代（約1,300年前）の竪穴建物跡12棟、平安時代（約1,200年前）の竪穴建物跡12棟のほか、鎌倉時代の建物跡や江戸時代の炭窯跡などを確認しました。



第86・189号竪穴建物跡の調査風景



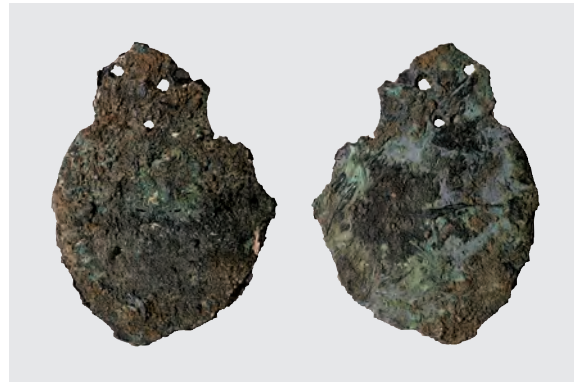
第 196 号 竪穴建物跡調査風景（古墳時代）



第 192 号 竪穴建物跡出土遺物（平安時代）



鎌倉時代の掘立柱建物跡と段切遺構



匙の可能性のある銅製品（奈良時代）

調査の成果

今回の調査によって、縄文時代から江戸時代まで、断続的に生活の痕跡が確認できました。当遺跡のある桜川中流域は、古墳時代前期になると大型古墳が築造されますが、当遺跡は弥生時代後期前半から本格的な集落が営まれ、これらの基盤となるムラであったと推測されます。また奈良時代では、多くの竪穴建物跡が確認でき、当集落は最盛期を迎えます。この時期に作られた第 186 号竪穴建物跡から、匙さじの可能性のある銅製品が出土しました。匙は仏くようを供養する飲食具の一つとされ、発掘調査では、官衙かんが関連遺跡のほか、村落内の有力者や下級役人、私度僧しどそう、庶民らによる「村落内寺院」が営まれた集落遺跡から出土する例があります。当遺跡では、仏堂の可能性のある建物跡は確認されていませんが、前回の調査では「佛」や「寺」と書かれた墨書土器や水瓶、灯明すいびょう とうみょうをあげる坏などが出土し、その存在が示唆しきされます。当遺跡は平安時代の後半まで多くの建物跡が確認でき、古代筑波郡諸蒲郷つくば すがまの中心的なムラであることが再確認されました。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成23年1月13日、茨城県土浦土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道つくば真岡線バイパス整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無、及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成23年3月11日に現地踏査を実施し、続いて平成23年10月20・21日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成23年12月9日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県土浦土木事務所長あてに、事業地内に明石遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

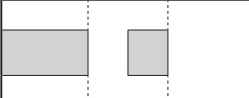
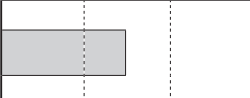
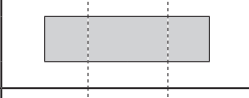
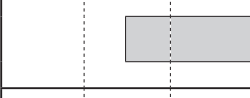
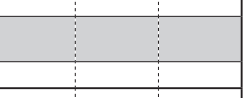
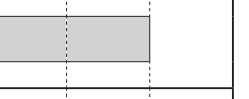
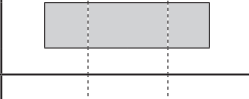
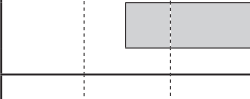
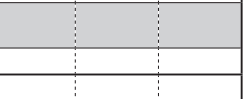



平成24年2月8日及び平成25年2月21日、茨城県土浦土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。これを受けて、茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成24年2月29日及び平成25年3月5日、茨城県土浦土木事務所長あてに工事着手前に発掘調査を実施するように通知した。

平成24年3月9日及び平成25年3月25日、茨城県土浦土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、主要地方道つくば真岡線バイパス整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成24年3月22日及び平成25年3月29日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県土浦土木事務所長あてに、明石遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県土浦土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成24年10月1日から10月31日まで、及び平成25年11月1日から平成26年1月31日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

明石遺跡の調査は、平成24年10月1日から10月31日までの1か月間、及び平成25年11月1日から平成26年1月31日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	平成25年度		
	平成24年度	11月	12月	1月
調査準備 表土除去 遺構確認				
遺構調査				
遺物洗浄 注写真整理				
撤収				

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

明石遺跡は、茨城県つくば市明石 686 - 2 番地ほかに所在している。

当遺跡が所在するつくば市西北部は、小貝川と桜川に挟まれた、洪積台地と沖積低地からなっている。洪積台地は常総台地の一部であり、筑波・稲敷台地と呼ばれている。台地の基本土層は、竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし、その上に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層 (0.3 ~ 0.5 m)、その上に関東ローム層 (0.5 ~ 2.5 m) が堆積し、最上部は腐植土層となっている。標高は、河川流域に展開する沖積低地や浸食谷を除けば、いずれも 20 ~ 30 m である。沖積低地は、地質上最新の地層で桜川低地と呼ばれ、古鬼怒川とされる幅 200 m ほどの鬼怒川水系の河川により開析されたものである。低地の幅は 2 ~ 3 km ほどである。

当遺跡は、東側を桜川低地に、西側を南から入り込んだ小支谷によって挟まれた、幅約 700 m で南に張り出した標高約 20 ~ 30 m の舌状台地上に位置している。当遺跡が立地する北から南に向かって緩やかに傾斜する台地上は畑地、宅地、山林などに利用されており、桜川低地は水田として土地利用がなされている。台地上と桜川低地面との比高差は 12 ~ 15 m である。

第2節 歴史的環境

明石遺跡周辺は、桜川や小貝川などの水系に恵まれ、古くから人々の生活が営まれてきた地域である。桜川流域は、縄文時代や弥生時代の遺跡が少ない反面、古墳時代以降の遺跡が多く確認されており、古墳時代は古墳の群集する地域として、また古代は筑波郡における重要な地域として捉えられる。

縄文時代の遺跡としては、明石北原遺跡〈2〉、寺具遺跡〈4〉、寺具琴平遺跡〈5〉、洞下庚窪遺跡〈6〉、上白畑遺跡〈8〉などがあるが、規模の大きな遺跡は見られない。明石北原遺跡、上白畑遺跡は、平成 9 年度に調査が行われ、明石北原遺跡では中期後半の土器片が出土したのみであるが、上白畑遺跡では陥し穴 1 基、中期後半加曾利 E I 式期の竪穴建物跡 1 棟や土坑 2 基などが確認されている¹⁾。当遺跡の約 4 km 南に位置する中台遺跡では、加曾利 E I 式期の袋状土坑が 379 基確認でき、当地域の中心的な集落跡と考えられる²⁾。南に約 1.5 km の作谷和台原遺跡〈25〉は、『常総古文化研究』に中期土器の出土の記述がある。平成 11 年につくば市教育委員会が試掘調査を行い、性格不明の落ち込みと、中期前半阿玉台 I b 式の土器が確認された³⁾。

弥生時代の遺跡は激減し、桜川低地に面する台地縁辺部にある中菅間福王地 A 遺跡〈12〉、水守荒神遺跡〈23〉、水守観音下遺跡〈24〉、山木古墳〈31〉、山木舛田遺跡〈32〉、桜川右岸の微高地にある中菅間遺跡〈20〉のほか、桜川左岸の低地にある神郡条里跡で確認されている程度である。当地域の弥生時代の遺跡は、桜川低地に面する台地上に立地する傾向にあり、稲作との関係も示唆される。山木古墳の調査では、墳丘下から後期の竪穴建物跡 1 棟が確認され、広口壺や土製紡錘車が出土した。神郡条里跡の調査では、トレンチ内から広口壺や土製紡錘車が出土している。水守荒神遺跡は、平成 9 年に行われた発掘調査で、後期の竪穴建物跡や溝跡などが調査されている。その北約 250 m の水守観音下遺跡では、後期の竪穴建物跡などが確認されている。

古墳時代になると遺跡は増加し、当遺跡の周辺でも明石北原遺跡や磯部安森遺跡〈3〉、洞下庚窪遺跡、上菅間洞下遺跡〈7〉、上白畑遺跡、池田道光寺遺跡〈10〉、中菅間福王地 A 遺跡などがある。当遺跡の位置する

桜川流域は、古墳時代前期から古墳の集中する地域として知られており、古墳時代の地域首長権が輪番的に継承されたことを示す典型的事例とされている。当地域で最も古いとされる水守桜塚古墳〈27〉は、長大な割竹形木棺を内蔵する粘土槨を埋葬施設に持つ、全長30mほどの前方後円墳と考えられているが、平成24年に行われた筑波大学の調査で、墳長約59mの前方後円墳であること、また時期についても比田井克仁氏による編年の南関東Ⅱ段階（4世紀前半）に遡るとの見解が示された⁴⁾。山木古墳は全長48mの柄鏡形の前方後円墳で、築造は5世紀初頭と考えられる。水守古墳群〈28〉は径32mと径35mの2基の円墳からなり、築造は5世紀後半と考えられる。沼田古墳群〈17〉の中の八幡塚古墳は、全長94mの当地域で最大級の前方後円墳で、県指定史跡に指定されている。埴輪の出土があり、築造は6世紀前半と考えられる。古墳時代後期から終末期の古墳には、中菅間大塚山古墳（前方後円墳・全長30m）〈13〉、池田亀の子塚古墳（円墳・径7m）〈14〉、上菅間赤淵古墳（円墳・径15m）〈15〉、中菅間稲荷塚古墳（円墳・径10m）〈19〉、池田古墳（円墳・径15m）〈21〉、山木坊ノ下古墳（前方後円墳・全長20m）〈33〉、山木古墳群（円墳3基・最大径10m）〈36〉などの小型の古墳が多く分布している⁵⁾。

奈良・平安時代の遺跡では、当遺跡南東の水守地区に水守城跡〈30〉、山木舛田遺跡、水守宿山遺跡〈34〉などがあり、約4.5km東には古代筑波郡の正倉である国指定史跡の平沢官衙遺跡がある。また、約4km東にある中台遺跡では、竪穴建物跡128棟、掘立柱建物跡1棟などが確認されている。中台遺跡の南東部では基壇状の高まりがみられ、礎石や石造露盤などが出土しており、中台廃寺跡に推定されている。以上のことから、当地域は古代筑波郡の中心的な地域と考えられる。平安時代中期、つくば市域をその舞台の一部に巻き込んだ平将門の乱が勃発している。この乱を詳細に記実した『将門記』によると、承平6年に「水守の営所」で平良正・貞盛らが対将門戦の軍議を行った、という記述がある。この記事にある「水守の営所」は、北に条里水田をひかえた舌状台地上にあり、その立地条件のよさから中世城郭に転用され、水守城跡として残ったものと思われる。明石北原遺跡からは、南北に走る3条の溝跡から平安時代末期の土師器が出土している。

中世においては、桜川左岸の北条地区や筑波山南東麓の小田地区周辺に中世の遺跡が集中する。当遺跡から約3km東に位置する小泉館跡は、平成5年に発掘調査が行われ、13世紀から15世紀の掘立柱建物跡や土坑、多量の遺物が出土している⁶⁾。また約6km東の小田城跡は、常陸南部に勢力を持っていた小田氏の居城で、南北朝時代に北畠親房が『神皇正統記』を執筆した地としても知られている。昭和10年に国指定史跡の指定を受け、平成9年度以降、史跡整備に伴う確認調査が行われており、内部の構造が明らかにされている⁷⁾。

※本章は、既刊の『茨城県教育財団文化財調査報告』第164集を参照し、加筆した。文中の〈 〉内の番号は、表1及び第1図の該当番号と同じである。

註

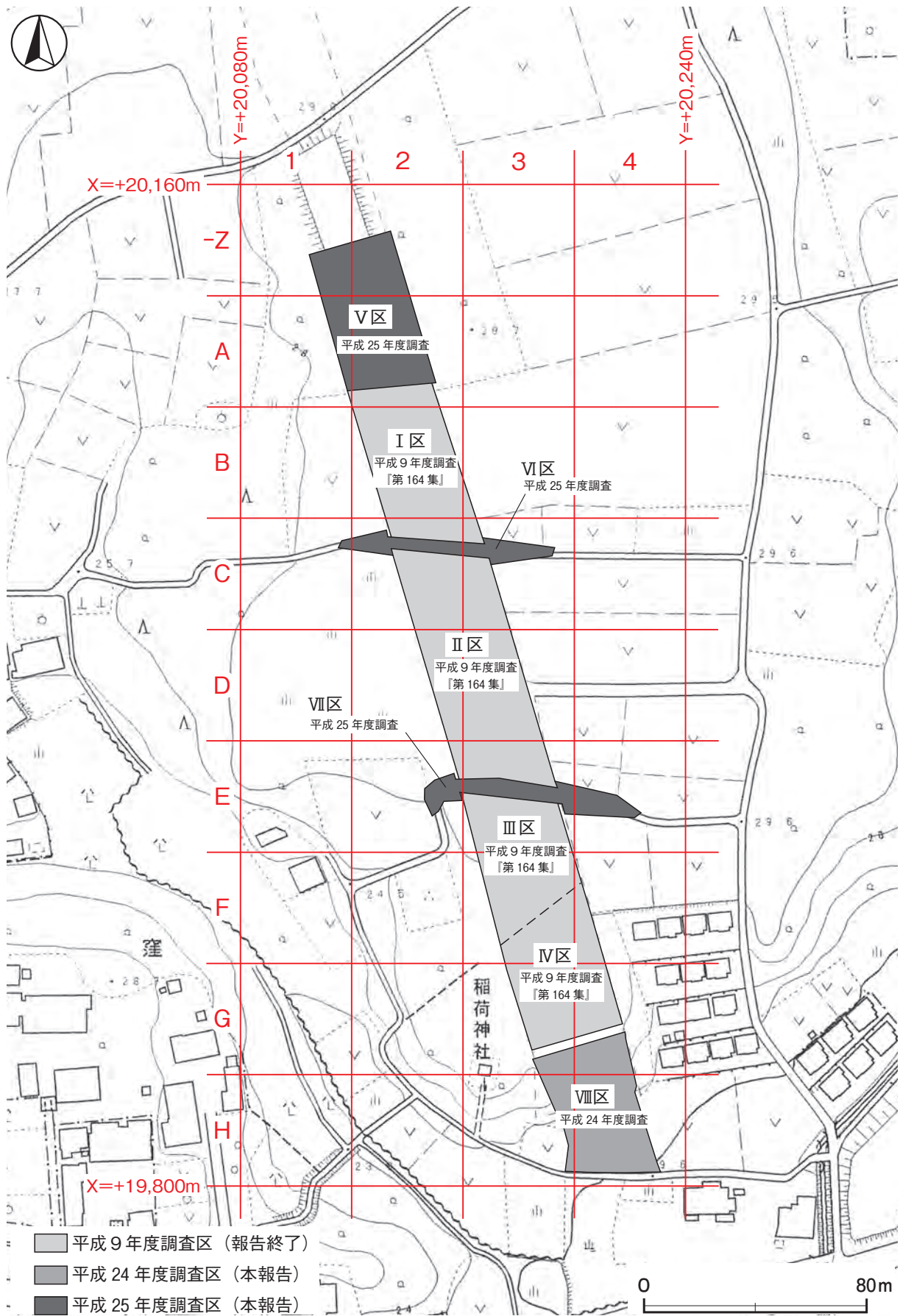
- 1) 寺門千勝 大関武「主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 明石遺跡 明石北原遺跡 上白畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第164集 2000年3月
- 2) 吉川明宏 新井聡 黒澤秀雄「(仮称)北条住宅団地建設工事地内埋蔵文化財調査報告書 中台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第102集 1995年12月
- 3) 石橋充『つくば市内遺跡－平成10年度発掘調査報告－』つくば市教育委員会 1999年3月
- 4) 滝沢誠 宮内優子 田代恵美 和泉直樹 山下優介 齋木誠 福田誠「つくば市水守桜塚古墳2012年度発掘調査概要」『筑波大学先史学・考古学研究』第25号 筑波大学 2014年3月
- 5) 佐々木憲一 田中裕『常陸の古墳群』六一書房 2010年2月
- 6) 矢ノ倉正男「一般県道長高野筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 小泉館跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第97集 1995年3月
- 7) 石橋充 広瀬季一郎『史跡小田城跡－第48次調査(本丸跡確認調査Ⅳ)概要報告－』つくば市教育委員会 2005年3月



第1図 明石遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「筑波」「上郷」）

表1 明石遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	明石遺跡	○	○	○	○	○	○	○	19	中菅間稲荷塚古墳				○			
2	明石北原遺跡		○		○	○	○	○	20	中菅間遺跡			○	○			
3	磯部安森遺跡				○				21	池田古墳			○				
4	寺具遺跡		○						22	明石南遺跡		○					
5	寺具琴平遺跡		○						23	水守荒神遺跡			○	○			
6	洞下庚窪遺跡		○		○				24	水守観音下遺跡			○				
7	上菅間洞下遺跡		○		○				25	作谷和台原遺跡		○					
8	上白畑遺跡		○		○	○			26	作谷十九耕地古墳			○				
9	洞下谷越遺跡		○						27	水守桜塚古墳			○				
10	池田道光寺遺跡				○				28	水守古墳群			○				
11	中菅間福王地B遺跡		○						29	水守遺跡			○				
12	中菅間福王地A遺跡		○	○	○				30	水守城跡					○	○	
13	中菅間大塚山古墳				○				31	山木古墳			○	○			
14	池田亀の子塚古墳				○				32	山木舛田遺跡			○		○		
15	上菅間赤渕古墳				○				33	山木坊ノ下古墳			○				
16	上菅間遺跡				○				34	水守宿山遺跡					○	○	
17	沼田古墳群				○				35	山木東原遺跡			○				
18	沼田遺跡		○						36	山木古墳群			○				



第2図 明石遺跡調査区設定図 (つくば市都市計画図 2,500 分の 1)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

明石遺跡はつくば市の北西部に位置し、東側を桜川低地に、西側を南から入り込む小支谷によって挟まれた標高20～30mの舌状台地上及び緩斜面部に位置している。遺跡の範囲は約17万㎡で、そのほぼ中央を南北に調査区が設定されている。今回報告するのは、平成9年度に調査し平成11年度に報告済であるⅠ～Ⅳ区の北側及び南側のⅤ・Ⅷ区と、前回調査時には農道であったⅥ・Ⅶ区である。調査面積は平成24年度が1,365㎡、平成25年度が2,038㎡で、調査前の現況は畑地、山林、荒地である。

調査の結果、竪穴建物跡33棟（弥生時代2、古墳時代6、奈良時代12、平安時代12、時期不明1）、掘立柱建物跡1棟（鎌倉時代）、陥し穴9基（縄文時代）、土器棺墓2基（弥生時代）、土坑30基（古墳時代2、奈良時代1、平安時代3、鎌倉時代1、時期不明23）、炭窯跡5基（江戸時代3、時期不明2）、溝跡19条（古墳時代1、平安時代1、時期不明17）、道路跡3条（時期不明）、段切遺構1か所（時期不明）、ピット群3か所（鎌倉時代1、時期不明2）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に31箱出土している。主な遺物は、弥生土器（広口壺）、土師器（坏・椀・高台付椀・埴・器台・高坏・鉢・壺・甕・甑）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・盤・短頸壺・甕・甑）、土師質土器（小皿）、陶器（碗・灯明皿）、磁器（碗）、土製品（土玉・紡錘車・支脚）、石器（搔器・鏃・磨石・砥石）、石製品（支脚・五輪塔）、金属製品（刀子・鏃・鎌・匙カ）、炭化種子（モモ）などである。

第2節 基本層序

調査区北部の台地上の平坦面（A 1 d9区）にテストピットを設定し、土層の堆積状況を観察した。なお、平成9年度の調査で、調査区中央のC 2 f5区にテストピットを設定しており、再録して参照することとした。土層は8層に分層できる。土層観察は以下の通りである。

第1層は、黒褐色を呈する腐植土層である。粘性・締まりとも弱く、層厚は10～20cmである。

第2層は、暗褐色を呈する耕作土である。ローム粒子を多量に含み、層厚は50～60cmである。

第3層は、明褐色のハードローム層である。白色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は15～30cmである。平成9年度調査区の第4層に対応する。

第4層は、にぶい橙色のハードローム層である。白色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は60～70cmである。平成9年度調査区の第5層に対応する。

第5層は、にぶい褐色のハードローム層である。白色粒子を微量含み、粘性・締まりともに非常に強く、層厚は35～45cmである。平成9年度調査区の第5層に対応する。

第6層は、暗褐色のハードローム層である。赤色粒子・黒色粒子・粘土粒子を少量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は15～30cmである。平成9年度調査区の第6層に対応する。

第7層は、明褐色のハードローム層である。黒色粒子を少量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は10cmである。平成9年度調査区の第6層に対応する。

第8層は、灰白色の常総粘土層である。粘性・締まりともに極めて強い。下層が未掘のため、本来の層厚は

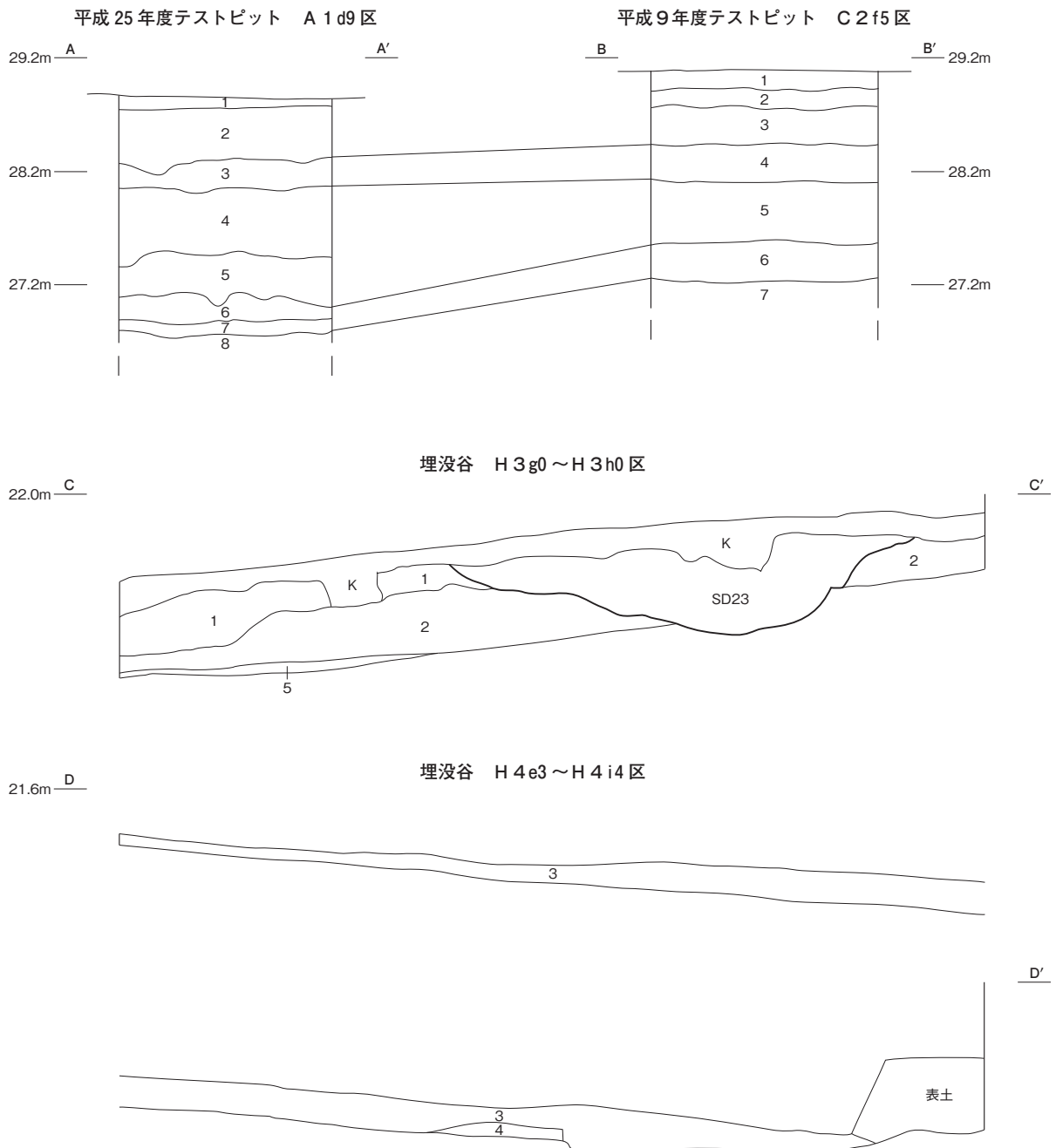
不明である。平成9年度調査区の第7層に対応する。

遺構は、第3層上面で確認できた。

なお調査区南部のG 4 d1区から南側は、南から延びる支谷が入り込み、埋没谷が形成されている。埋没谷の範囲は、東西30 m、南北60 mで、さらに調査区の東西及び南に延びている。埋没谷堆積土の下で、縄文時代の陥し穴や弥生時代の土器棺墓などを確認している。H 4 e3～H 4 i4区及びH 3 g0～H 3 h0区で、埋没谷の堆積状況を確認した。第1～4層が埋没谷の堆積土で、おおよそ暗褐色土・黒褐色土・黒色土・灰褐色土の順で堆積している。第5層以下は地山で、常総粘土層に対応するものと考えられる。

埋没谷土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 褐灰色 | 粘土粒子多量 |
| 2 黒褐色 | 粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 灰褐色 | 粘土粒子多量、ローム粒子少量 |
| 3 黒色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | | |



第3図 基本土層図・埋没谷土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴9基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

陥し穴

第5号陥し穴（第4図）

調査年度 平成24年度

位置 調査Ⅷ区南部のH4e1区、標高22mほどの斜面部に位置している。

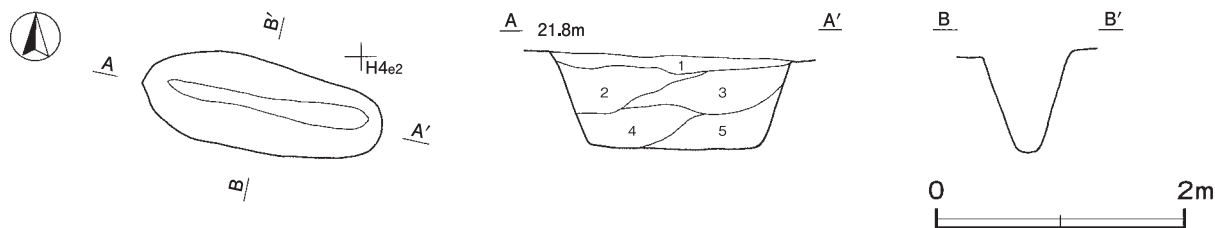
規模と形状 長径1.93m、短径0.73mの楕円形で、長径方向はN-79°-Wである。深さは79cmで、底面は幅15~20cmと狭く、ほぼ平坦である。短径方向の断面形は逆台形で、壁はほぼ直立している。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子、粘土粒子が含まれている層が、東側から流れ込むように堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|--------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 3 黒褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・砂粒微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 4 極暗褐色 | 砂粒少量、粘土粒子微量 |
| | | 5 極暗褐色 | 粘土粒子・砂粒少量 |

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、形状から縄文時代と考えられる。



第4図 第5号陥し穴実測図

第6号陥し穴（第5図）

調査年度 平成24年度

位置 調査Ⅷ区南部のH4a4区、標高23.5mほどの斜面部に位置している。

重複関係 第7号陥し穴を掘り込んでいます。

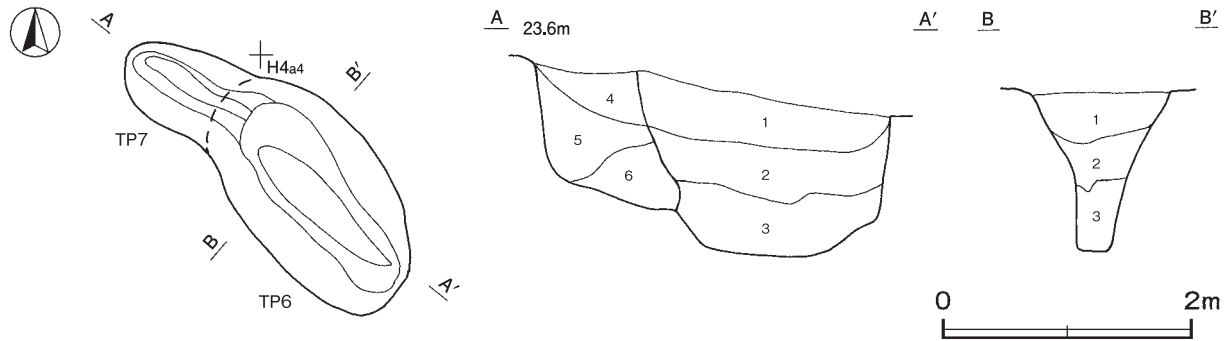
規模と形状 長径2.06m、短径1.16mの楕円形で、長径方向はN-41°-Wである。深さは123cm、底面は幅30cmほどで、南西側に向かって緩やかに傾斜している。短径方向の断面形は逆台形で、壁は底面から70cmまで直立し、くびれ部から上位は外傾している。

覆土 3層に分層できる。ローム粒子が含まれている黒褐色土が主体で、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量（本跡覆土） | 5 黒褐色 | 粘土粒子少量、炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量（第7号陥し穴覆土） |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量（本跡覆土） | 6 褐色 | 粘土粒子多量（第7号陥し穴覆土） |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子微量（本跡覆土） | | |
| 4 黒褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量（第7号陥し穴覆土） | | |

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、形状から縄文時代と考えられる。



第5図 第6・7号陥し穴実測図

第7号陥し穴（第5図）

調査年度 平成24年度

位置 調査Ⅷ区南部のH4a3区、標高23.5mほどの斜面部に位置している。

重複関係 第6号陥し穴に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が第6号陥し穴に掘り込まれているため、北東・南西径は0.69mで、北西・南東径は1.06mしか確認できなかった。平面形は楕円形で、長径方向はN-60°-Wと推測できる。深さは106cmで、底面は幅10~15cmと狭く、南東方向に傾斜している。壁はほぼ直立している。

覆土 3層に分層できる。ローム粒子が含まれている黒褐色土が主体で、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、形状から縄文時代と考えられる。

第8号陥し穴（第6図）

調査年度 平成24年度

位置 調査Ⅷ区南部のH4b3区、標高23.5mほどの斜面部に位置している。

規模と形状 長径1.80m、短径0.92mの楕円形で、長径方向はN-47°-Wである。深さは99cmで、底面は幅10cmと狭く、ほぼ平坦である。短径方向の断面形はV字形で、壁は底面から高さ55cmまで直立し、くびれ部から上位は外傾している。

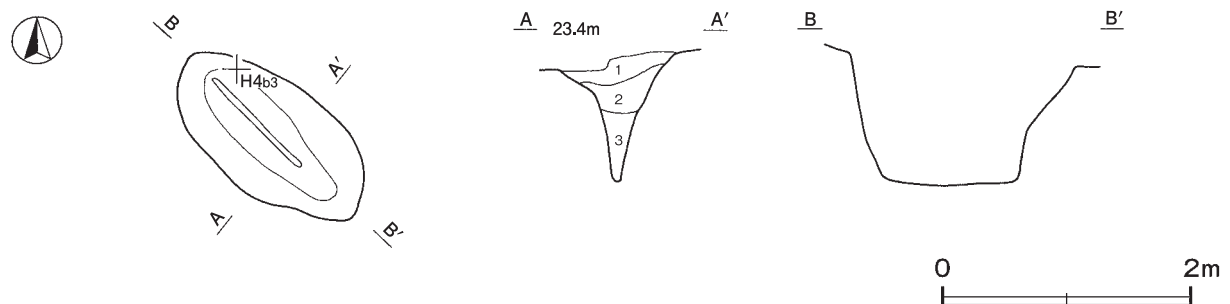
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれる層が、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

- 3 暗褐色 ロームブロック少量（2層よりやや暗）

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、形状から縄文時代と考えられる。



第6図 第8号陥し穴実測図

第9号陥し穴（第7図）

調査年度 平成24年度

位置 調査Ⅷ区南部のH4e6区，標高20.5mほどの斜面部に位置している。

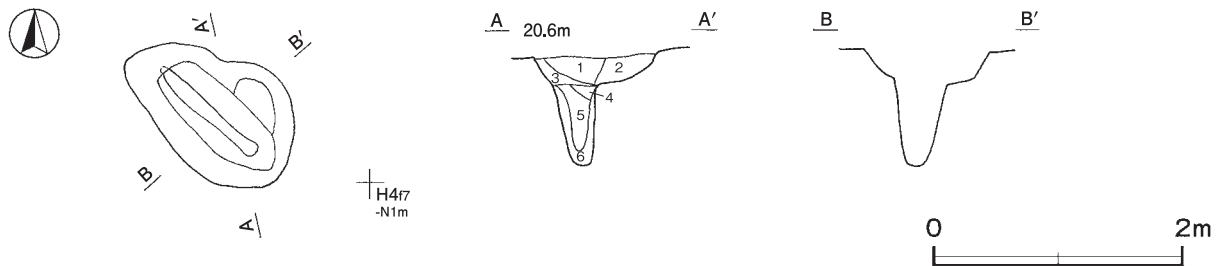
規模と形状 長径1.48m，短径0.98mの不整楕円形で，北東側の一部が不整形に広がっている。長径方向はN-45°-Wである。深さは95cmで，底面は幅10cmと狭く，ほぼ平坦である。壁は底面から高さ62cmまで直立し，くびれ部から上位は外傾している。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックや粘土ブロックが含まれている層が，レンズ状に堆積していることから，自然堆積である。

土層解説

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 4 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量 | 5 灰黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量 | 6 にお黄褐色 粘土ブロック中量，ローム粒子少量 |

所見 北東側の土坑状の張り出しは，覆土の堆積状況から本跡を掘り込む別土坑の可能性もあるが，覆土が類似していることから，一つの遺構と判断した。時期は，出土遺物がないため明確ではないが，形状から縄文時代と考えられる。



第7図 第9号陥し穴実測図

第10号陥し穴（第8図）

調査年度 平成24年度

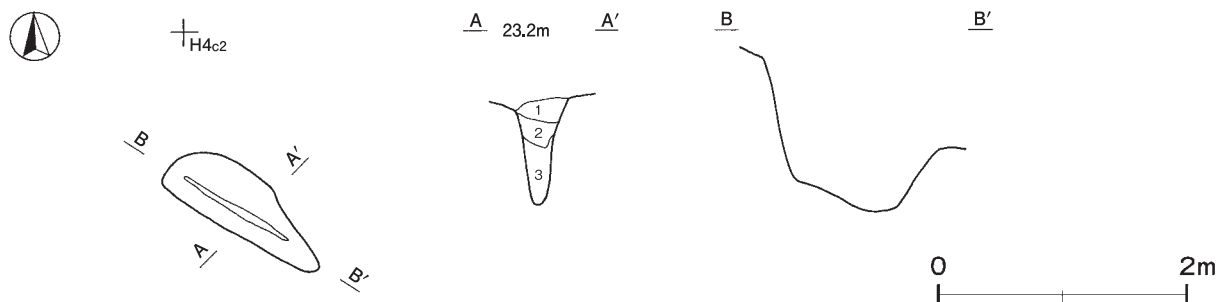
位置 調査Ⅷ区南部のH4c2区，標高23mほどの斜面部に位置している。

規模と形状 長径1.42m，短径0.46mの不整楕円形で，長径方向はN-58°-Wである。深さは81cmで，底面は幅10cmと狭く，南東側に向かって傾斜している。短径方向の断面形はV字形で，壁は底面から高さ55cmまで直立し，くびれ部から上位は外傾している。

覆土 3層に分層できる。焼土ブロックや粘土ブロックが含まれている層が，レンズ状に堆積することから，自然堆積である。

土層解説

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子少量，粘土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 粘土粒子少量，ローム粒子微量 | |



第8図 第10号陥し穴実測図

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、形状から縄文時代と考えられる。

第 11 号陥し穴 (第 9 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅵ区西部の C 2 b3 区、標高 29 m ほどの台地上に位置している。

重複関係 第 30・37 号溝に掘り込まれている。

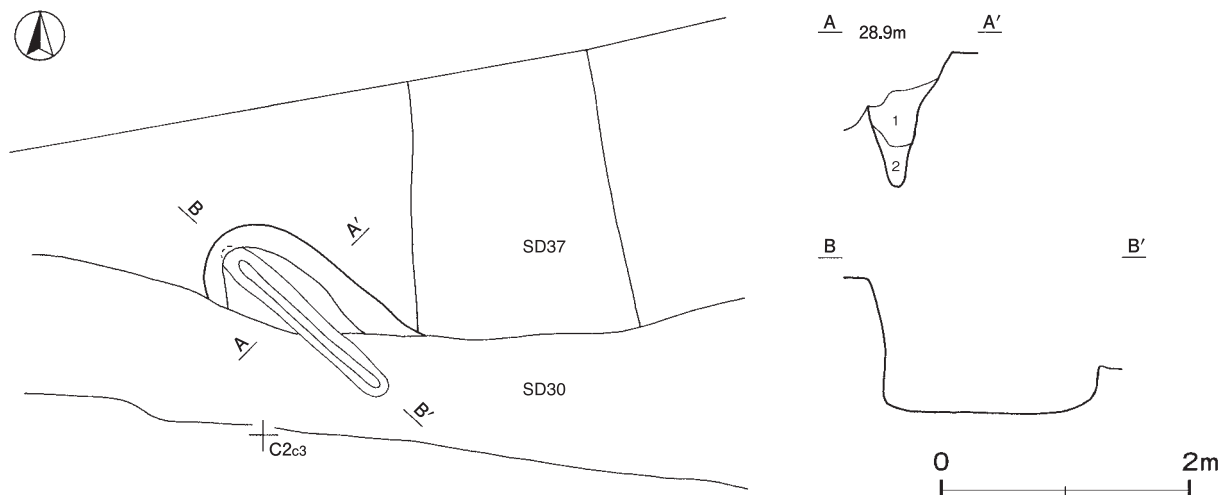
規模と形状 南半部が第 30・37 号溝に掘り込まれているため、北西・南東径は 1.80 m、北東・南西径は 0.80 m しか確認できなかった。平面形は楕円形で、北西・南東径方向は $N - 48^\circ - W$ と推測できる。深さは 108cm で、底面は幅 5 ~ 10cm と狭く、ほぼ平坦である。北西・南東壁は底面から高さ 40cm まで内彎し、上位は外傾している。北東・南西径方向の断面形は V 字形で、壁は底面から高さ 64cm まで直立し、くびれ部から上位は外傾している。

覆土 2 層に分層できる。ローム粒子が含まれている層が、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 2 褐色 ローム粒子中量

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、形状から縄文時代と考えられる。



第 9 図 第 11 号陥し穴実測図

第 12 号陥し穴 (第 10 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅵ区西部の C 2 c2 区、標高 29 m ほどの台地上に位置している。

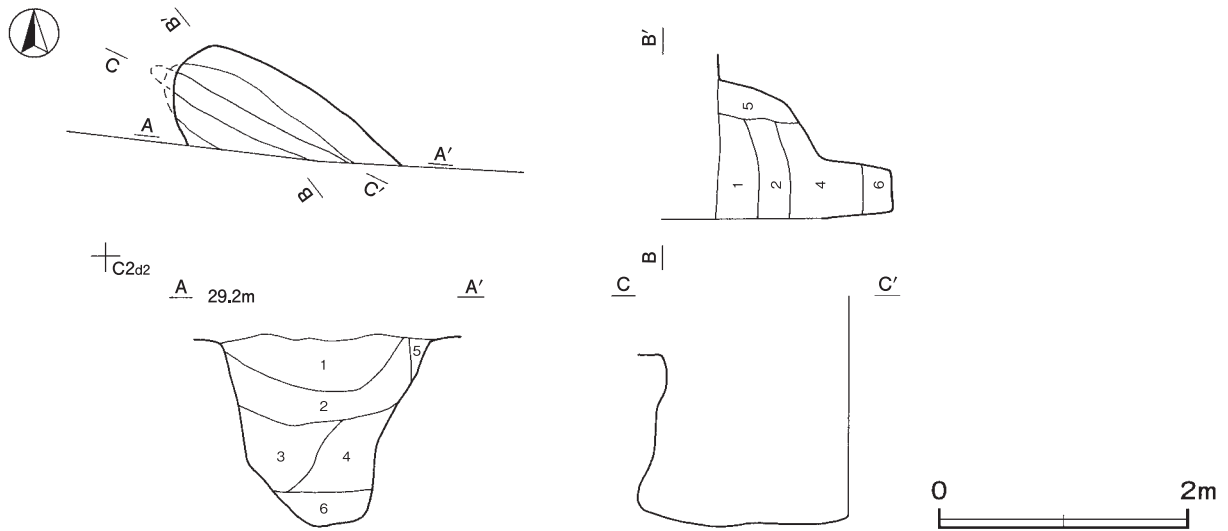
規模と形状 南部が調査区域外へ延びているため、長径は 2.15 m、短径は 0.85 m しか確認できなかった。平面形は楕円形で、長径方向は $N - 65^\circ - W$ と推測できる。深さは 137cm で、底面は幅 15 ~ 20cm と狭く、ほぼ平坦である。長径方向の壁は、底面から高さ 104cm まで内彎して立ち上がり、くびれ部から上位は外傾している。短径方向の断面形は逆台形で、壁は底面から高さ 60cm まで直立し、くびれ部から上位は外傾している。

覆土 6 層に分層できる。ローム粒子が含まれている層が、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 4 褐色 ローム粒子少量
2 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 5 褐色 ローム粒子中量、炭化物微量
3 褐色 ローム粒子中量 6 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、形状から縄文時代と考えられる。



第10図 第12号陥し穴実測図

第13号陥し穴（第11図）

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅵ区西部のC3d4区、標高29mほどの台地上に位置している。

重複関係 第206号竪穴建物、第30・31号溝に掘り込まれている。

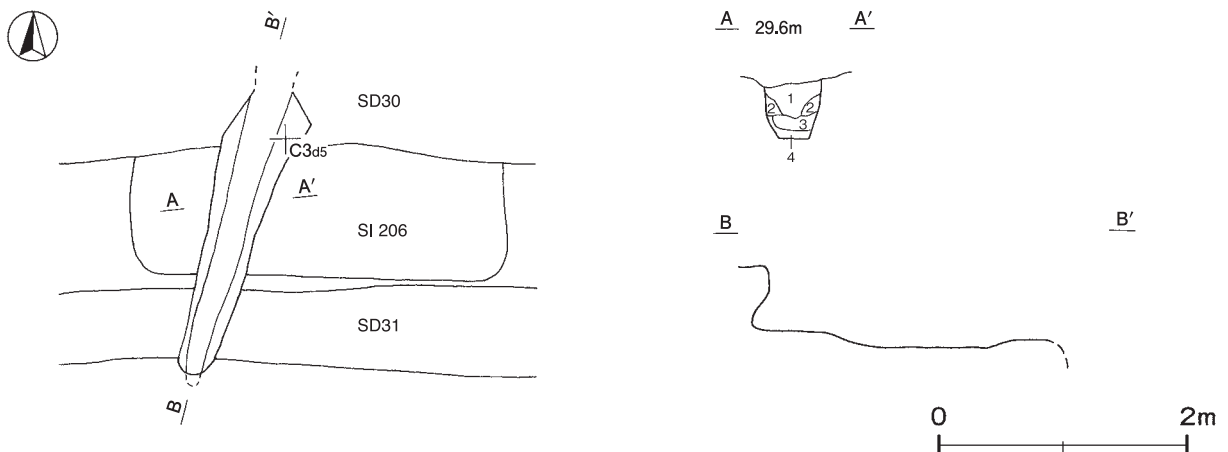
規模と形状 上部を第206号竪穴建物、北部を第30号溝、南部を第31号溝に掘り込まれているため、くびれ部から下しか確認できなかった。確認できた規模は、長径2.62m、短径0.54mである。平面形は楕円形で、長径方向はN-18°-Eと推測できる。深さは63cmで、底面は幅が15~20cmと狭く、北側に向かって傾斜している。長径方向の壁は底面から高さ42cmまで内彎して立ち上がり、くびれ部から上位は外傾している。短径方向の断面形は逆台形で、壁は外傾している。

覆土 4層に分層できる。ローム粒子が含まれている層が、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------|----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 2 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 極暗褐色 ローム粒子中量 |

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、形状から縄文時代と考えられる。



第11図 第13号陥し穴実測図

表2 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
5	H 4 e1	N - 79° - W	楕円形	1.93 × 0.73	79	平坦	ほぼ直立	自然	-	
6	H 4 a4	N - 41° - W	楕円形	2.06 × 1.16	123	傾斜	直立外傾	自然	-	TP 7→本跡
7	H 4 a3	N - 60° - W	[楕円形]	(1.06) × 0.69	106	傾斜	ほぼ直立	自然	-	本跡→TP 6
8	H 4 b3	N - 47° - W	楕円形	1.80 × 0.92	99	平坦	直立外傾	自然	-	
9	H 4 e6	N - 45° - W	不整楕円形	1.48 × 0.98	95	平坦	直立外傾	自然	-	
10	H 4 c2	N - 58° - W	不整楕円形	1.42 × 0.46	81	傾斜	直立外傾	自然	-	
11	C 2 b3	N - 48° - W	[楕円形]	(1.80) × (0.80)	108	平坦	外傾内彎	自然	-	本跡→SD30・37
12	C 2 c2	N - 65° - W	[楕円形]	(2.15) × (0.85)	137	平坦	外傾内彎	自然	-	
13	C 3 d4	N - 18° - E	[楕円形]	(2.62) × (0.54)	(63)	傾斜	外傾内彎	自然	-	本跡→SI206, SD30・31

2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡2棟、土器棺墓2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第135号竪穴建物跡（第12・13図）

調査年度 平成25年度。南西コーナー部は平成9年度に調査し、当財団調査報告『第164集』において報告している。

位置 調査Ⅶ区東部のE 3 e9区、標高29 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 平成9年度の調査で、本跡を掘り込む第96号竪穴建物跡が確認されているが、今回の調査では確認することができなかった。

規模と形状 北部が調査区域外に延びているため、東西軸は8.53 mで、南北軸は4.35 mしか確認できなかった。隅丸長方形と推定でき、主軸方向はN - 54° - Wである。壁は高さ16～46 cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。南壁下には壁溝が巡っている。

炉 北半分が調査区域外に延びているため、長径130 cm、短径は60 cmしか確認できなかった。楕円形と推定され、床面のほぼ中央に付設されたと考えられる。深さ10 cmの地床炉で、炉底面は火熱を受けて赤変硬化している部分が2か所確認できる。

炉土層解説

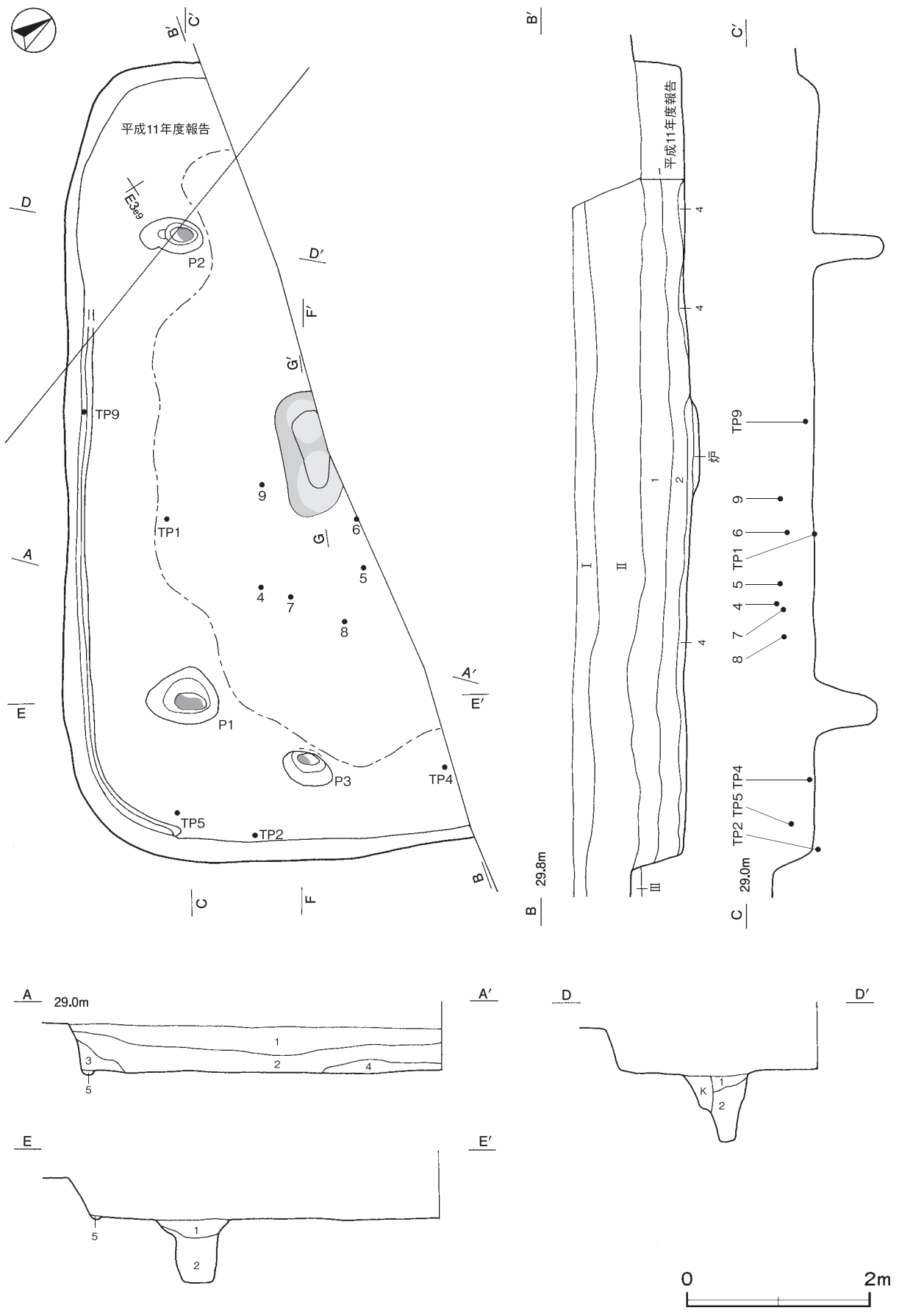
- 1 明赤褐色 焼土粒子多量
- 2 灰赤色 ローム粒子・焼土粒子少量

ピット 3か所。いずれも建物の短軸方向に長い楕円形に掘り込まれている。P 1・P 2は深さ70 cmで、位置から支柱穴である。P 1・P 2とも底面に柱の当たりが確認できた。P 3は深さ60 cmで、位置から出入口施設に伴うピットと考えられる。西壁方向に傾斜して掘り込まれ、底面には柱の当たりが見られる。覆土は第2層がローム粒子を多く含む土で、柱抜き取り後の埋め戻し土、第4層は黒褐色土で、柱痕跡の可能性もある。

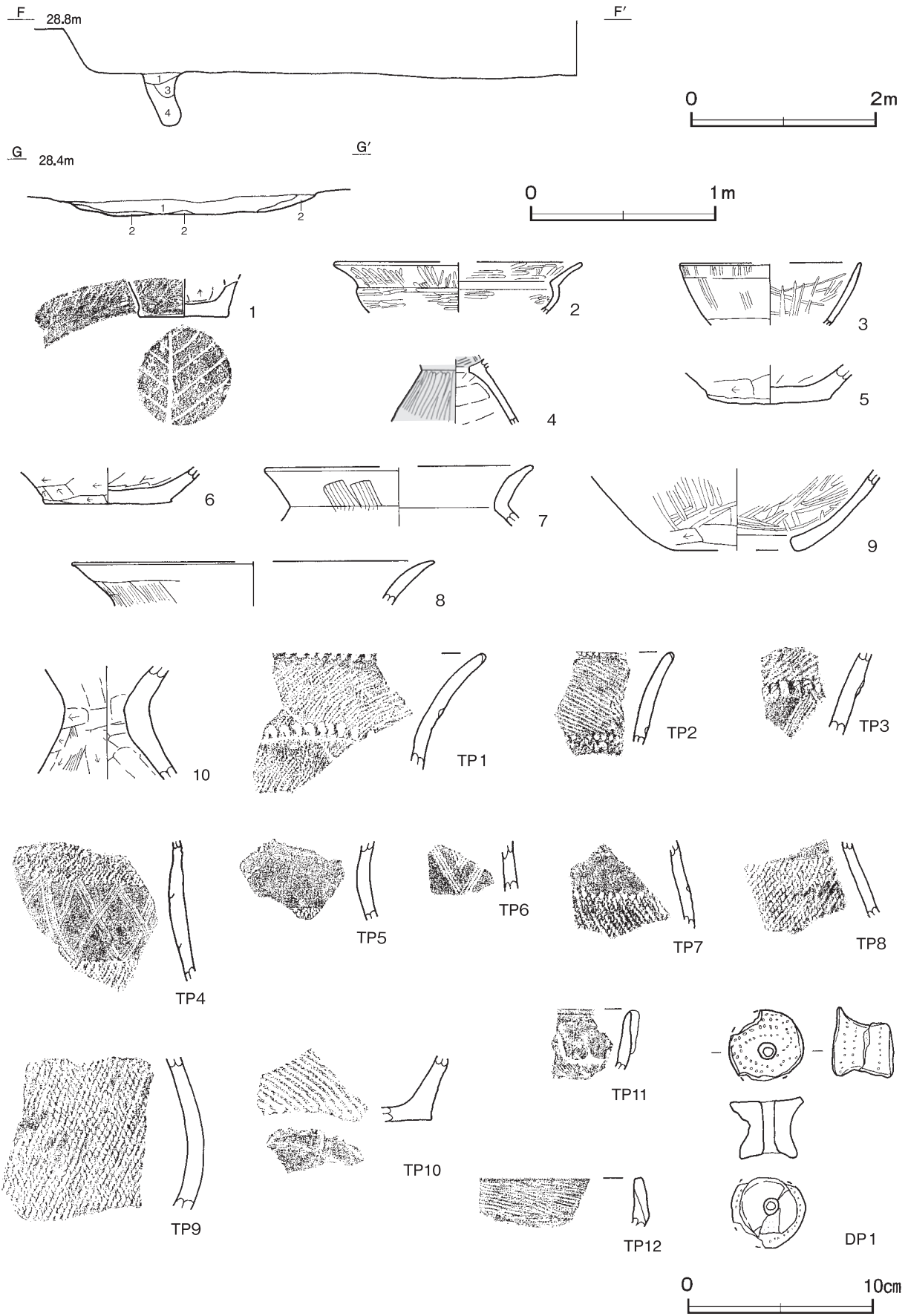
ピット土層解説（共通）

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

覆土 5層に分層できる。いずれも粘性、締まりともに強く、ロームブロックや焼土ブロック、炭化粒子が少量含まれているものの、レンズ状の堆積状況から、自然堆積である。



第 12 図 第 135 号竪穴建物跡実測図



第 13 图 第 135 号竖穴建物跡・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|-----------------------|
| I 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量（表土層） | 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| II 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 2 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| III 褐色 | ローム粒子中量，炭化粒子微量（ローム漸移層） | 3 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| | | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量 |
| | | 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量（壁溝覆土） |

遺物出土状況 弥生土器片 210 点（広口壺），土師器片 211 点（埴 7，器台 7，鉢 1，壺 30，甕類 165，甑 1），土製品 1 点（紡錘車），石英片 7 点（12.39 g），礫 2 点のほか，須恵器片 2 点（坏，甕類）が出土している。2～10 はいずれも覆土上層から中層で出土しており，これら以外の土師器片もほとんどが覆土上層からの出土である。1 や TP 1～TP 4・TP 6～TP10 は床面あるいは覆土下層から出土しており，これら以外の弥生土器片も同様の傾向がある。掲載外の礫 1 点は床面からの出土で，長径 15cm の安山岩である。火熱を受けていることから，炉石の可能性はある。石英片は，覆土下層及び床面から出土している。

所見 時期は，出土土器から後期前葉と考えられる。平成 9 年度の調査で，本跡とほぼ同じ位置で第 96 号竪穴建物跡が確認されている。第 96 号竪穴建物跡の床面が，本跡の第 2 層上面にほぼ相当し，出土土器も覆土中層以上と覆土下層では時期が異なっていることから，第 1 層を覆土とし，第 2 層上面を床面とする古墳時代前期の第 96 号竪穴建物跡との重複も考えられる。しかし，今回の調査では，第 2 層上面で床面や炉石，柱穴等を確認できなかったことから，前回確認した第 96 号竪穴建物跡は本跡の覆土の一部と判断した。2～10，TP11・TP12 などの遺物はいずれも破片であることから，本跡の南東に位置する第 196 号竪穴建物跡からの流れ込みと考えられる。

第 135 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 13 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	-	(2.0)	4.9	長石・石英・雲母	黒褐	普通	胴部外面附加条一種 (LR + 2R) 縄文 内面指頭ナデ 底面木葉痕	覆土下層	10% PL20
2	土師器	埴	[13.4]	(2.7)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面ヘラナデ後磨き 体部外・内面ヘラナデ後磨き	覆土上層	20%
3	土師器	壺	[9.6]	(3.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	磨減著しい 口縁部外・内面ヘラナデ後磨き	覆土中層	10%
4	土師器	器台	-	(3.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	脚部外面ヘラナデ後磨き 内面ヘラナデ	覆土上層	10%
5	土師器	甕	-	(2.2)	6.6	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底面粗いヘラナデ	覆土上層	10%
6	土師器	甕	-	(2.0)	6.9	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底面粗いヘラナデ	覆土上層	10%
7	土師器	甕	[14.2]	(3.2)	-	長石・石英・細礫	橙	普通	口縁部外面ハケ目調整後横ナデ 内面横ナデ	覆土上層	10%
8	土師器	甕	[19.3]	(2.4)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外面ハケ目調整後横ナデ 内面横ナデ	覆土上層	5%
9	土師器	甑	-	(4.5)	[6.5]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り後磨き 内面ヘラナデ後磨き	覆土上層	5%
10	土師器	器台	-	(6.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	脚部外面ハケ目調整後ヘラナデ 内面指頭ナデ	覆土上層	10%
TP11	土師器	鉢	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	複合口縁 外面指頭ナデ 内面ヘラナデ 体部外面ハケ目調整 内面ヘラナデ	覆土上層	PL20
TP12	土師器	壺	-	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	複合口縁 外面ハケ目調整 内面ヘラナデ	覆土上層	PL20

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	口唇部に刻み目 1 段の複合口縁に刺突列 LR 縄文	床面	PL20
TP 2	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	口唇部に刻み目 1 段の複合口縁に刺突列 附加条一種 (LR + 2R) 縄文 頸部櫛描波状文	床面	PL20
TP 3	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	橙	1 段の複合口縁に原体押圧による刺突列 附加条一種 (LR + 2R) 縄文 頸部櫛描山形文	床面	PL20
TP 4	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐	頸部櫛描格子目文 直前段反撚 LLR	床面	PL20
TP 5	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	頸部ナデ 胴部附加条一種 (LR + 2R) 縄文カ	覆土中層	PL20
TP 6	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐	頸部櫛描山形文	覆土下層	PL20
TP 7	弥生土器	広口壺	長石・石英	褐	頸部ナデ 胴部 1 列の刺突列 附加条一種 (RL + 2L) 縄文	覆土下層	PL20
TP 8	弥生土器	広口壺	長石・石英・針状鉱物	橙	頸部ナデ 胴部 LR 縄文	覆土下層	PL20
TP 9	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	橙	胴部外面 LR 縄文 内面ヘラナデ	床面	PL20
TP10	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	明褐	胴部附加条一種 (RL + 2L) 縄文 底面木葉痕	覆土下層	PL20

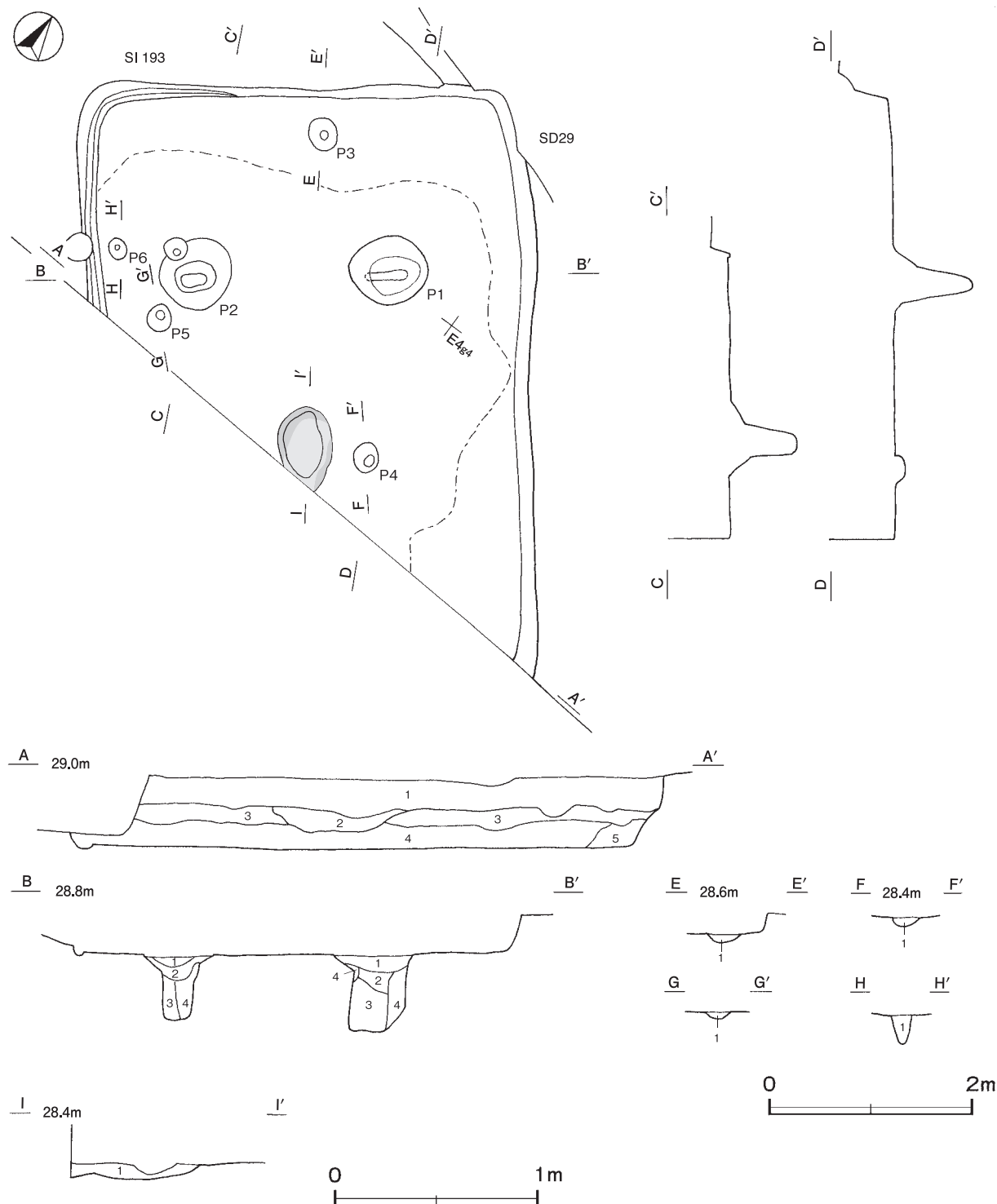
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP1	紡錘車	3.8	3.2	0.5	(30.8)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	上面・側面に刺突文	覆土上層	90% PL22

第198号竪穴建物跡 (第14・15図)

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅶ区東部のE4g3区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第193号竪穴建物、第29号溝に掘り込まれている。



第14図 第198号竪穴建物跡実測図

規模と形状 南部が調査区域外に延びているため、短軸は4.41 mで、長軸は5.65 mしか確認できなかった。隅丸長方形と推定でき、主軸方向はN-37°-Wである。壁は高さ37～68cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。確認できた北西壁から南西壁の一部に壁溝が巡っている。

炉 南部が調査区域外に延びているため、長径82cm、短径50cmしか確認できなかった。楕円形と推定され、床面のほぼ中央に付設されたと考えられる。深さ7cmの地床炉で、炉底面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量

ピット 6か所。P1・P2は、建物の短軸方向に長い楕円形に掘り込まれている。深さはP1が78cm、P2が62cmで、位置から主柱穴である。P3～P6は、深さ5～15cmで、性格は不明である。

ピット土層解説 (共通)

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

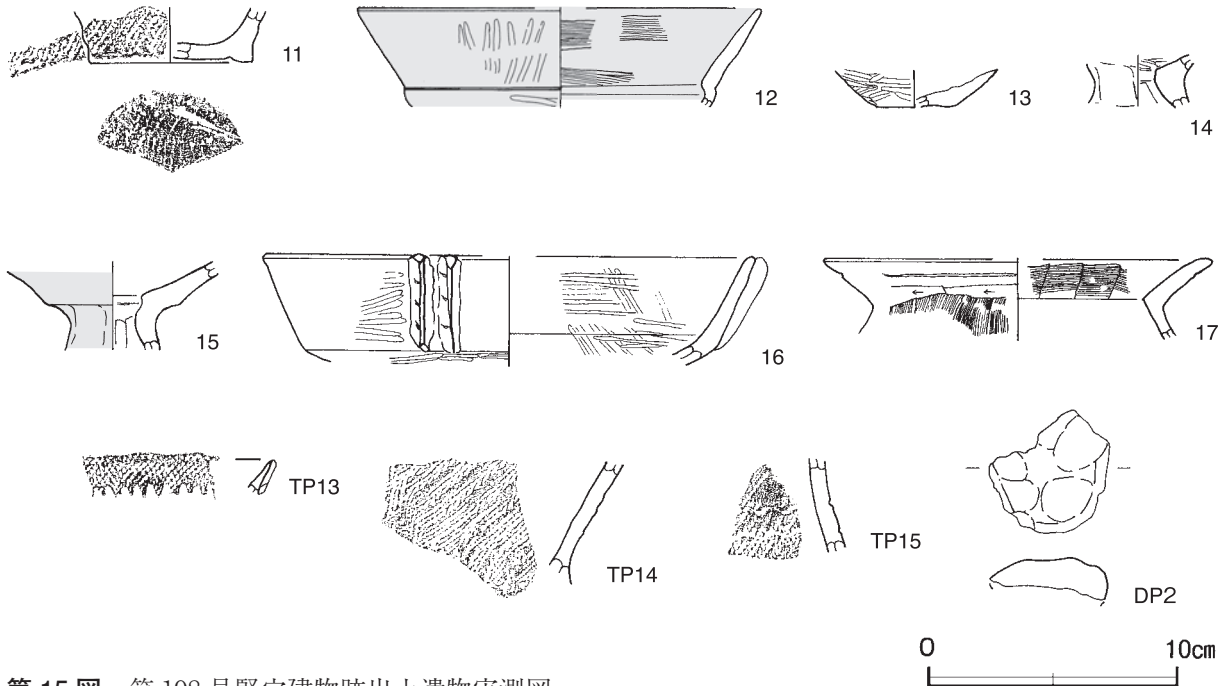
覆土 5層に分層できる。いずれも粘性、締まりともに強く、ローム粒子や焼土粒子、炭化粒子が少量含まれているものの、レンズ状の堆積状況から、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片47点(広口壺), 土師器片101点(坏1, 埴3, 器台1, 高坏1, 壺18, 甕類77), 土製品1点(不明), 剥片2点(石英)のほか, 須恵器片3点(坏, 蓋, 甕類), が出土している。遺物は少なく, 小片であるが, 覆土上層から土師器片が, 覆土下層から弥生土器片が出土する傾向がある。

所見 時期は, 覆土下層から出土している土器から後期前葉と考えられる。覆土上層から出土している12～17は, 北西に位置する第196号竪穴建物跡からの流れ込みと考えられる。



第15図 第198号竪穴建物跡出土遺物実測図

第198号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	弥生土器	広口壺	-	(22)	[64]	長石・石英・赤色粒子・針状鉱物	赤褐	普通	胴部外面附加条一種 (LR+2R) 縄文内面へラナテ 底面木葉痕	覆土上層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
12	土師器	埴	[16.0]	(3.9)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶ黄橙	普通	口縁部外面ヘラナデ後磨き 内面ハケ目調整後横ナデ 体部外面ヘラナデ後磨き 磨減著しい	覆土上層	5%
13	土師器	埴	-	(1.5)	[3.2]	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	体部外面ヘラナデ後磨き 内面剥離	覆土上層	5%
14	土師器	器台	-	(2.1)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	器受部内面磨き 脚部外・内面ヘラナデ	覆土下層	10%
15	土師器	高坏	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	坏部外・内面ヘラナデ 脚部外・内面ヘラナデ	覆土上層	10%
16	土師器	壺	[19.6]	(4.2)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ヘラナデ後棒状浮文貼付 磨き 内面磨き	覆土下層	10% PL20
17	土師器	甕	[15.0]	(3.3)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	口縁部外面ヘラ削り後横ナデ 内面ハケ目調整 体部外面ハケ目調整 内面ヘラナデ	覆土上層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP13	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	明赤褐	口唇部原体押圧直前段反燃 LLRカ 1段の複合口縁に刺突列 LR縄文あるいは	覆土下層	PL20
TP14	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母赤色粒子	浅黄橙	胴部直前段多条 LR縄文	覆土下層	PL20
TP15	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	褐	頸部櫛描山形文 胴部 LR縄文 結節縄文	覆土下層	PL20

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 2	不明	(4.9)	4.8	(1.7)	(22.1)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	外面指頭によるナデ 内面剥離	覆土上層	

表3 弥生時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)				主柱穴	出入口	ピット	炉	貯蔵穴				
135	E3e9	N-54°-W	[隅丸長方形]	8.53×(4.35)	16~46	平坦	一部	2	1	-	1	-	自然	弥生土器, 土製品, 剥片, 礫	後期前葉	
198	E4g3	N-37°-W	[隅丸長方形]	(5.65)×4.41	37~68	平坦	一部	2	-	4	1	-	自然	弥生土器, 土製品, 剥片	後期前葉	本跡→SI193, SD29

(2) 土器棺墓

第246号土坑 (第16図)

調査年度 平成24年度

位置 調査Ⅷ区南東部のH4e6区, 標高20.5mほどの斜面部に位置している。



第16図 第246号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 長径 1.05 m，短径 0.95 m の楕円形で，長径方向は N - 50° - W である。深さは北西部は 8 cm であるが，斜面下方の南東部ではほとんど確認できなかった。底面はほぼ平坦で，壁は外傾している。

覆土 3層に分層できる。第1層は広口壺内部の堆積土である。第2・3層はロームブロックや粘土ブロックが含まれている層で，広口壺を埋設した際の埋土と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量

遺物出土状況 弥生土器広口壺1点が，底面から高さ5cmほどに，斜位の状態で出土している。

所見 上部は耕作等により削平されており，広口壺の体部下半のみを確認した。埋設されるように出土していることから，土器棺墓と考えられる。時期は中期後葉と考えられる。

第 246 号土坑出土遺物観察表 (第 16 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
18	弥生土器	広口壺	-	(18.3)	[9.0]	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	胴部外面 LR 縄文 内面ヘラナデ 底面木葉痕	覆土下層	30% PL15

第 247 号土坑 (第 17 図)

調査年度 平成 24 年度

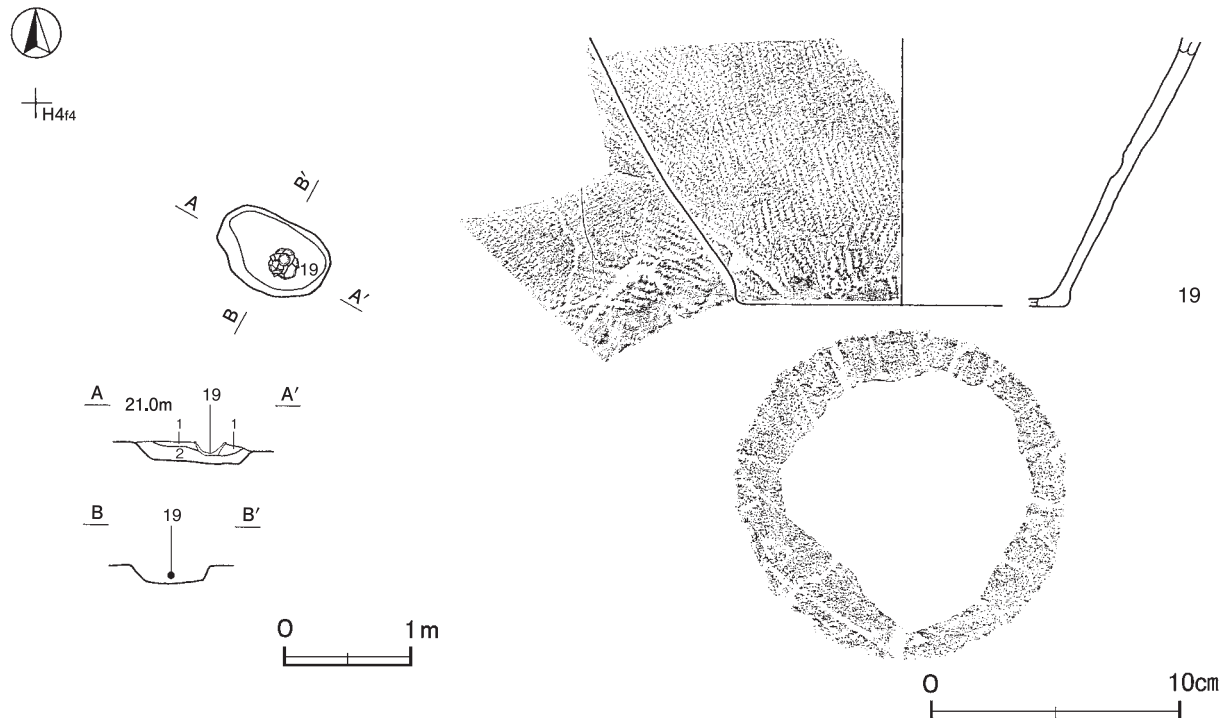
位置 調査Ⅷ区南東部の H 4 f4 区，標高 20.5 m ほどの斜面部に位置している。

規模と形状 長径 0.92 m，短径 0.60 m の楕円形で，長径方向は N - 67° - W である。深さ 14cm で，底面はほぼ平坦である。壁は外傾している。

覆土 2層に分層できる。第1・2層はロームブロックや粘土ブロックが含まれている層で，広口壺を埋設した際の埋土と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量，粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量



第 17 図 第 247 号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 弥生土器広口壺1点が、底面から高さ5cmほどに、正位の状態で出土している。広口壺の底部は穿孔されている。

所見 上部は耕作等により削平されており、広口壺の体部下半のみを確認した。埋設されるように出土していることから、土器棺墓と考えられる。時期は中期後葉と考えられる。

第247号土坑出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
19	弥生土器	広口壺	-	(10.6)	12.8	長石・石英・雲母	赤褐	普通	胴部外面LR縄文 内面ヘラナデ 底面木葉痕穿孔	覆土下層	40% PL15

表4 弥生時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
246	H4e6	N-50°-W	楕円形	1.05×0.95	8	ほぼ平坦	外傾	人為	弥生土器	
247	H4f4	N-67°-W	楕円形	0.92×0.60	14	ほぼ平坦	外傾	人為	弥生土器	

3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡6棟、土坑2基、溝跡1条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第2号竪穴建物跡（第18～20図）

調査年度 平成25年度。北部は平成9年度に調査し、当財団調査報告『第164集』において報告している。

位置 調査Ⅶ区西部のE3d1区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第1・3・103・104号竪穴建物、第2号道路に掘り込まれている。

規模と形状 今回確認できたのは南北軸4.00m、東西軸4.76mであるが、平成9年度調査部分と合わせると、長軸4.80mの方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁は高さ12～20cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、第6～10層を埋土して構築している。北東コーナー部を除き、壁下には壁溝が巡っている。

竈 前回の調査で、北壁中央部に付設されているのを確認している。

ピット 7か所。P1～P4は深さ40～60cmで、位置から支柱穴である。P5は深さ24cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットである。P1～P5とも、第1～5層は柱抜き取り後の堆積土で、底面には柱の当たりが見られる。P6は深さ20cm、P7は深さ30cmで、性格不明である。

P1土層解説

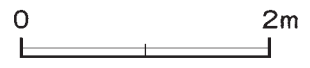
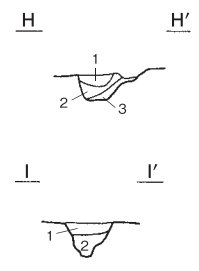
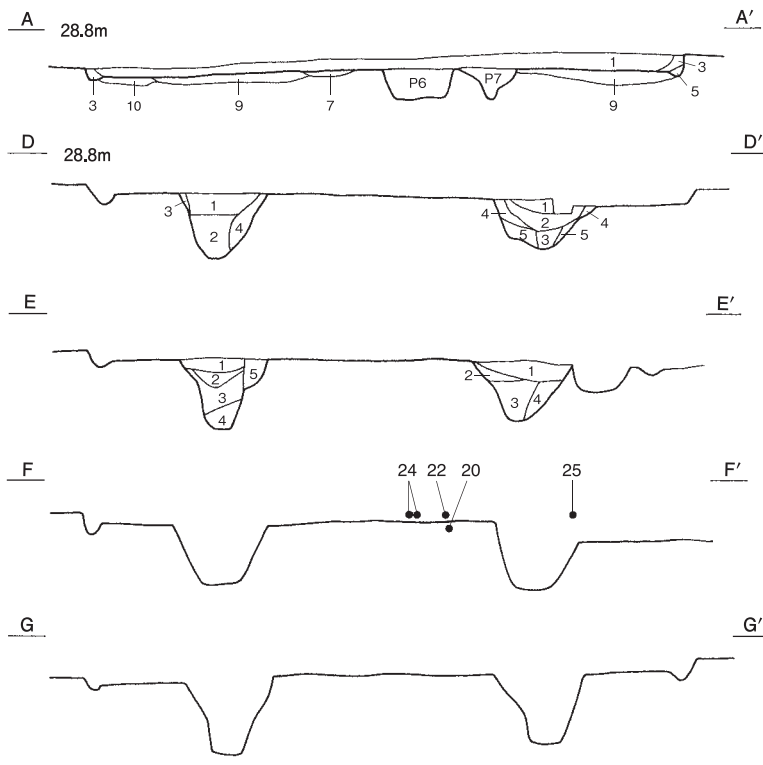
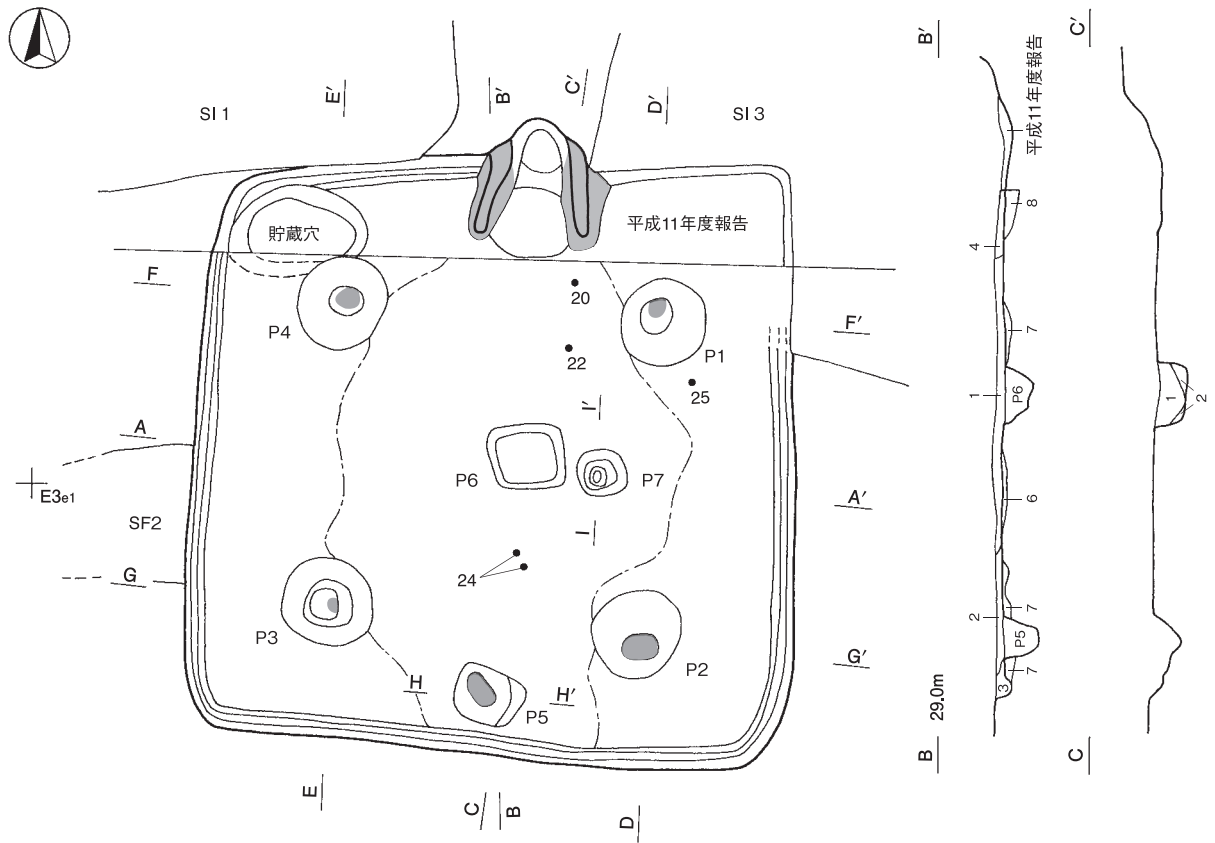
1	黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子	3	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
		微量	4	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子
2	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	5	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量

P2土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量	3	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	4	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

P3土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	4	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量			



第 18 図 第 2 号竪穴建物跡実測図(1)

P4土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子・粘土粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 4 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |

P5土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 粘土ブロック・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | | |

P6・P7土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
|-------|----------------------|------|-------------------|

貯蔵穴 『第164集』で住居内土坑としているが、北西コーナー部に配置されていることや形状から、貯蔵穴と考えられる。今回の調査では、南壁部分は確認できなかった。

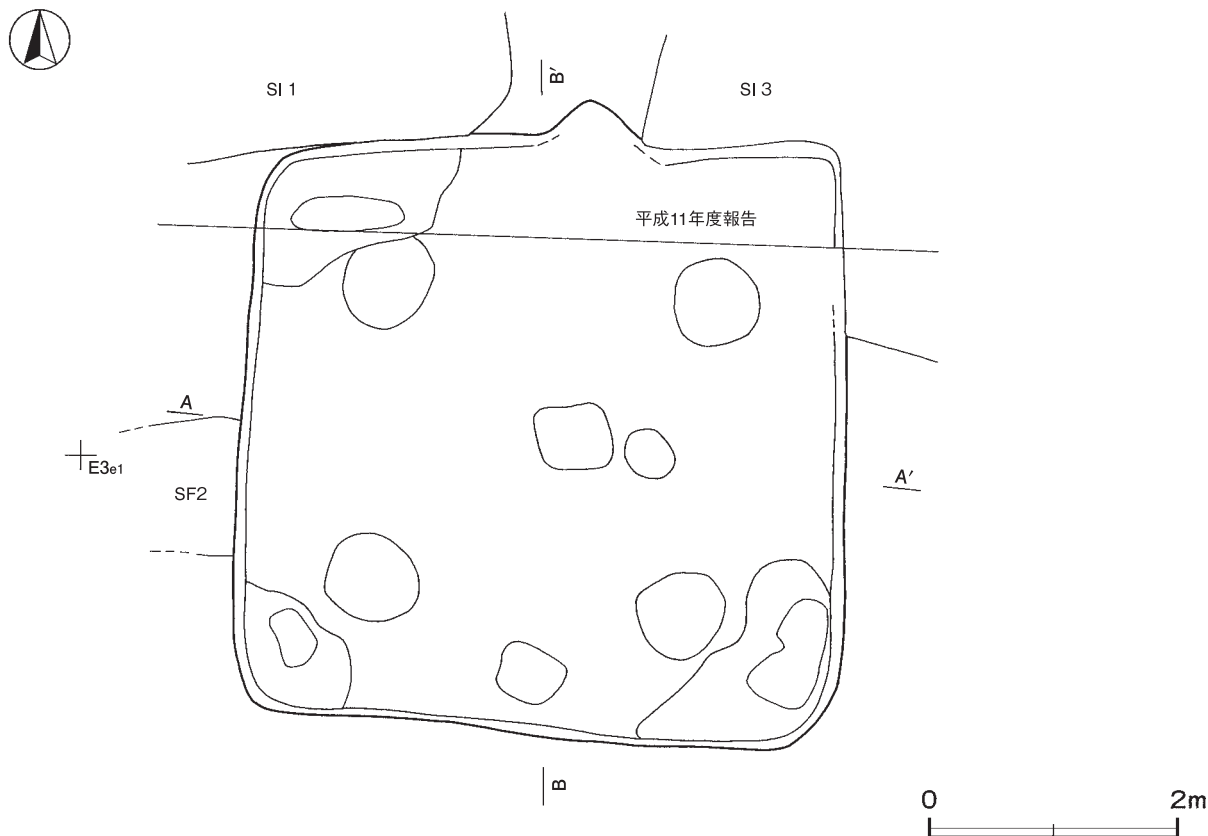
覆土 5層に分層できる。第1・2・4層はローム粒子が含まれている暗褐色土を主体とした自然堆積である。第3・5層はローム粒子が多く含まれていることから、壁の崩落土である。第6～10層は貼床の構築土で、コーナー部を一段深く掘りくぼめて構築している。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|------------------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化物・粘土粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (貼床構築土) |
| 2 黒褐色 | 粘土ブロック・炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 (貼床構築土) |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 (貼床構築土) |
| 4 暗褐色 | 粘土ブロック少量, 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 (貼床構築土) |
| 5 暗褐色 | ローム粒子中量 | 10 褐色 | ローム粒子少量 (貼床構築土) |

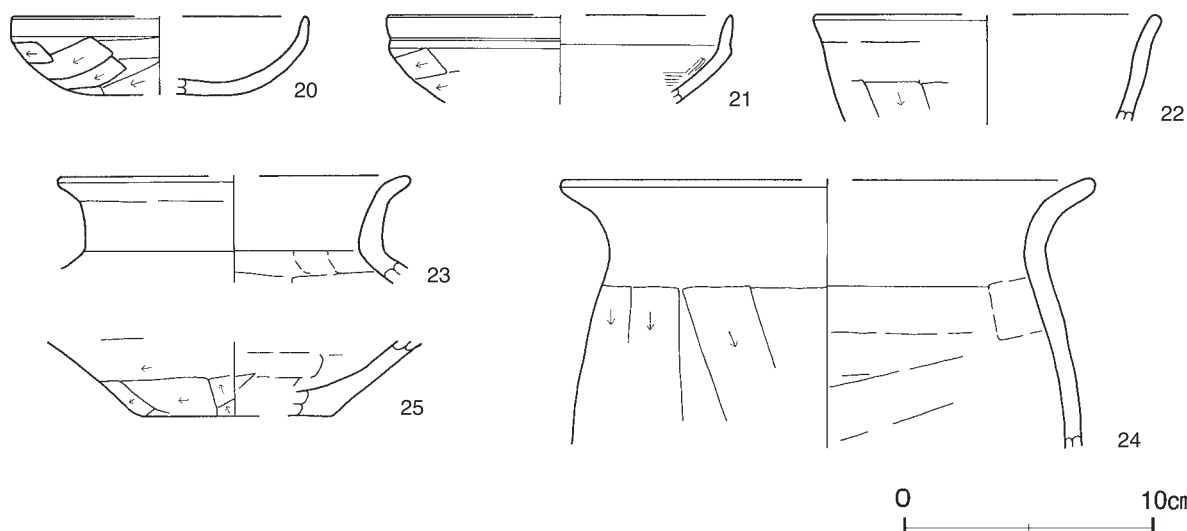
遺物出土状況 土師器片75点(坏10, 碗1, 鉢1, 甕類63), 須恵器片1点(甕類), 鉄滓1点(10.89g)のほか, 陶器片4点(灯明皿1, 碗3), 磁器片1点(碗)が出土している。遺物は小片が多く, 床面の中央付近から出土しており, 建物の埋没時に周囲から流入したものと考えられる。

所見 時期は、『第164集』では7世紀第2～第3四半期としているが, 今回の調査で出土土器から6世紀後



第19図 第2号竪穴建物跡実測図(2)

葉と考えられる。



第 20 図 第 2 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 2 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 20 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
20	土師器	坏	[11.6]	3.1	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	におい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	床面	30%
21	土師器	坏	[13.6]	(3.5)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面磨き	覆土中	5%
22	土師器	鉢	[13.4]	(4.3)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	床面	5%
23	土師器	甕	[13.7]	(4.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラナデ 内面指頭ナデ ヘラナデ	覆土中	5%
24	土師器	甕	[21.1]	(10.7)	-	長石・石英・雲母・礫	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	10%
25	土師器	甕	-	(3.0)	[7.6]	長石・雲母・赤色粒子	褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底面ヘラナデ	床面	5%

第 86 号竪穴建物跡 (第 21 ~ 23 図)

調査年度 平成 25 年度。南部は平成 9 年度に調査し、当財団調査報告『第 164 集』において報告している。

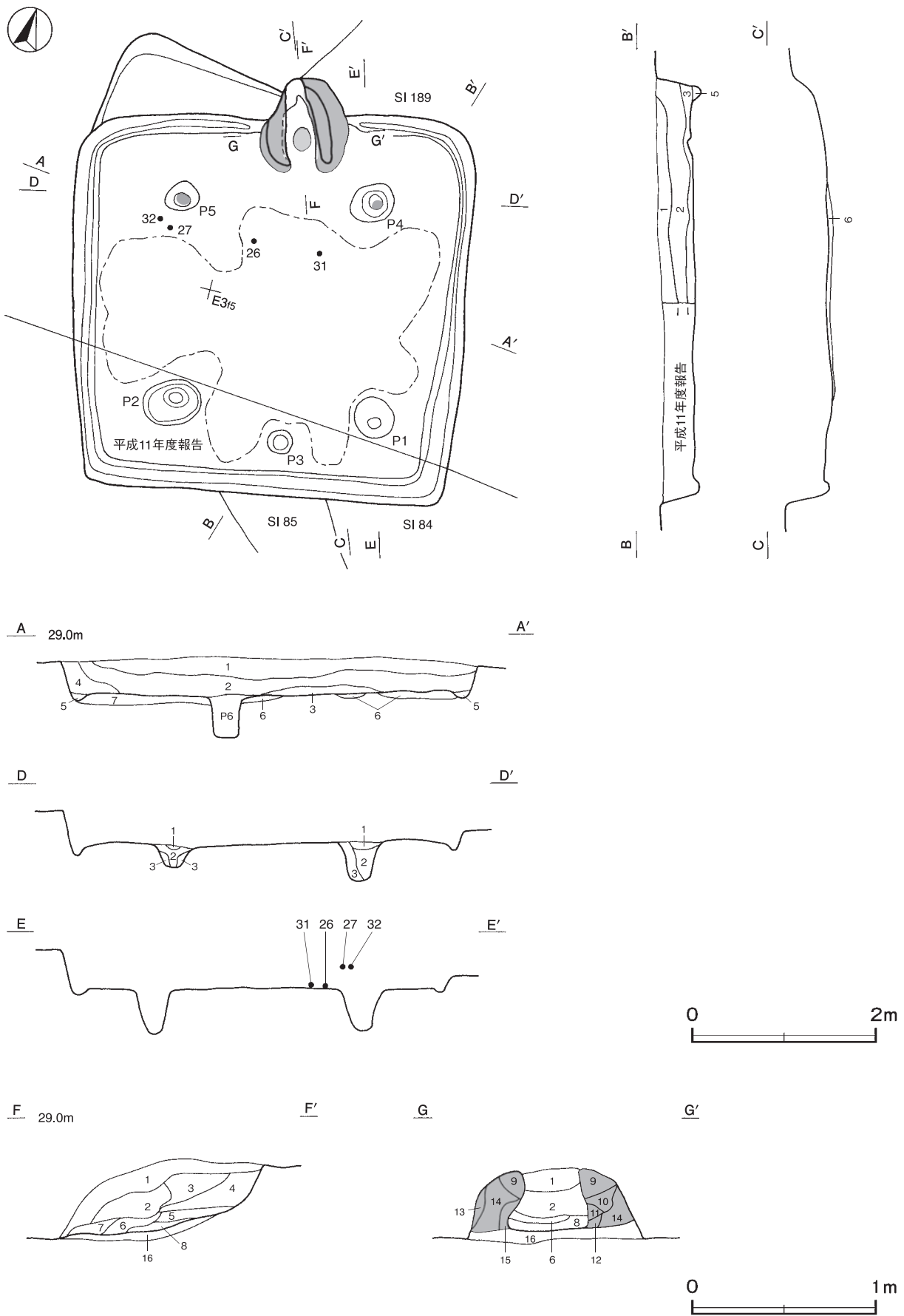
位置 調査Ⅶ区中央部の E 3 e5 区、標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 84・85・189 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。また、平成 9 年度の調査で第 82 号竪穴建物跡を掘り込んでいたが、今回の調査では確認することができなかった。

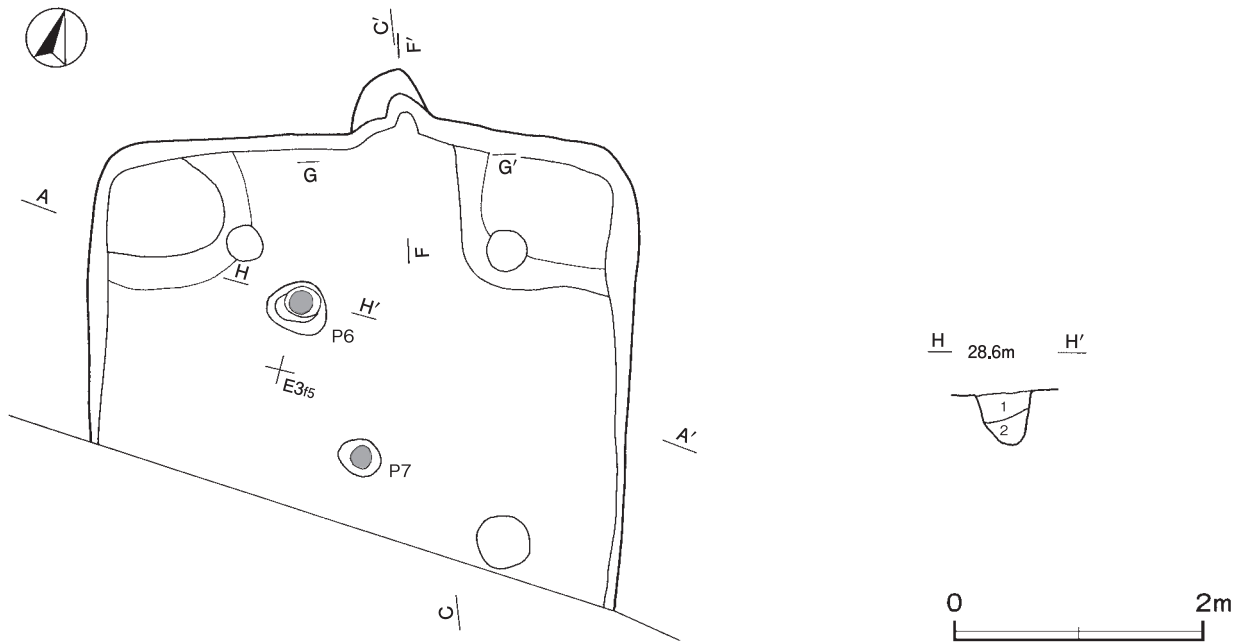
規模と形状 今回確認できた南北軸は 3.60 m、東西軸は 4.24 m で、前回調査部分と合わせると、長軸 4.28 m の方形で、主軸方向は N - 13° - W である。壁は高さ 12 ~ 42cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が全周している。貼床は、今回の調査区で確認したもので、コーナー部を一段深く掘りくぼめ、ロームブロックを含む第 6・7 層を埋土して構築している。

竈 北壁中央やや東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは 105cm、燃燒部幅は 40cm である。袖部は、貼床構築土の第 16 層上面に粘土ブロックや焼土ブロックを含む第 9 ~ 15 層を積み上げて構築している。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 42cm ほど掘り込まれ、火床面から外傾している。第 1 ~ 8 層が天井部材や内壁の崩落土及び煙道部からの流入土であることから、自然崩壊したものと思われる。



第21図 第86号竖穴建物跡実測図(1)



第 22 図 第 86 号竪穴建物跡実測図(2)

竈土層解説

- | | | | |
|---------|--|----------|--|
| 1 灰褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量(天井部材崩落土) | 10 にぶい橙色 | 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量, 炭化物微量(袖部構築土) |
| 2 暗褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量(天井部材崩落土) | 11 にぶい橙色 | 粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量(袖部構築土) |
| 3 暗褐色 | 粘土粒子中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(天井部材崩落土) | 12 明褐色 | ローム粒子中量, 粘土粒子少量, 焼土粒子微量(袖部構築土) |
| 4 黒褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(流入土) | 13 浅黄橙色 | 粘土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量(袖部構築土) |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量(流入土) | 14 浅黄橙色 | 粘土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量(袖部構築土) |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, 炭化物少量, ローム粒子微量(天井部内壁崩落土) | 15 にぶい橙色 | 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量(袖部構築土) |
| 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量(天井部内壁崩落土) | 16 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量(貼床構築土 覆土第7層に相当) |
| 8 黒褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量(流入土) | | |
| 9 にぶい褐色 | 粘土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化物微量(袖部構築土) | | |

ピット 7か所。P1～P3は前回の調査で確認されたものである。P4・P5は、深さがP4が42cm、P5が26cmで、位置から支柱穴である。第1・2層は柱痕跡で、第3層は掘方への埋土である。底面には柱の当たりが見られる。P3は南壁際の中央部に位置していることや、周辺が踏み固められていることから、出入口施設に伴うピットである。P6・P7は掘方調査時に確認できたピットである。P6は深さ44cmで、ロームブロックが含まれている土が堆積していることから、柱抜き取り後に埋め戻されている。P7は深さ13cmである。いずれも底面には柱の当たりが見られるが、性格は不明である。

ピット土層解説 (P4～P6共通)

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|---------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 3 明褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | | |

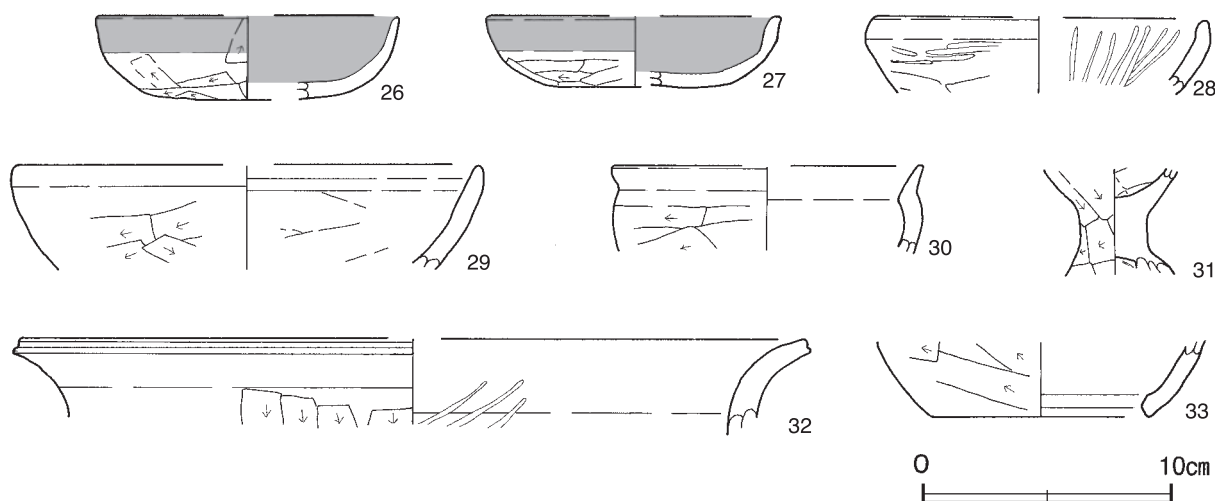
覆土 5層に分層できる。第1層はロームブロックや焼土ブロックが少量含まれている黒褐色土を主体とし、第2～4層はローム粒子が含まれている暗褐色土を主体とした層で、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。第5層は壁溝の覆土である。第6・7層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|--------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, 粘土粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 (壁溝覆土) |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 6 褐色 | ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 (貼床構築土) |
| | | 7 暗褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子少量 (貼床構築土) |

遺物出土状況 土師器片 209 点 (坏 17, 椀 1, 高坏 2, 鉢 1, 壺 3, 甕類 182, 甌 3), 須恵器片 3 点 (坏) のほか, 弥生土器片 2 点 (広口壺) が出土している。遺物は小片が多く, 27 ~ 30・32・33 は覆土上層から出土していることから, 埋没過程で周囲から流入したものと考えられる。26・31 は床面から出土し, 建物の廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土遺物から 6 世紀後葉と考えられる。『第 164 集』では, 出土土器から 4 世紀第 3 四半期 ~ 第 4 四半期としているが, 出土遺物が少量であったことから, 周辺からの流れ込みと考えられる。竈から北西コーナー部外の北側に, 深さ約 10cm の方形の段差が確認できた。本跡の棚状施設の可能性もあるが, 遺物の出土がなく, 軸方向を違えることから別遺構と考えられる。また, 前回調査で確認した第 82 号竪穴建物跡は確認面が本跡床面より下位であり, 本跡の掘方調査においても確認することができなかった。コーナー部の一部を確認したのみであることや, 第 82 号竪穴建物跡の床面が本跡の掘方底面と同じ高さであることなどから, 前回の調査では本跡掘方の一部を建物跡と捉えたものと考えられる。



第 23 図 第 86 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 86 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 23 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
26	土師器	坏	[12.0]	3.3	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	床面	20%
27	土師器	坏	[11.7]	2.8	[5.9]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	覆土上層	30%
28	土師器	坏	[13.0]	(3.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面ナデ後ヘラ削り一部磨き 内面放射状の磨き	覆土上層	10%
29	土師器	椀	[18.3]	(4.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土上層	10%
30	土師器	鉢	[12.4]	(3.4)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土上層	10%
31	土師器	高坏	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部外・内面ヘラナデ 脚部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	10%
32	土師器	甌	[31.4]	(3.3)	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ後磨き	覆土上層	5%
33	土師器	甌	-	(3.1)	[8.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土上層	5%

第 95 号竪穴建物跡（第 24・25 図）

調査年度 平成 25 年度。南東コーナー部は平成 9 年度に調査し、当財団調査報告『第 164 集』において報告している。

位置 調査Ⅶ区西部の E 2 e0 区、標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 252・262 号土坑、第 2 号道路、第 2 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外に延びているため、今回確認できたのは南北軸 5.02 m、東西軸 5.90 m で、前回調査部分と合わせると、長軸 6.00 m、短軸 5.90 m の方形で、主軸方向は N - 13° - W である。確認面が床面とほぼ同じ高さであったことから、壁の高さは部分的に 10cm 程度しか確認できなかった。

床 ほぼ平坦な貼床で、竈前面から中央部付近が踏み固められている。確認できた範囲では、北東コーナー部及び南東コーナー部を除いて、壁溝が巡っている。貼床は、壁際を幅 0.4 ~ 1.5 m ほど溝状に掘り込み、ロームブロックを含む第 1 ~ 8 層を 5 ~ 30cm ほど埋土して構築されている。東壁際の床面から径 30cm、厚さ 5 cm の焼土ブロックが出土している。

竈 北壁中央部に付設されている。削平のため、床面付近の一部しか確認することができなかった。規模は焚口部から煙道部までは 110cm、燃焼部幅 50cm である。全体を楕円形状に深さ 25cm ほど掘りくぼめた部分に、焼土ブロックやローム粒子を含む第 3 ~ 5 層を埋土して構築されている。袖部は貼床上に締まりの強いローム粒子や粘土粒子を含む第 1 層を積み上げて構築している。火床面は床面から 5 cm ほど下がった高さで、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 30cm ほど掘り込まれている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 褐 色 | ローム粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 黒 褐 色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量（埋土） |
| 2 赤 褐 色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量（燃焼部覆土） | 5 黒 褐 色 | 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量、ローム粒子微量（埋土） |
| 3 暗 褐 色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量（埋土） | | |

ピット 15 か所確認できたが、第 2 号ピット群のものも含んでいる可能性がある。P 1 は前回の調査で確認されたものである。P 1 ~ P 4 は深さ 44 ~ 50cm で、位置から支柱穴である。P 2 ~ P 4 は P 5 ~ P 7 が重複しており、柱の立て替えの可能性がある。P 8 ~ P 15 は、径 20 ~ 40cm、深さ 15 ~ 50cm で、性格は不明である。第 1・2 層が柱痕跡、第 5 ~ 7 層は柱抜き取り後の流入土である。

ピット土層解説（P 3・P 6・P 8・P 9・P 12 ~ P 15 共通）

- | | | | |
|---------|---------------------|---------|------------------------|
| 1 暗 褐 色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 黒 褐 色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐 色 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量 | 6 暗 褐 色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒 褐 色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 7 暗 褐 色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 4 褐 色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | | |

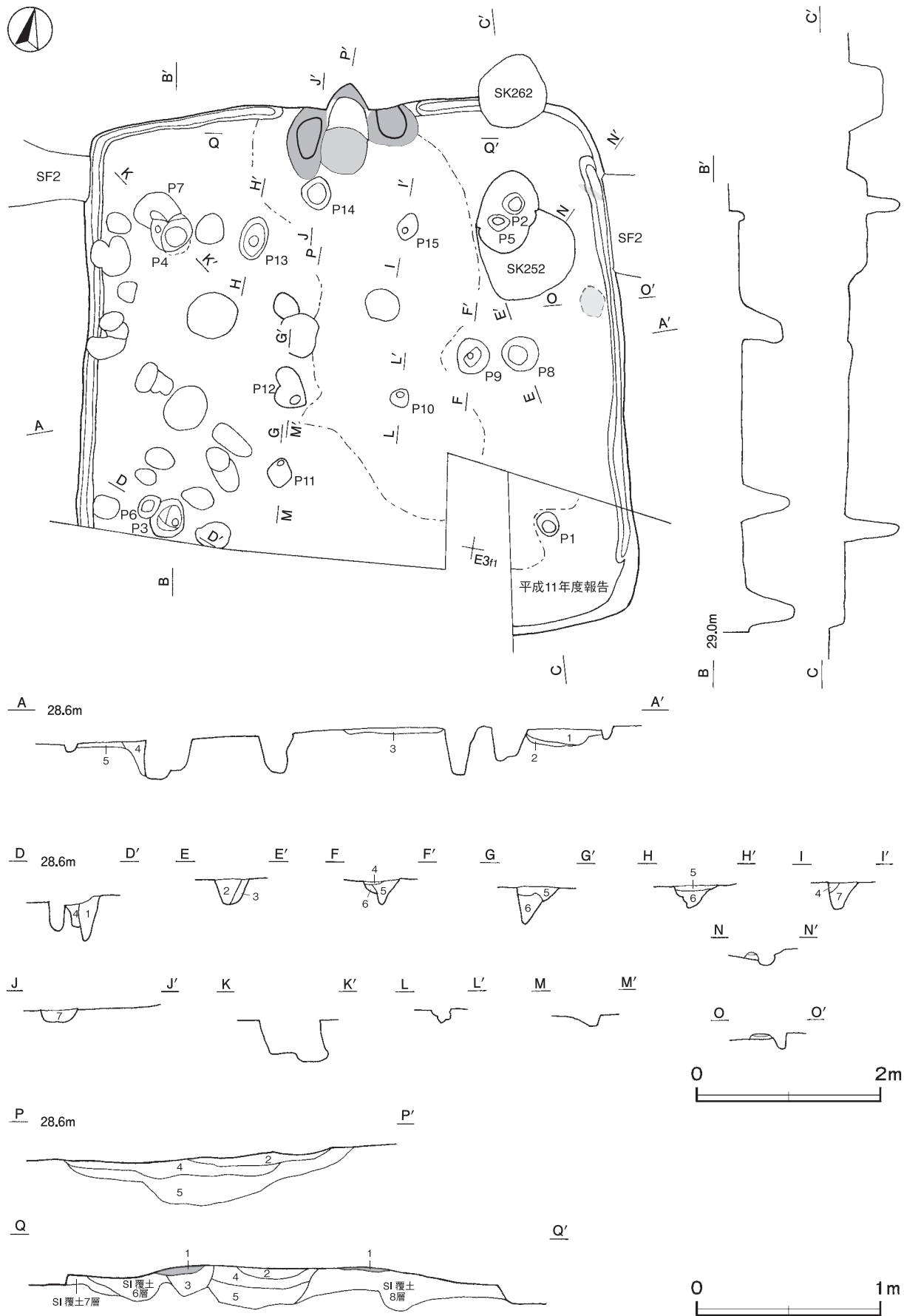
覆土 確認面が床面とほぼ同じ高さであったため、覆土を確認することができなかった。第 1 ~ 8 層は貼床の構築土である。

土層解説

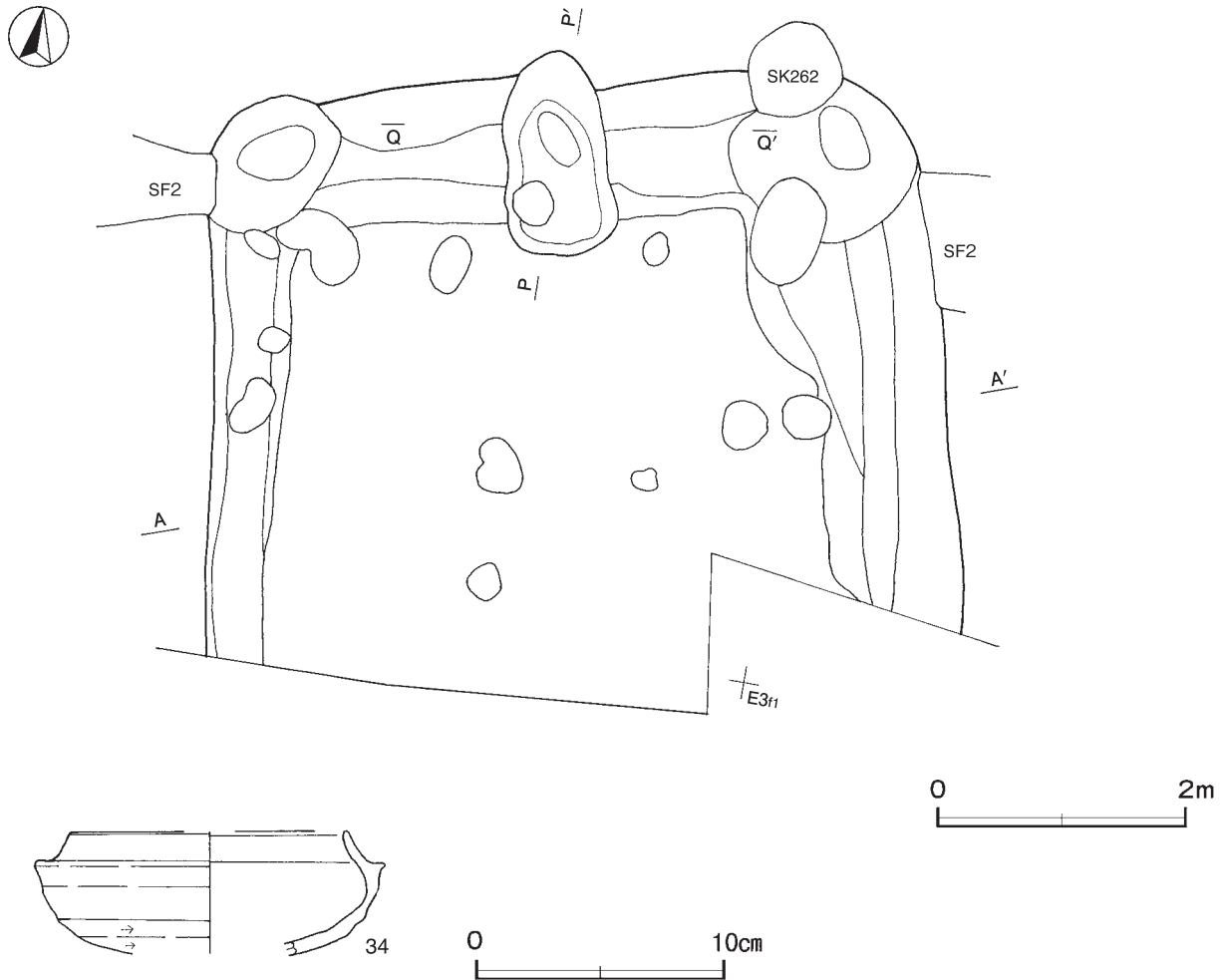
- | | | | |
|---------|---------------------|---------|------------------------------|
| 1 黒 褐 色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗 褐 色 | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 2 褐 色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 7 褐 色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗 褐 色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 黒 褐 色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |
| 5 暗 褐 色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 97 点（坏 10、甕類 87）、須恵器片 10 点（坏 7、甕類 3）のほか、陶器片 1 点（碗）が出土している。削平のため、覆土がほとんど確認できなかったことから、土器小片が床面付近から散在して出土している。34 は南東部の床面付近から出土している。

所見 出土遺物が少なく不明瞭であるが、時期は出土土器から 6 世紀前葉と考えられる。



第24図 第95号竖穴建物跡実測図



第 25 図 第 95 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 95 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 25 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
34	須恵器	坏	[10.8]	(4.9)	-	長石・石英	灰	良好	体部下半回転ヘラ削り	床面	10% 東海産。

第 138 号竪穴建物跡 (第 26・27 図)

調査年度 平成 25 年度。南部は平成 9 年度に調査し、当財団調査報告『第 164 集』において報告している。

位置 調査 VI 区東部の C 3 d1 区、標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 30・31 号溝、第 3 号道路に掘り込まれている。前回の調査で、第 14 号溝跡を掘り込み、第 95 号土坑、第 8・9 号溝に掘り込まれているのを確認しているが、今回の調査では第 8・9・14 号溝跡を確認することができなかった。

規模と形状 北部が第 30 号溝に掘り込まれているが、長軸 3.55 m、短軸 3.43 m の方形で、主軸方向は N-40°-W である。壁は高さ 28cm で、外傾している。

床 ほぼ平坦な貼床で、竈前面から中央部付近が踏み固められている。確認できた範囲で壁溝が全周している。貼床は北西コーナー部や北壁際が土坑状に一段深く掘りくぼめられ、ローム粒子を多量に含む第 8~10 層を埋土して構築されている。

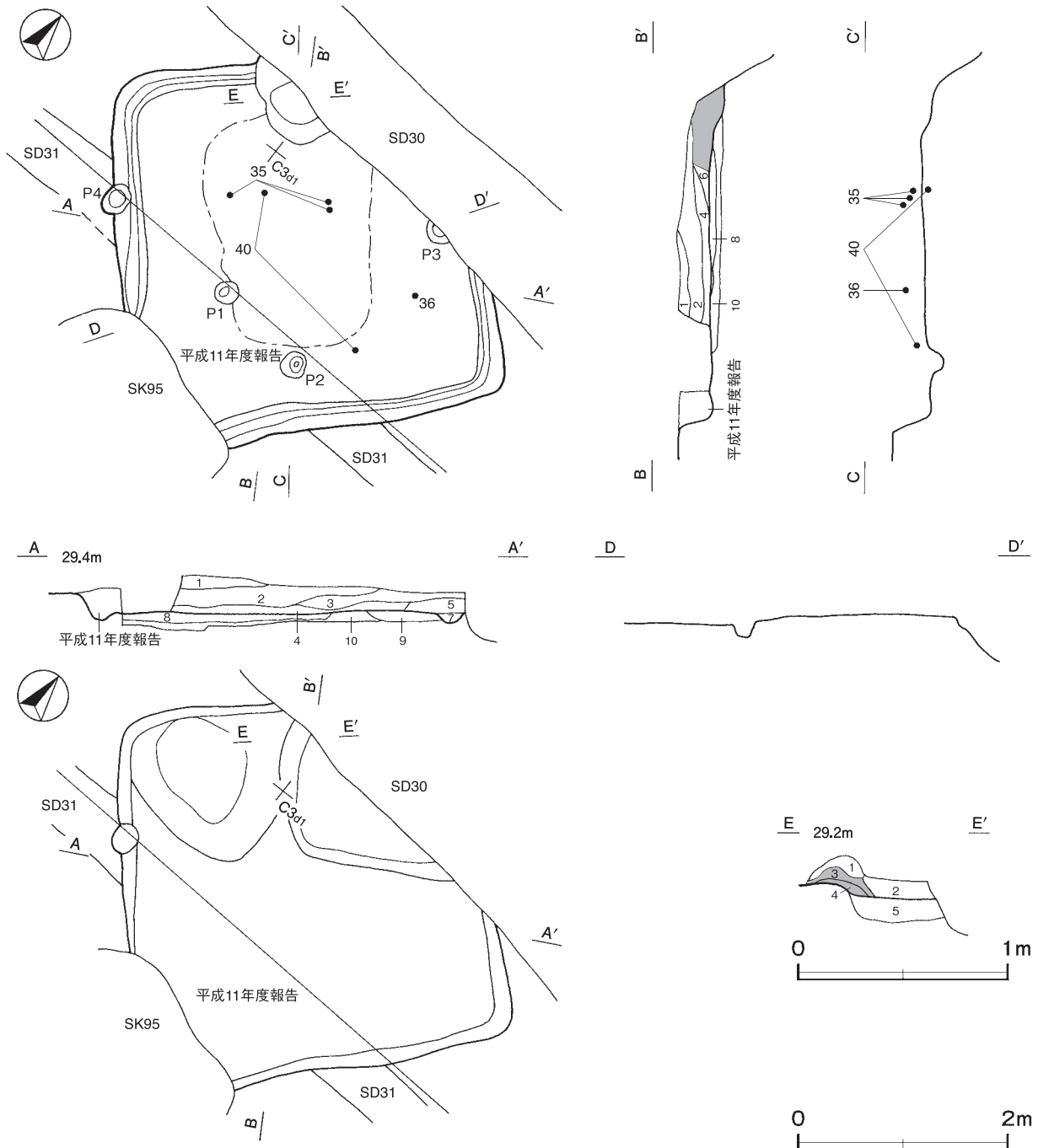
竈 北壁中央部に付設されているが、東半部が第 30 号溝に掘り込まれており、わずかに左袖部の基底部付近

が確認できるのみである。全体を楕円形状に深さ10cmほど掘りくぼめ、ローム粒子を多く含む第5層を埋土して構築されている。袖部は地山の掘り残しを基部とし、粘土ブロックを含む第3・4層を積み上げて構築している。火床面は床面とほぼ同じ高さであるが、火熱による赤変硬化は確認できなかった。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|-------|------------------------------------|---|----|----------------|
| 1 | にぶい橙色 | 粘土ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 | 褐色 | ローム粒子多量(袖部構築土) |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 5 | 褐色 | ローム粒子多量(埋土) |
| 3 | にぶい褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量(袖部構築土) | | | |

ピット 4か所。P1・P2は前回の調査で確認されたもので、P1が主柱穴で、P2は位置から、出入口施設に伴うピットの可能性がある。P3は深さ15cmで、位置的に主柱穴の可能性がある。P4は深さ23cmで、性格は不明である。いずれもロームブロックが少量含まれている黒褐色土が流入している。



第26図 第138号竪穴建物跡実測図

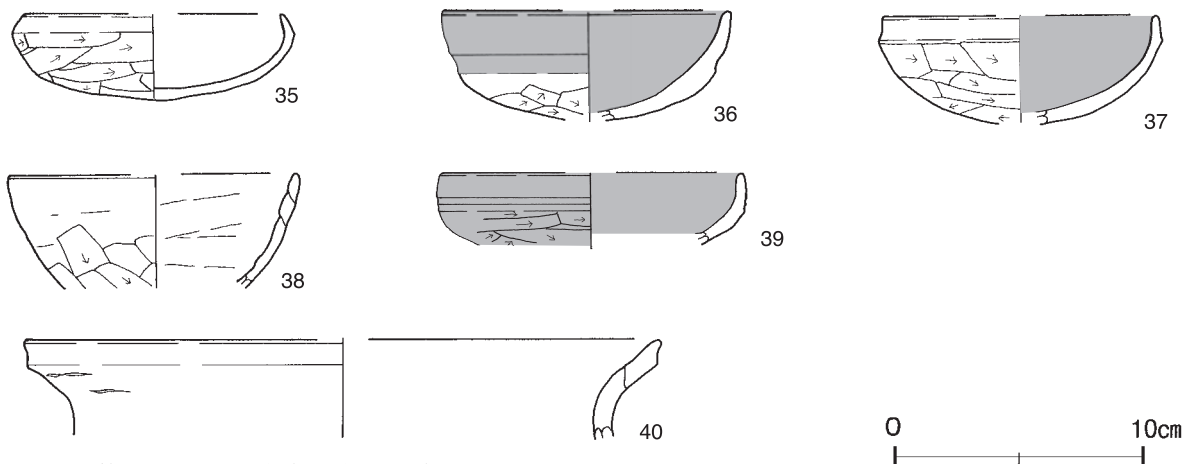
覆土 7層に分層できる。第2～5層は、ローム粒子がやや多く含まれている土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。第6層は粘土ブロックが少量含まれている極暗褐色土で、竈からの流入土である。第7層は壁溝の覆土である。第8～10層は貼床の構築土である。なお、第1層は非常に硬化しており、第3号道路跡に関わる層の可能性はある。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------------|--------|----------------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 (第3号道路跡覆土) | 7 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 (壁溝覆土) |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子多量 (貼床構築土) |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 9 褐色 | ローム粒子多量 (貼床構築土) |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量 | 10 暗褐色 | ローム粒子多量 (貼床構築土) |
| 5 褐色 | ローム粒子中量 | | |
| 6 極暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 149 点 (坏 43, 鉢 1, 鉢 1, 甕類 104), 須恵器片 3 点 (甕類), 炭化種子 1 点 (モモ) のほか、縄文土器片 1 点 (深鉢), 弥生土器片 3 点 (広口壺) が出土している。遺物は全域に散在し、覆土中層から下層で多く出土している。35・40 は床面からやや上位で、1～2 m 離れた位置で出土している破片が接合したことから、埋没後、若干時間が経過して土が堆積した窪地に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 7 世紀後葉と考えられる。



第 27 図 第 138 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 138 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 27 図)

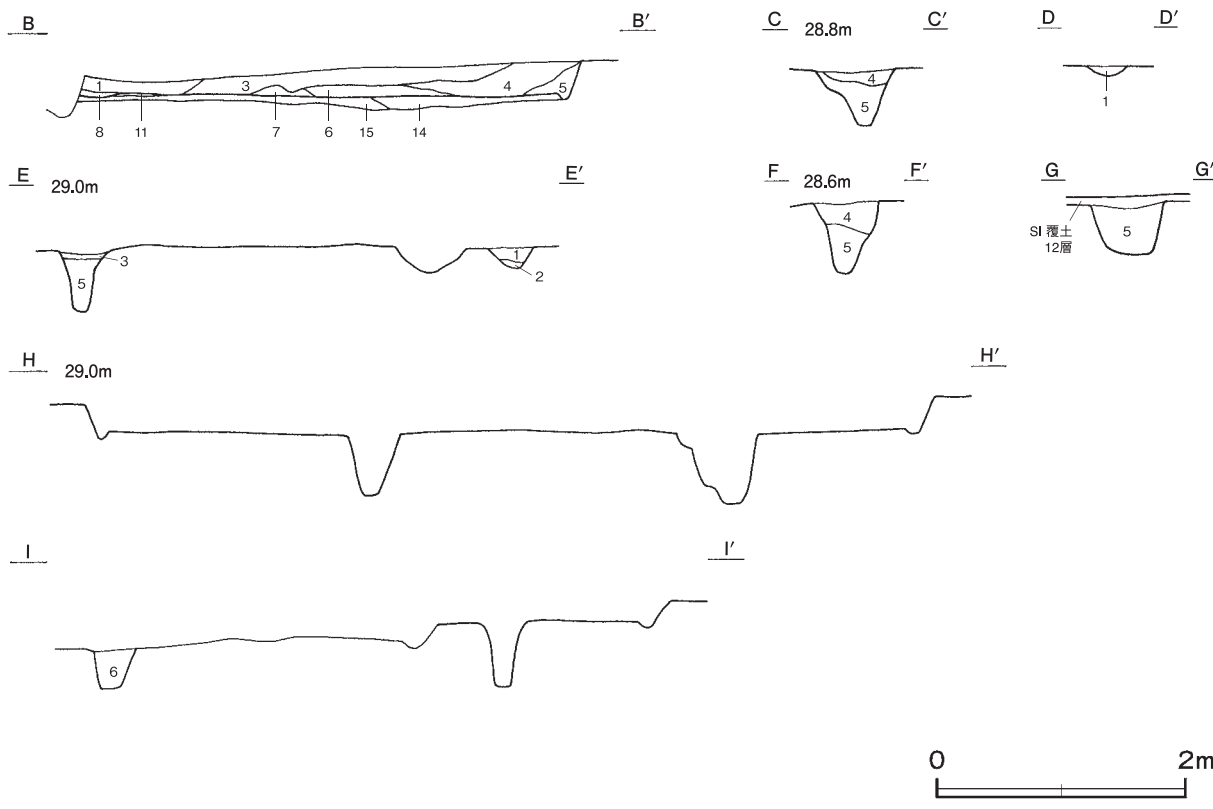
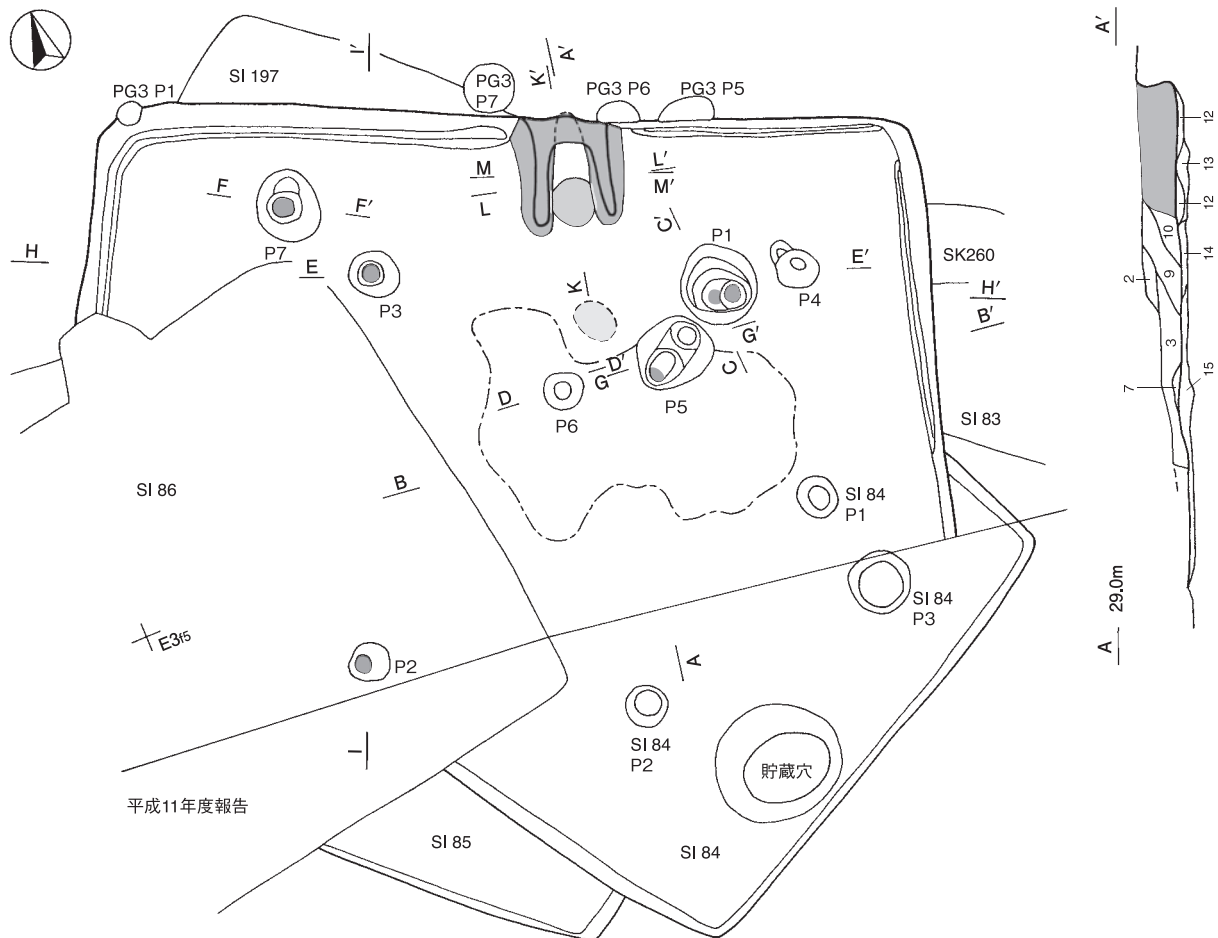
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
35	土師器	坏	[10.4]	3.4	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	覆土下層	40%
36	土師器	坏	[11.6]	4.3	-	長石・石英・雲母	にぶ黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	覆土中層	20%
37	土師器	坏	[10.8]	4.3	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	竈覆土中	20%
38	土師器	鉢	[11.6]	(4.5)	-	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 体部外面下半ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土上層	10%
39	土師器	坏	[12.0]	(2.9)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	覆土上層	10%
40	土師器	甕	[25.0]	(3.9)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面ヘラナデ	覆土下層	5%

第 189 号竪穴建物跡 (第 28～30 図)

調査年度 平成 25 年度。南部は平成 9 年度に調査し、当財団調査報告『第 164 集』において報告している。

位置 調査Ⅶ区中央部の E 3 e5 区、標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

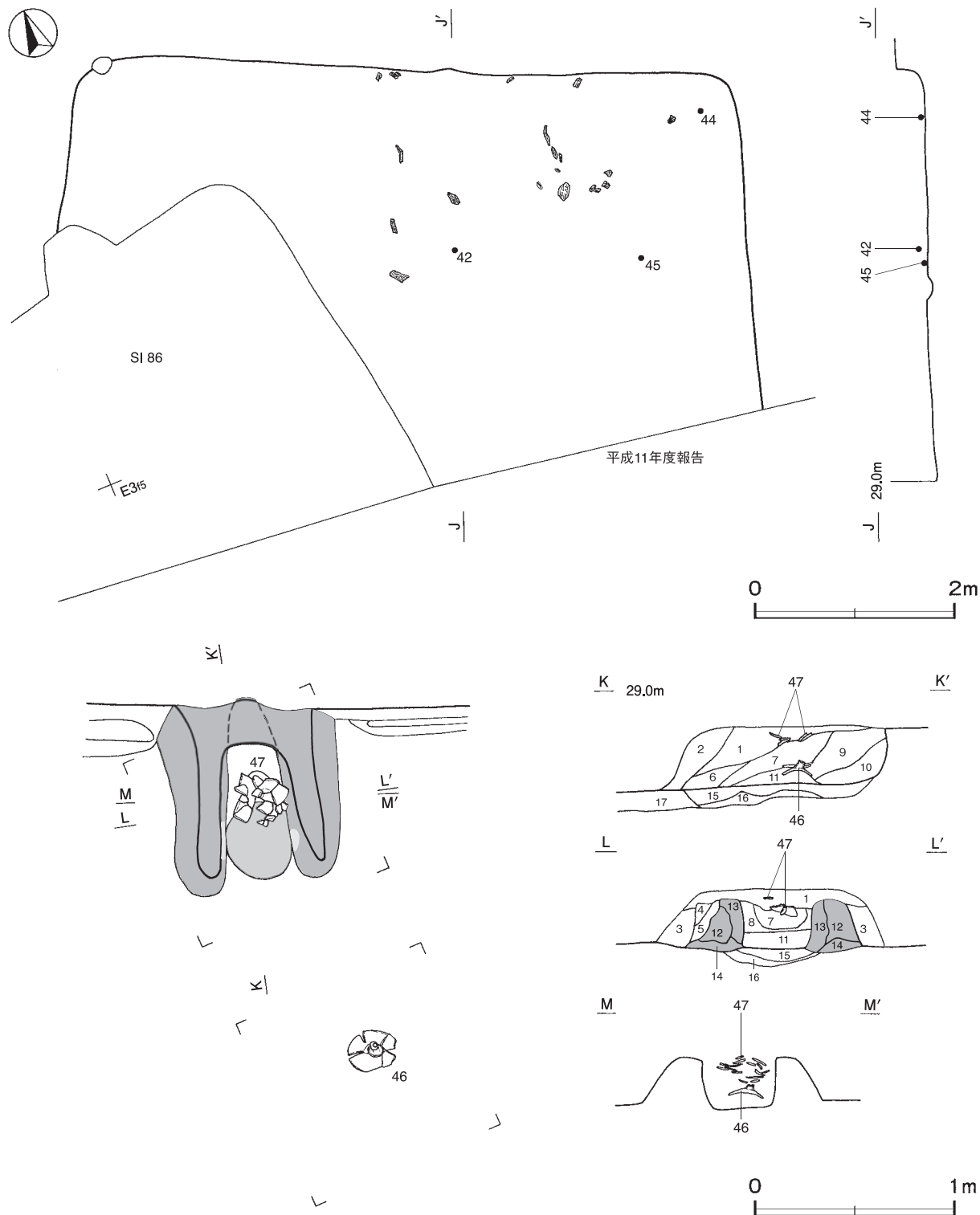
重複関係 第 197 号竪穴建物跡を掘り込み、第 86 号竪穴建物に掘り込まれている。第 260 号土坑、第 3 号ピット群との新旧関係は不明である。平成 9 年度の調査で、本跡南半分に該当する位置に第 83・84・85 号竪穴



第 28 図 第 189 号 竪穴建物跡実測図(1)

建物跡を確認しているが、今回の調査ではこれらの建物跡を確認することができなかった。今回の遺構確認面が、第83・84・85号竪穴建物跡の床面とほぼ同レベルであることがその一因と考えられるが、遺構確認面でも床面と考えられる硬化面や遺物の出土は見られなかった。

規模と形状 南半部が前回の調査で未確認のため、東西軸は6.72 mで、南北軸は4.08 mしか確認できなかった。形状は方形あるいは長方形と推定され、主軸方向はN - 25° - Eである。壁は高さ14 ~ 26cmで、ほぼ直立している。



第29図 第189号竪穴建物跡実測図(2)

床 ほぼ平坦な貼床で、竈前面の中央部付近が踏み固められている。確認できた範囲では、北東コーナー部の一部を除き壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロックを含む暗褐色土の第11～15層を埋土して構築されている。

竈 北壁中央やや東寄りに付設されている。焚口部から煙道部までは92cm、燃焼部幅は34cmである。袖部は貼床構築土の第15～17層上面に、暗褐色土の第14層を基部とし、粘土主体の第12・13層を積み上げて構築している。火床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外にほとんど張り出さず、火床面から内彎して立ち上がっている。第1層下から47の甕1個体が逆位で押しつぶされた状態で出土し、火床面から約10cm上で、46の高坏が逆位で出土している。第11層は焼土ブロックを多く含む暗赤褐色土で、竈使用時の堆積土と推測できることから、46は竈廃棄後に遺棄されたものと考えられる。第7・9・10層は砂質粘土ブロックや焼土ブロックが多く含まれており、天井部や天井内壁の崩落土と考えられ、また第3～5層は袖部の崩壊土である。47と46の間に天井部材の崩落土と考えられる第6・7層が入り込んでいることから、竈の使用停止後、意図的に竈を破壊し、47の甕を逆位に据え置いたものと推測される。

竈土層解説

1 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子中量、炭化粒子少量（流入土）	9 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量（天井部内壁崩落土）
2 灰褐色	焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量（流入土）	10 灰褐色	焼土ブロック・粘土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量（天井部・天井部内壁崩落土）
3 暗褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・炭化材少量（袖部材崩壊土）	11 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量（燃焼部堆積土）
4 灰褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量（袖部材崩壊土）	12 灰白色	粘土粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子少量（袖部構築土）
5 暗褐色	炭化材・ローム粒子少量、焼土粒子微量（袖部材崩壊土）	13 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量（袖部構築土）
6 極暗赤褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量（天井部材崩落土）	14 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量（袖部構築土）
7 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量（天井部材崩落土）	15	覆土第12層に相当
8 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量（竈内壁崩落土）	16	覆土第13層に相当
		17	覆土第14層に相当

ピット 7か所。P1～P3は深さ30～45cmで、位置から支柱穴である。第5層はローム粒子を少量含む暗褐色土で、柱抜き取り後の流入土である。第3・4層は焼土粒子や炭化粒子を含む暗褐色土で、建物の埋没に関わる堆積土である。P1～P3は底面に柱の当たりが確認でき、P1は柱の当たりが2か所確認できることから、柱の立て替えの可能性はある。P5・P7は掘方調査時に確認したピットで、いずれも柱の当たりが確認できるが、性格は不明である。P5は底面に2か所のくぼみが見られ、南側には柱の当たりが、北側には礎板の可能性のある板状の礫が出土している。P4・P6は径30cm程度の小形で浅く、性格は不明である。支柱穴のうち南東部の1か所と、出入口施設に伴うピットについては、前回の調査範囲で確認することができなかった。

ピット土層解説（共通）

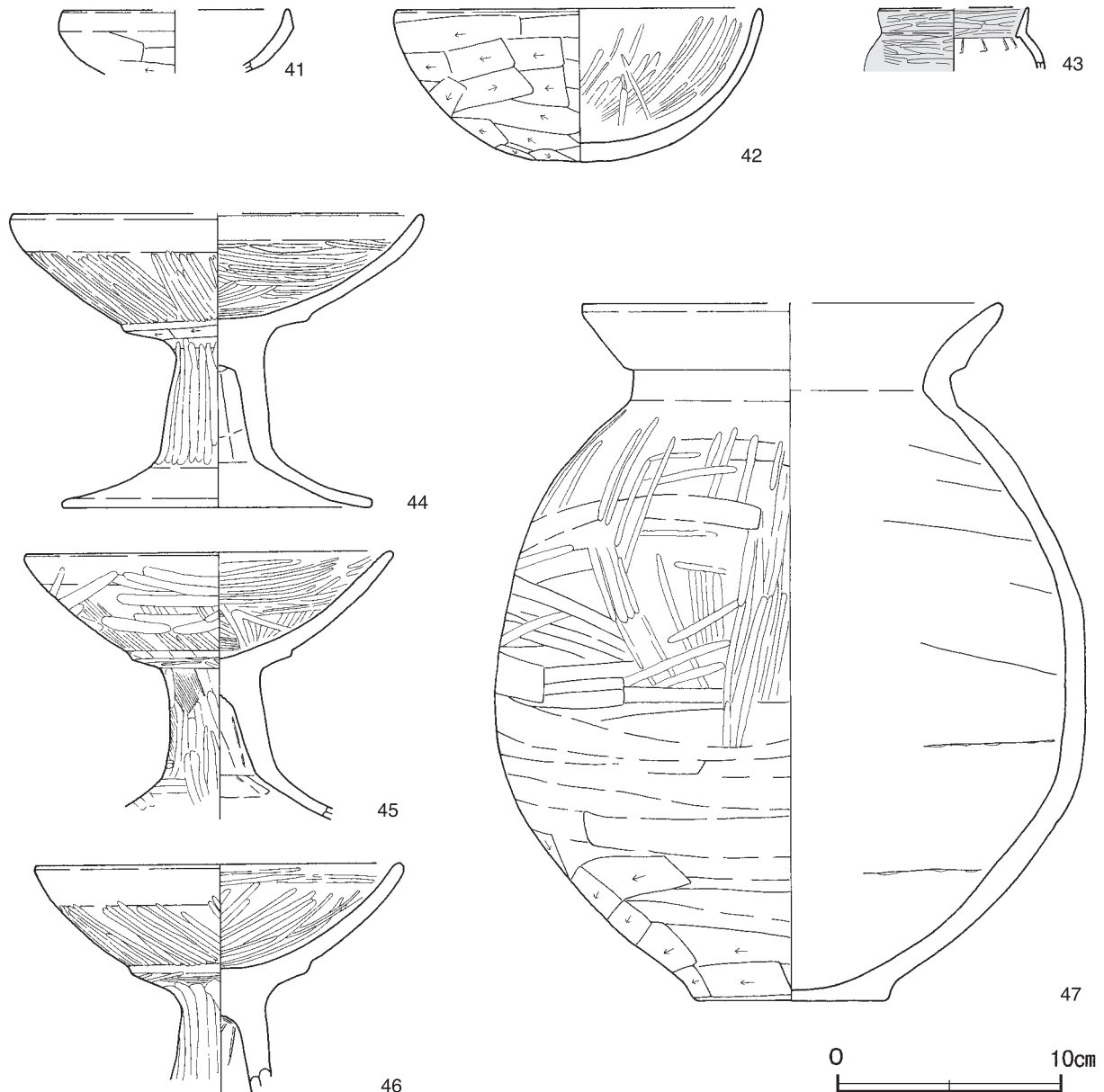
1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	4 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子少量	5 暗褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量

覆土 10層に分層できる。床面上で炭化材が少量出土しているが、覆土中に炭化材はほとんど含まれておらず、焼土も竈前面の1か所が確認できたのみである。第1・3～6・8層は、ローム粒子や焼土粒子・炭化粒子が少量含まれている黒褐色土や暗褐色土がレンズ状に堆積しており、自然堆積である。第2・9・10層は竈前面に堆積した流入土で、粘土ブロックが少量含まれている。第7層は白色粘土粒子が多く含まれている層である。第11～15層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|---------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化材・焼土粒子少量 | 10 極暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 | 11 褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 (貼床構築土) |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 12 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 (貼床構築土) |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 13 暗褐色 | ローム粒子中量 (貼床構築土) |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 14 暗褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子少量 (貼床構築土) |
| 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | 15 暗褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 (貼床構築土) |
| 7 灰白色 | 粘土粒子多量 | | |
| 8 黄褐色 | ローム粒子多量 | | |
| 9 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片 426 点 (坏 34, 碗 3, 埴 1, 高坏 39, 小形壺 3, 壺 2, 甕類 344), 炭化種子 1 点 (種不明) のほか, 縄文土器片 2 点 (深鉢), 弥生土器片 4 点 (広口壺, 土製品 1 点 (不明) が出土している。遺物は全域に散在した状態で出土し, 覆土上層から中層に多い傾向があることや接合関係が見られないことから, 埋没時に周辺から流入したものと考えられる。炭化種子は, 北東コーナー部付近の覆土上層から出土している。42 は竈前面から, 44・45 は北東コーナー部の床面からそれぞれ出土しており, ほぼ完形であること



第 30 図 第 189 号竪穴建物跡出土遺物実測図

から、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。またこれらには二次焼成痕や煤の付着が見られる。46・47は竈から出土したもので、竈廃絶時の祭祀行為に関わる可能性がある。床面から約10cm浮いた状態で炭化材が少量出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。竈は袖が細長く、壁外への掘り込みが少ない初期竈の様相を呈している。竈の遺物出土状況から、竪穴建物の使用停止後、竈に高坏を逆位に据え置いて何らかの行為を行い、その後竈を破壊して甕を逆位に伏せ置くという、竈廃絶に関わる一連の祭祀行為が推測できる。また、床面から炭化材が出土していることから焼失建物跡の可能性があるが、床面上や覆土中に炭化材や焼土の残存が少ないことから、建物焼失後に片付け等の行為を行っている可能性があり、その後自然に埋没したのと考えられる。床面から出土した土器は二次焼成を受けており、建物廃絶時に遺棄されたものと推測される。『第164集』に報告されている第84号竪穴建物跡との新旧関係は不明であるが、軸方向が本跡と異なっており、出土土器は同時期のものである。しかし北半部は確認できず、本跡によって掘り込まれている可能性が高いことから、本跡より古い時期の建物跡と考えられる。よって第84号竪穴建物跡出土とされた遺物は、本跡のものであったと考えられる。その判断が妥当であると、第84号竪穴建物跡で貯蔵穴としたピットは、本跡の南西コーナー部に位置することになり、本跡の貯蔵穴と考えられる。また、第84号竪穴建物跡のP2は高さ62cmで、位置から本跡の支柱穴、あるいは出入口施設に伴うピットの可能性がある。

第189号竪穴建物跡出土遺物観察表（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
41	土師器	坏	[10.0]	(2.8)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へら削り 内面横ナデ	覆土上層	10%
42	土師器	椀	16.0	6.8	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外面へら削り 内面磨き	床面	90% PL16
43	土師器	小形壺	[6.5]	(2.8)	-	長石・石英・雲母	赤	普通	口縁部外・内面磨き 体部外面磨き 内面へらナデ	覆土上層	10% 二次焼成
44	土師器	高坏	[18.0]	13.0	[13.6]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	坏部口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面磨き 脚部外面磨き 横ナデ 内面へらナデ	床面	70% PL16
45	土師器	高坏	16.0	(11.9)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	坏部口縁部外面横ナデ 体部外・内面磨き 脚部外面ハゲ目調整後磨き 内面へらナデ	床面	70% PL16 二次焼成
46	土師器	高坏	16.0	(10.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	坏部口縁部外面横ナデ 体部外・内面磨き 脚部外面へら削り 内面へらナデ	竈火床面	60% PL16 二次焼成
47	土師器	甕	[18.4]	30.8	8.0	長石・石英・赤色粒子・細礫	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上半へらナデ 後磨き 下半へらナデ後へら削り 内面へらナデ 底部へらナデ	竈上面	90% PL15 二次焼成

第196号竪穴建物跡（第31～33図）

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅶ区東部のE4f2区、標高29mほどの緩やかな台地斜面部に位置している。

重複関係 第194・195号竪穴建物、第29号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びているため、長軸は7.28m、短軸は5.77mしか確認できなかった。形状は隅丸長方形と推定され、主軸方向はN-52°-Eである。壁は高さ5～18cmで、外傾している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除いた中央部付近が踏み固められている。貼床は、ロームブロックを含む暗褐色土や黒褐色土の第2・3層を埋土して構築している。また、掘方調査で南壁から約30cm内側に10cmほどの段差が確認でき、西壁から約30cm内側には、全長2.1m、幅20cm、深さ5cmの溝状の掘り込みが確認できた。南壁・西壁側を拡張していることが推測され、前述の溝状の掘り込みは、拡張前の建物の壁溝と考えられる。

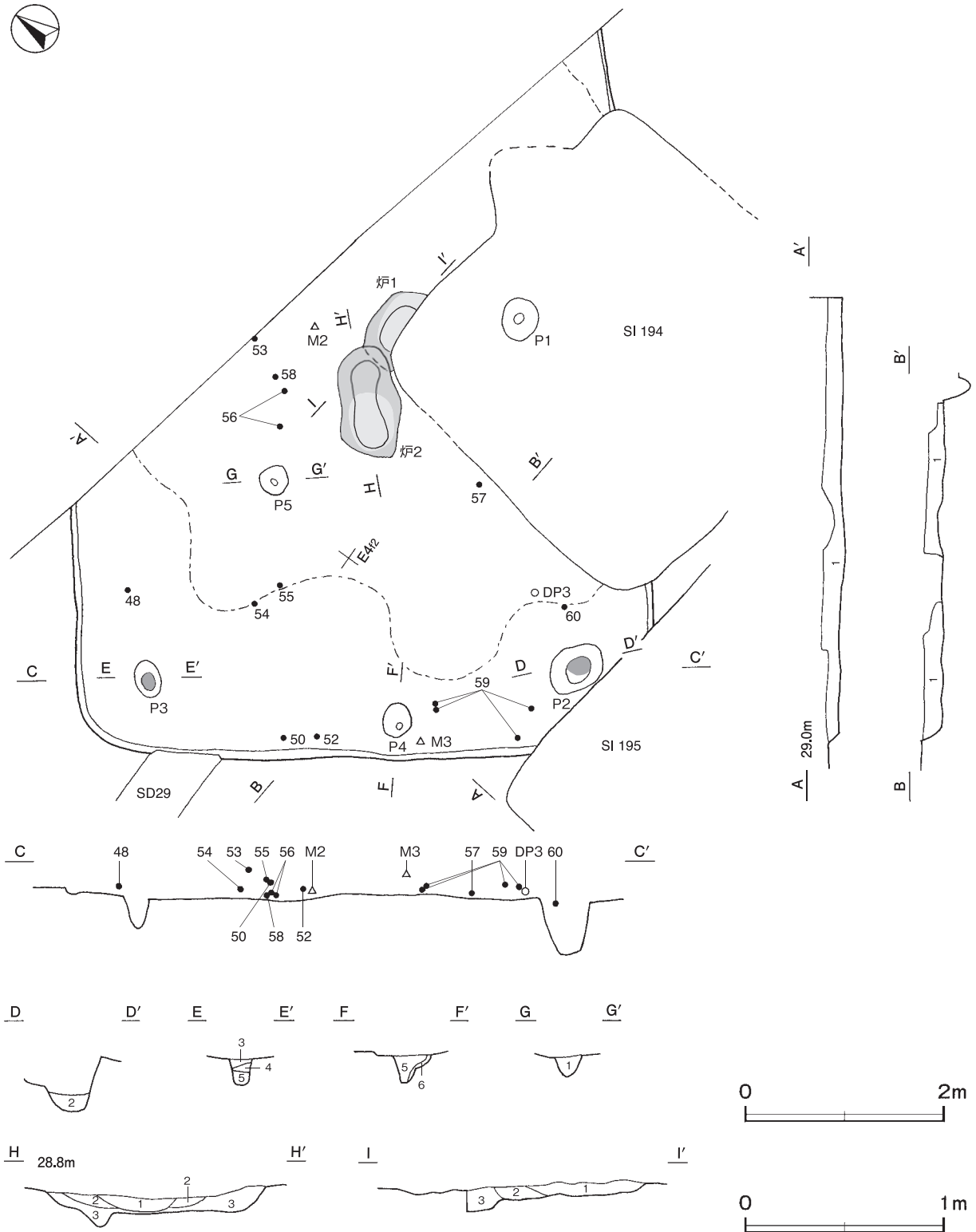
炉 2か所。中央部に位置すると推測され、炉2から炉1へ作り変えられている。炉2は長径112cm、短径58cmの楕円形である。深さ約8cmの地床炉で、炉底面は火熱を受けて赤変硬化している。炉1は南側が第194号竪穴建物に掘り込まれているため、長径80cm、短径は35cmしか確認できなかった。深さ約8cmの楕円形の地

床炉で、炉底面は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説 (炉1・2共通)

- 1 赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量

ピット 8か所。P1～P3が位置的に支柱穴と考えられる。P1は第194号竪穴建物跡の掘方調査時に確認したもので、床面からの深さは約40cmである。P2・P3は深さ49cm・25cmで、第2～5層は柱抜き取り後



第31図 第196号竪穴建物跡実測図(1)

の流入土と考えられる。底面に柱の当たりが確認できる。P4は深さ28cmで、位置的に出入口施設に伴うピットと考えられる。P5は深さ20cmで、性格は不明である。P6～P8は掘方調査時に確認できたピットである。深さ20～40cmで、いずれもロームブロックを含む極暗褐色土で埋め戻されている。

ピット土層解説 (P1～P8共通)

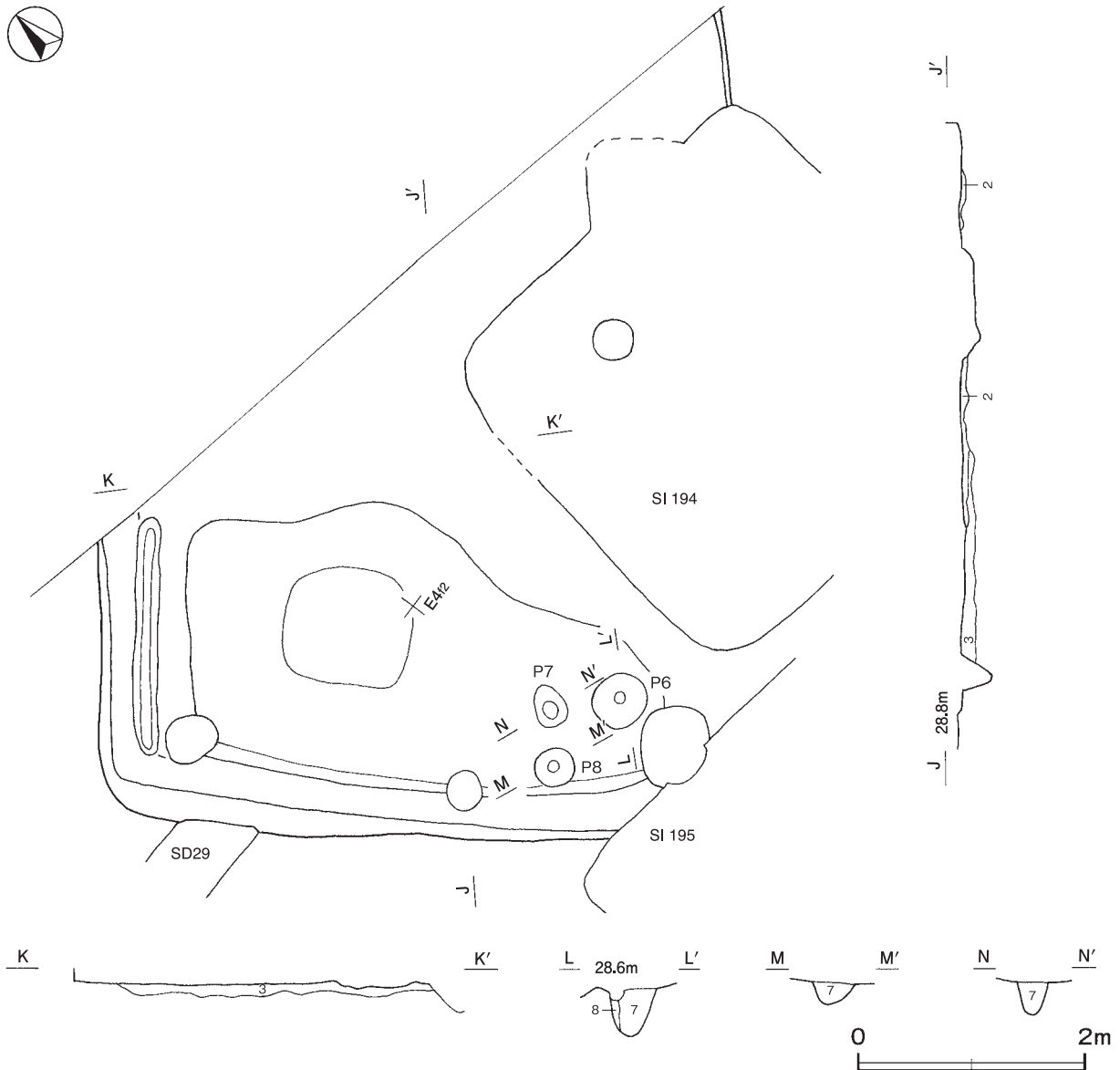
- | | | | |
|--------|-----------------|--------|-------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 7 極暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子少量 |

覆土 単一層。ロームブロックがやや多く含まれる極暗褐色土が堆積しており、埋め戻されている。第2・3層は貼床の構築土で、西壁側を大きく土坑状に一段掘りくぼめて構築されている。

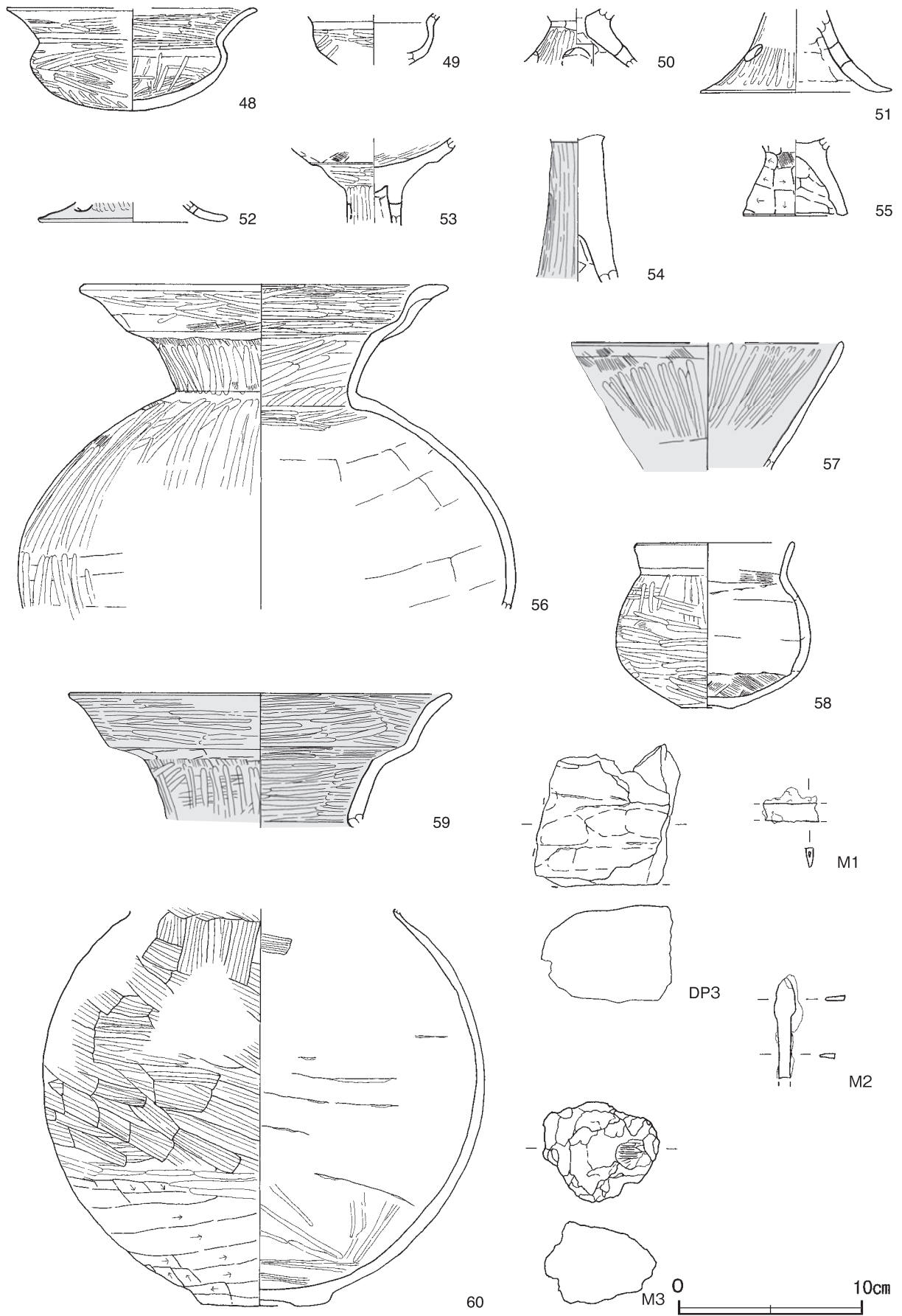
土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------------|-------|---------------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 (貼床構築土) | | 量 (貼床構築土) |

遺物出土状況 土師器片 145点 (埴4, 器台2, 高坏4, 鉢1, 小形壺1, 壺23, 甕類110), 土製品2点 (支脚カ, 不明), 鉄製品2点 (刀子, 鎌), 鉄滓1点 (178.50g) のほか, 弥生土器片43点 (広口壺), 須恵器片



第32図 第196号竪穴建物跡実測図(2)



第 33 图 第 196 号竖穴建物迹出土遗物实测图

6点（坏2，甕類4），焼成粘土塊3点が出土している。遺物は炉周辺と南壁付近の覆土下層から床面に多く、残存率のよい58・60や、56・59のような大形破片も出土していることから、廃絶時に遺棄されたと考えられる。覆土上層から出土する48～55や弥生土器片は建物を埋め戻した後、周囲から流入したものと考えられる。

所見 掘方調査での所見や炉が重複していることなどから、建て替えの可能性がある。時期は、出土土器から4世紀後葉と考えられる。

第196号竪穴建物跡出土遺物観察表（第33図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
48	土師器	埴	[13.4]	5.5	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ後磨き 体部外・内面磨き	覆土下層	60% PL15
49	土師器	埴	-	(2.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部外面磨き 内面ヘラナデ 磨減著しい	覆土上層	10%
50	土師器	器台	-	(3.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	外面磨き 内面指頭ナデ 3か所穿孔	覆土上層	10%
51	土師器	高坏	-	(4.4)	[10.4]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外面磨き 内面ヘラナデ 1か所穿孔	覆土上層	20%
52	土師器	高坏	-	(1.1)	[10.2]	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	外面磨き 内面ヘラナデ 1か所穿孔 磨減著しい	覆土上層	5%
53	土師器	高坏	-	(4.6)	-	長石・石英・細礫	赤褐	普通	坏部外面ハケ目調整後ヘラナデ 内面磨き 脚部外面磨き 内面指頭ナデ 3か所穿孔	覆土上層	30%
54	土師器	高坏	-	(7.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外面磨き 内面ヘラナデ	覆土上層	20%
55	土師器	台付甕	-	(4.1)	[5.6]	長石・石英・赤色粒子	にぶ赤褐	普通	外面ハケ目調整後ヘラナデ 内面指頭ナデ	覆土上層	10%
56	土師器	壺	19.2	(17.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面磨き 頸部外面ハケ目調整後磨き 内面磨き 体部外面ハケ目調整後ヘラナデ 磨き 内面ヘラナデ	覆土下層	30% PL15
57	土師器	壺	[14.6]	(6.9)	-	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐	普通	口縁部外面ハケ目調整後横ナデ 磨き 内面横ナデ後磨き	床面	10%
58	土師器	小形壺	8.6	8.9	2.5	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部外・内面ハケ目調整後横ナデ 体部外面ハケ目調整後磨き 内面ヘラナデ 下半ハケ目調整 底部ヘラ削り	床面	100% PL15
59	土師器	壺	20.4	(7.2)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面磨き 頸部外面ハケ目調整後磨き 内面磨き	床面	40% PL15
60	土師器	甕	-	(21.4)	6.9	長石・石英・雲母	黒褐	普通	体部外面上半ハケ目調整 中央部磨き 下半ヘラ削り 内面ヘラナデ一部磨き 底部ヘラ削り	床面	50% PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 3	支脚	(7.7)	(7.8)	(5.2)	(262.3)	長石・赤色粒子・細礫	橙	外面指頭ナデ 底面指頭ナデ	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	刀子	(3.0)	1.0	0.1～0.4	(4.6)	鉄	刃部 茎部欠損	覆土中	PL22
M 2	鎌	(5.5)	1.1	0.2	(9.4)	鉄	柳葉式 茎部欠損	覆土上層	PL22
M 3	鉄滓	5.4	6.2	4.4	178.5	鉄	表面暗褐色 一部黒褐色 木炭痕あり	覆土上層	

表5 古墳時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面 貼床平坦	壁溝 ほぼ全周	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
2	E3d1	N-5°-E	方形	4.80×4.76	12～20	貼床平坦	ほぼ全周	4	1	2	北壁	1	自然	土師器, 須恵器, 鉄滓	6世紀後葉	本跡→SI1・3・103・104, SF2
86	E3e5	N-13°-W	方形	4.28×4.24	12～42	貼床平坦	全周	4	1	2	北壁	-	自然	土師器, 須恵器	6世紀後葉	SI84・85・189→本跡
95	E2e0	N-13°-W	方形	6.00×5.90	10	貼床平坦	ほぼ全周	7	-	8	北壁	-	-	土師器, 須恵器	6世紀前葉	本跡→SK252・262, SF2, PG2
138	C3d1	N-40°-W	方形	3.55×3.43	28	貼床平坦	全周	2	1	1	北壁	-	自然	土師器, 須恵器, 炭化種子	7世紀後葉	本跡→SD30・31, SF3
189	E3e5	N-25°-E	[方形・長方形]	6.72×(4.08)	14～26	貼床平坦	ほぼ全周	3	-	4	北壁	-	自然	土師器, 炭化種子	5世紀後葉	SI197→本跡→SI86 SK260, PG.3 新旧不明
196	E4f2	N-52°-E	[隅丸長方形]	(7.28)×5.77	5～18	貼床平坦	-	3	1	4	炉2	-	人為	土師器, 土製品, 鉄製品, 鉄滓	4世紀後葉	本跡→SI194・195, SD29

(2) 土坑

第254号土坑（第34図）

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅶ区中央部のE 3 d3区，標高 29 mほどの台地平坦部に位置している。

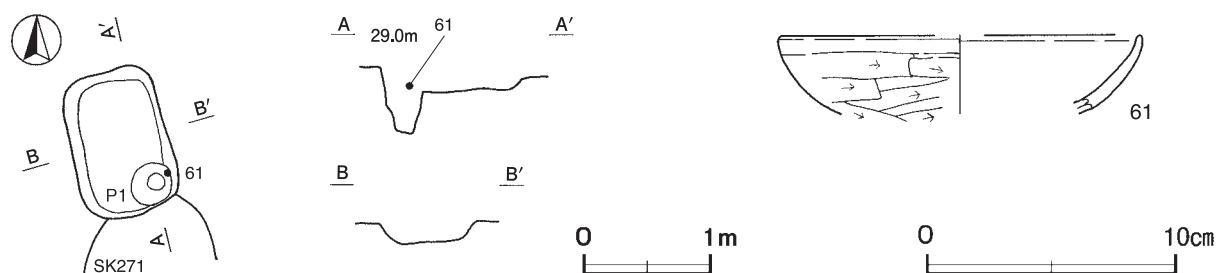
重複関係 第 271 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 1.16 m，短軸 0.72 mの隅丸長方形で，長軸方向はN - 15° - Wである。深さは 18cmで，底面は平坦である。壁は外傾している。

ピット 南東コーナー部にあり，径 31cm，深さ 36cmである。性格は不明である。

遺物出土状況 土師器片 22 点（坏 1，壺 1，甕類 20），須恵器片 1 点（甕類）のほか，縄文土器片 1 点（深鉢），陶器片 1 点（碗），磁器片 1 点（碗）が出土している。覆土上層から出土した土師器壺片が，第 271 号土坑の 63 と接合している。61 は南東コーナー付近の底面から出土している。

所見 時期は，出土土器から 7 世紀中葉と考えられる。性格は不明である。



第 34 図 第 254 号土坑実測図・出土遺物実測図

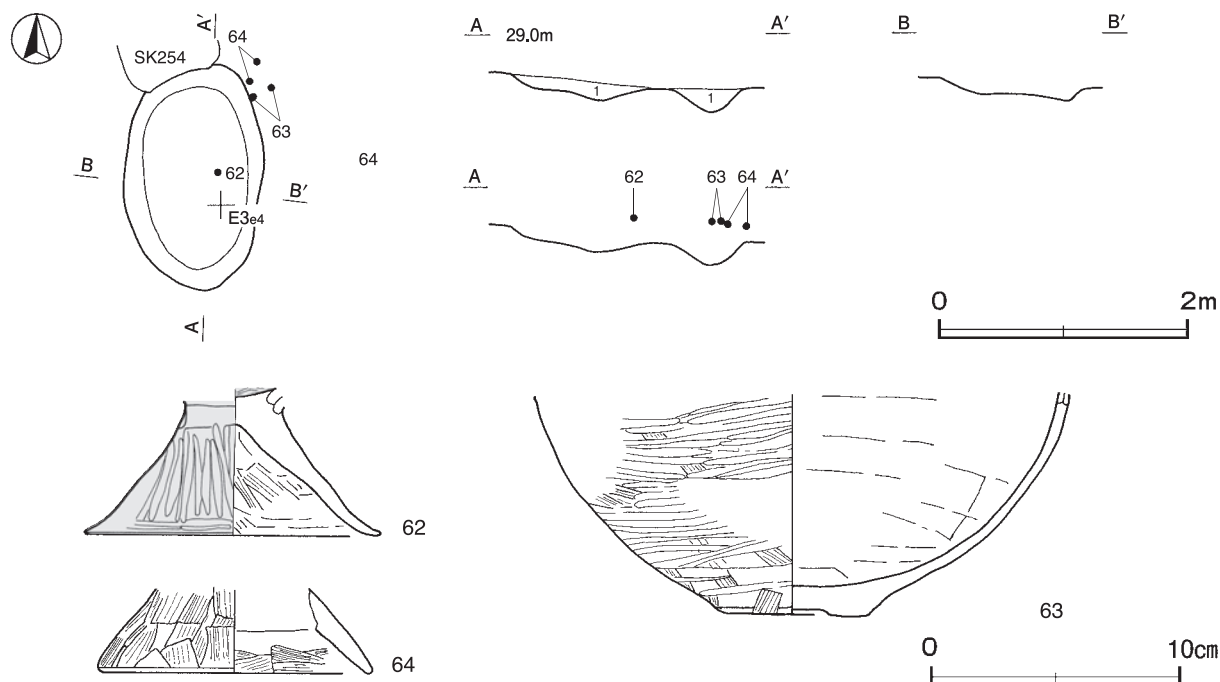
第 254 号土坑出土遺物観察表（第 34 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
61	土師器	坏	[144]	(3.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶ黄橙	普通	口縁部外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	底面	10%

第 271 号土坑（第 35 図）

調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅶ区中央部のE 3 e4区，標高 29 mほどの台地平坦部に位置している。



第 35 図 第 271 号土坑実測図・出土遺物実測図

重複関係 第254号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.80 m，短径1.12 mの楕円形で，長径方向はN-2°-Wである。深さは12cmで，底面は凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 単一層。ローム粒子がやや多く含まれている暗褐色土の自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片85点（高坏7，壺18，台付甕1，甕類59）のほか，須恵器片1点（甕類）が出土している。62は中央付近の覆土上層から出土した。63・64は北部の壁際およびその周辺から出土し，63は重複する第254号土坑から出土した破片と接合している。

所見 時期は，出土土器から4世紀後葉と考えられる。性格は不明である。

第271号土坑出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
62	土師器	高坏	-	(5.8)	[11.8]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	坏部内面磨き 脚部外面磨き 内面ハケ目調整 後ヘラナデ 指頭ナデ	覆土上層	40%
63	土師器	壺	-	(8.8)	6.0	長石・石英・赤色粒子	におい黄橙	普通	体部外面ハケ目調整後磨き 内面ヘラナデ 底部ナデ後磨き	覆土上層	20%
64	土師器	台付甕	-	(3.4)	[10.6]	長石・石英	橙	普通	脚部外面ハケ目調整 内面ナデ後ハケ目調整	覆土上層	20%

表6 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
254	E3d3	N-15°-W	隅丸長方形	1.16×0.72	18	平坦	外傾	-	土師器，須恵器	SK271→本跡
271	E3e4	N-2°-W	楕円形	1.80×1.12	12	凹凸	緩斜	自然	土師器	本跡→SK254

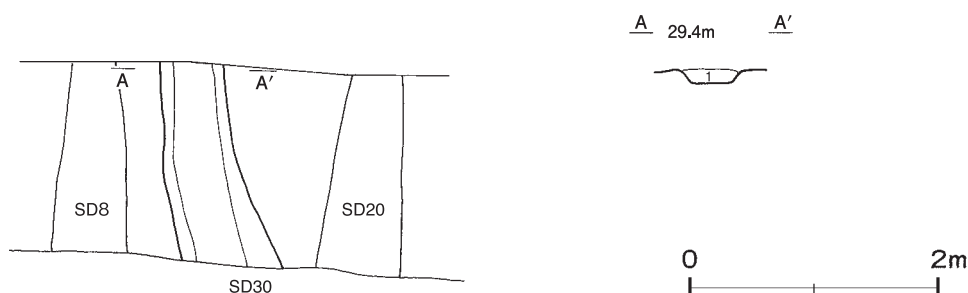
(3) 溝跡

第14号溝跡（第36図）

調査年度 平成25年度。北部及び南部は平成9年度に調査し，当財団調査報告『第164集』において報告している。

位置 調査Ⅵ区東部のC3c1区，標高29mほどの台地上に位置している。

重複関係 第162号竪穴建物，第30号溝，第3号道路に掘り込まれている。第138号竪穴建物跡との新旧関係は不明である。



第36図 第14号溝跡実測図

規模と形状 今回の調査で確認できた長さは1.63 mで、上幅50～85cm、下幅30～42cm、深さ8～19cmである。平成9年度調査分と合わせると、D3j7区から西南西方向（N-113°-W）へ3.2 m延び、D3j6区で95度北に屈曲し、北西方向（N-18°-W）に直線的に89.2 m延びている。底面はほぼ平坦で、北に向かって傾斜している。壁は外傾している。

覆土 単一層。ローム粒子が含まれている黒褐色土で、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 今回の調査では遺物は出土しなかったが、前回の調査で、7世紀代から8世紀代を中心とした土師器片や須恵器片が多く出土している。

所見 今回の調査区は、後世の削平のため前回調査時よりも遺構確認面が低いことから、溝の下位部分のみが確認されたものと思われる。時期は前回の調査成果から、古墳時代後期に掘削されて使用され、8世紀代まで埋まりきらなかったものと考えられる。性格は不明である。

4 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡12棟と土坑1基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。なお、前回の調査でⅦ区東側で第81号竪穴建物跡を確認しているが、今回の調査では確認できなかった。

(1) 竪穴建物跡

第3号竪穴建物跡（第37図）

調査年度 平成25年度。北部は平成9年度に調査し、当財団調査報告『第164集』において報告している。

位置 調査Ⅶ区西部のE3d2区、標高29 mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2・103・104号竪穴建物跡を掘り込み、第4・15号竪穴建物に掘り込まれている。ただし、今回の調査範囲は、竪穴建物跡の南壁際の一部であるため、第4・15号竪穴建物跡については確認していない。また、前回の調査で確認した第4号溝跡は確認できなかった。

規模と形状 今回確認できたのは南北軸1.30 m、東西軸6.12 mであるが、前回調査部分と合わせると、長軸6.70 m、短軸6.30 mの方形で、主軸方向はN-17°-Eである。壁は高さ10～40cmで、外傾している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部付近が踏み固められている。南西コーナー部を除き、壁溝が巡っている。貼床は、ロームブロックやローム粒子を含む暗褐色土を主体とした第4～7層で、第103・104号竪穴建物跡を埋土して構築されている。南東コーナー部の床面から15cmほど浮いた状態で、径30cm、厚さ10cmの焼土ブロックが出土している。

竈 前回の調査で、北壁中央部に付設されているのを確認している。

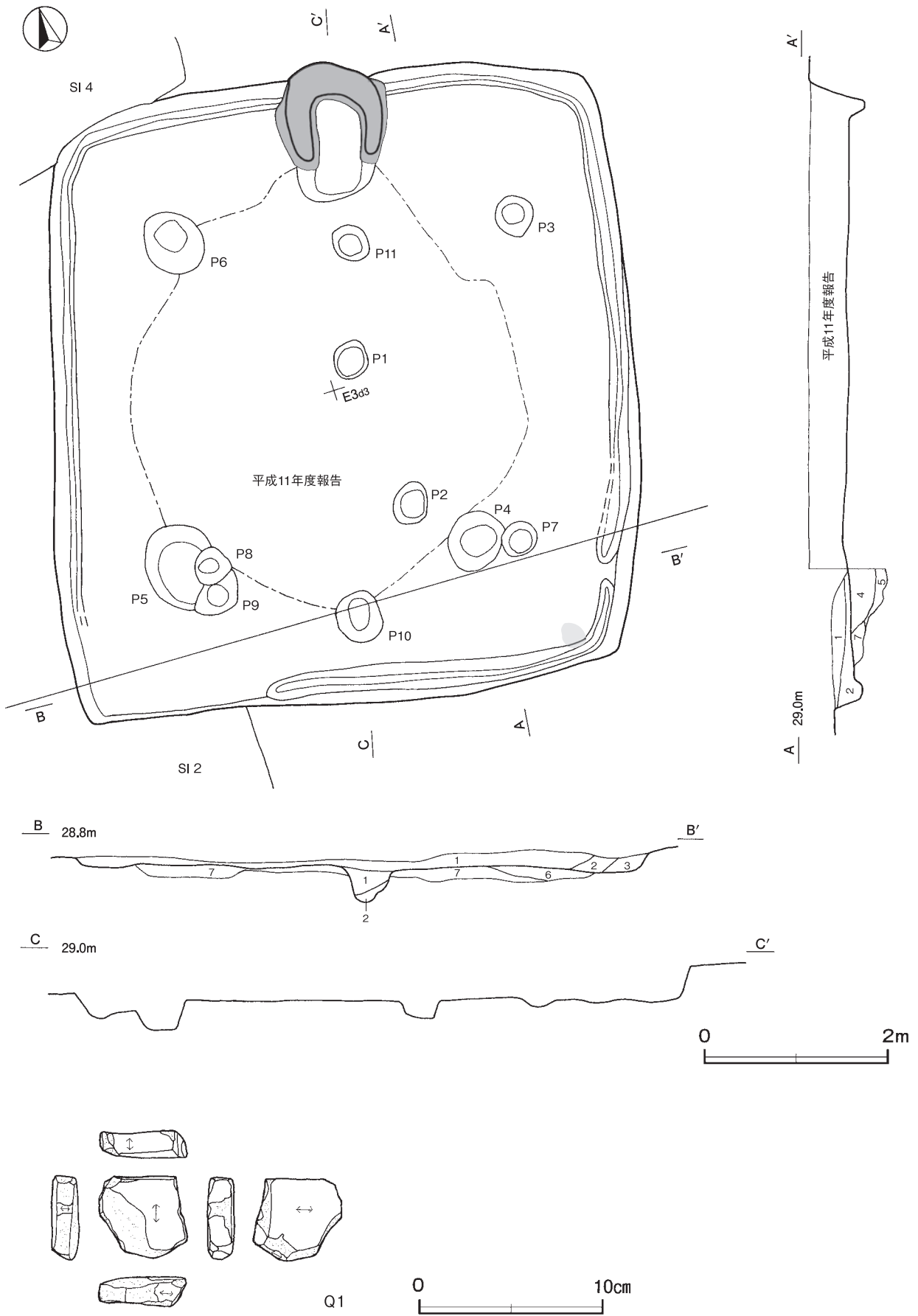
ピット 前回の調査で11か所のピットを確認しており、今回の調査ではP10の南半部を確認した。位置から出入口施設に伴うピットである。

P10土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

覆土 3層に分層できる。第1～3層はローム粒子が含まれている暗褐色土を主体とした層で、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。第4～7層は、貼床の構築土である。



第37図 第3号竖穴建物跡・出土遺物実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------------|-------|---|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
(第103号竪穴建物跡埋土) |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
(第103号竪穴建物跡埋土) |
| 3 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量
(第104号竪穴建物跡埋土) | | |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 (第104号竪穴建物跡埋土) | | |

遺物出土状況 土師器片 62 点 (坏 7, 壺 7, 甕類 48), 須恵器片 2 点 (坏, 蓋), 石器 1 点 (砥石) のほか, 縄文土器片 1 点 (深鉢), 弥生土器片 3 点 (広口壺), 磁器片 2 点 (碗) が出土している。いずれも小片で, 調査範囲内に散在している。

所見 今回の調査では, 時期判断が可能な遺物がほとんど確認できなかったが, 前回の調査の成果から, 8 世紀前葉と考えられる。

第 3 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 37 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	4.4	4.8	1.5	39.39	凝灰岩	砥面 4 面	覆土下層	

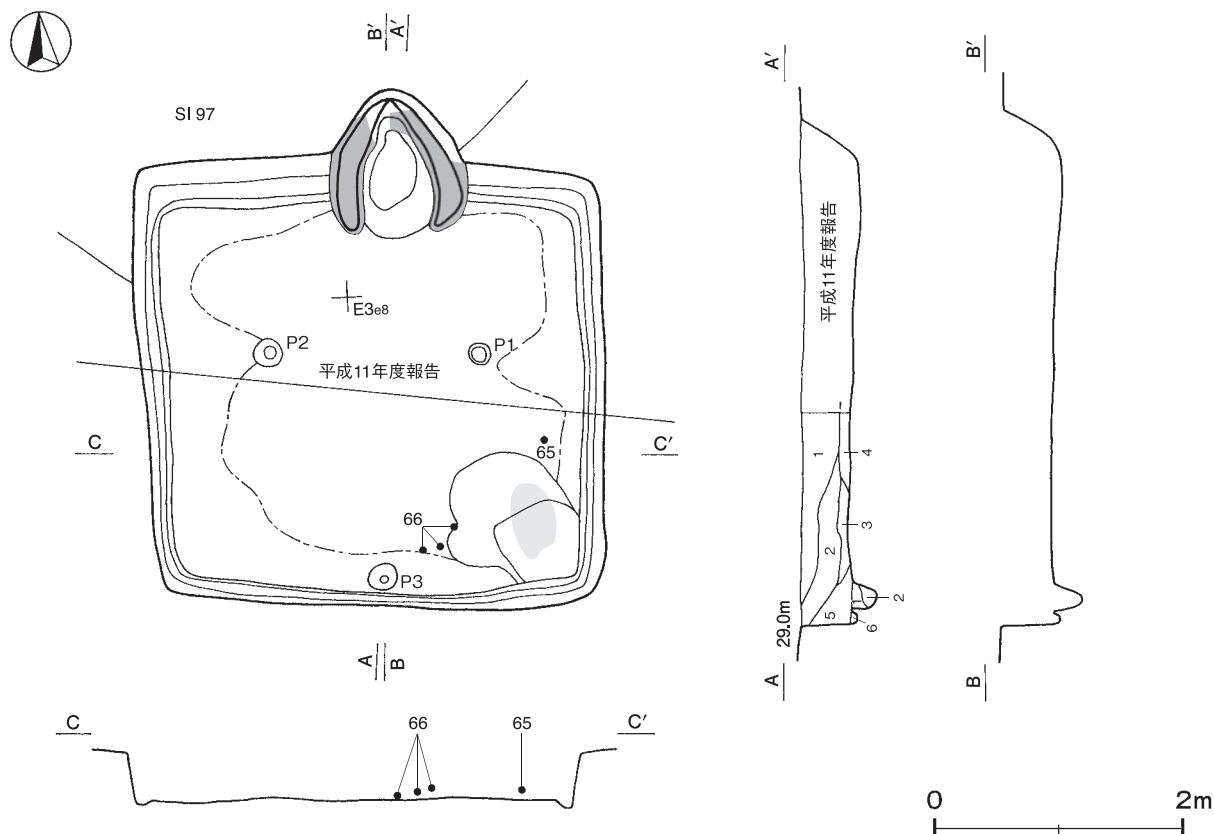
第 98 号竪穴建物跡 (第 38・39 図)

調査年度 平成 25 年度。北部は平成 9 年度に調査し, 当財団調査報告『第 164 集』において報告している。

位置 調査Ⅶ区中央部の E 3e8 区, 標高 29 m ほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 前回の調査で, 第 97 号竪穴建物跡を掘り込んでいることが確認されている。

規模と形状 今回確認できたのは南北軸 1.80 m, 東西軸 3.56 m であるが, 前回調査部分と合わせると, 長軸 3.60 m, 短軸 3.56 m の方形で, 主軸方向は N - 3° - E である。壁は高さ 35 ~ 40cm で, ほぼ直立している。



第 38 図 第 98 号竪穴建物跡実測図

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除いて踏み固められている。壁下には、壁溝が全周している。貼床は、南東コーナー部のみ確認できた。南東コーナー部の床面で、長径62cm、短径33cm、厚さ5cmの焼土塊が確認されている。

竈 前回の調査で、北壁中央部に付設されているのを確認している。

ピット 3か所。P1・P2は前回の調査で確認されたもので、位置から支柱穴である。P3は深さ20cmで、位置から出入口施設に伴うピットである。第1・2層は抜き取り後の流入土である。

P3土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 黒褐色 ローム粒子微量

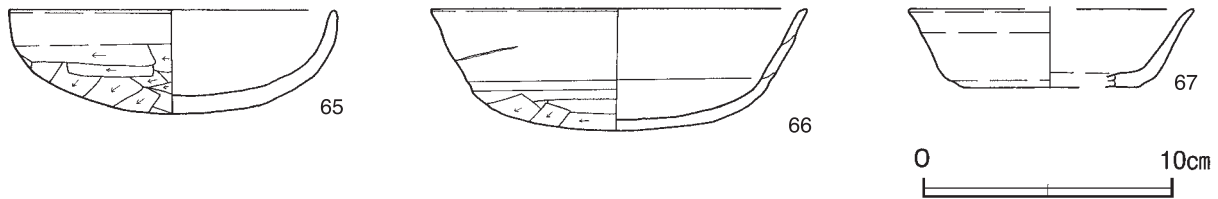
覆土 6層に分層できる。第1～5層は各層にローム粒子が含まれ、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。第6層は壁溝の堆積土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 4 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量
 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 6 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量（壁溝覆土）

遺物出土状況 土師器片84点(坏4, 甕類80), 須恵器片5点(坏3, 甕類2)のほか、縄文土器片1点(深鉢), 弥生土器片2点(広口壺)が出土している。65・66は、南東コーナー部の床面付近からほぼ完形で出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。床面から焼土ブロックが出土していることや、出土土器が二次焼成を受けていることから焼失建物の可能性がある。しかし、覆土中に焼土ブロックは含まれているものの少量で、炭化材等の出土も見られないため、焼土ブロックは65・66とともに建物廃絶後に投棄され、その後自然に埋没したものと考えられる。



第39図 第98号竪穴建物跡出土遺物実測図

第98号竪穴建物跡出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
65	土師器	坏	12.9	4.1	-	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	床面	100% PL16
66	土師器	坏	15.0	5.0	-	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	床面	60% PL16 二次焼成
67	須恵器	坏	[11.3]	3.1	[7.0]	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部回転ヘラ削り	覆土下層	10% 新治窯

第103号竪穴建物跡（第40図）

調査年度 平成25年度。北部は平成9年度に調査し、当財団調査報告『第164集』において報告している。

位置 調査Ⅶ区西部のE3d2区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第2号竪穴建物跡を掘り込み、第3・15・104号竪穴建物に掘り込まれている。ただし、今回の調査範囲は竪穴建物跡の南壁際の一部であるため、第2・15号竪穴建物跡については確認していない。また、前回の調査で確認した第4号溝跡は確認できなかった。

規模と形状 第3号竪穴建物跡の堆積状況を調査する中で確認したもので、平面では確認することができなかった。前回の調査部分と合わせると、東西軸5.30m、南北軸5.30mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁は高さ8～14cmで、外傾している。

床 今回の調査区は南壁際にあたるため、硬化面は確認できなかった。

竈 前回の調査で、北壁中央部に付設されているのを確認している。

ピット 前回の調査で、10か所のピットが確認されている。

覆土 2層に分層できる。第3・4層は、ロームブロックが含まれている暗褐色土で、埋め戻されている。

土層解説

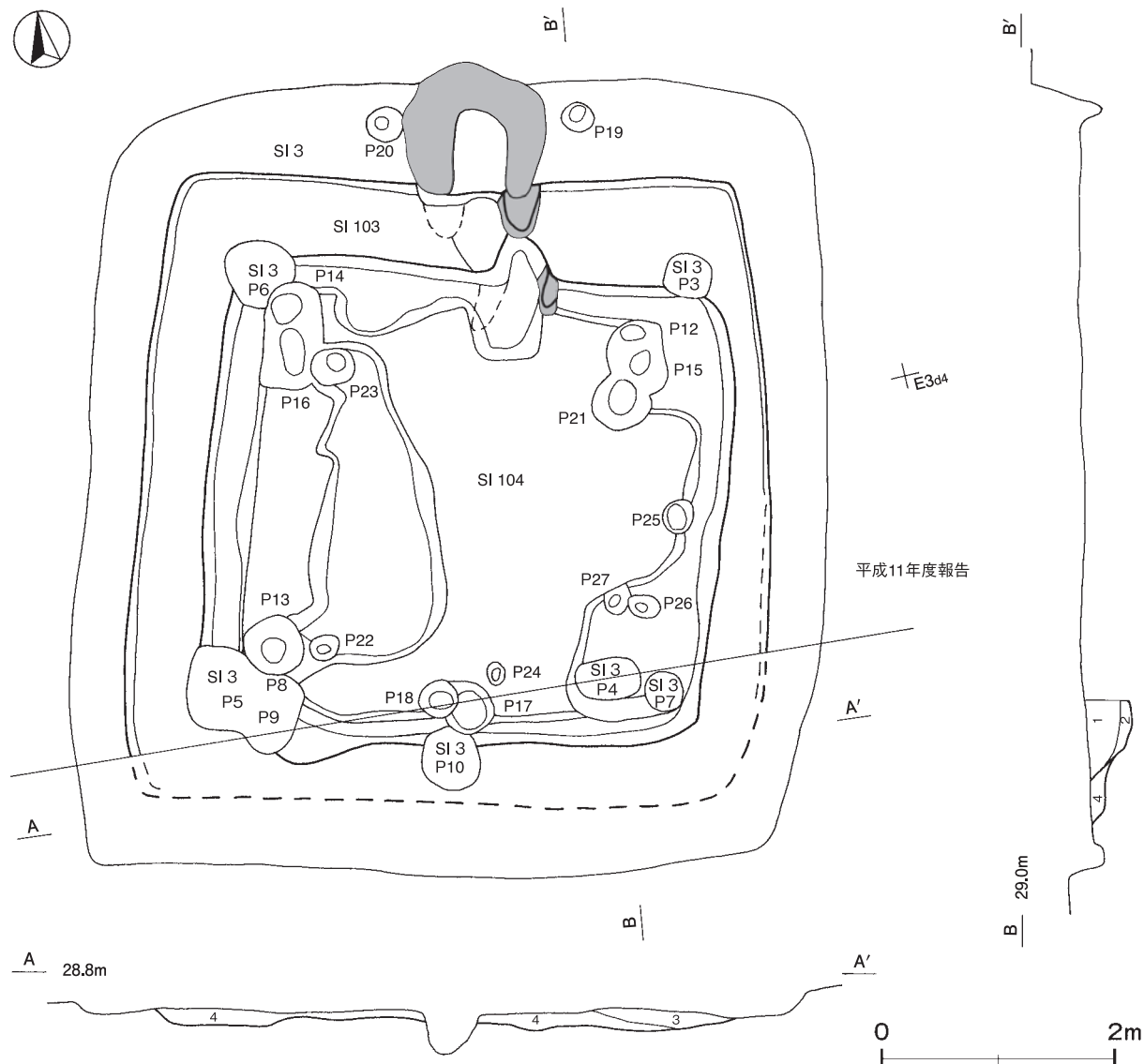
- | | | | |
|-------|------------------------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量
(第104号竪穴建物跡覆土) | 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量
(第104号竪穴建物跡覆土) | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |

所見 前回の調査では、伴出する遺物が少なく、重複関係から8世紀代と考えられたが、今回も時期を判断できるような遺物は見られなかった。本跡が一番古く、第104号竪穴建物、第3号竪穴建物の順に、一度規模が縮小された後、拡張されたものと考えられる。

第104号竪穴建物跡 (第40図)

調査年度 平成25年度。北部は平成9年度に調査し、当財団調査報告『第164集』において報告している。

位置 調査Ⅶ区西部のE3d2区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。



第40図 第103・104号竪穴建物跡実測図

重複関係 第2・103号竪穴建物跡を掘り込み、第3・15号竪穴建物に掘り込まれている。ただし、今回の調査範囲は竪穴建物跡の南壁際の一部であるため、第2・15号竪穴建物跡については確認していない。また、前回の調査で確認した第4号溝跡は確認できなかった。

規模と形状 南壁の一部のみを確認した。今回確認できたのは南北軸0.57m、東西軸3.60mであるが、前回調査分と合わせると長軸4.40m、短軸4.10mの方形で、主軸方向はN-14°-Eである。壁は高さ30～35cmで、外傾している。

床 今回の調査区は南壁際で、やや凹凸がある。壁下に壁溝が全周している。

竈 前回の調査で、北壁中央部に付設されているのを確認している。

ピット 前回の調査で8か所のピットが確認されている。

覆土 2層に分層できる。第1・2層はロームブロックが含まれている層で、埋め戻されている。

所見 前回の調査では、伴出する遺物が少なく、重複関係から8世紀代と考えられていたが、今回も時期を判断できるような出土遺物は見られなかった。第103号竪穴建物跡が一番古く、本跡、第3号竪穴建物の順に、一度規模が縮小された後、拡張されているものと考えられる。

第182号竪穴建物跡（第41図）

調査年度 平成25年度。南部は平成9年度に調査し、当財団調査報告『第164集』において報告している。

位置 調査V区南部のA2i4区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第181号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 今回確認できたのは南北軸1.60m、東西軸3.31mであるが、前回調査部分と合わせると、長軸3.55m、短軸3.31mの長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁は高さ9～13cmで、外傾している。

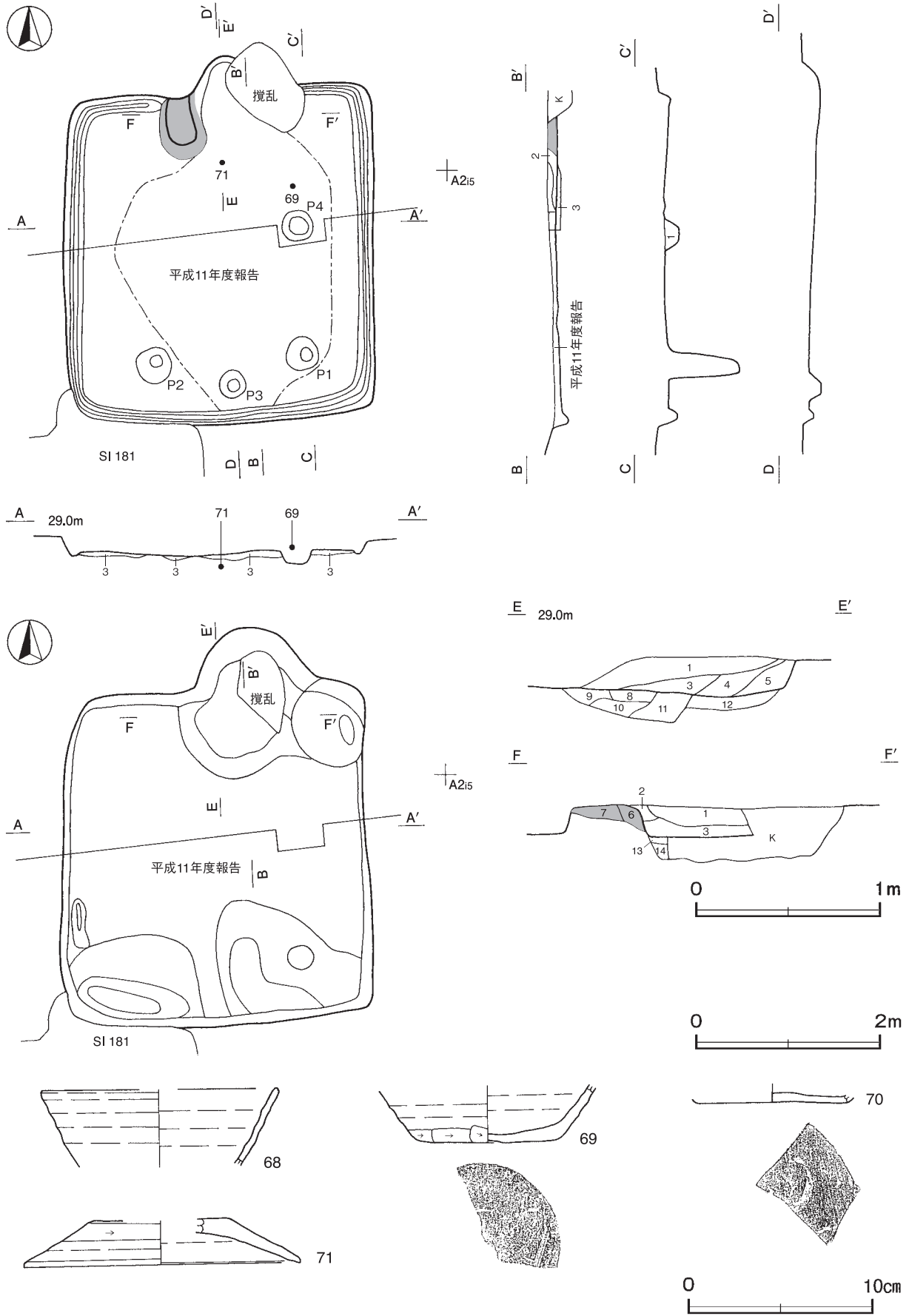
床 ほぼ平坦な貼床で、中央部付近が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。貼床は、コーナー部を土坑状に一段深く掘り下げ、ロームブロックやローム粒子を多く含む第3層で埋土して構築している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで110cmで、燃焼部幅は、東部が攪乱によって壊されているため不明である。全体を楕円形状に深さ20cmほど掘りくぼめ、ロームブロックや焼土ブロックを含む第8～14層を埋土して構築されている。袖部は、地山を掘り残した部分に、粘土粒子を含む第6・7層を積み上げて構築している。火床面は、床面とほぼ同じ高さで、火熱による赤変硬化が見られない。煙道部は、壁外に42cmほど掘り込まれ、火床面から外傾している。第1～5層が天井部材や内壁崩落土及び煙道部からの流入土であることから、自然崩壊したものと考えられる。

竈土層解説

1	褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	8	褐色	ローム粒子中量（埋土）
2	褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	9	暗褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量（埋土）
3	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック微量	10	黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量（埋土）
4	褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量	11	褐色	ローム粒子多量（埋土）
5	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	12	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量（埋土）
6	褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量（袖部構築土）	13	褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量（埋土）
7	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量（袖部構築土）	14	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量（埋土）

ピット 4か所。P1～P3は前回の調査で確認されたピットで、位置からP1・P2は主柱穴、P3は出入口施設に伴うピットである。P4は深さ15cmで、浅いものの位置的に主柱穴の可能性がある。P2に対応する位置の主柱穴は確認できなかった。



第 41 図 第 182 号竖穴建物跡・出土遺物実測図

P4土層解説

1 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが少量含まれている層を主体とした自然堆積である。第3層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量 3 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (貼床構築土)
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 18点 (甕類), 須恵器片 17点 (坏 14, 蓋 1, 甕類 2) が出土している。遺物はいずれも小片で, 全体から散在するように出土している。71は, 竈前面の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀後葉と考えられる。前回の調査でも, 同時期の土器を確認している。

第182号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第41図)

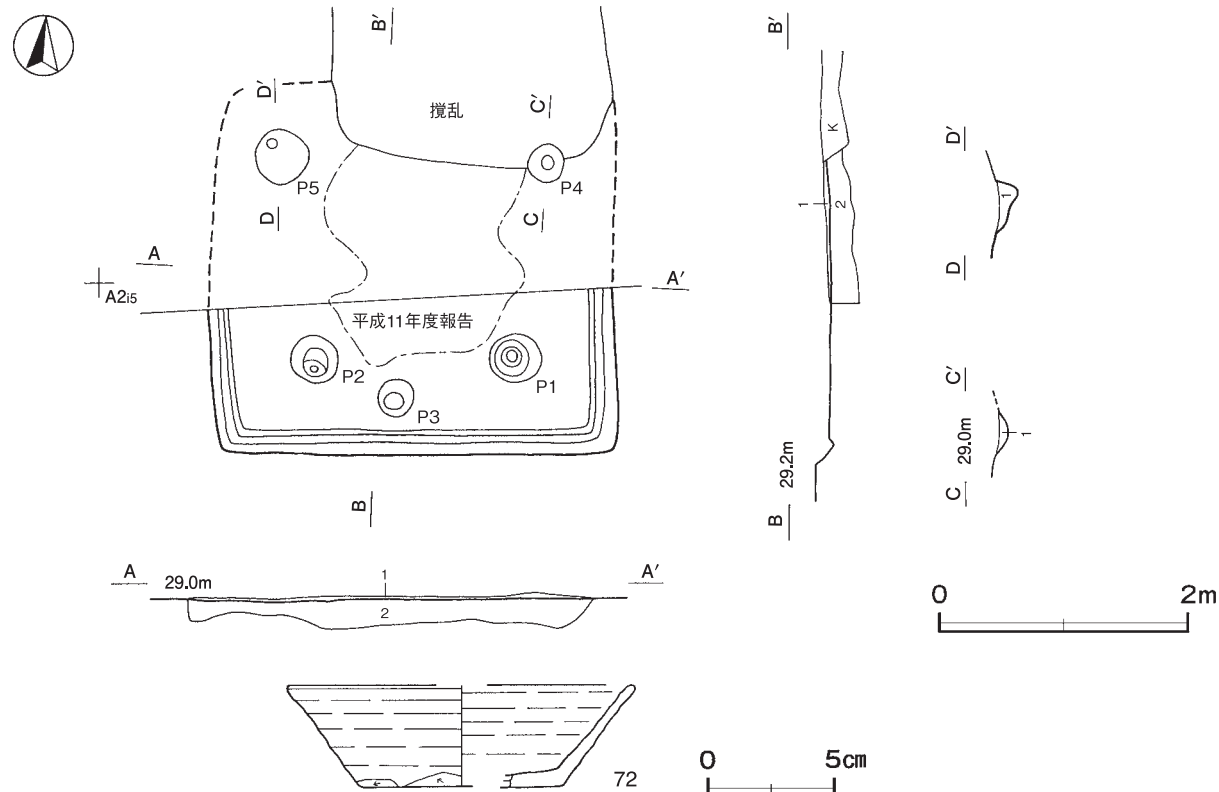
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
68	須恵器	坏	[12.8]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	にお黄澄	普通	外・内面ロクロナデ	覆土中層	50% 新治窯
69	須恵器	坏	-	(3.0)	[7.6]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	40% 新治窯
70	須恵器	坏	-	(0.6)	[8.3]	長石・石英・雲母・細礫	灰	普通	底部一方向のヘラ削り 研磨	覆土中層	10% 新治窯 視転用カ
71	須恵器	蓋	[15.0]	(2.5)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	20% 新治窯

第183号竪穴建物跡 (第42図)

調査年度 平成25年度。南部は平成9年度に調査し, 当財団調査報告『第164集』において報告している。

位置 調査V区南部のA2h5区, 標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 遺構確認面が床面とほぼ同じ高さであったことから, 壁は確認できなかった。前回の調査成果や



第42図 第183号竪穴建物跡・出土遺物実測図

ピットの位置などから、南北軸約3m、東西軸3.23mの方形で、主軸方向はN-2°-Wと推定できる。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。前回調査した南部の壁下には壁溝が巡っている。貼床は、全体的に20cmほど掘りくぼめ、焼土粒子や炭化粒子を含む第2層を埋土して構築している。

竈 北壁付近が攪乱のため、確認することができなかった。

ピット 5か所。P1～P3は前回の調査で確認したピットである。P4・P5はいずれも深さが10cmほどであるが、位置から支柱穴と考えられる。第1層は柱抜き取り後の流入土である。

ピット土層解説 (P4・P5共通)

1 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

覆土 単一層。ローム粒子が含まれている暗褐色土を主体とした土であるが、確認できた層厚がわずかであるため、堆積状況を判断できなかった。前回の調査では、自然堆積と捉えている。第2層は貼床の構築土である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 (貼床構築土)

遺物出土状況 土師器片10点(坏4, 甕類6), 須恵器片5点(坏)が出土している。遺物は少量で小片が多く、本跡の埋没時に周囲から流入したものと考えられる。72は貼床構築土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。前回調査でも同期の遺物を確認している。

第183号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
72	須恵器	坏	[13.6]	4.0	[8.0]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	貼床構築土	20%

第186号竪穴建物跡 (第43・44図)

調査年度 平成24年度

位置 調査Ⅷ区中央部のH4b2区, 標高23mほどの斜面部に位置している。

規模と形状 南部が削平されていることから、確認できたのは南北軸3.15m, 東西軸3.76mで、方形と推測され、主軸方向はN-13°-Wである。壁は高さ30～55cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除く中央部付近が踏み固められている。確認できた範囲で、北壁の一部を除いて壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで100cmで、燃焼部幅は54cmである。全体を深さ5cmほど掘りくぼめ、焼土粒子をやや多く含む第10層を埋土して構築されている。袖部は、粘土粒子をやや多く含む第6～9層を積み上げて構築されている。火床面は、床面から10～20cmほど掘りくぼめ、火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外に30cm掘り込まれ、火床部から外傾している。第2～5層が天井部及び天井部内壁の崩落土や流入土であることから、自然崩壊したものと考えられる。

竈土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 (建物跡覆土)

6 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 (袖部構築土)

2 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 粘土ブロック・炭化粒子微量 (流入土)

7 に~~い~~赤褐色 粘土粒子中量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 (袖部構築土)

3 に~~い~~赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量, 粘土ブロック・ローム粒子微量 (天井部内壁崩落土)

8 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化物微量 (袖部構築土)

4 暗赤褐色 焼土粒子少量, 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 (天井部内壁崩落土)

9 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化物・粘土粒子微量 (袖部構築土)

5 に~~い~~赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量, 粘土ブロック・ローム粒子微量 (天井部内壁崩落土)

10 に~~い~~赤褐色 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, ローム粒子・粘土粒子微量 (埋土)

ピット 2か所。P1・P2は深さがP1が55cm, P2が60cmで, 位置から支柱穴である。

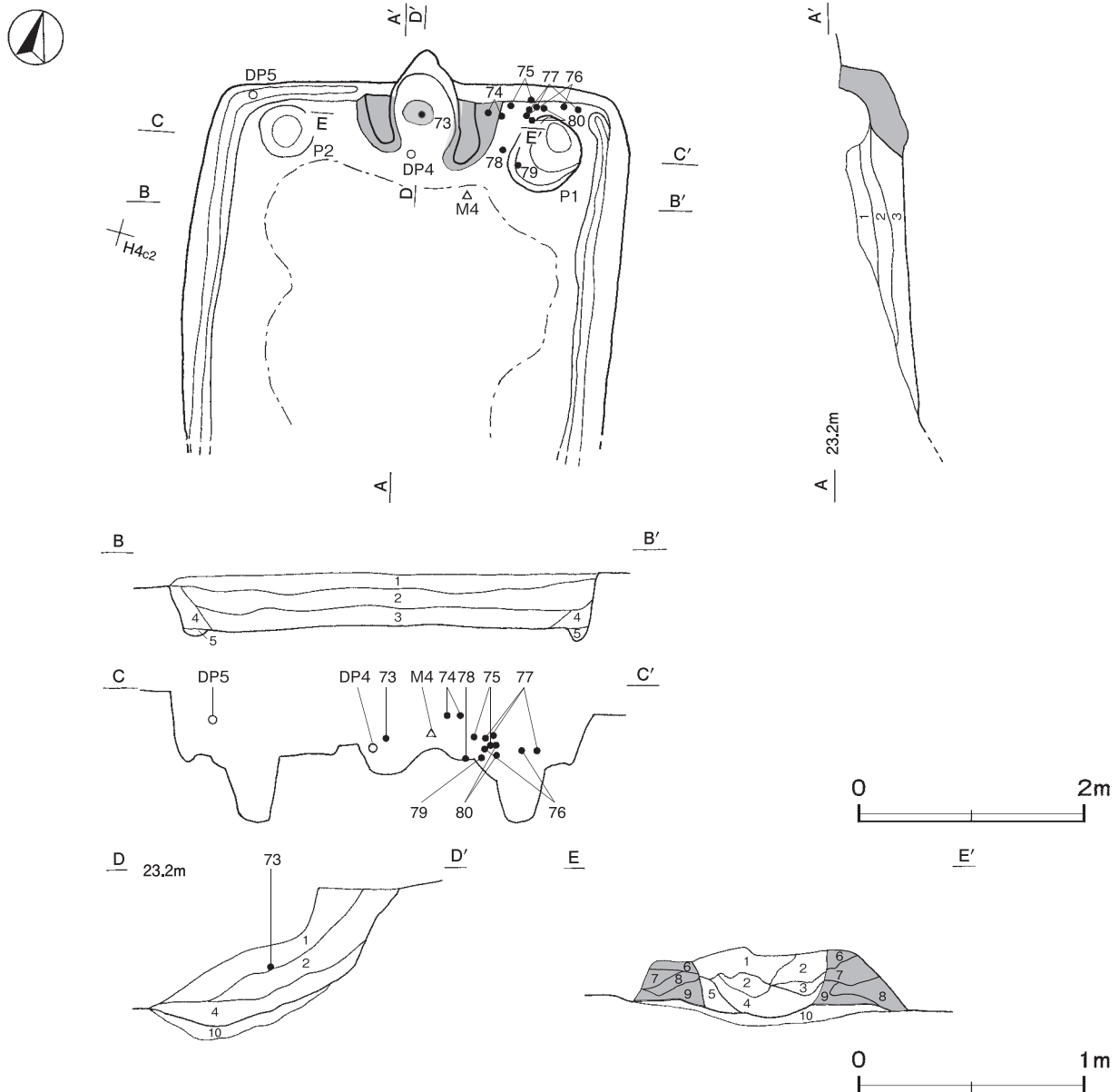
覆土 5層に分層できる。第1～3層は, ローム粒子が少量含まれている黒褐色土が水平に堆積しており, 自然堆積である。第4層は壁の崩落土を含む層, 第5層は壁溝の覆土である。

土層解説

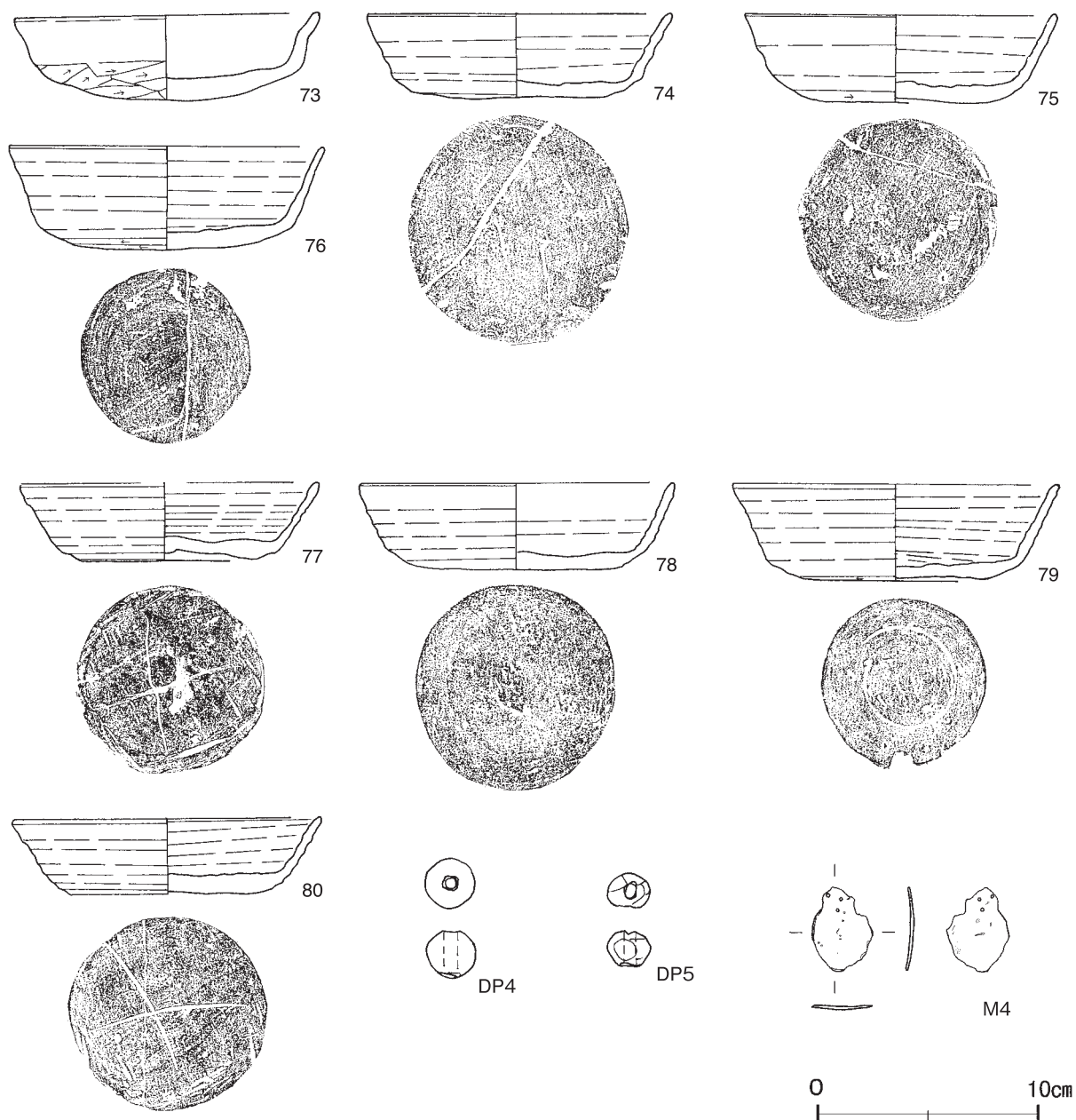
- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| | 5 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (壁溝覆土) |

遺物出土状況 土師器片79点(坏8, 高坏1, 甕類70), 須恵器片7点(坏), 土製品2点(土玉), 銅製品1点(匙カ), 焼成粘土塊5点のほか, 縄文土器片1点(深鉢), 弥生土器片6点(広口壺)が出土している。遺物は, 覆土中層から下層にかけて多く出土しており, 特に, 竈から北東コーナー部にかけてほぼ完形に近い土器が流れ込むように出土していることから, 埋没過程で投棄されたものと考えられる。77・80には底部に刻書「×」があり, 第199号竪穴建物跡から出土した91の須恵器坏にも同様な刻書が見られる。73は竈の覆土中層から逆位で出土した。M4は匙の可能性のある銅製品で, 竈前面の覆土中層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第43図 第186号竪穴建物跡実測図



第 44 図 第 186 号 縦穴建物跡出土遺物実測図

第 186 号 縦穴建物跡出土遺物観察表 (第 44 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
73	土師器	坏	13.6	3.9	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	竈覆土中層	90% PL16 新治窯
74	須恵器	坏	13.5	3.9	9.7	長石・石英・雲母	灰	普通	底部多方向のヘラ削り	覆土上層	95% PL16 新治窯
75	須恵器	坏	14.0	4.0	7.8	長石・石英・雲母・細礫	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	80% PL16 新治窯
76	須恵器	坏	14.0	4.6	8.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	明黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土下層	80% PL16 新治窯
77	須恵器	坏	[13.2]	3.5	7.6	長石・雲母	暗灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	60% PL17 新治窯 刻書「×」
78	須恵器	坏	13.9	3.9	10.0	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	100% PL17 新治窯
79	須恵器	坏	14.6	4.3	7.4	長石・石英・雲母・細礫	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り	床面	70% PL17 新治窯
80	須恵器	坏	13.7	3.5	9.2	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土下層	60% PL17 新治窯 刻書「×」

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 4	土玉	2.2	2.1	0.5	8.87	長石・石英	橙	一方向からの穿孔 指頭ナデ調整	床面	100% PL22
DP 5	土玉	1.9	1.7	0.5	3.42	長石・石英	橙	一方向からの穿孔 指頭ナデ調整	覆土上層	100% PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 4	匙カ	(3.8)	2.8	0.2~0.5	(3.05)	銅	3孔 表面に鍍金 裏面に繊維の付着あり	覆土中層	30% PL22

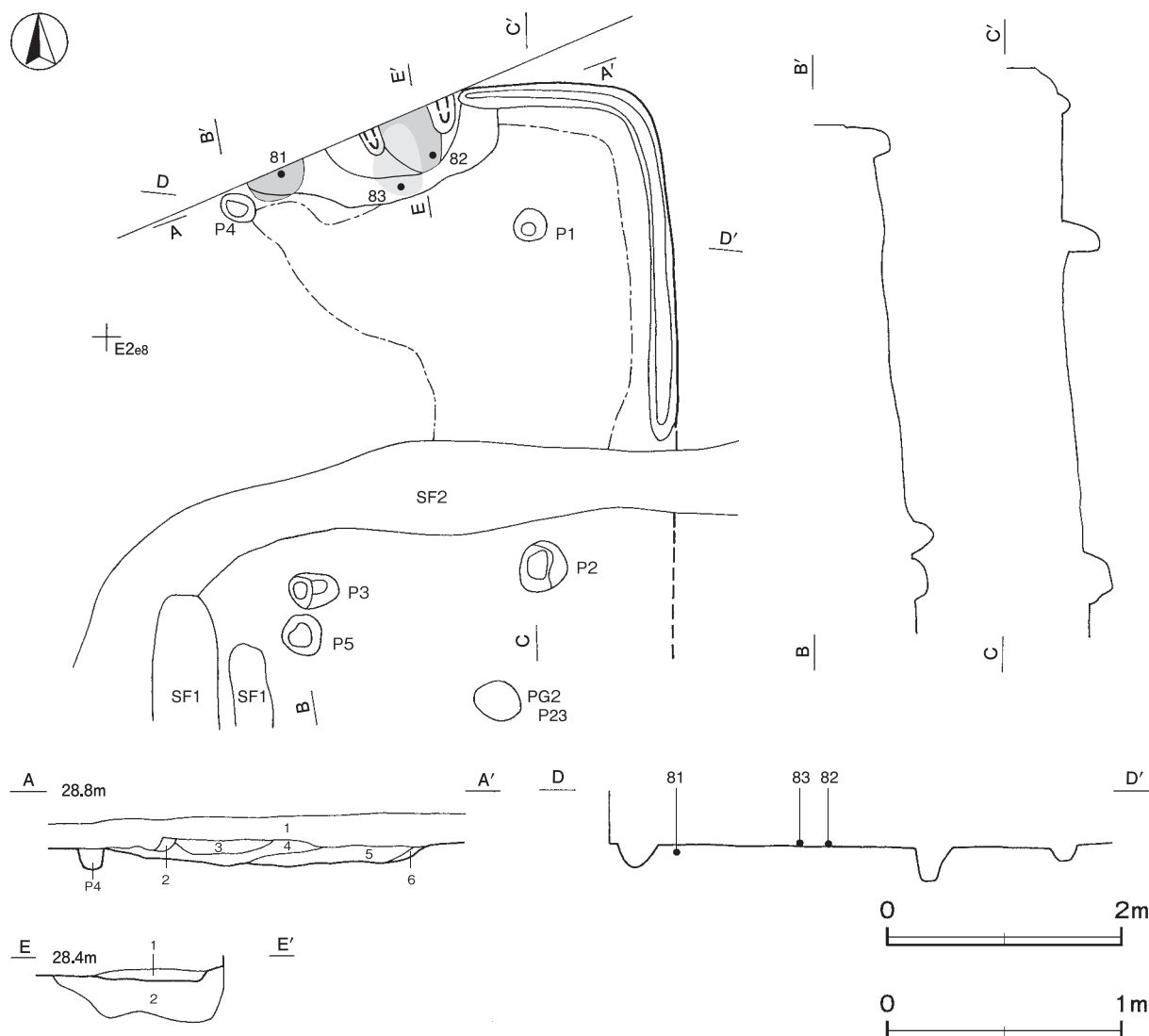
第 187 号 竪穴建物跡 (第 45・46 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅶ区西部の E 2 d8 区, 標高 29 m ほどの緩斜面部に位置している。

重複関係 第 1・2 号道路, 第 2 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 北西コーナー部から竈までの北部が削平されている。また, 確認面がほぼ床面で, 西及び南に向かって傾斜していることから, 北・西・南壁が確認できず, 東壁側も壁溝が確認できたのみであった。ピットの位置などから, 確認できたのは南北軸約 4.80 m, 東西軸約 3.80 m で, 約 5 m の方形あるいは長方形と考えられる。主軸方向は N - 13° - W と推測できる。



第 45 図 第 187 号 竪穴建物跡実測図

床 ほぼ平坦で、南に向かってやや下がっている。中央部から東半分が踏み固められている。竈東側の北壁から東壁側にかけて、壁溝が巡っている。

竈 北壁中央部やや東寄りに付設されている。煙道部は調査区域外となり、また、覆土が削平されているため、焚口部から煙道部までの規模は不明である。袖部は、地山を掘り残した基底部付近がかろうじて残存しており、燃烧部幅は40cmである。火床面は、床面から20～30cmほど掘りくぼめた部分に焼土ブロックや炭化粒子を含む第2層を埋土して構築されており、火熱により赤変硬化している。また竈西側に、径50cmの赤変硬化する部分があり、火床面の可能性があることから、竈の作り替えが考えられる。

竈土層解説

- 1 におい赤褐色 焼土粒子少量、粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量(埋土)

ピット 5か所。P1～P4は深さが20～30cmで、位置から主柱穴である。P5は深さ10cmで、性格は不明である。出入口施設に伴うピットは確認できなかった。

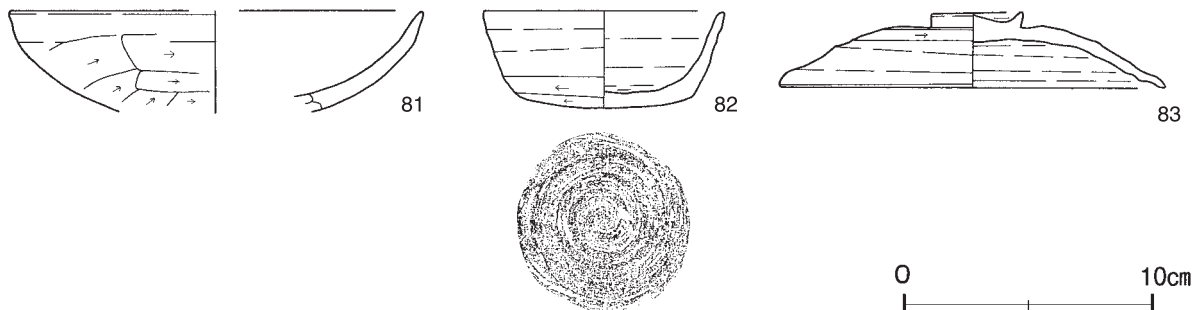
覆土 5層に分層できる。第3～5層は竈の上に堆積した暗褐色土で、粘土ブロックや粘土粒子等が含まれていないことから、廃絶時には竈が破壊されていた可能性がある。第6層は壁溝の覆土である。

土層解説

- 1 耕作土
- 2 暗褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量(壁溝覆土)

遺物出土状況 土師器片47点(坏4, 高坏1, 甕類42), 須恵器片14点(坏12, 蓋1, 甕類1)のほか、陶器片1点(碗)が出土している。覆土がないため、竈や床面付近の遺物が確認できたのみである。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第46図 第187号竪穴建物跡出土遺物実測図

第187号竪穴建物跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
81	土師器	坏	[16.4]	(4.0)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	床面	10%
82	須恵器	坏	9.5	3.9	7.0	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	70% 新治窯 PL17
83	須恵器	蓋	15.4	3.0	-	長石・石英・雲母・細礫	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	100% 新治窯 PL17

第190号竪穴建物跡(第47・48図)

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅵ区東部のC3c3区、標高29mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第204号竪穴建物、第30号溝、第3号道路に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.90m、短軸3.80mの方形で、主軸方向はN-16°-Wである。壁は高さ15～30cmで、

ほぼ直立している。

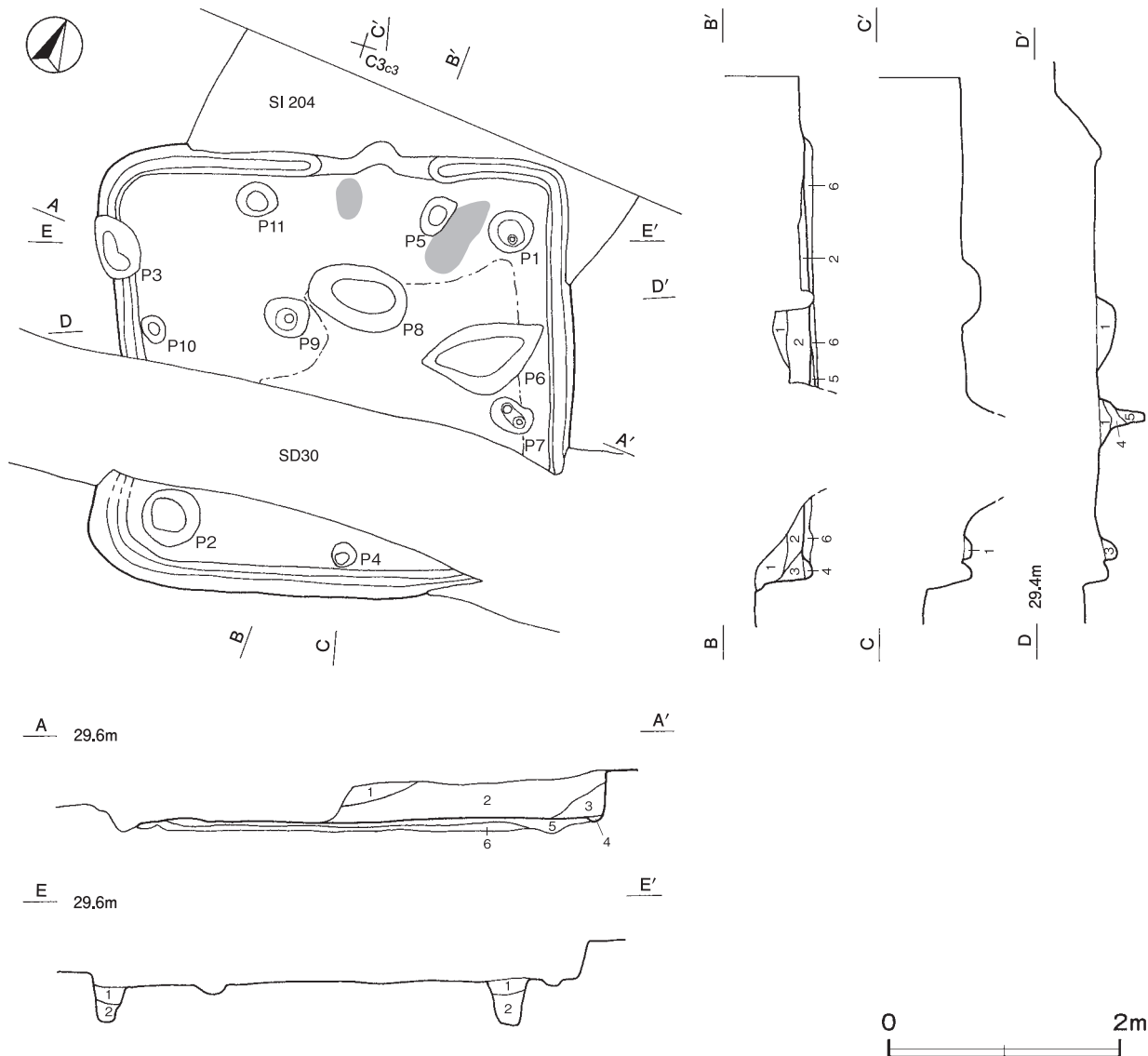
床 ほぼ平坦な貼床で、竈前面の床面中央部付近が踏み固められている。確認できた範囲では、壁溝が全周している。貼床は、コーナー部が土坑状に一段深く掘りくぼめられ、ローム粒子を多量に含む第5・6層を埋土して構築されている。

竈 北壁中央部やや東寄りに付設されていたと推定されるが、確認できたのは煙道部の壁外への掘り込みと袖の痕跡と考えられる粘土塊のみで、規模については不明である。全体を楕円形状に深さ15cmほど掘りくぼめた部分に、ローム粒子を多量に含む褐色土を埋土して構築されている。煙道部の壁外へ掘り込みは20cmである。

ピット 11か所。P1～P3は、やや壁際に寄っているが、深さや位置から支柱穴と考えられる。P2は、深さ20cmである。P4は、南壁際の位置から出入口施設に伴うピットである。第1・2層は、柱抜き取り後の流入土である。P5～P11は深さ8～60cmで、性格は不明である。このうちP5は深さ9cm、P11は深さ15cmと浅いが、P6は深さ30cm、P7は深さ60cm、P9は深さ40cmである。

ピット土層解説 (P1・P3・P4・P8～P10共通)

- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| 1 暗褐色 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ローム粒子少量 | 4 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量 |
| | 5 褐色 ロームブロック中量 |



第47図 第190号竪穴建物跡実測図

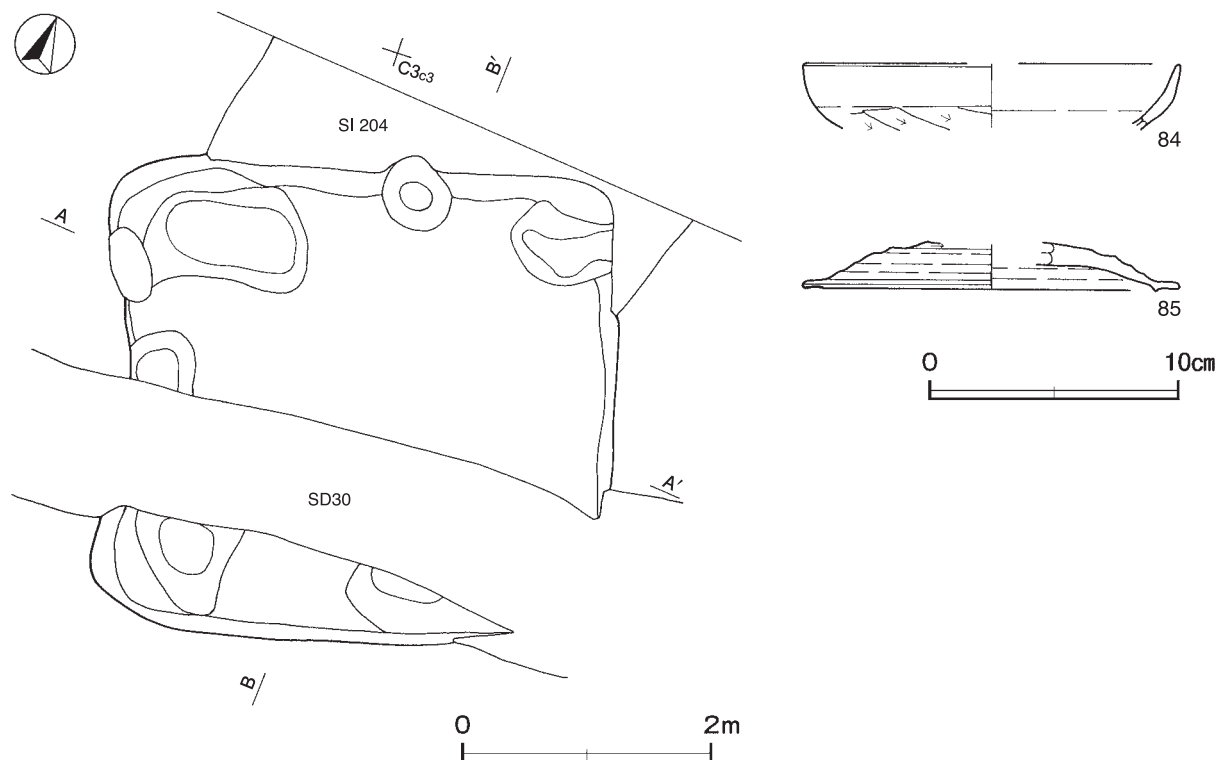
覆土 4層に分層できる。第2層は、ローム粒子がやや多く含まれている暗褐色土で、埋め戻されている。第4層は壁溝の覆土、第5・6層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|---------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・粘土粒子少量, 炭化物微量 | 4 におい褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量 (壁溝覆土) |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 (貼床構築土) |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | 6 褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子微量 (貼床構築土) |

遺物出土状況 土師器片 132 点 (坏 13, 甕類 118, 甑 1), 須恵器片 38 点 (坏 30, 蓋 1, 甕類 7), 鉄滓 1 点 (19.7g) のほか, 陶器片 2 点 (鉢, 瓶), 磁器片 3 点 (碗) が出土している。この中には, 重複する第 204 号 竪穴建物跡に属する遺物も含まれている可能性がある。遺物は全域に散在しており, 特に, 覆土上層から中層にかけて多く出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉と考えられる。



第 48 図 第 190 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 190 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 48 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
84	土師器	坏	[15.0]	(2.6)	-	長石・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	覆土中	20% 二次焼成
85	須恵器	蓋	[15.0]	(1.9)	-	長石・石英・雲母	におい黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	40% 新治窯 二次焼成

第 199 号竪穴建物跡 (第 49 ~ 51 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査 VI 区西部の C 2 c3 区, 標高 29 m ほどの台地平坦部に位置している。

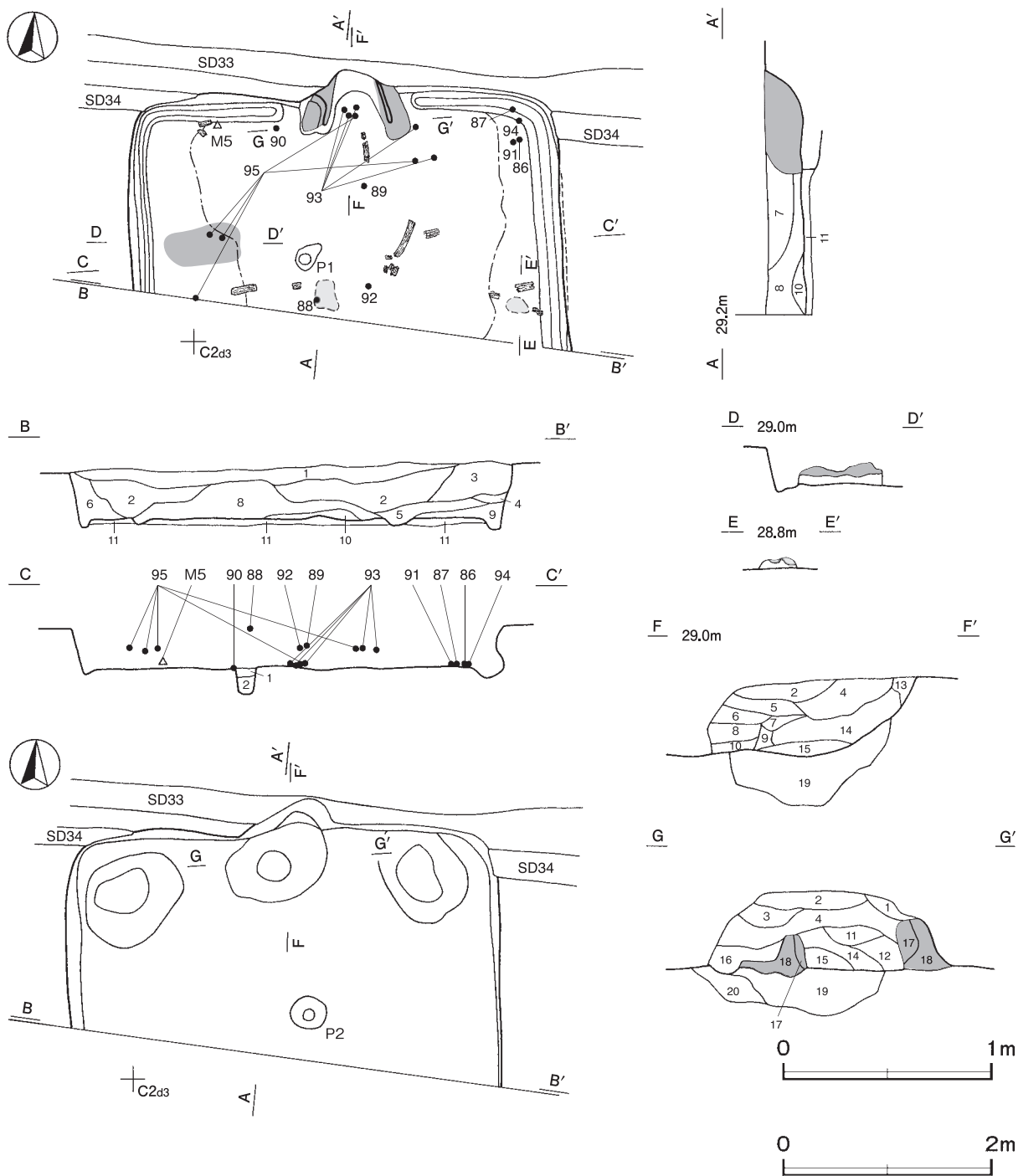
重複関係 第 33・34 号溝, 第 3 号道路に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外に延びているため, 東西軸は 4.11 m で, 南北軸は 2.38 m しか確認できなかった。

方形と推定でき、主軸方向はN-2°-Wである。壁は高さ38~54cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除き踏み固められている。確認できた範囲では、壁溝が全周している。貼床は、コーナー部が土坑状に一段深く掘りくぼめられ、ロームブロックを多量に含む第11層を埋土して構築されている。床面よりやや上位で、炭化材や焼土ブロックが出土している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで70cmで、燃焼部幅は50cmである。全体を楕円形状に深さ40cmほど掘りくぼめ、焼土ブロックや粘土ブロックを含む第19・20層を埋土して構築されている。袖部は、粘土粒子が主体の第17・18層を積み上げて構築している。火床面は、床面とはほぼ同じ高さであるが、火熱による赤変硬化は見られなかった。煙道部は壁外に20cm掘り込まれ、火床面から外傾している。第12・

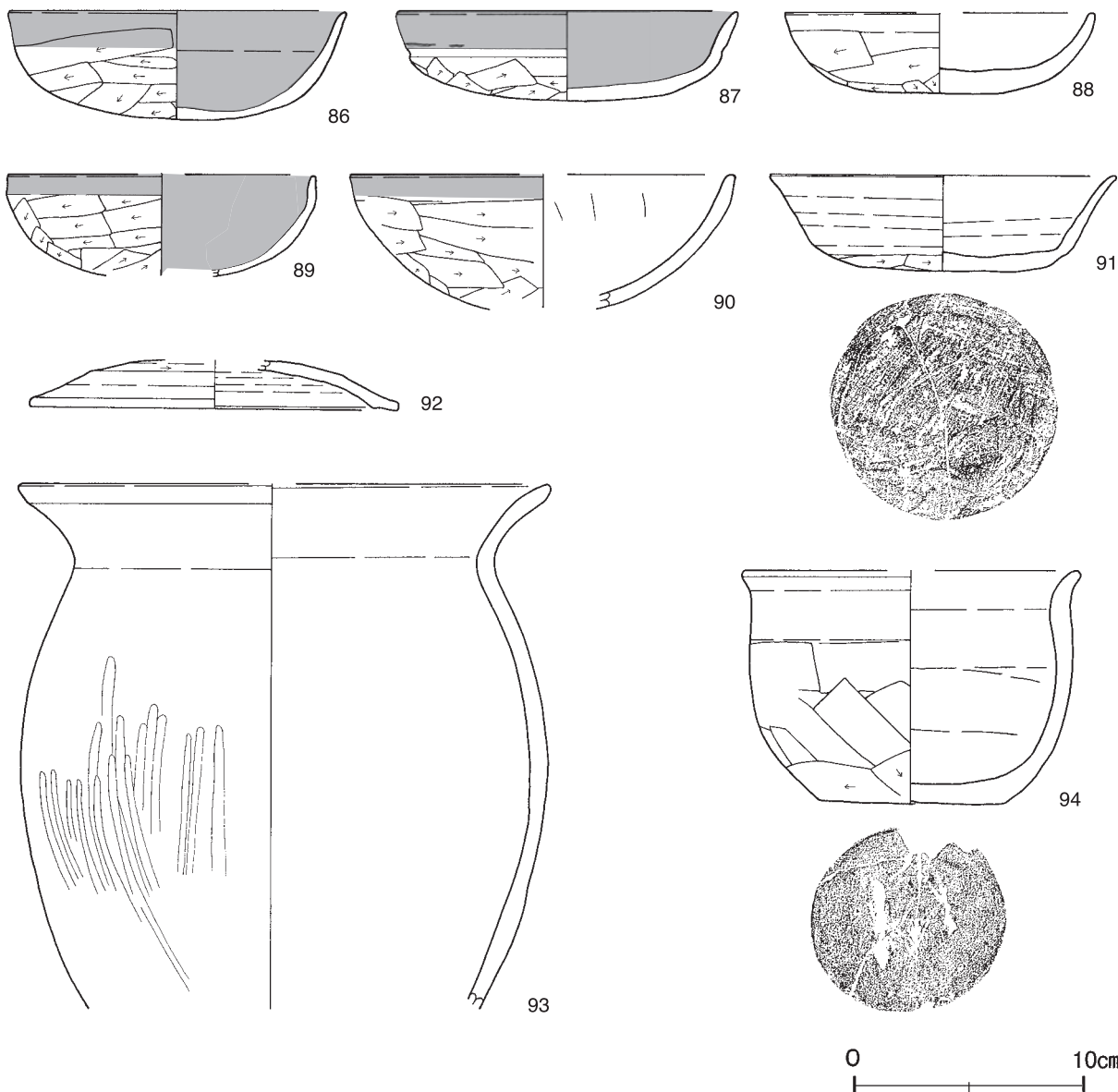


第49図 第199号竪穴建物跡実測図

15・16層が袖部の崩壊土と考えられること、南西部の床面上に竈構築材の一部と考えられる粘土塊があることなどから、人為的に壊されたと考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--|---------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量（建物覆土） | 11 暗褐色 | 粘土粒子中量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量（天井部崩落土） |
| 2 暗褐色 | 粘土ブロック少量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量（天井部崩落土） | 12 暗赤褐色 | 粘土ブロック少量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量（袖部崩落土） |
| 3 暗赤褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量（天井部内壁崩落土） | 13 褐色 | ローム粒子中量，粘土粒子少量，炭化粒子微量（流入土） |
| 4 暗褐色 | 粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量（天井部崩落土） | 14 暗褐色 | 粘土粒子少量，焼土ブロック・炭化材・ローム粒子微量（流入土） |
| 5 明褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量（天井部内壁崩落土） | 15 明赤褐色 | 焼土ブロック少量，炭化物・ローム粒子・粘土粒子微量（袖部崩落土） |
| 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量（流入土） | 16 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量（袖部崩落土） |
| 7 暗褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量（流入土） | 17 淡赤橙色 | 焼土ブロック・粘土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量（袖部構築土） |
| 8 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化材・ローム粒子・粘土粒子微量（流入土） | 18 淡黄橙色 | 粘土粒子多量，焼土粒子少量（袖部構築土） |
| 9 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量（流入土） | 19 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量（埋土） |
| 10 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 | 20 褐色 | ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量（埋土） |



第50図 第199号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)

ピット 2か所。P 1は深さ22cmで、性格は不明である。掘方調査時に確認したP 2は、深さ16cmで、性格は不明である。P 1の第1・2層は、柱抜き取り後の流入土である。

P 1 土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 2 褐色 | ローム粒子中量 |
|-------|-----------------|------|---------|

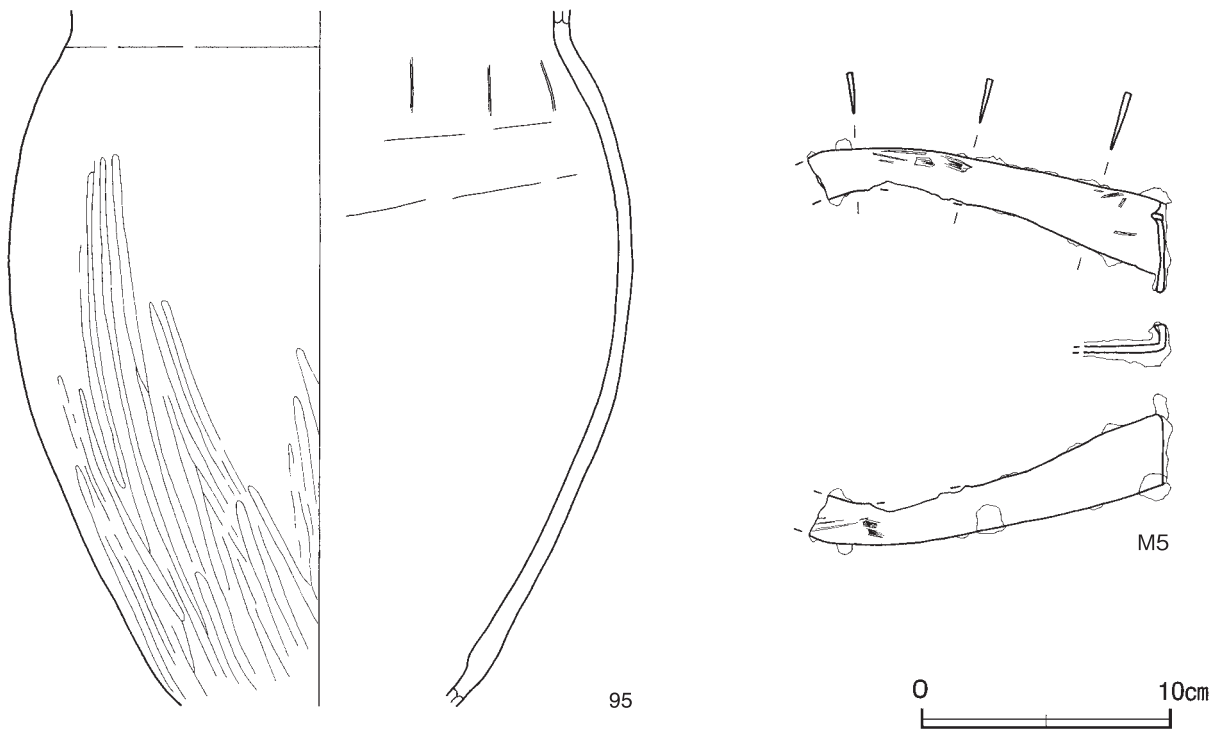
覆土 10層に分層できる。第1～3・8層は、ロームブロックや炭化粒子が含まれている黒褐色土を主体とした層、第4～7・9・10層は焼土ブロックやロームブロックが含まれている暗褐色土を主体とした層で、不自然な堆積状況から、埋め戻されている。第11層は貼床の構築土である。覆土下層に、焼土と炭化材が散在している。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量 | 8 黒褐色 | 炭化物少量, ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック・焼土粒子微量 | 9 暗褐色 | 炭化物少量, ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック・砂粒微量 | 11 褐色 | ロームブロック多量, 炭化粒子微量 (貼床構築土) |
| 6 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片76点(坏19, 甕類57), 須恵器片5点(坏4, 蓋1), 鉄製品1点(鎌), 石核2点(石英), 焼成粘土塊13点のほか, 弥生土器片25点(広口壺)が出土している。北東コーナー付近の床面と竈周辺から完存する個体が多く出土し, 二次焼成を受けているものが多い。95は竈の上部と南東部の粘土塊上から出土した破片が接合したもので, 元来は竈に架けられていた可能性がある。M5は北西コーナー近くの覆土下層から出土した。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。床面より上位から焼土や炭化材が出土しているが少なく, 覆土中にも焼土ブロックや炭化材は少量しか含まれていないことから, 建物廃絶後まもなく焼土や炭化材が土器類とともに投棄されたものと考えられる。



第51図 第199号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第 199 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 50・51 図)

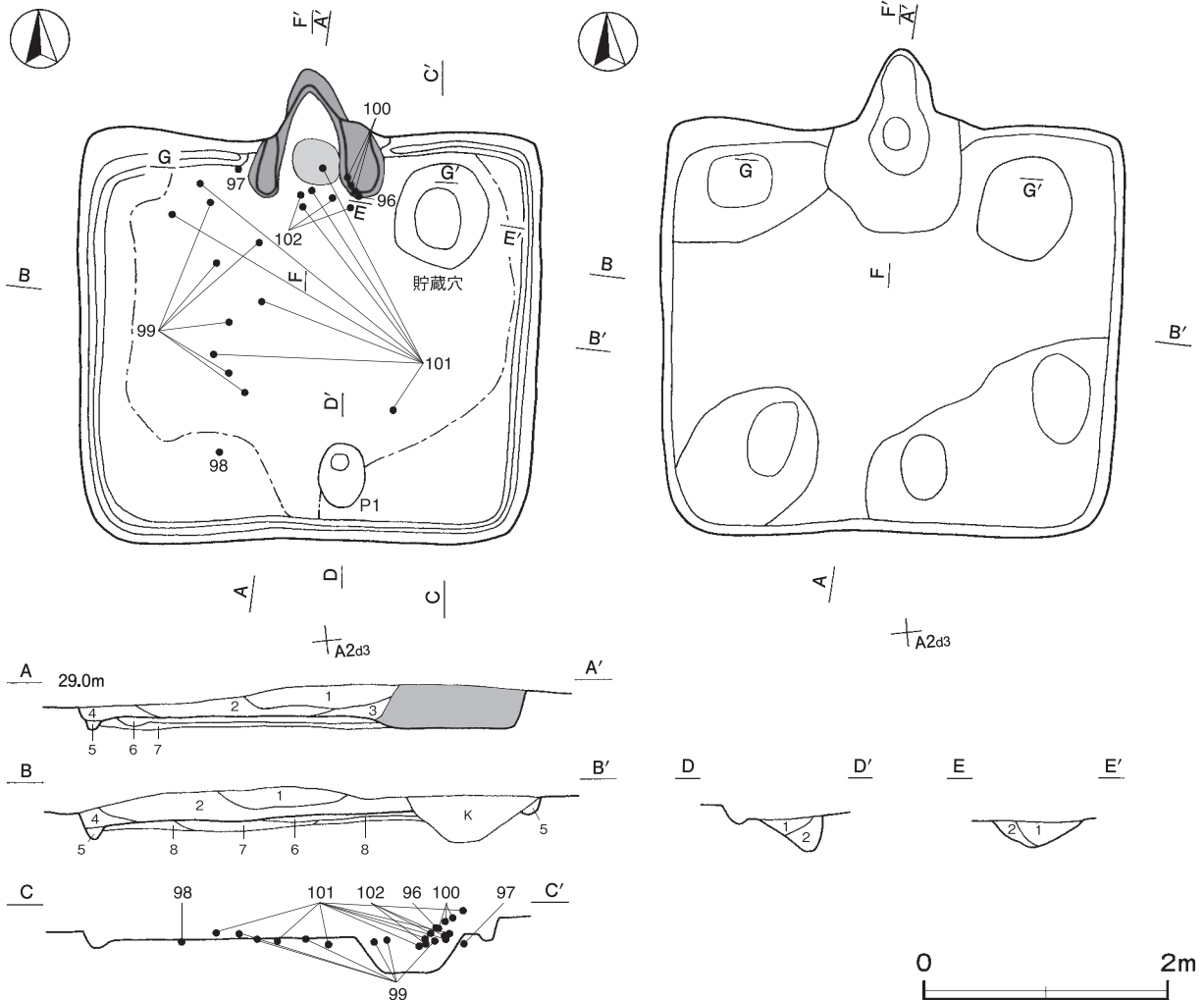
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
86	土師器	坏	14.4	4.8	-	長石・石英・赤色粒子	黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	床面	100% PL17 二次焼成
87	土師器	坏	14.6	3.9	-	長石・雲母・赤色粒子	にお黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	床面	80% PL17 二次焼成
88	土師器	坏	[13.4]	3.5	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	覆土上層	60% 二次焼成
89	土師器	坏	[13.1]	(4.4)	-	長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面横ナデ	覆土中層	30% 二次焼成
90	土師器	坏	[16.4]	(5.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	50%
91	須恵器	坏	14.9	4.2	10.2	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部多方向のヘラ削り	床面	100% PL17 新治窯 二次焼成 刻書×
92	須恵器	蓋	[15.6]	(2.1)	-	長石・石英・雲母	にお黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中層	30% 新治窯 二次焼成
93	土師器	甕	[22.6]	(22.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にお黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面磨き 内面ヘラナデ	覆土中層	20% 二次焼成
94	土師器	小形甕	[14.2]	10.0	8.0	長石・石英・細礫	暗赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部木葉痕後ヘラ削り	床面	70% PL18 二次焼成
95	土師器	甕	-	(27.6)	-	長石・石英・雲母	にお黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面磨き 内面ヘラナデ	床面	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 5	鎌	(14.4)	(5.7)	0.2	(36.22)	鉄	先端部欠損 表裏面に木質部付着	覆土下層	80% PL22

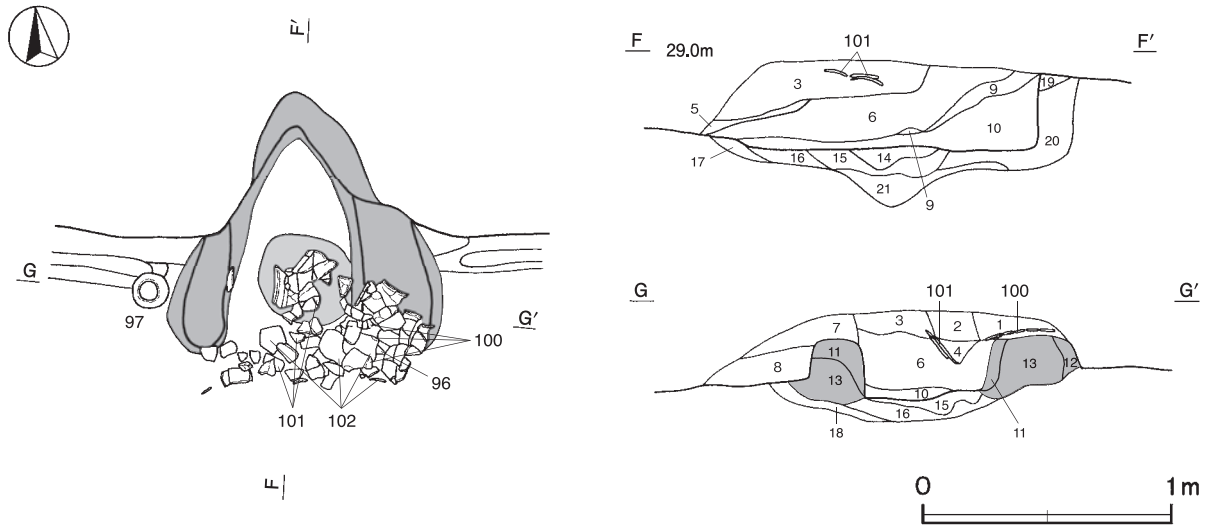
第 200 号竪穴建物跡 (第 52 ~ 55 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査 V 区中央部の A 2 c3 区, 標高 29 m ほどの台地平坦部に位置している。



第 52 図 第 200 号竪穴建物跡実測図(1)



第 53 図 第 200 号竈穴建物跡実測図(2)

規模と形状 長軸 3.68 m，短軸 3.27 m の方形で，主軸方向は $N - 7^{\circ} - E$ である。壁は高さ 10 ～ 25cm で，ほぼ直立している。

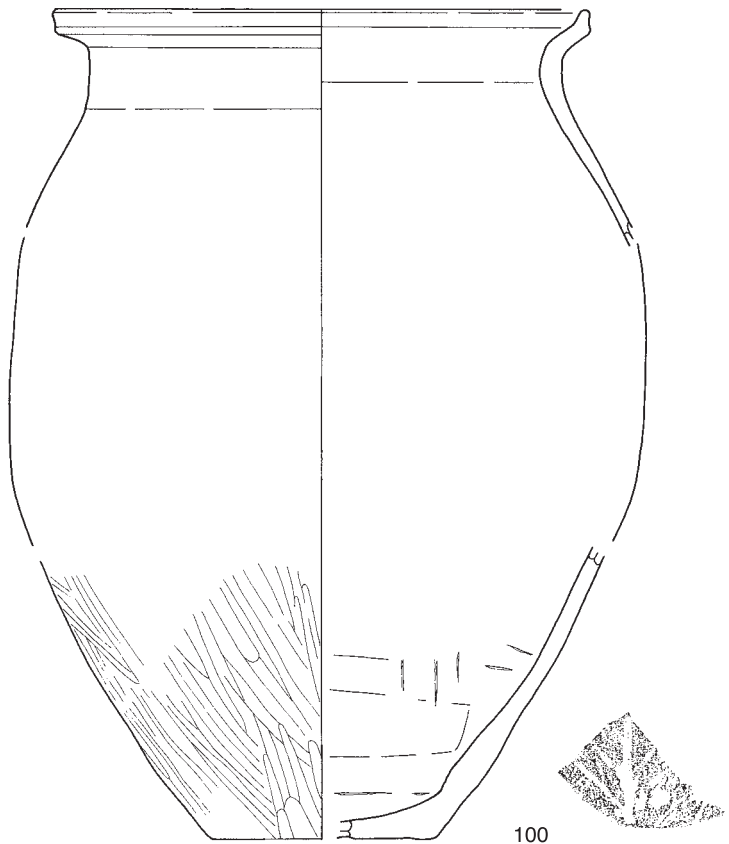
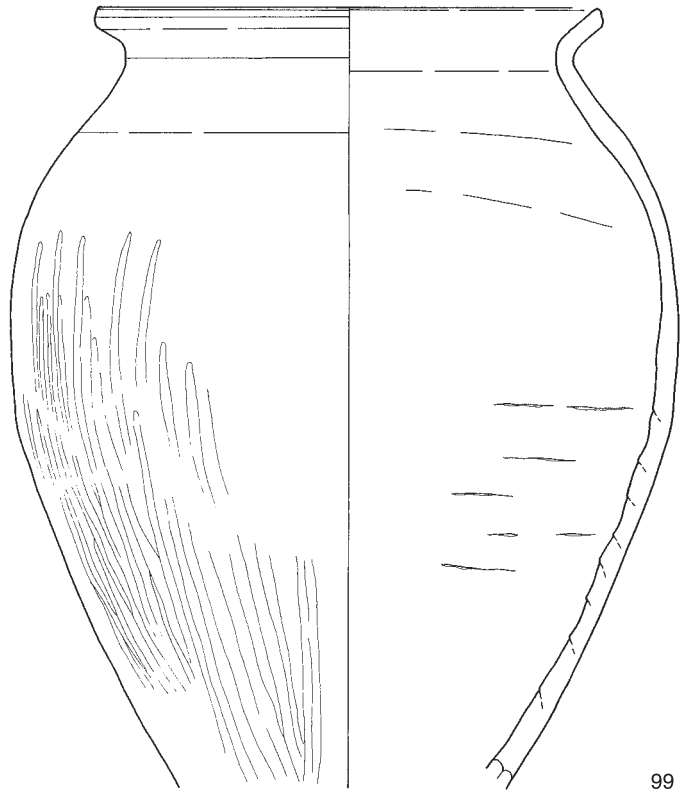
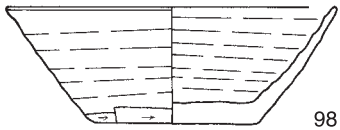
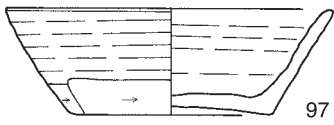
床 ほぼ平坦な貼床で，壁際を除いて踏み固められている。壁下には，壁溝が全周している。貼床は，コーナー部付近を一段深く掘りくぼめ，ロームブロックを含む第 6 ～ 8 層を埋土して構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは 88cm で，燃焼部幅は 50cm である。全体を楕円形に 20cm ほど掘りくぼめ，ロームブロックや焼土ブロックを含む第 14 ～ 21 層を埋土して構築されている。袖部は，地山及び掘方埋土上に白色粘土主体の第 11 ～ 13 層を積み上げて構築している。右袖上には 100 の土師器甕が張り付くように出土しており，袖の補強材と考えられる。火床面は床面とほぼ同じ高さで，火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外へ 58cm ほど掘り込まれ，火床面から直立しており，底面が火熱により赤変硬化している。第 8 層は袖部の崩壊土，第 10 層は焼土ブロックが多量に含まれている層で，燃焼部及び煙道部の堆積土である。第 1 ～ 5・7 層は流入土，第 6 層は天井部材及び内壁の崩壊土で，第 6 層上面から 101 の須恵器鉢が正位で出土していることから，竈は使用停止後に破壊され，上部に鉢を据え置いて何らかの祭祀行為を行い，その後放置されたものと考えられる。

竈土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	10	赤褐色	焼土粒子中量，ローム粒子微量（燃焼部堆積土）
2	褐色	ローム粒子中量，焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	11	赤褐色	焼土粒子中量，粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量（袖部構築土）
3	褐色	ロームブロック少量，焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	12	暗褐色	粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量（袖部構築土）
4	褐色	ローム粒子少量，焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	13	灰白色	粘土粒子多量，焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量（袖部構築土）
5	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量	14	暗褐色	ローム粒子少量，炭化物・粘土粒子微量（埋土）
6	明黄褐色	粘土ブロック多量，焼土ブロック少量（天井部崩壊土）	15	黒褐色	焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量（埋土）
7	暗褐色	ローム粒子少量，焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	16	褐色	ロームブロック少量，炭化物・焼土粒子微量（埋土）
8	明黄褐色	粘土ブロック多量（袖部崩壊土）	17	暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量（埋土）
9	赤褐色	焼土ブロック少量，ローム粒子・粘土粒子微量（天井部内壁崩壊土）	18	暗褐色	ローム粒子中量，炭化粒子微量（埋土）
			19	赤褐色	焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量（埋土）
			20	黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量（埋土）
			21	褐色	ローム粒子中量，炭化粒子微量（埋土）

ピット 1 か所。P 1 は深さ 30cm で，底面は北側に向かって傾斜しており，位置的に出入口施設に伴うピットである。第 1・2 層は，柱抜き取り後に堆積した層である。



第 54 图 第 200 号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)

P1土層解説

1 褐色 ローム粒子中量

2 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径84cm, 短径76cmの楕円形で, 深さは25cmである。底面は皿状で, 壁は緩やかに立ち上がっている。覆土は2層に分層でき, ローム粒子が含まれている褐色土が主体で, 自然に埋没している。

貯蔵穴土層解説

1 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

2 褐色 ローム粒子中量, 炭化物微量

覆土 5層に分層できる。ローム粒子がやや多く含まれている暗褐色土が主体で, レンズ状の堆積状況から, 自然堆積である。第5層は壁溝の堆積土である。第6~8層は貼床の構築土である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

5 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (壁溝覆土)

2 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量

6 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 (貼床構築土)

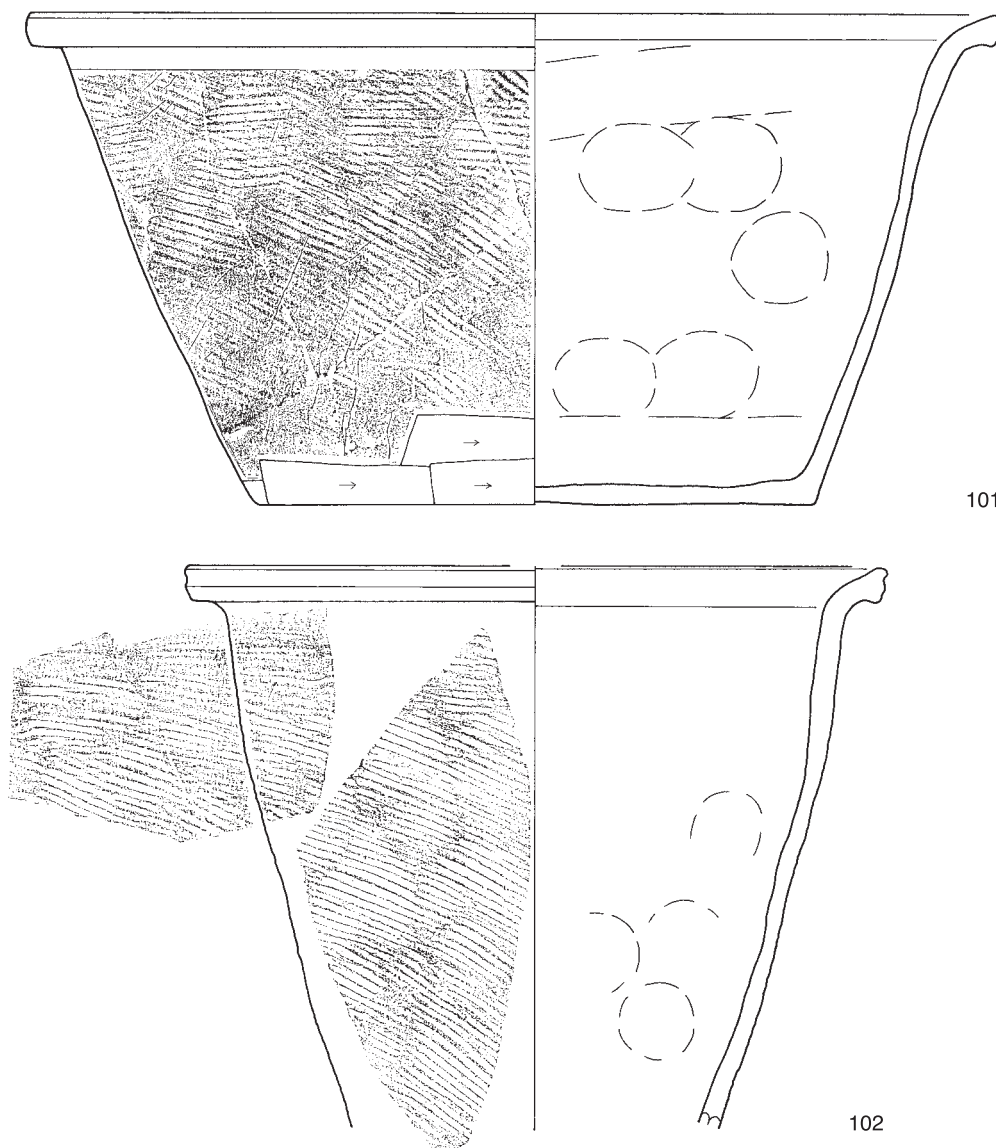
3 褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量

7 褐色 ロームブロック中量 (貼床構築土)

4 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

8 褐色 ローム粒子中量 (貼床構築土)

遺物出土状況 土師器片189点 (坏類3, 甕類186), 須恵器片20点 (坏16, 蓋2, 鉢2)が, 全域から散在



第55図 第200号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

した状態で出土している。特に、竈前面から床面中央付近にかけて、形状が復元可能な土器が床面から出土しており、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。

第200号竪穴建物跡出土遺物観察表（第54・55図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
96	須恵器	坏	[13.2]	4.4	8.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	不良	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	60% 新治窯二次焼成
97	須恵器	坏	12.8	4.2	7.8	長石・石英	黄灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	100% 新治窯・火罨
98	須恵器	坏	13.0	4.7	6.5	長石・石英	にぶい黄	良好	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	床面	70% 新治窯 火ぶくれ
99	土師器	甕	20.0	(31.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面磨き 内面ヘラナデ	床面	60% PL18
100	土師器	甕	21.1	(33.0)	[9.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面磨き 内面ヘラナデ 底部木葉痕	竈袖部	30%
101	須恵器	鉢	38.4	19.5	22.2	長石・石英・雲母・細礫	にぶい黄褐	普通	体部平行叩き 下端ヘラ削り 内面ヘラナデ 当て具痕	床面	60% 新治窯 PL18
102	須恵器	鉢	[27.5]	(22.5)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	外面平行叩き 内面ヘラナデ 当て具痕	床面	20% 新治窯

第203号竪穴建物跡（第56・57図）

調査年度 平成25年度

位置 調査V区東部のA2f6区、標高29mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.34m、短軸4.01mの方形で、主軸方向はN-82°-Eである。壁は高さ16~18cmで、外傾している。

床 ほぼ平坦な貼床で、北壁際及び南壁際を除いて竈前面の中央部付近が踏み固められている。確認できた範囲では壁溝が全周し、南東コーナー部及び南西コーナー部の壁溝底面には、径5~10cm、深さ6~8cmの小ピットが見られる。貼床は、第11・12層を埋土して構築されている。

竈 東壁中央部やや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで120cmで、燃焼部幅は60cmである。全体を楕円形状に深さ30cmほど掘りくぼめ、ロームブロックや焼土ブロックを含む第14~17層を埋土して構築されている。袖部は、ローム土主体の第13層に粘土粒子を含む第8~12層を積み上げて構築している。火床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱により赤変硬化が見られる。煙道部は壁外に45cmほど掘り込まれ、火床面から外傾している。第1~7層が天井部材や内壁崩落土、煙道部からの流入土であることから、自然崩壊したものと考えられる。

竈土層解説

1	褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック微量（天井部崩落土）	9	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量（袖部構築土）
2	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	10	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、焼土ブロック微量（袖部構築土）
3	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子微量	11	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量（袖部構築土）
4	褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量（天井部崩落土）	12	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量（袖部構築土）
5	褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量（天井部崩落土）	13	褐色	ローム粒子多量（袖部構築土）
6	暗褐色	ローム粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量（流入土）	14	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量（埋土）
7	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量（流入土）	15	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量（埋土）
8	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、焼土ブロック微量（袖部構築土）	16	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量（埋土）
			17	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック微量（埋土）

ピット 2か所。P1は深さ48cmで、位置から出入口施設に伴うピットである。P2は深さ10cmで、性格は

不明である。P1の第1層は、柱抜き取り後の流入土である。

P1土層解説

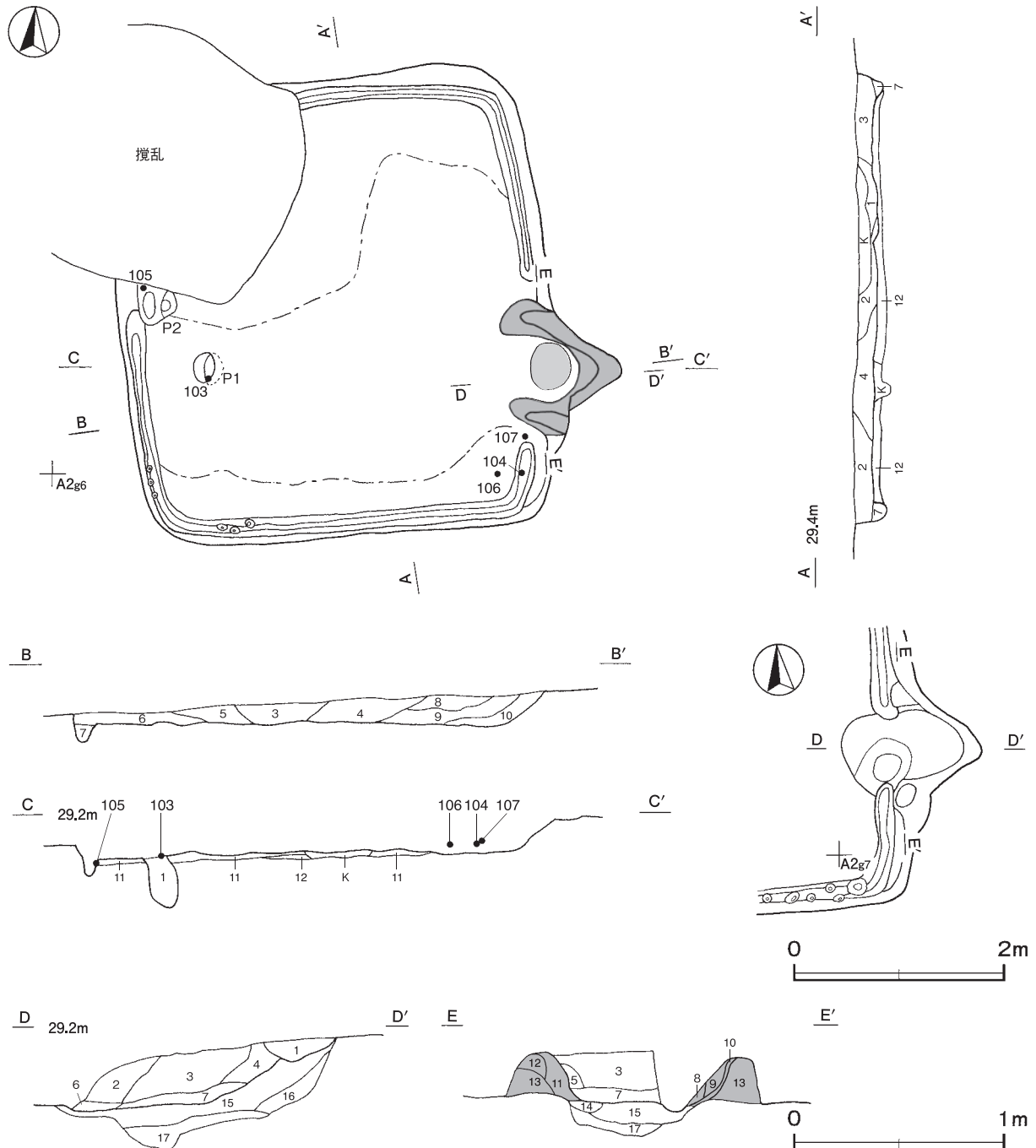
1 褐色 ローム粒子中量

覆土 10層に分層できる。第1～10層は、ローム粒子がやや多く含まれている褐色土を主体とした層が、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。第7層は壁溝の覆土、第11・12層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|--------|-------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量 | 7 褐色 | ローム粒子中量 (壁溝覆土) |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 10 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 5 褐色 | ローム粒子中量 | 11 褐色 | ローム粒子中量 (貼床構築土) |
| 6 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 | 12 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (貼床構築土) |

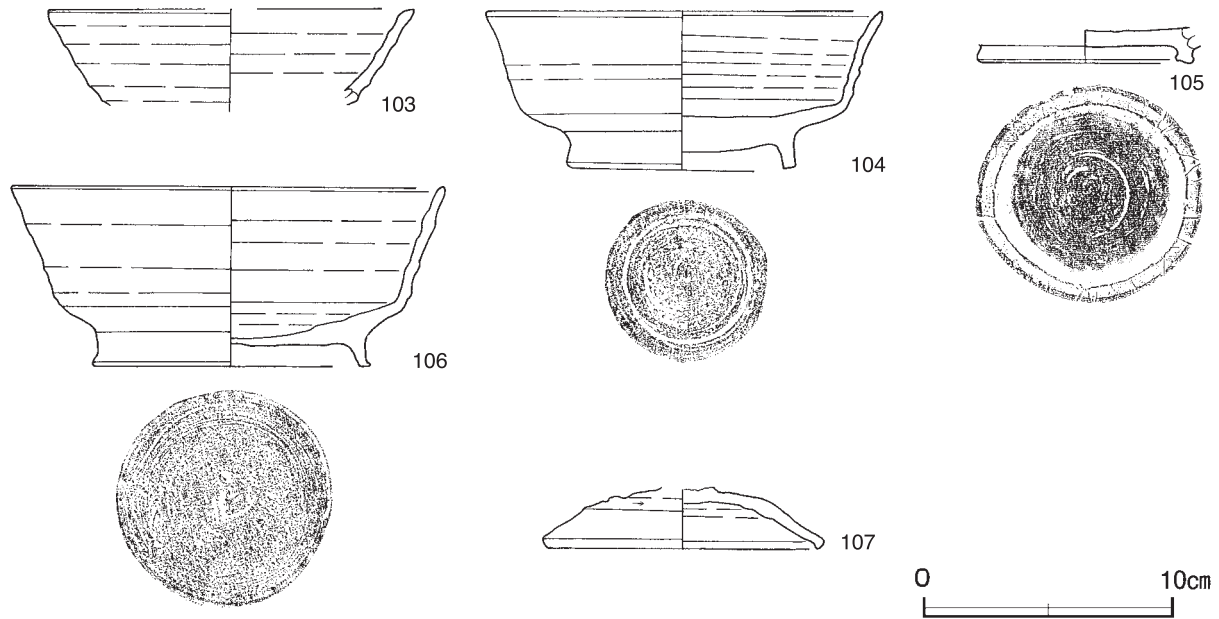
遺物出土状況 土師片42点 (坏5, 甕類37), 須恵片15点 (坏7, 高台付坏3, 蓋3, 甕類2) が出土



第56図 第203号竪穴建物跡実測図

している。南東コーナー部及び出入口施設周辺の床面からは、完形に近い個体が出土しており、廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第57図 第203号竪穴建物跡出土遺物実測図

第203号竪穴建物跡出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
103	須恵器	坏	[14.5]	(3.8)	-	長石・雲母	灰白	普通	外・内面ロクロナデ	床面	20% 新治窯
104	須恵器	高台付坏	15.6	6.3	9.0	長石・石英・雲母・細礫	灰	普通	高台貼付後ロクロナデ	床面	70% PL18 新治窯
105	須恵器	高台付坏	-	(1.4)	8.4	長石・石英	灰白	普通	高台貼付後ロクロナデ 研磨	床面	10% 硯転用 新治窯
106	須恵器	高台付坏	16.9	7.1	11.0	長石・石英・雲母	灰	普通	ロクロナデ	床面	95% PL18 新治窯
107	須恵器	蓋	10.7	(2.5)	-	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	90% PL18 新治窯

表7 奈良時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)	(cm)			主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
3	E3d2	N-17°-E	方形	6.70×6.30	10~40	貼床平坦	ほぼ全周	4	1	6	北壁	-	自然	土師器, 須恵器, 石器	8世紀前葉	SI 2・103・104 → 本跡 → SI 4・15
98	E3e8	N-3°-E	方形	3.60×3.56	35~40	貼床平坦	全周	2	1	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器	8世紀前葉	SI97 → 本跡
103	E3d2	N-14°-E	方形	5.30×5.30	8~14	平坦	-	4	1	5	北壁	-	人為		8世紀	SI 2 → 本跡 → SI 3・15・104
104	E3d2	N-14°-E	方形	4.40×4.10	30~35	凹凸	全周	4	1	3	北壁	-	人為		8世紀	SI 2・103 → 本跡 → SI 3・15
182	A2i4	N-2°-W	長方形	3.55×3.31	9~13	貼床平坦	全周	3	1	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器	8世紀後葉	本跡 → SI181
183	A2h5	N-2°-W	[方形]	3.23×(3.0)	-	貼床平坦	全周	4	1	-	-	-	-	土師器, 須恵器	8世紀後葉	
186	H4b2	N-13°-W	[方形]	3.76×(3.15)	30~55	平坦	ほぼ全周	2	-	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器, 土製品, 銅製品, 焼成粘土塊	8世紀前葉	
187	E2d8	N-13°-W	[方形・長方形]	(4.80)×(3.80)	-	傾斜	一部	4	-	1	北壁	-	-	土師器, 須恵器	8世紀前葉	本跡 → SF 1・2, PG 2
190	C3c3	N-16°-W	方形	3.90×3.80	15~30	貼床平坦	ほぼ全周	3	1	7	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 鉄滓	8世紀前葉	本跡 → SI204, SD30, SF 3
199	C2c3	N-2°-W	[方形]	4.11×(2.38)	38~54	貼床平坦	ほぼ全周	-	-	2	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 鉄製品, 焼成粘土塊	8世紀前葉	本跡 → SD33・34, SF 3
200	A2c3	N-7°-E	方形	3.68×3.27	10~25	貼床平坦	全周	-	1	-	北壁	1	自然	土師器, 須恵器	8世紀後葉	
203	A2f6	N-82°-E	方形	4.34×4.01	16~18	貼床平坦	ほぼ全周	-	1	1	東壁	-	自然	土師器, 須恵器	8世紀中葉	

(2) 土坑

第 252 号土坑 (第 58 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅶ区西部の E 3e1 区, 標高 29 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 95 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 2 号道路に掘り込まれている。

規模と形状 長径 1.08 m, 短径 1.07 m の不整形円形である。深さは 20cm で, 底面はやや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がっている。

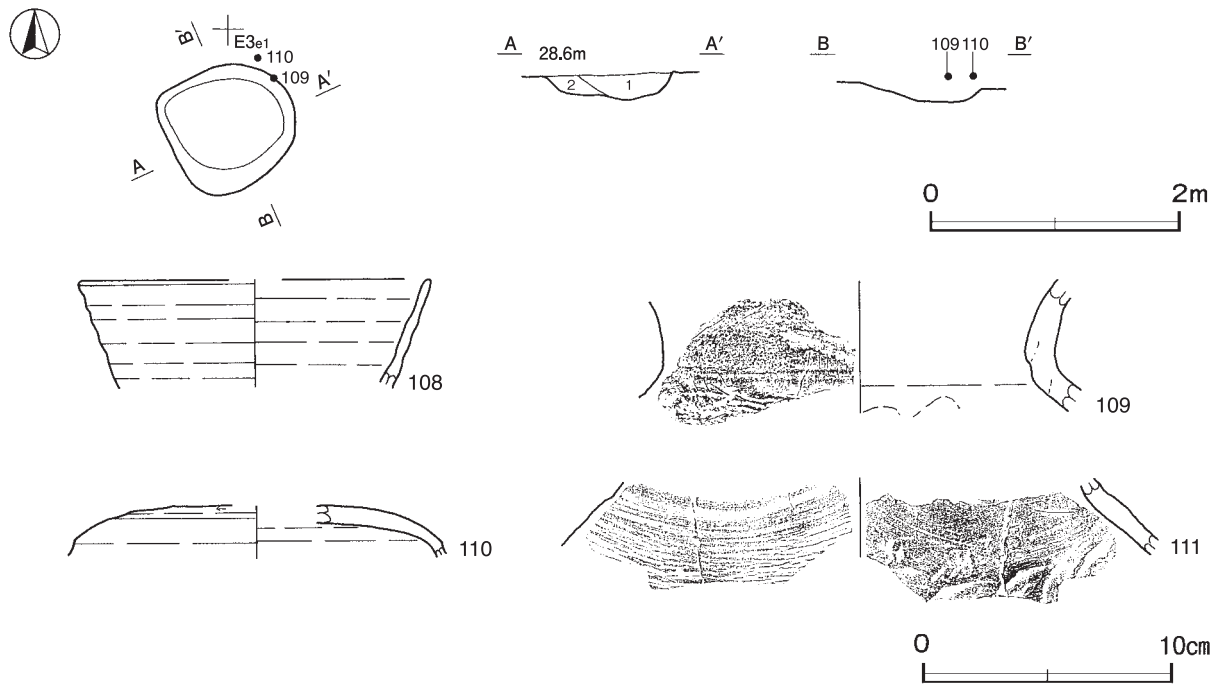
覆土 2 層に分層できる。ロームブロックが含まれている暗褐色土がレンズ状に堆積していることから, 自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量 2 暗褐色 焼土ブロック少量, ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 9 点 (坏 2, 甕類 7), 須恵器片 5 点 (坏 1, 蓋 1, 甕類 3) が出土している。いずれも覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第 58 図 第 252 号土坑・出土遺物実測図

第 252 号土坑出土遺物観察表 (第 58 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
108	須恵器	坏	[14.0]	(4.3)	-	長石・石英・雲母・針状鉱物	褐灰	普通	外・内面ロクロナデ	覆土上層	10% 新治窯
109	須恵器	甕	-	(5.3)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	外面平行叩き 内面当て具痕	覆土上層	10% 新治窯
110	須恵器	蓋	-	(2.1)	-	長石・石英・雲母	こげ黄澄	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	10% 新治窯
111	須恵器	甕	-	(3.0)	-	長石・雲母	灰	普通	外面平行叩き 内面当て具痕	覆土上層	10% 新治窯

5 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡12棟と土坑3基、溝跡1条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。なお、前回調査で、Ⅵ区東部で第162号竪穴建物跡、Ⅶ区中央部で第99・100号竪穴建物跡を調査しているが、今回の調査では、後世の削平により、遺構確認面が第99・100・162号竪穴建物跡の床面よりも下位であったことから、確認することはできなかった。

(1) 竪穴建物跡

第169号竪穴建物跡（第59・60図）

調査年度 平成25年度。北部は平成9年度に調査し、当財団調査報告『第164集』において報告している。

位置 調査Ⅵ区中央部のC2c6区、標高29mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第30・31号溝、第3号道路に掘り込まれている。また、第266号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 今回確認できたのは、東西軸4.00m、南北軸3.07mであるが、前回調査部分と合わせると、東西軸4.00m、南北軸4.00mの方形で、主軸方向はN-7°-Eである。壁は高さ2～18cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央から東側が踏み固められている。壁下には壁溝が全周している。貼床は、コーナー部と竈部分を土坑状に一段深く掘りくぼめ、ロームブロックやローム粒子を多く含む褐色土を主体とした第9～11層を埋土して構築されている。南東コーナー部から、焼土ブロックが出土している。

竈 前回の調査で、北壁中央部のやや東寄りに付設されているのを確認している。

ピット 3か所。P1は位置から出入口施設に伴うピットである。P2・P3は径20～40cm、深さ15cmで、性格は不明である。

ピット土層解説（共通）

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量 | |

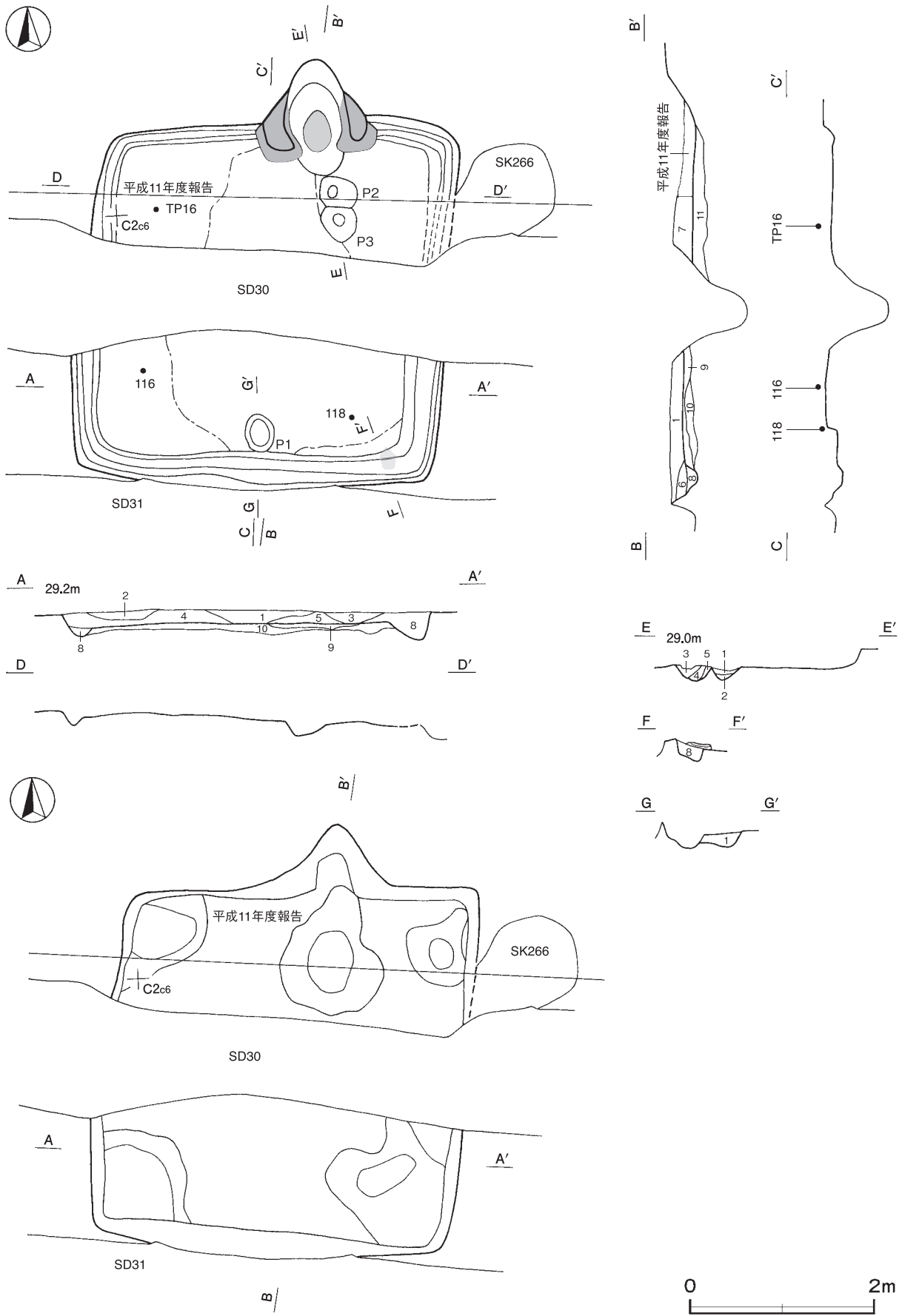
覆土 8層に分層できる。第1～7層はロームブロックや焼土粒子・炭化粒子が含まれており、不自然な堆積状況から、埋め戻されている。第8層は壁溝の堆積土、第9～11層は貼床の構築土である。

土層解説

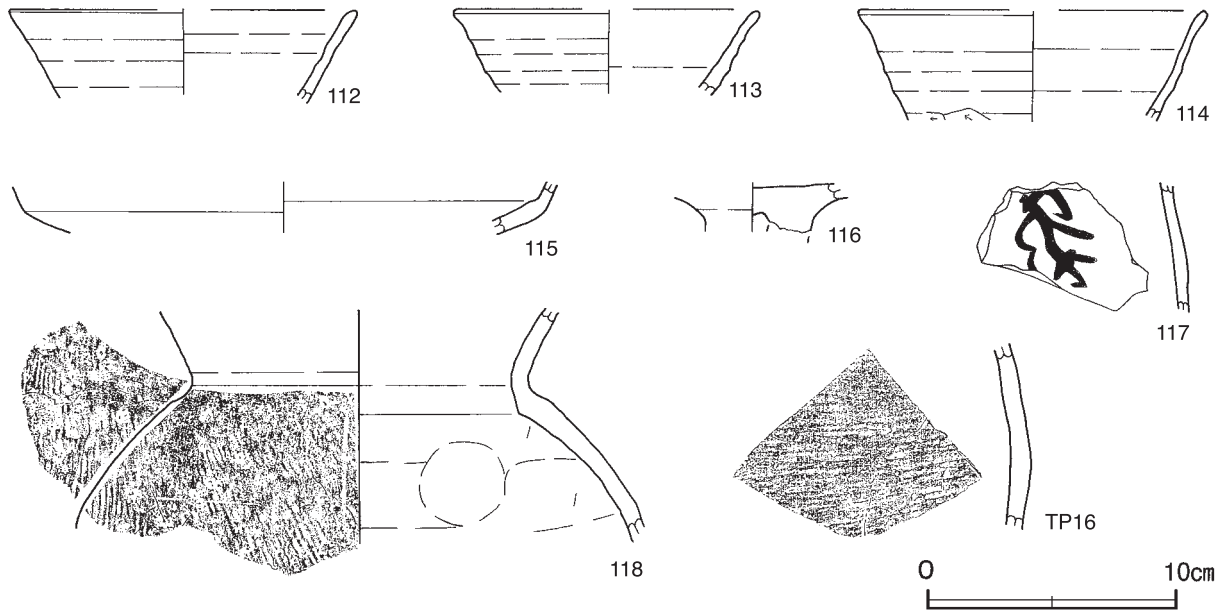
- | | |
|-----------------------------------|---|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量（壁溝覆土） |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量（貼床構築土） |
| 3 黒褐色 炭化粒子少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 | 10 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量（貼床構築土） |
| 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 11 極暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量（貼床構築土） |
| 5 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | |
| 6 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | |
| 7 暗褐色 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | |

遺物出土状況 土師器片56点（坏類7、器台1、甕類48）、須恵器片39点（坏23、高台付坏2、盤1、高盤1、蓋1、甕類11）のほか、弥生土器片14点（広口壺）、剥片1点（石英）が出土している。遺物は、全域に散在した状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第59図 第169号竖穴建物跡実測図



第 60 図 第 169 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 169 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 60 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
112	須恵器	坏	[13.6]	(3.7)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	ロクロナデ	覆土上層	10% 新治窯
113	須恵器	坏	[12.2]	(3.4)	-	長石・石英	灰黄	良好	ロクロナデ	覆土中	5% 新治窯
114	須恵器	坏	[13.8]	(4.4)	-	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土上層	10% 新治窯
115	須恵器	盤	-	(2.0)	-	長石・石英	にぶい黄	良好	ロクロナデ	覆土中	5% 新治窯
116	須恵器	高盤	-	(2.0)	-	長石・石英・雲母	灰黄	良好	ロクロナデ	覆土下層	5% 新治窯
117	土師器	甕	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外・内面ヘラナデ	覆土中	5% 新治窯 PL21 墨書「□□」
118	須恵器	甕	-	(9.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面縦位の平行叩き 内面ヘラナデ 当て具痕	覆土下層	20% 新治窯
TP16	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	普通	外面平行叩き 内面当て具痕	覆土上層	新治窯

第 185 号竪穴建物跡 (第 61 図)

調査年度 平成 24 年度

位置 調査Ⅷ区北部の H 4 b4 区, 標高 22 ~ 23 m の斜面部に位置している。

規模と形状 削平のため壁が確認できず, また台地斜面部に位置していることから, 南部が確認できなかった。ピットの位置や竈の火床面の痕跡から, 5 m ほどの方形あるいは長方形と推測できる。

床 遺構確認面が斜面の傾斜に沿って南に下がっていることから, 竈の火床面より南部は, 浸食により床面が残存せず, 硬化面等は確認できなかった。

竈 北部に火床面が確認できたことから, 北壁に付設されていたものと考えられる。火床面は長径 74cm, 短径 54cm の楕円形で, 火熱により赤変硬化している。火床面のやや上位から二次焼成を受けた 122 が正位で出土している。

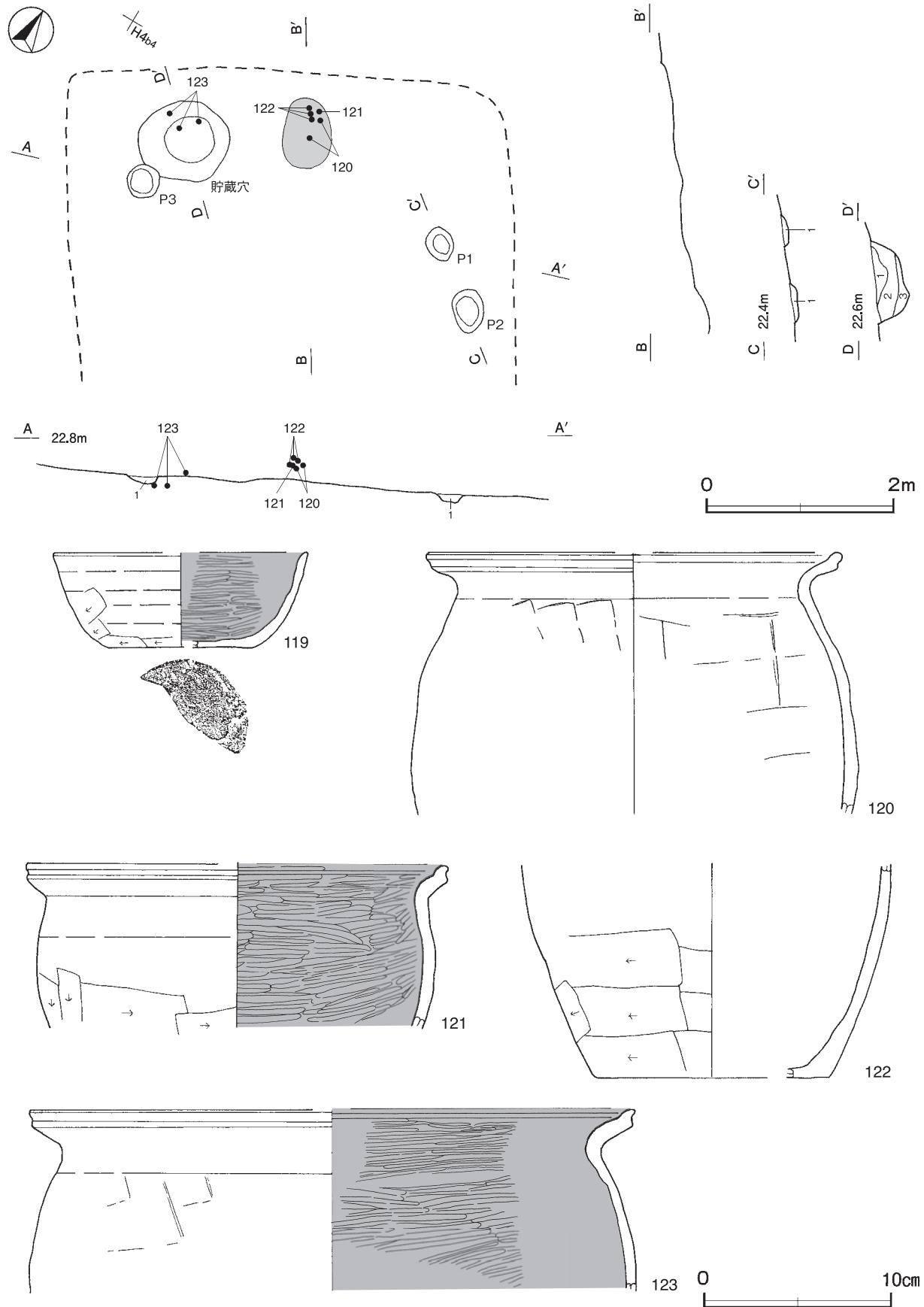
ピット 3 か所。いずれも深さ 10cm ほどで, 位置的にも支柱穴とは考えにくく, 性格は不明である。

ピット土層解説 (共通)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

貯蔵穴 竈の西側で, 北西コーナー部に位置していると推測される。長径 100cm, 短径 82cm の楕円形で, 深さ

は32cmである。底面は南に向かって傾斜しており、壁は外傾している。覆土は3層に分層でき、ロームブロックが少量含まれている黒褐色土がレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。



第61図 第185号竪穴建物跡・出土遺物実測図

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量 3 黒褐色 ローム粒子少量
 2 黒色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 25 点（坏類 4，器台 1，甕類 20）のほか，弥生土器片 3 点（広口壺），瓦片 1 点が出土している。遺物は竈周辺と貯蔵穴内から多く出土しており，120～122 は竈火床面のやや上位から，123 は貯蔵穴の覆土下層から出土しており，埋没時に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。

第 185 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 61 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
119	土師器	坏	[13.4]	5.0	[7.4]	長石・石英	橙	良好	体部下端手持ちヘラ削り 内面磨き 底部一方 向のヘラ削り	竈覆土中	25%
120	土師器	甕	[21.7]	(13.8)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	竈下層	20% 二次焼成
121	土師器	甕	[22.0]	(8.7)	-	長石・石英・ 赤色粒子	におい黄褐	普通	口縁部外面横ナデ 内面磨き 体部外面ヘラ削り 内面磨き	竈下層	30% 二次焼成
122	土師器	甕	-	(11.2)	[12.2]	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部ヘラ削り	竈	20% 二次焼成
123	土師器	甕	[31.8]	(9.6)	-	長石・石英・雲母	橙	良好	口縁部外面横ナデ 内面磨き 体部外面ヘラナデ 内面磨き	貯蔵穴下層	20% 二次焼成

第 191 号竪穴建物跡（第 62・63 図）

調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅶ区東部の E 4 g5 区，標高 29 m ほどの台地緩斜面部に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外に延びており，東部は斜面下位で浸食されているため，東西軸は 3.90 m で，南北軸は 1.71 m しか確認できなかった。方形と推定でき，主軸方向は N - 98° - E である。確認できた壁は高さ 10～30cm で，ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で，北壁際を除いて踏み固められている。確認できた壁下には壁溝が巡っている。北壁際の床面から，粘土ブロックが出土している。

竈 東壁に付設されている。焚口部から煙道部までは 99cm で，南部が調査区域外に延びるため，燃焼部幅は 40cm しか確認できなかった。全体を楕円形状に深さ 5～10cm ほど掘りくぼめ，焼土粒子を多く含む第 11 層を埋土して構築されている。袖部は，床面上に粘土ブロックを多く含む第 10 層を積み上げて構築している。火床面は床面とほぼ同じ高さで，火熱により赤変硬化している。火床面から，雲母片岩を利用した支脚が出土している。煙道部は火床面から外傾している。第 1～9 層が天井部材や内壁の崩落土及び煙道部からの流入土であることから，自然崩壊している。

竈土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子少量，
粘土粒子微量（天井部内壁崩落土） 6 灰褐色 焼土ブロック中量，粘土ブロック・ローム粒子少
量，炭化粒子微量（天井部内壁崩落土）
2 灰褐色 焼土粒子・粘土粒子中量，ロームブロック・炭化
粒子少量（天井部材崩落土） 7 赤褐色 焼土ブロック多量，ローム粒子少量（天井部内壁
崩落土）
3 黒褐色 焼土ブロック・粘土粒子少量，ローム粒子微量（天
井部材崩落土） 8 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少
量，炭化粒子微量（流入土）
4 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子
少量（流入土） 9 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・
炭化粒子少量（流入土）
5 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
（流入土） 10 浅黄橙色 粘土ブロック多量（袖部構築土）
11 赤褐色 焼土粒子中量（埋土）

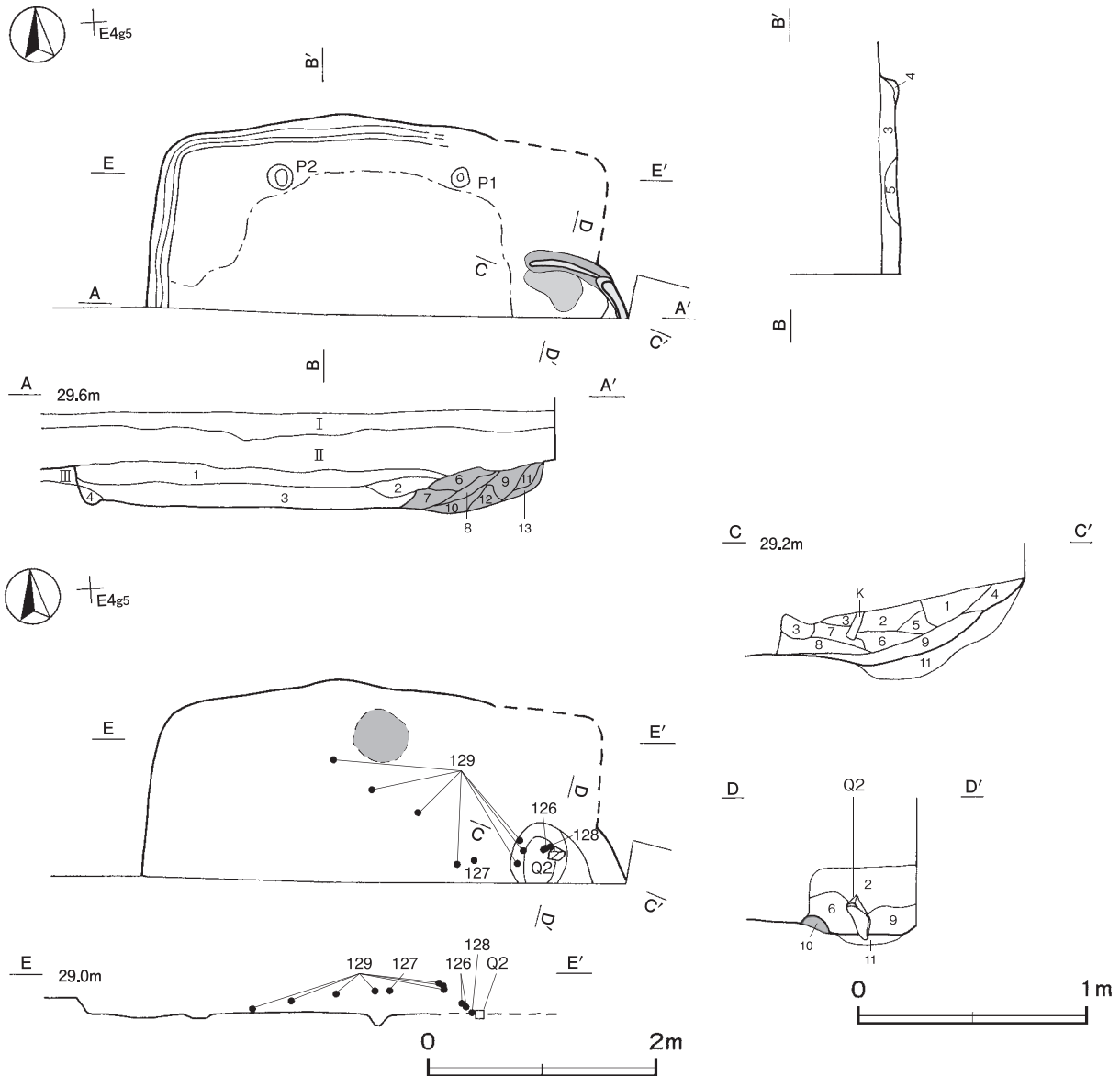
ピット 2 か所。P 1 は深さ 10cm，P 2 は深さ 5cm で，いずれも主柱穴とは考えにくい。性格は不明である。

覆土 5 層に分層できる。第 1～5 層はロームブロックが少量含まれている黒褐色土が主体で，レンズ状に堆積していることから，自然堆積である。第 4 層は壁溝の堆積土，第 6～13 層は竈の崩落土である。

土層解説

I 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量 (表土層)	8 暗赤褐色	焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量, 粘土ブロック微量 (天井部内壁崩落土, 竈2層に対応)
II 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	9 明灰褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量 (天井部崩落土)
III 褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量 (ローム漸移層)	10 暗赤褐色	焼土ブロック中量, ローム粒子・粘土粒子少量 (天井部内壁崩落土, 竈9層に対応)
1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量, 炭化粒子微量	11 赤褐色	焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子微量 (天井部内壁崩落土)
2 黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量	12 浅黄橙色	粘土ブロック多量, 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量 (袖部構築土)
3 黒褐色	焼土粒子中量, ロームブロック・炭化粒子少量	13 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 (煙道部流入土)
4 黒褐色	ローム粒子少量 (壁溝覆土)		
5 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量		
6 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量		
7 明灰褐色	粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 (天井部崩落土)		

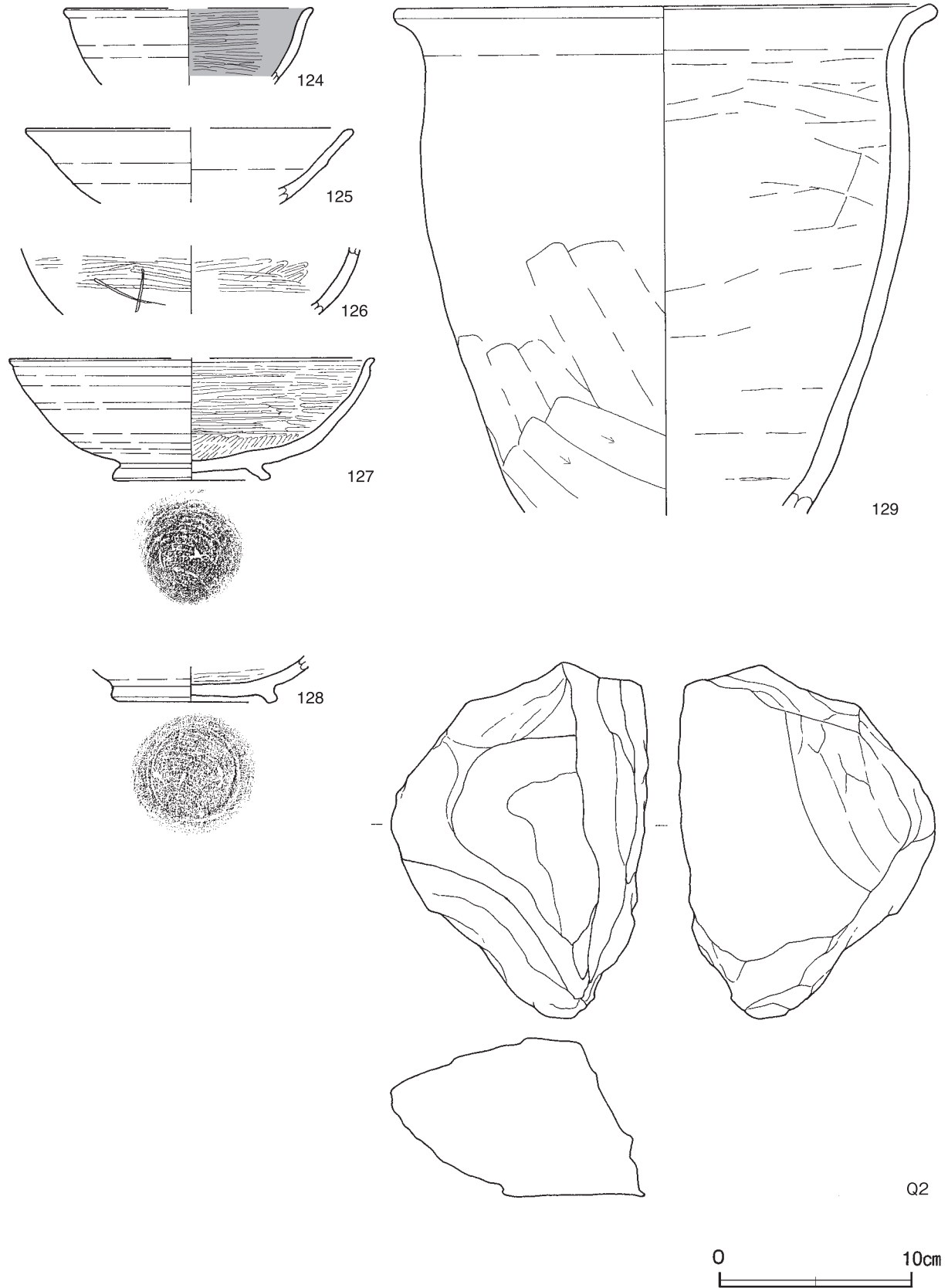
遺物出土状況 土師器片 77 点(坏類 29, 高台付椀 3, 甕類 45), 石製品 1 点(支脚)のほか, 須恵器片 12 点(坏 5, 甕類 7), が出土している。遺物は全域に散在し, 特に覆土上層から多く出土している。126・128 は竈の火床面から出土している。Q 2 は加工痕のない雲母片岩で, 出土状況から支脚と考えられる。127・129 は覆土上層から出土し, 129 は床面から覆土上層にかけて散在した破片が接合することから, 廃絶後の埋没過程で



第 62 図 第 191 号 竪穴建物跡実測図

投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から 10 世紀中葉と考えられる。



第 63 図 第 191 号 竪穴建物跡出土遺物実測図

第 191 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 63 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
124	土師器	椀	[12.6]	(3.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外面ロクロナデ 内面磨き	覆土上層	5%
125	土師器	椀	[16.6]	(3.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ	覆土上層	10%
126	土師器	椀	-	(3.5)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外・内面磨き	竈火床面	10% 刻書「x」
127	土師器	高台付椀	[18.6]	6.3	7.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転糸切り後高台貼付	覆土上層	50% PL18
128	土師器	高台付椀	-	(2.4)	7.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外面ロクロナデ 内面ヘラ磨き 底部回転糸切り後高台貼付	竈火床面	30%
129	土師器	甕	27.6	(26.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラナデ 下半ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土上層～床面	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	支脚	18.2	13.3	8.0	20.98	雲母片岩	加工痕なく、石材をそのまま支脚に利用	竈	赤変

第 192 号 竪穴建物跡 (第 64 ~ 66 図)

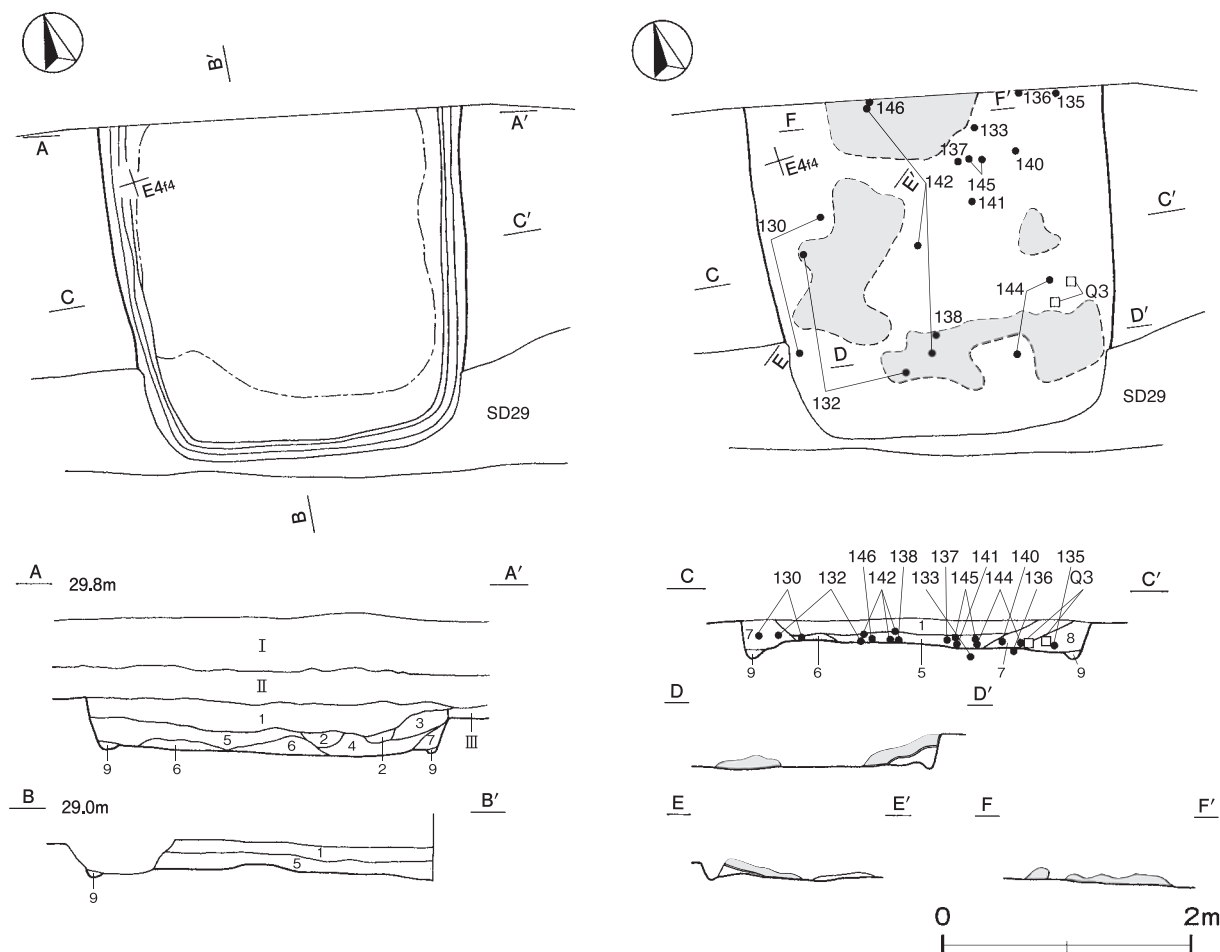
調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅶ区東部の E 4 f4 区、標高 29 m ほどの台地緩斜面部に位置している。

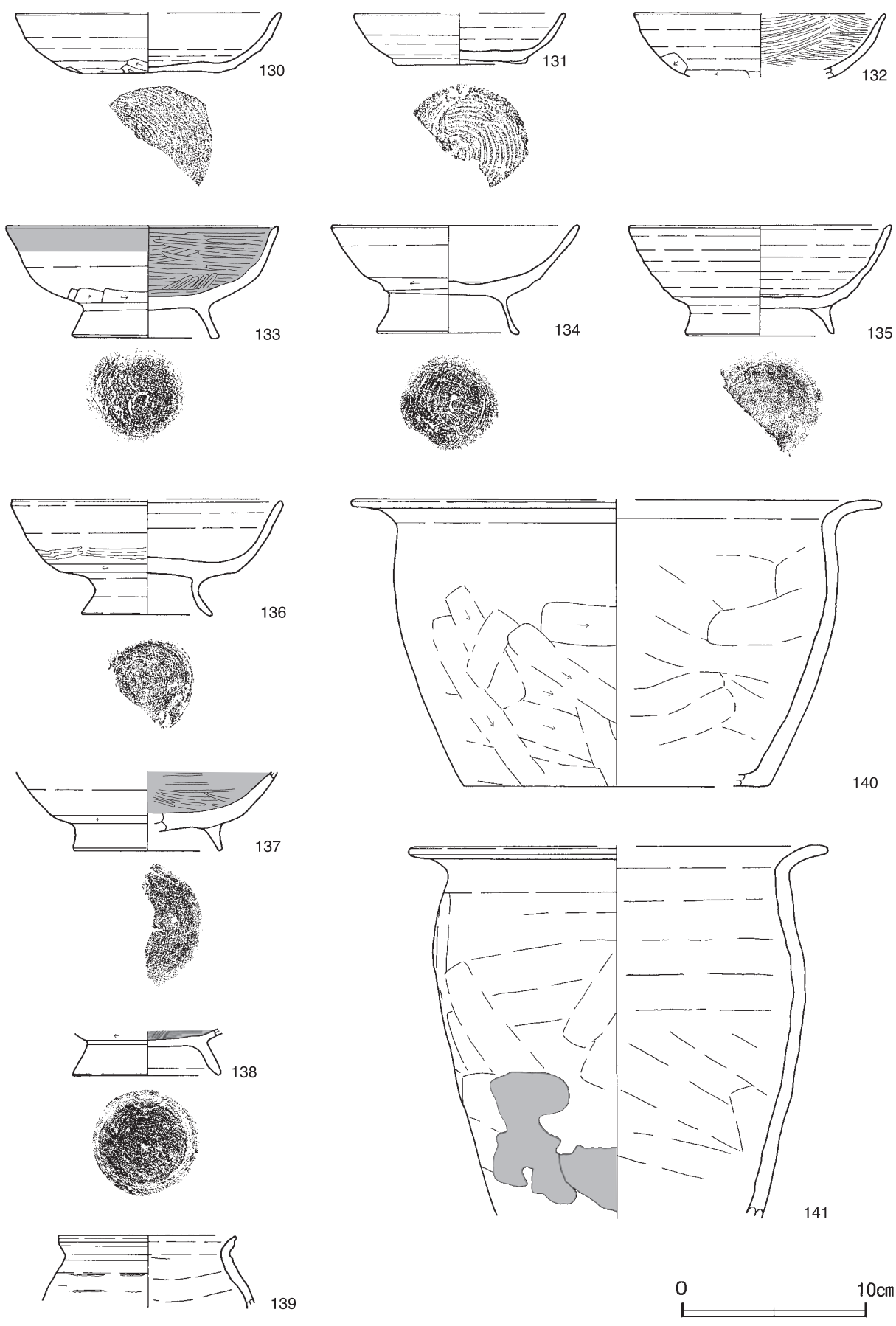
重複関係 第 29 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びているため、東西軸は 2.88 m で、南北軸は 2.74 m しか確認できなかった。長方形と推定でき、長軸方向は N - 12° - E である。壁は高さ 22 ~ 26 cm で、ほぼ直立している。

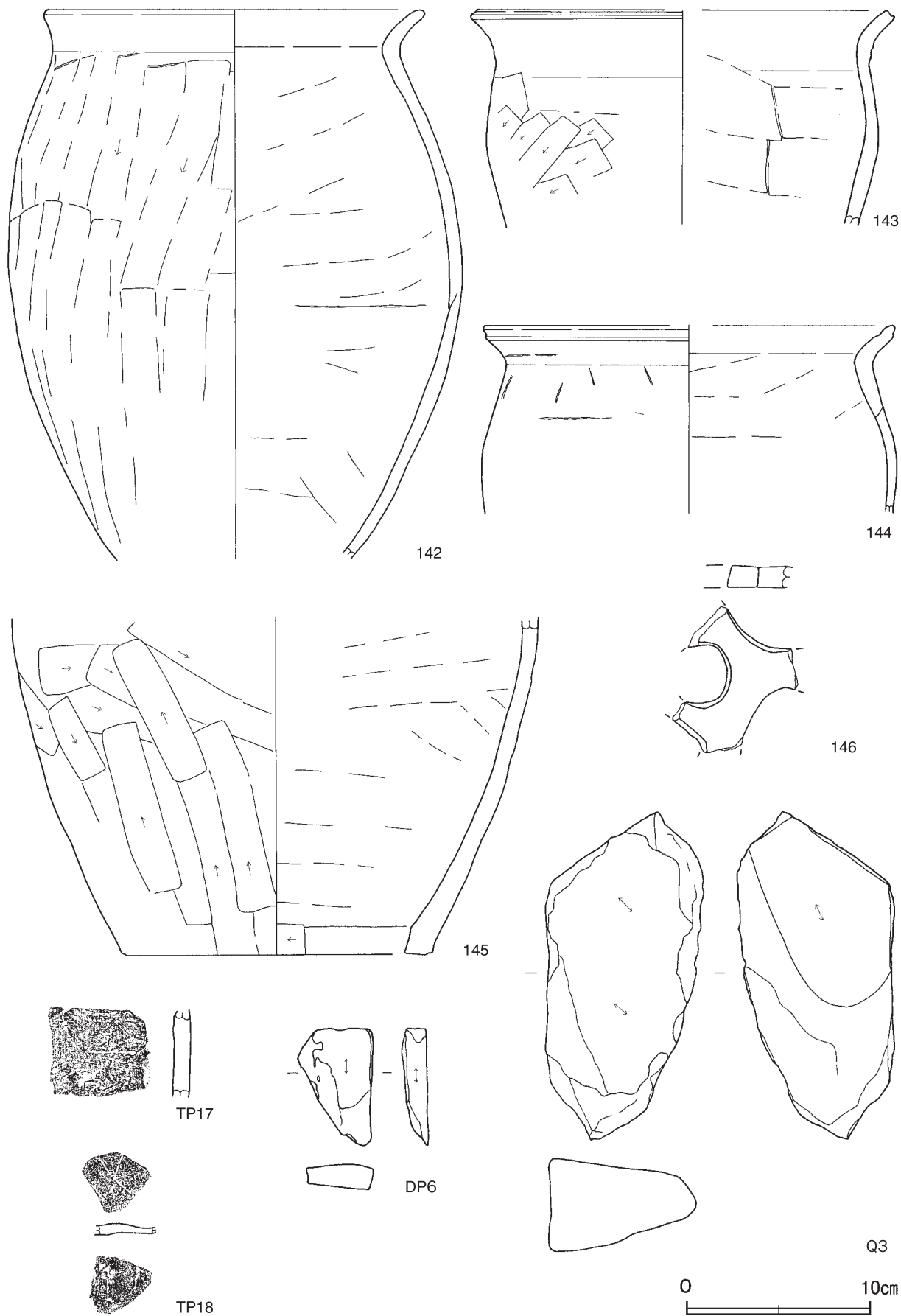
床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。確認できた壁下には、壁溝が巡っている。



第 64 図 第 192 号 竪穴建物跡実測図



第 65 图 第 192 号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 66 图 第 192 号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

覆土 9層に分層できる。第1・5・7・8層はロームブロックが含まれている暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。第2～4層は粘土ブロックや焼土ブロックが多く含まれている層で、竈の流入土の可能性がある。第6層は焼土ブロックが多量に含まれている層で、第9層は壁溝の堆積土である。焼土ブロックを主体とする第6層が床面上に広がっていることから、本跡は焼失建物跡で、焼失後自然に埋没したものと考えられる。

土層解説

I	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量（表土層）	5	暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
II	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	6	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
III	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量（ローム漸移層）	7	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
1	極暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	8	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2	浅黄橙色	粘土ブロック中量	9	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量（壁溝覆土）
3	暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量			
4	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量			

遺物出土状況 土師器片 191点（坏類 47, 高台付碗 9, 鉢 2, 甕類 130, 甗 3）, 須恵器片 12点（坏 5, 蓋 1, 壺 1, 甕類 5）, 土製品 1点（砥石転用須恵器甕片）, 石器 1点（砥石）のほか、弥生土器片 4点（広口壺）が出土している。遺物は全域から多量に出土している。特に、床面及び覆土下層から出土したものが多く、二次焼成を受けたものも見られることから、廃絶時に遺棄されたと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から 10 世紀中葉と考えられる。

第 192 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 65・66 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
130	土師器	坏	[14.0]	3.3	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転糸切り	床面	30%
131	土師器	坏	[11.2]	2.8	[6.8]	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部回転糸切り	床面	30%
132	土師器	坏	[13.4]	(3.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面磨き	床面	30%
133	土師器	高台付碗	14.6	6.2	7.4	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面磨き 底部回転糸切り	床面	90% PL19
134	土師器	高台付碗	13.2	5.9	7.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転糸切り	覆土下層	80% PL19
135	土師器	高台付碗	14.0	6.0	[8.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り	覆土下層	50% PL19 二次焼成
136	土師器	高台付碗	[14.6]	6.2	[7.0]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部ロクロ成形 外面一部ヘラ磨き後ロクロナデ 下端回転ヘラ削り 底部回転糸切り	床面	50% 二次焼成
137	土師器	高台付碗	-	(4.3)	[7.7]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部高台貼付後ロクロナデ	床面	20% 二次焼成
138	土師器	高台付碗	-	(2.4)	8.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部高台貼付後ロクロナデ 内面磨き	床面	30% 二次焼成
139	土師器	小形甕	9.6	(3.9)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	10%
140	土師器	鉢	[28.0]	15.5	[16.4]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部ヘラ削り	覆土下層	20% 二次焼成
141	土師器	甕	[22.0]	(20.1)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ 体部外面に粘土付着	床面	30%
142	土師器	甕	20.2	(29.7)	-	長石・石英・赤色粒子・細礫	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	50% PL18
143	土師器	甕	[22.0]	(11.6)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土上層	20%
144	土師器	甕	[22.0]	(10.2)	-	長石・石英・赤色粒子	明黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	床面	10%
145	土師器	甗	-	(18.2)	[16.8]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	10%
146	土師器	甗	-	-	(6.5)	長石・石英・雲母	橙	普通	5 孔式	床面	5%
TP17	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰	普通	外面同心円叩き 内面当て具痕	壁溝	新治窯
TP18	土師器	坏	-	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	黄橙	普通	底部回転ヘラ削り	覆土下層	刻書

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 6	砥石	6.3	4.1	1.4	32.05	長石・雲母	灰	須恵器甕片転用 砥面 2 面	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	砥石	17.7	8.4	5.0	913.0	砂岩	加工痕なく、石材をそのまま支脚に利用	覆土下層	二次焼成

第193号竪穴建物跡 (第67～70図)

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅶ区東部のE4g3区、標高29mほどの台地緩斜面部に位置している。

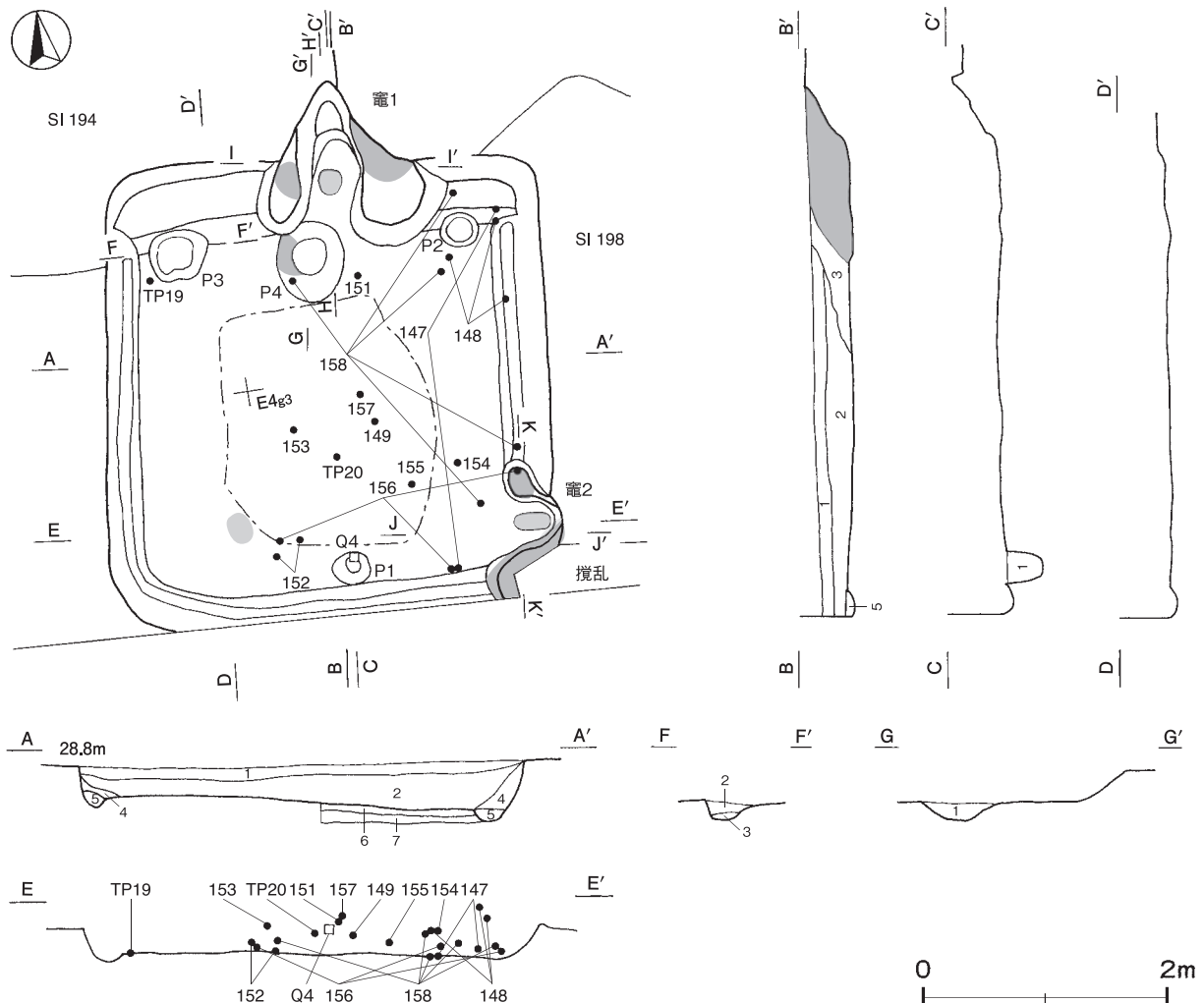
重複関係 第194・198号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南壁の一部が調査区域外に延びているため、東西軸は3.52mで、南北軸は3.78mしか確認できなかった。方形と推定でき、主軸方向はN-8°-Eである。壁は高さ24～38cmで、東壁は外傾し、それ以外はほぼ直立している。

床 貼床で、東側に向かってやや下がっている。中央部が踏み固められている。北壁を除いて、壁下には壁溝が巡っている。貼床は、東部で第198号竪穴建物跡の覆土上に、ロームブロックを含む第6・7層を埋土して構築されている。

棚状施設 北壁に設置されている。幅3.2m、奥行0.5mで、地山を掘り残して構築されている。確認面からの深さは32cmで、床面からの高さは8cmである。棚状施設の上面は平坦である。

竈 2か所。竈1は北壁のほぼ中央に付設されている。焚口部から煙道部までは130cmで、燃焼部幅は40cmで

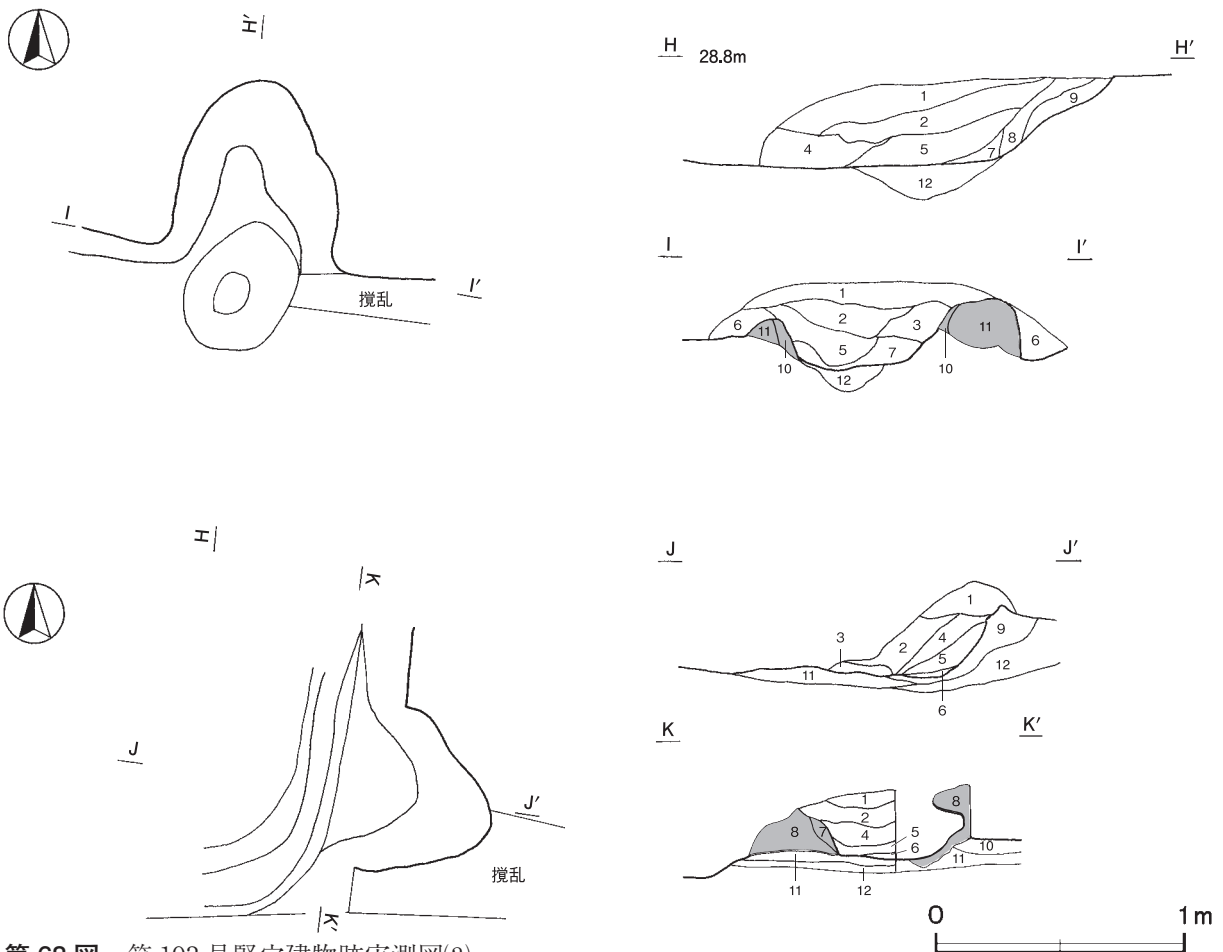


第67図 第193号竪穴建物跡実測図(1)

ある。袖部は地山を掘り残して基部とし、白色粘土の第10・11層を積み上げて構築している。火床部は25cmほど掘りくぼめ、焼土ブロックや粘土粒子を含む第12層を埋土して構築されており、火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外へ68cmほど掘り込まれ、火床面から外傾している。第1～4・6層が流入土、第5層が天井部材の崩落土、第7～9層が煙道部からの流入土であることから、自然崩落している。竈2は南東コーナー部に付設されている。焚口部から煙道部までは50cmで、燃焼部幅は40cmである。袖部は第198号竈穴建物跡の覆土を貼床した上に、白色粘土の第7・8層を積み上げて構築している。火床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱により赤変硬化している。煙道部は全体的に10～20cm掘り下げ、焼土ブロックなどを含む第9層を埋土して構築されている。壁外にほとんど掘り込まれず、火床面から外傾している。第1～4層は天井部材の崩壊土、第5層は煙道部からの流入土、第6層は燃焼部の堆積土である。第10・11層は貼床、第12層は第198号竈穴建物跡の覆土である。袖部の残存が悪く、南東コーナー部に広く粘土が散布しているが、竈2の火床面下から壁溝が確認されたことなどから、竈1から竈2へ作り直されたか、同時に使用されたものと考えられる。

竈1土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------------|---------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(流入土) | 7 極暗褐色 | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(流入土) |
| 2 黒褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(流入土) | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量(流入土) |
| 3 暗褐色 | 粘土粒子中量, ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量(流入土) | 9 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, 粘土粒子微量(流入土) |
| 4 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(流入土) | 10 灰褐色 | 粘土ブロック中量(袖部構築土) |
| 5 灰褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(天井部崩落土) | 11 浅黄橙色 | 粘土ブロック多量, 焼土ブロック少量(袖部構築土) |
| 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量(流入土) | 12 極暗褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(埋土) |



第68図 第193号竈穴建物跡実測図(2)

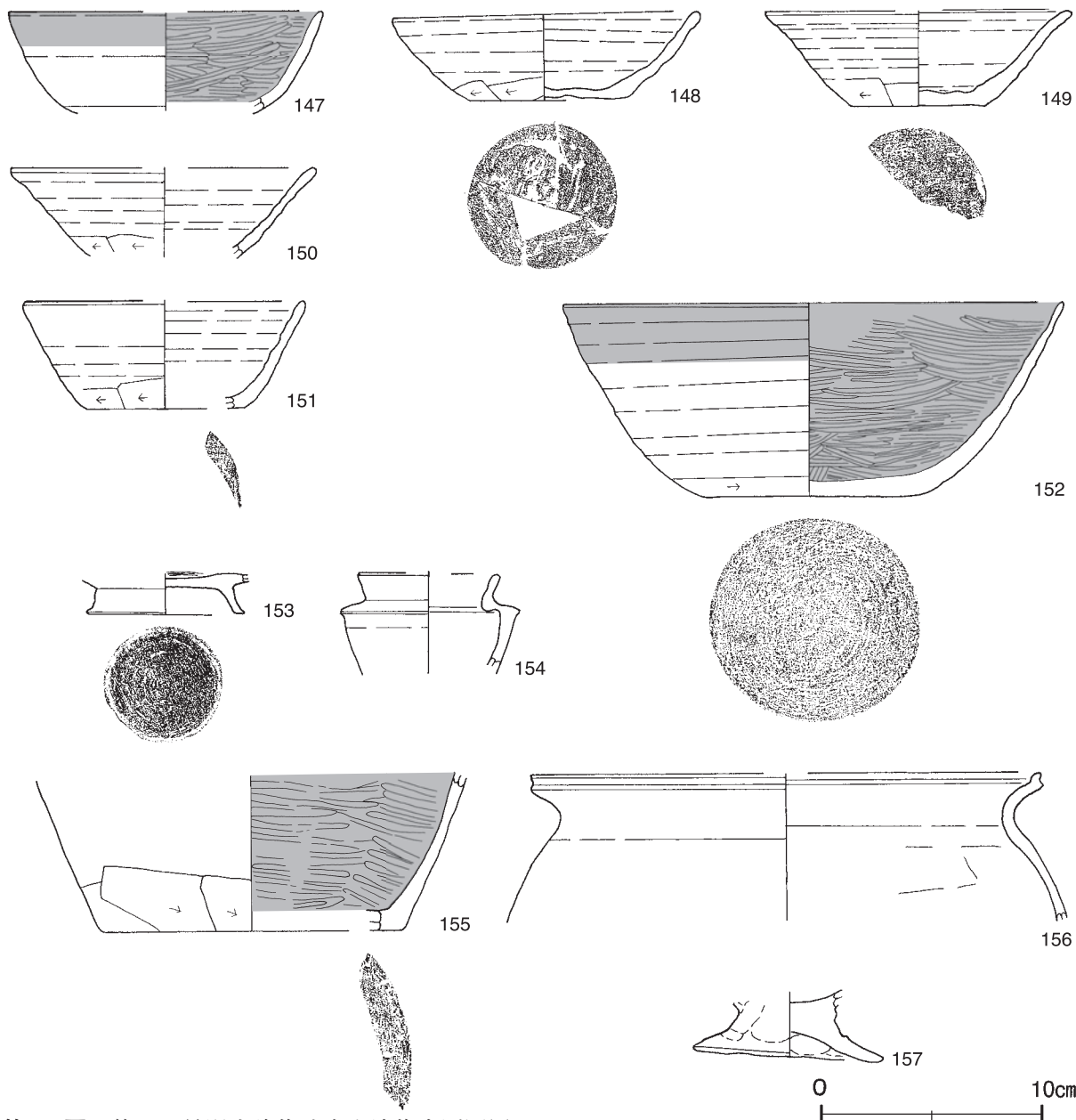
竈2土層解説

- | | | | |
|---------|--|--------|--------------------------------------|
| 1 にぶい褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(天井部材崩壊土) | 7 浅黄橙色 | 粘土ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量(袖部構築土) |
| 2 灰褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物・ローム粒子少量(天井部材崩壊土) | 8 灰褐色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(袖部構築土) |
| 3 褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量(天井部崩壊土) | 9 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・粘土粒子微量(埋土) |
| 4 浅黄橙色 | 粘土粒子多量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量(天井部崩壊土) | 10 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量(貼床構築土) |
| 5 黒褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量(流入土) | 11 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量(貼床構築土) |
| 6 赤褐色 | 焼土ブロック多量(燃焼部堆積土) | 12 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量(第198号竪穴建物跡覆土) |

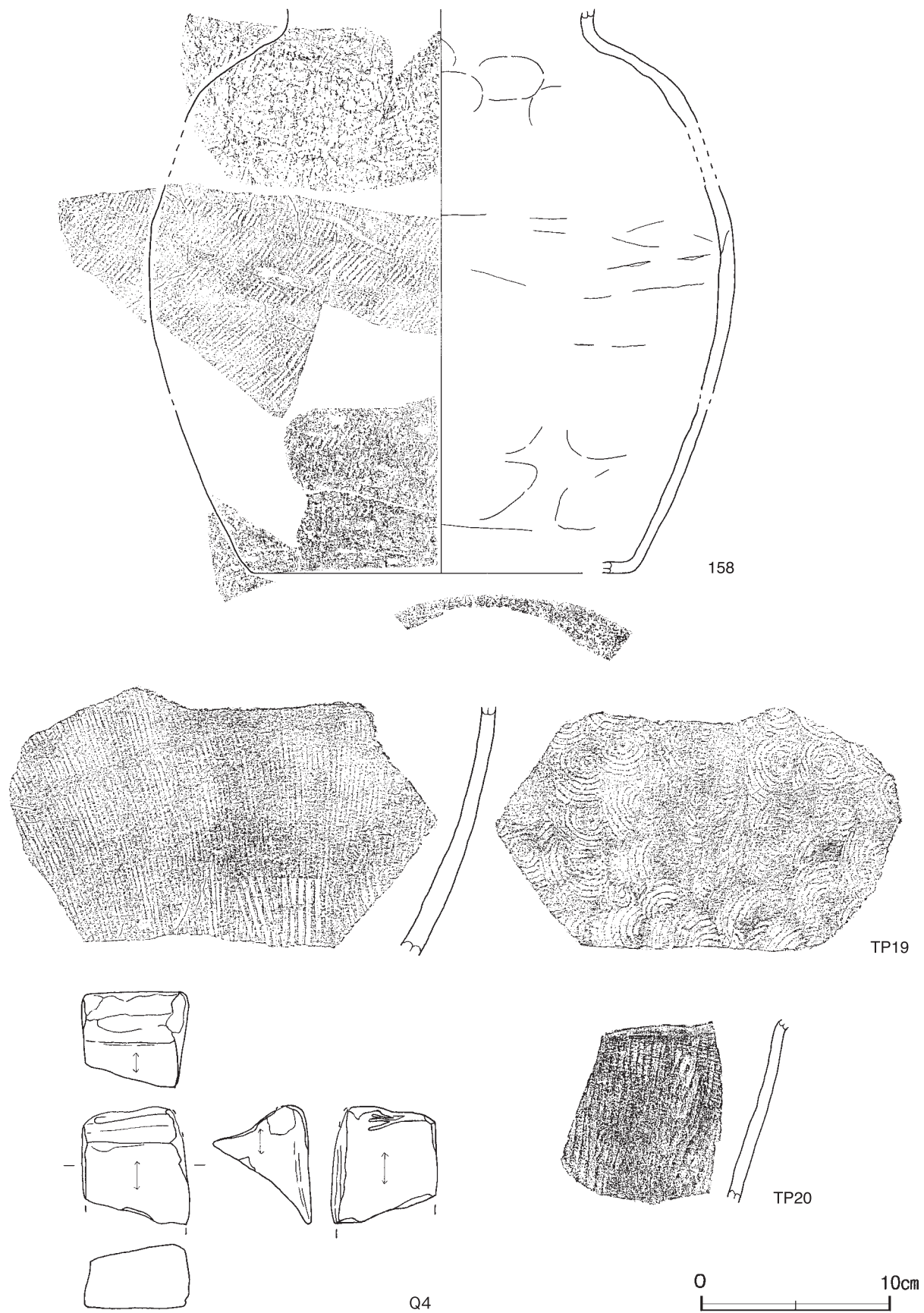
ピット 4か所。P1は深さ35cmで、位置的に出入口施設に伴うピットである。P2は北壁際に位置し、深さが8cmと浅く、主柱穴とは考えにくい。P3・P4は掘方の調査時に確認したものである。P3は深さが20cm, P4は深さ17cmで、いずれも性格は不明である。P4の覆土中から、粘土塊が出土している。

ピット土層解説 (P1・P3・P4共通)

- | | | | |
|-------|-------------------------|------|---------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量 | 3 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量, 粘土粒子少量 | | |



第69図 第193号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第70图 第193号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)

覆土 5層に分層できる。第1～4層は焼土ブロックや粘土ブロックが含まれている黒褐色土が主体で、レンズ状の堆積状況から自然堆積である。第3層は粘土ブロックがやや多く含まれている灰褐色土で竈の崩落土、第4層は壁際の堆積土、第5層は壁溝の堆積土である。第6層は貼床の構築土で、埋め戻された第198号竪穴建物跡の覆土の第7層上に構築されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|--|
| 1 極暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量（壁溝覆土） |
| 3 灰褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量（貼床構築土） |
| | | 7 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量（第198号竪穴建物跡覆土） |

遺物出土状況 土師器片 160点（坏類 23, 高台付坏 2, 椀 1, 鉢 2, 甕類 131, 手捏土器 1）、須恵器片 50点（坏 24, 高台付坏 1, 蓋 3, 瓶類 4, 短頸壺 1, 甕類 16, 甑 1）、石器 1点（砥石）のほか、弥生土器片 3点（広口壺）、焼成粘土塊 2点が出土している。遺物は全域から出土しているが、特に東半部の覆土上層から多く出土している。147・148・156・158は広域に分布する破片が接合していることから、埋没過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第193号竪穴建物跡出土遺物観察表（第69・70図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
147	土師器	椀	[14.0]	(4.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部外面回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き 磨滅のため調整不明瞭	床面	20%
148	須恵器	坏	13.7	3.9	6.8	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り	覆土上層	60% 新治窯 PL19
149	須恵器	坏	[13.4]	4.3	6.0	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土上層	40% 新治窯
150	須恵器	坏	[13.4]	(4.0)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土下層	10% 新治窯
151	須恵器	坏	[12.4]	4.7	[7.0]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土上層	10% 新治窯
152	土師器	鉢	22.3	8.6	9.5	長石・石英	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面磨き 底部回転ヘラ削り	床面	60% PL19
153	土師器	高台付坏	-	(1.8)	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面磨き 底部高台貼付後ロクロナデ	覆土上層	10%
154	須恵器	小形短頸壺	[6.0]	(4.5)	-	長石・石英・細礫	オリーブ黒	良好	口縁部内面・体部外面に自然釉	覆土上層	20% 堀ノ内窯
155	土師器	鉢	-	(7.0)	[13.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面下端ヘラ削り 内面磨き 底部ヘラ削り	覆土下層	10%
156	土師器	甕	[22.6]	(6.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	床面	5%
157	土師器	手捏土器	-	(3.2)	8.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外・内面指頭ナデ	覆土上層	10%
158	須恵器	甕	-	(29.7)	[18.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面平行叩き 内面ヘラナデ 当て具痕	覆土下層	30% 新治窯
TP19	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英・雲母	灰	良好	外面縦位の平行叩き 内面同心円状の当て具痕	床面	新治窯
TP20	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外面縄目叩き 内面ヘラナデ	覆土上層	新治窯

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	砥石	(6.1)	5.6	5.1	(136.8)	凝灰岩	砥面4面	覆土上層	PL21

第194号竪穴建物跡（第71・72図）

調査年度 平成25年度

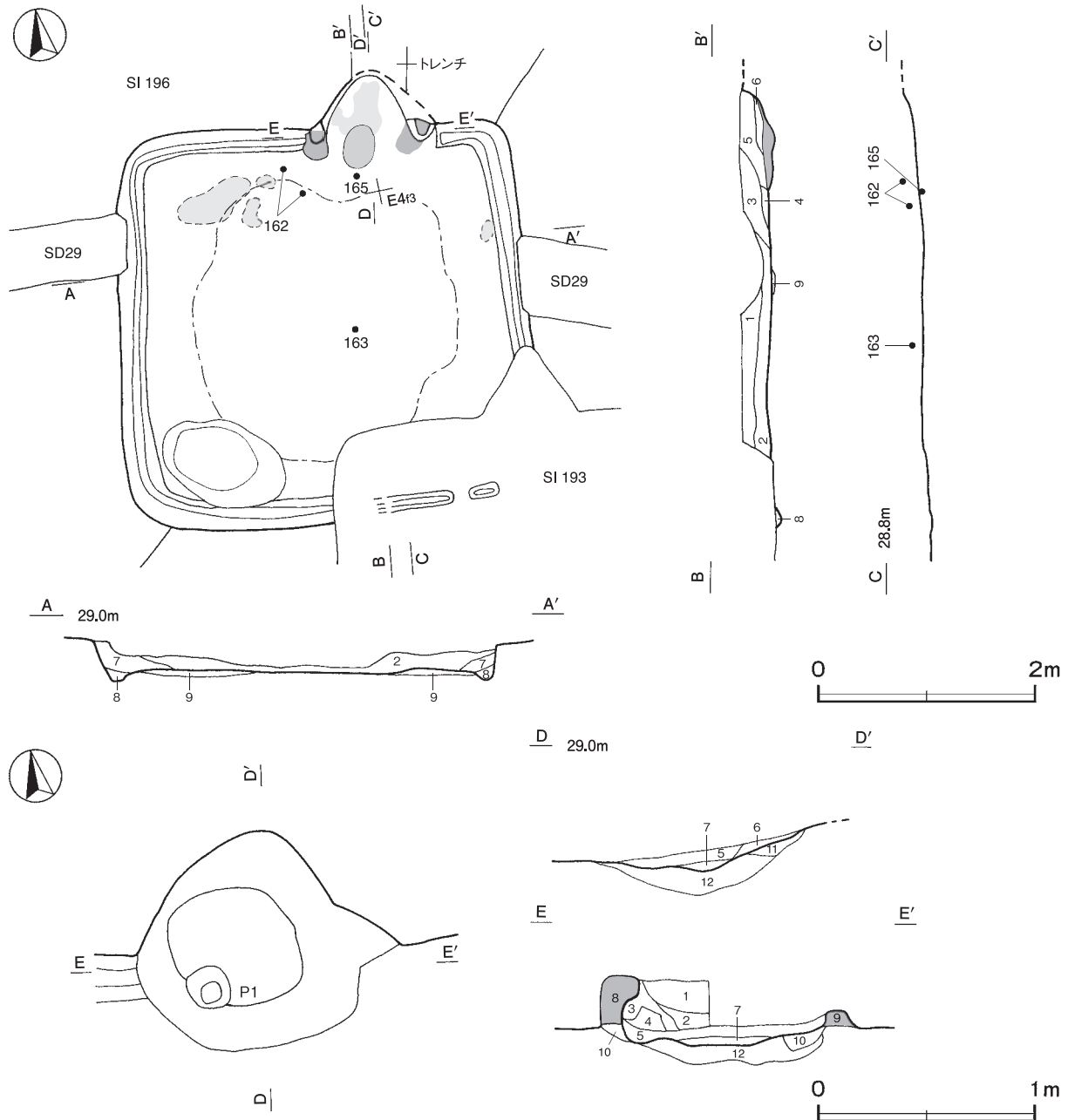
位置 調査Ⅶ区東部のE4f2区、標高29mほどの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第196号竪穴建物跡を掘り込み、第193号竪穴建物、第29号溝に掘り込まれている。

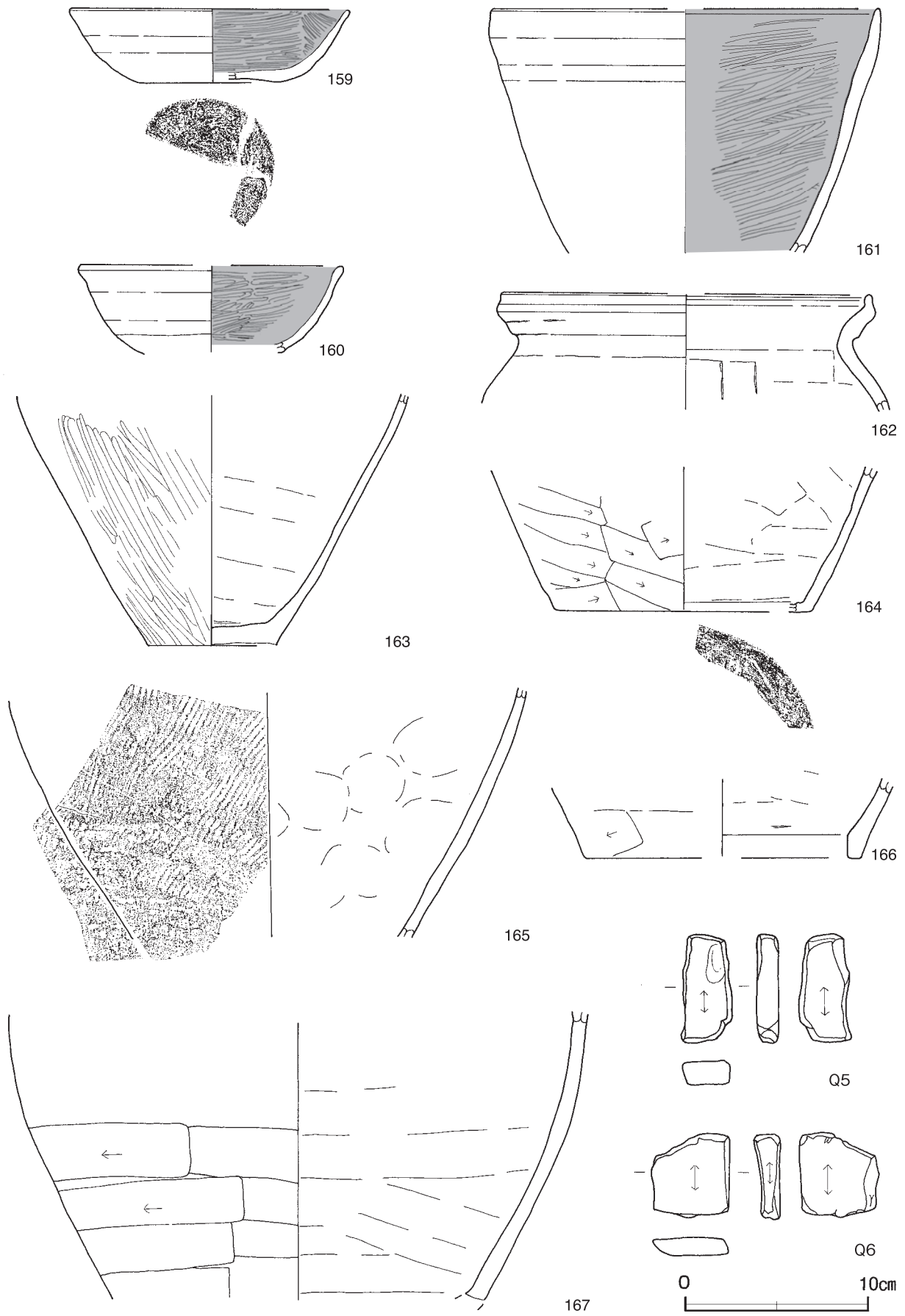
規模と形状 長軸3.60m、短軸3.48mの方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁は高さ20～24cmで、直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。確認できた壁下には壁溝が巡っており、南壁の一部は第193号竪穴建物の床面で、壁溝の痕跡が確認できた。貼床は、コーナー部付近を一段深く掘りくぼめ、ロームブロックや焼土ブロックを含む第9層を埋土して構築されている。竈の南西部及び東壁際の床面から、焼土ブロックが出土している。

竈 北壁中央部のやや東寄りに付設されている。竈の中心を通るように土層確認トレンチが設定されたことから、煙道部の一部は攪乱を受けている。焚口部から煙道部までは90cmで、燃焼部幅は64cmである。全体を楕円形に20cmほど掘りくぼめ、ロームブロックや焼土ブロック、粘土ブロックを含む第10～12層を埋土して構築されている。袖部は、地山及び埋土の上に白色粘土主体の第8・9層を積み上げて構築している。火床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱により赤変硬化している。確認できた煙道部は、壁外へ50cmほど掘り込まれ、火床面から緩やかに立ち上がっており、底面が火熱により赤変硬化している。第1～4層は天井部材及び袖部内壁の崩落土で、攪乱のため不明瞭であるが、自然崩落している。第5～7層は焼土ブロックが多量に含まれ



第71図 第194号竪穴建物跡実測図



第72図 第194号竖穴建物跡出土遺物実測図

ている層で、燃焼部の堆積土である。

竈土層解説

- | | | | |
|-----------|--|-----------|---------------------------------------|
| 1 暗 褐 色 | 粘土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量 (天井部崩落土) | 7 暗 赤 褐 色 | 焼土ブロック多量 (燃焼部堆積土) |
| 2 暗 赤 褐 色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 (天井部内壁崩落土) | 8 暗 褐 灰 色 | 粘土粒子多量 (袖部構築土) |
| 3 極 暗 褐 色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 (天井部崩落土) | 9 暗 褐 色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子微量 (袖部構築土) |
| 4 浅 黄 橙 色 | 粘土ブロック多量 (天井部崩落土) | 10 暗 褐 色 | 焼土ブロック中量, 粘土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 (埋土) |
| 5 暗 赤 褐 色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化物少量, 粘土ブロック微量 (燃焼部堆積土) | 11 灰 褐 色 | 粘土ブロック中量, 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 (埋土) |
| 6 暗 赤 褐 色 | 焼土ブロック多量, 炭化粒子少量, 粘土粒子微量 (燃焼部堆積土) | 12 暗 褐 色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 (埋土) |

ピット 床面では確認できなかった。P1は掘方の調査で確認されたもので、深さは10cmである。性格は不明である。

覆土 8層に分層できる。第1～5・7層は、ロームブロックや焼土ブロックが含まれている暗褐色土が主体である。特に第1・2層はローム粒子がやや多く含まれている土が水平に堆積していることから、第3～7層が自然に堆積した後、埋め戻されている。第8層は壁溝の堆積土、第9層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-----------|-------------------------------|-----------|--------------------------------|
| 1 極 暗 褐 色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 6 暗 赤 褐 色 | 焼土ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 2 暗 褐 色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 7 極 暗 褐 色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 3 灰 褐 色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 | 8 黒 褐 色 | ロームブロック少量 (壁溝覆土) |
| 4 暗 褐 色 | ロームブロック少量 | 9 黒 褐 色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 (貼床構築土) |
| 5 暗 褐 色 | 粘土ブロック中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器片 289点 (坏類 29, 埴 2, 高坏 1, 鉢 1, 壺 4, 甕類 251, 甌 1), 須恵器片 49点 (坏 21, 蓋 1, 甕類 27), 石器 2点 (砥石) のほか、縄文土器片 3点 (深鉢), 弥生土器片 14点 (広口壺), 焼成粘土塊 3点, 剥片 1点 (石英) が出土している。遺物は破片が多いが、全域から多量に出土しており、埋め戻す過程で焼土ブロックとともに投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第 194 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 72 図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
159	土師器	坏	15.0	4.1	[7.4]	長石・石英・雲母	橙	不良	外面ロクロナデ 内面磨き 底部ヘラ削り	覆土上層	50% 磨滅 PL19
160	土師器	坏	[14.4]	(4.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	外面ロクロナデ 体部外面下端ヘラ削り 内面磨き	覆土上層	10%
161	土師器	鉢	[20.8]	(13.2)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	外面ロクロナデ 内面磨き	覆土中	20% 磨滅
162	土師器	甕	[19.8]	(6.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	10%
163	土師器	甕	-	(13.5)	[7.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	外面磨き 内面ヘラナデ 底部剥離	覆土下層	10%
164	須恵器	甕	-	(7.9)	[14.0]	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部ヘラ削り	覆土中	20% 新治窯
165	須恵器	甕	-	(13.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	不良	外面平行叩き 内面当て具痕	床面	10% 新治窯
166	土師器	甌	-	(4.3)	[15.0]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土上層	10%
167	土師器	甕	-	(15.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土中	10%

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 5	砥石	5.8	2.8	1.3	30.63	凝灰岩	砥面2面	覆土下層	PL21
Q 6	砥石	4.6	4.3	1.5	29.73	凝灰岩	砥面3面	覆土下層	PL21

第 195 号竪穴建物跡 (第 73・74 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅶ区東部の E 4 f2 区, 標高 29 m ほどの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第 196 号竪穴建物跡, 第 272 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 3.80 m, 短軸 2.45 m の長方形で, 長軸方向は N - 81° - W である。壁は高さ 5 ~ 16 cm で, ほぼ直立している。

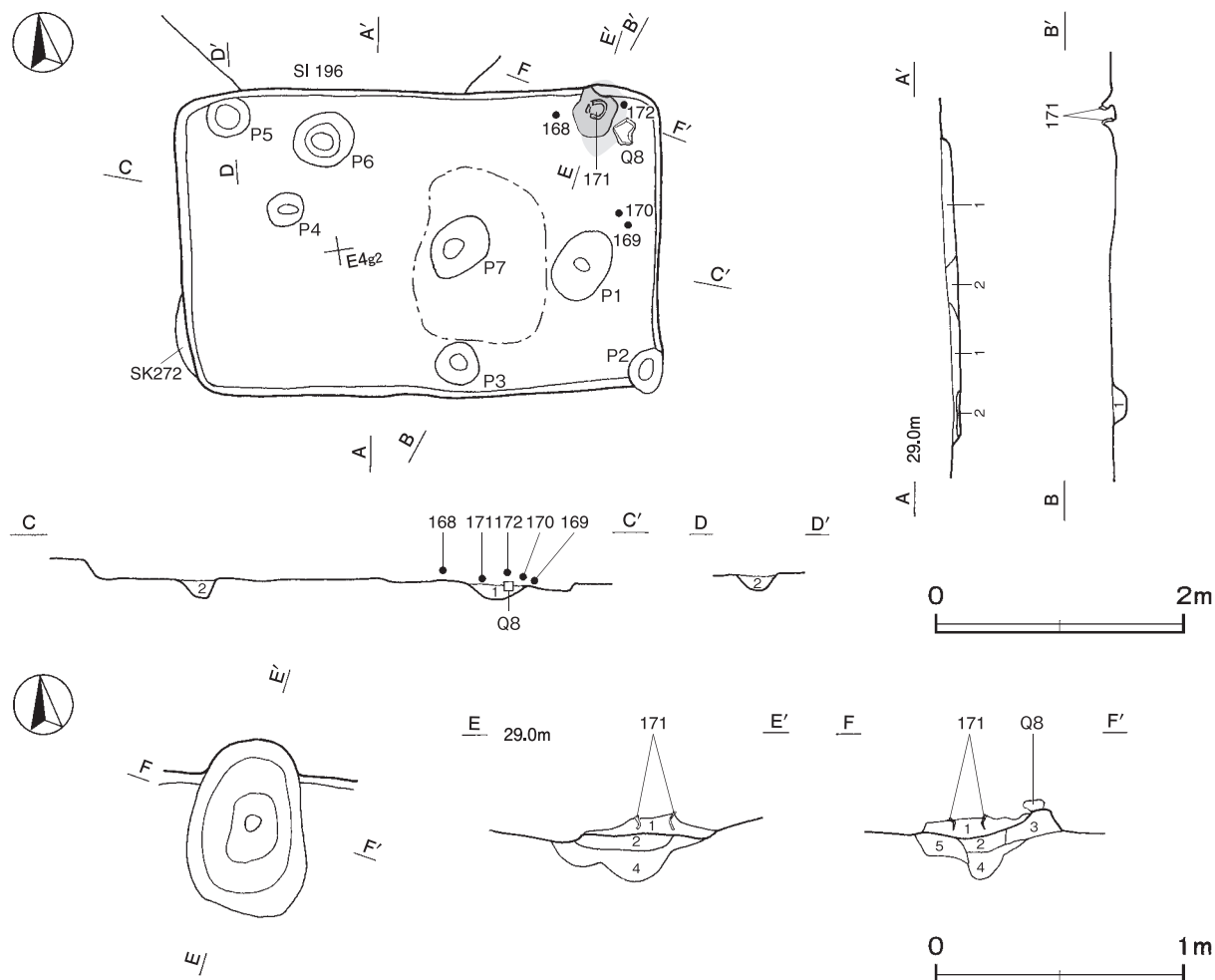
床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。中央付近に火熱により赤変硬化している部分が見られる。

竈 北東コーナー部寄りに付設されている。粘土の散布は見られず, 火床面と考えられる赤変硬化した部分が確認できたのみであったが, その下から掘方と考えられる土坑が確認できたことから, 竈と判断した。全体を楕円形状に 20 cm ほど掘りくぼめ, 中央部がピット状に下がっている。ロームブロックや焼土ブロック, 粘土ブロックを含む第 2 ~ 5 層を埋土して構築されており, 掘方は壁外へ 15 cm ほど掘り込まれている。火床面は床面とほぼ同じ高さで, 火熱により赤変硬化しており, 171 が逆位で出土している。また, 火床面の東側から, 火熱による二次焼成が見られる Q 8 が出土している。

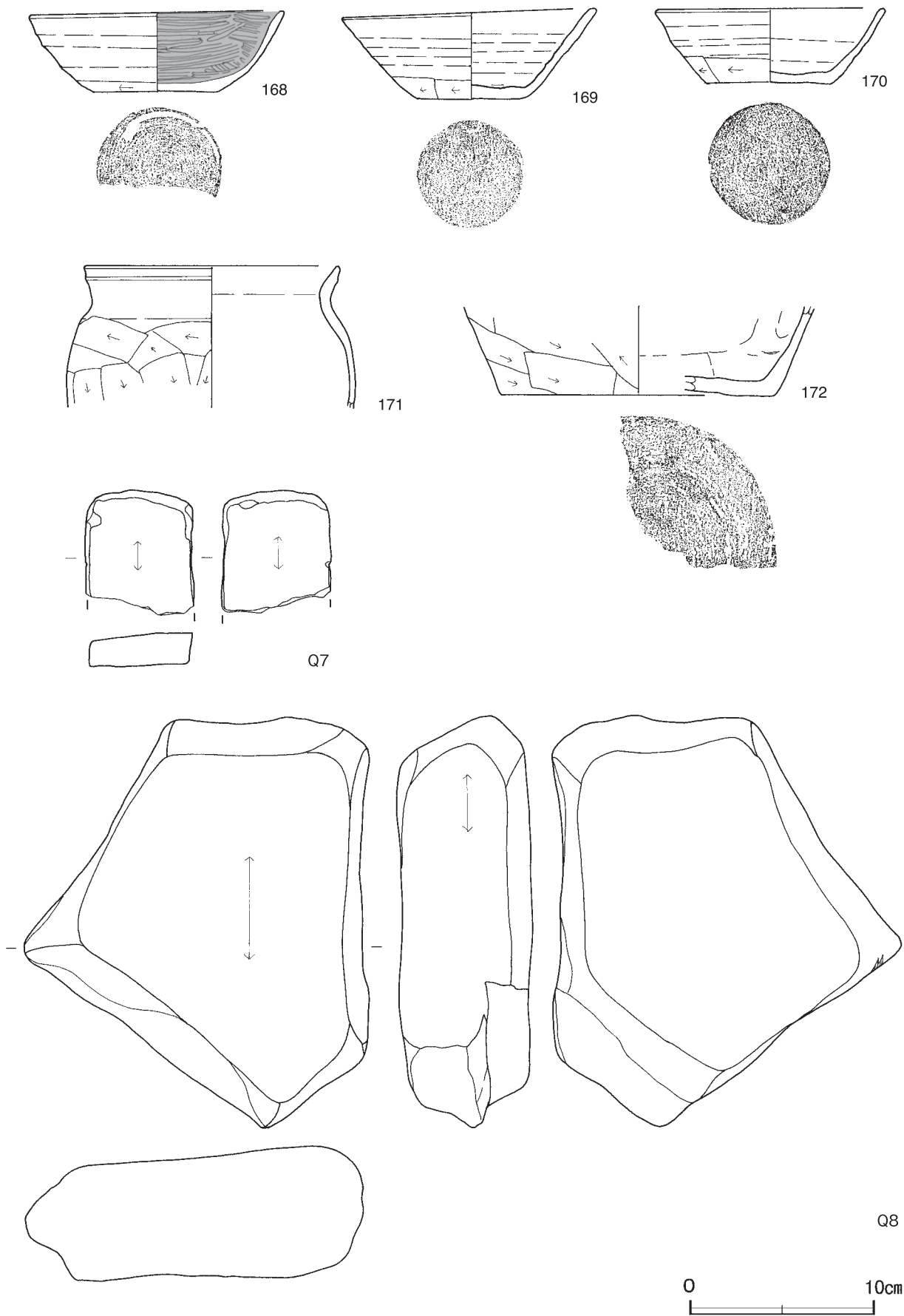
竈土層解説

- | | |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量, 炭化物・ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック・粘土ブロック少量 (埋土) |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 (埋土) | 5 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 (埋土) |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 (埋土) | |

ピット 7 か所。いずれも浅く, 配置も不規則である。P 2 は深さ 11 cm, P 5 は深さ 10 cm で, コーナー部に



第 73 図 第 195 号竪穴建物跡実測図



第74図 第195号竖穴建物跡出土遺物実測図

位置する。P 6は深さ17cmである。P 7は深さ17cmで、硬化面下で確認されたもので、本跡に伴うものかどうか不明である。

ピット土層解説 (P 1・P 3～P 5共通)

- 1 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 2 極暗褐色 ローム粒子少量

覆土 2層に分層できる。焼土ブロックや炭化物が含まれている層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 71点 (坏類 10, 高台付碗 1, 甕類 60), 須恵器片 9点 (坏 3, 甕類 6), 石器 2点 (砥石) のほか, 縄文土器片 1点 (深鉢), 弥生土器片 3点 (広口壺) が全域に散在する状態で出土している。特に, 竈周辺の覆土上層から中層にかけて多く出土している。

所見 床面の中央に赤変硬化した部分があることや大形の砥石が出土していることなどから, 何らかの作業場の可能性がある。時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第 195 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 74 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
168	土師器	坏	13.6	4.4	6.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面磨き 底部回転ヘラ削り	覆土下層	60% PL19
169	須恵器	坏	13.5	4.9	5.8	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	80% PL19 新治窯
170	須恵器	坏	12.1	4.1	6.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り	覆土下層	80% PL19 新治窯
171	土師器	甕	13.6	(7.7)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	10% PL19
172	土師器	甕	-	(4.8)	[14.8]	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	体部外面下端ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部ヘラ削り	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 7	砥石	(6.7)	5.8	1.9	(129.6)	凝灰岩	砥面 2面	覆土下層	PL21
Q 8	砥石	22.1	18.7	7.3	4245.0	雲母片岩	砥面 2面	覆土下層	二次焼成

第 201 号 竪穴建物跡 (第 75・76 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査V区中央部の A 2f4 区, 標高 29 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 2.94 m, 短軸 2.74 m の方形で, 主軸方向は N - 2° - E である。壁は高さ 24 ~ 38cm で, ほぼ直立している。

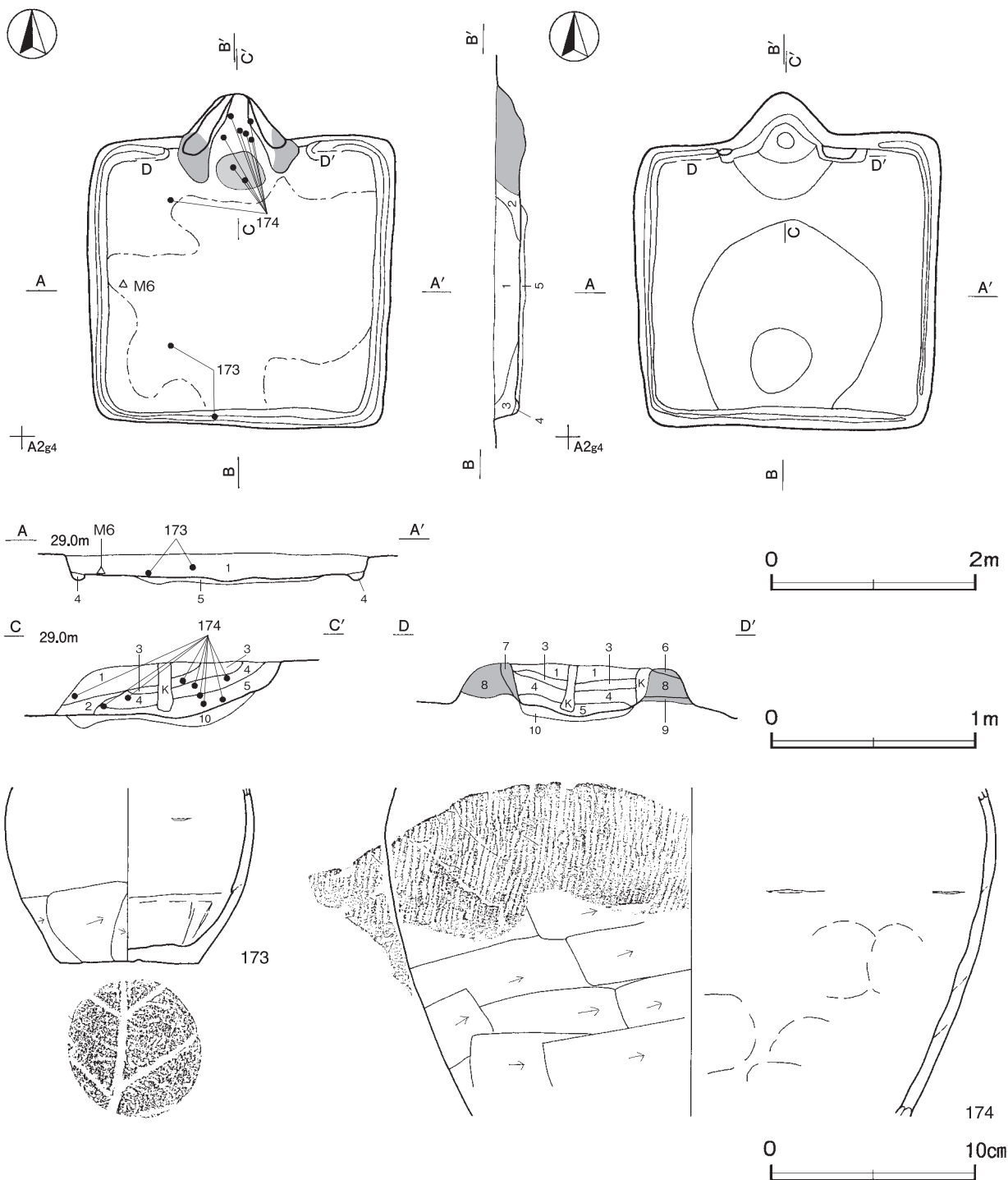
床 ほぼ平坦な貼床で, 壁際を除いて踏み固められている。壁下には, 壁溝が全周している。貼床は, 中央から南壁付近を一段深く掘りくぼめ, ローム粒子が多く含まれている第 5 層を埋土して構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは 94cm で, 燃焼部幅は 62cm である。全体を楕円形に 10cm ほど掘りくぼめ, ロームブロックや焼土ブロックを含む第 10 層を埋土して構築されている。袖部は, 地山を掘り残して基部とし, 白色粘土主体の第 6 ~ 9 層を積み上げて構築している。火床面は床面とほぼ同じ高さで, 火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外へ 46cm 掘り込まれ, 火床面から外傾している。第 1・2 層は流入土, 第 3・4 層は天井部材及び内壁の崩落土, 第 5 層は煙道部からの流入土であることから, 自然崩壊したものと考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|---|--------|--------------------------------------|
| 1 褐色 | 粘土ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | 粘土粒子中量, 焼土ブロック・ローム粒子微量 (袖部構築土) |
| 2 褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子微量 | 7 橙色 | 焼土粒子中量, 粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量 (袖部構築土) |
| 3 におい赤褐色 | 粘土粒子中量, 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 (天井部材・内壁崩落土) | 8 明黄褐色 | 粘土粒子中量, 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 (袖部構築土) |
| 4 明赤褐色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 (天井部材・内壁崩落土) | 9 明黄褐色 | 粘土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量 (袖部構築土) |
| 5 暗褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量 (流入土) | 10 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 (埋土) |

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが少量含まれている暗褐色土が主体で、レンズ状の堆積状況から、



第75図 第201号竪穴建物跡・出土遺物実測図

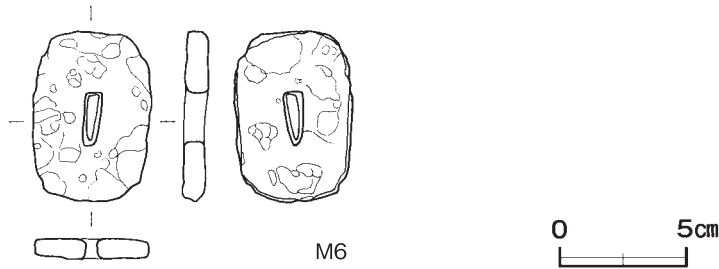
自然堆積である。第4層は壁溝の堆積土、第5層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 | 4 褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 (壁溝覆土) |
| 2 褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量 (貼床構築土) |
| 3 褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 34 点 (坏類 4, 甕類 30), 須恵器片 16 点 (坏 10, 甕類 6), 鉄製品 1 点 (鐺) のほか, 縄文土器片 2 点 (深鉢) が出土している。遺物は全域に散在しており, 覆土上層から出土しているものが多い。M6 は形状から, 本跡に伴うものではなく, 埋没時に流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から 9 世紀代と考えられる。



第 76 図 第 201 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 201 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 75・76 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
173	土師器	小形甕	-	(8.5)	6.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部木葉痕	床面	30%
174	須恵器	甕	-	(16.0)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄	良好	体部平行叩き 下端ヘラ削り 内面ヘラナデ	竈覆土	20% 新治窯

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 6	鐺	7.0	5.0	1.3~1.5	107.1	鉄	角形 四隅に抉り込み	覆土下層	PL22

第 202 号竪穴建物跡 (第 77 図)

調査年度 平成 25 年度

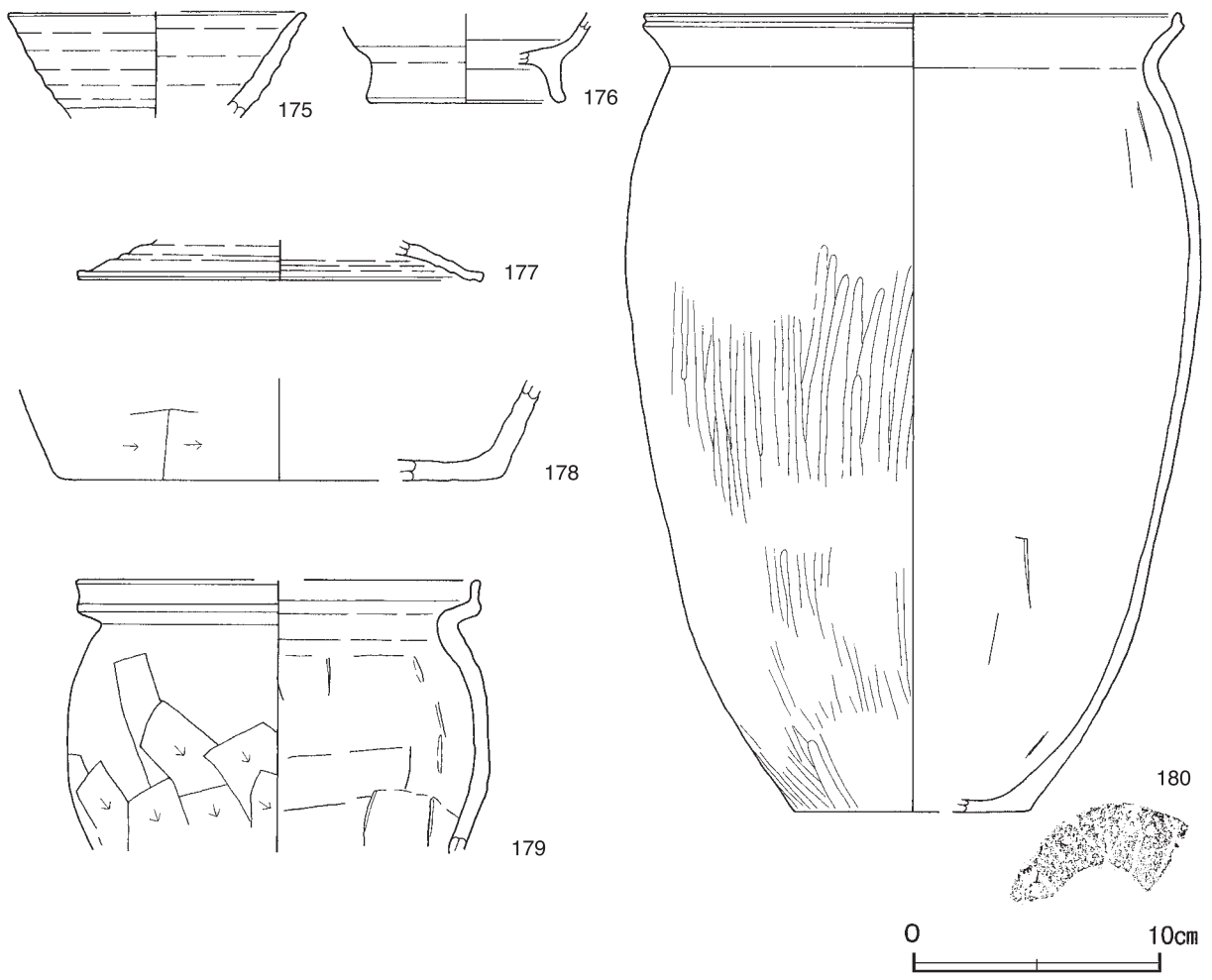
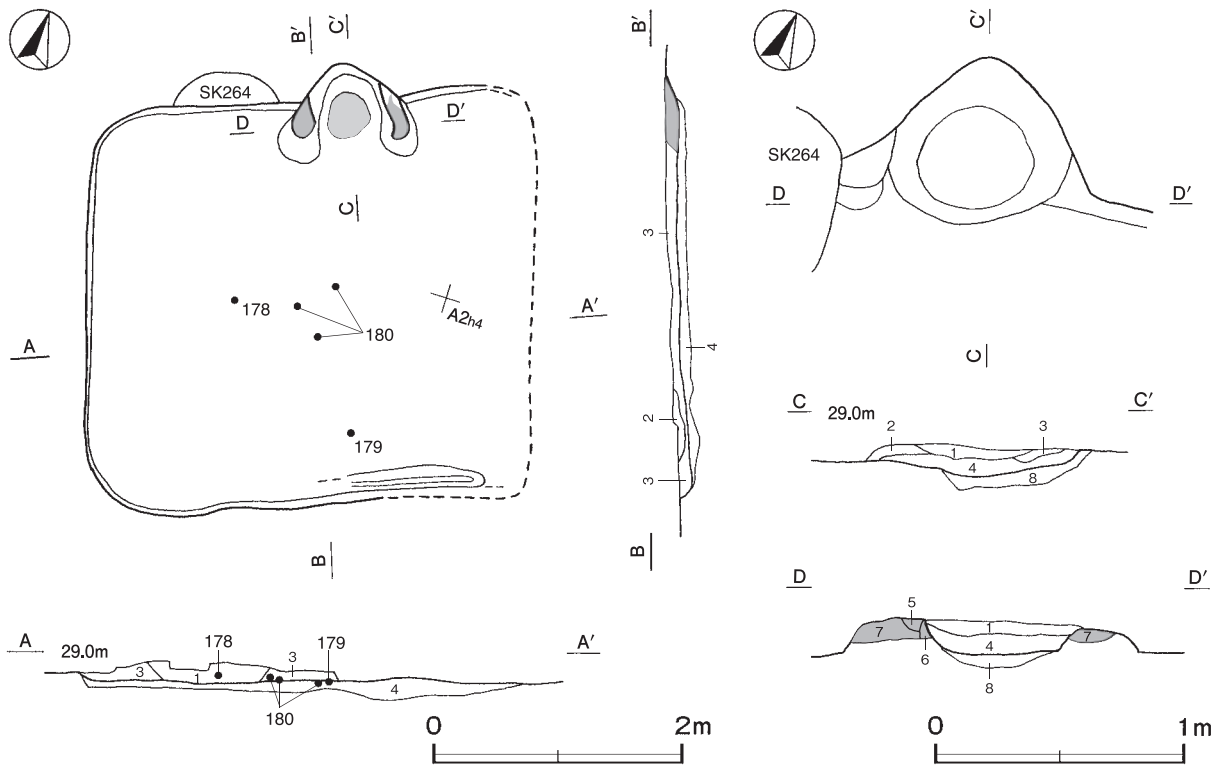
位置 調査V区南部のA 2g3区, 標高 29 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 263・264 号土坑を掘り込んでいます。

規模と形状 東部が削平されているため, 南北軸は 3.25 mで, 東西軸は 3.22 mしか確認できなかった。方形と推定され, 主軸方向は N - 18° - Wである。壁は高さ 9 cmで, ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で, 竈前面が踏み固められている。南壁の一部で幅 15cm, 深さ 5 cmの壁溝が確認された。貼床は, 中央部から東側付近を一段深く掘りくぼめ, ローム粒子や炭化粒子を含む第 4 層を埋土して構築されている。

竈 北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部までは 80cmで, 燃焼部幅は 48cmである。全体を楕円形に 10cmほど掘りくぼめ, 焼土ブロックを含む第 8 層を埋土して構築されている。袖部は, 地山を掘り残して基部とし, 白色粘土を含む第 5~7 層を積み上げて構築している。火床面は床面とほぼ同じ高さで, 火熱により赤変硬化している。煙道部は壁外へ 34cmほど掘り込まれ, 火床面から外傾している。第 1~3 層は天井部材及び内壁の崩落土, 第 4 層は煙道部からの流入土で, 自然崩壊したものと考えられる。



第 77 図 第 202 号竖穴建物跡・出土遺物実測図

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|-------|--|---|-----|---------------------------------------|
| 1 | にぶ赤褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量 (天井部材・内壁崩落土) | 6 | 赤褐色 | 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 (袖部構築土) |
| 2 | 明褐色 | 焼土粒子微量 (天井部材崩落土) | 7 | 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 (袖部構築土) |
| 3 | にぶ赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 (天井部材・内壁崩落土) | 8 | 褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 (埋土) |
| 4 | 褐色 | 焼土粒子少量 (流入土) | | | |
| 5 | 明黄褐色 | 粘土粒子少量, ロームブロック・焼土ブロック微量 (袖部構築土) | | | |

覆土 3層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が含まれている暗褐色土が主体で、レンズ状の堆積状況から、自然堆積である。第4層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-----------------------|---|-----|-------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 3 | 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 | 褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 (貼床構築土) |

遺物出土状況 土師器片 118点 (坏類9, 甕類109), 須恵器片 35点 (坏16, 蓋3, 鉢1, 甕類15) が出土している。遺物は全域に散在しており、埋没過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

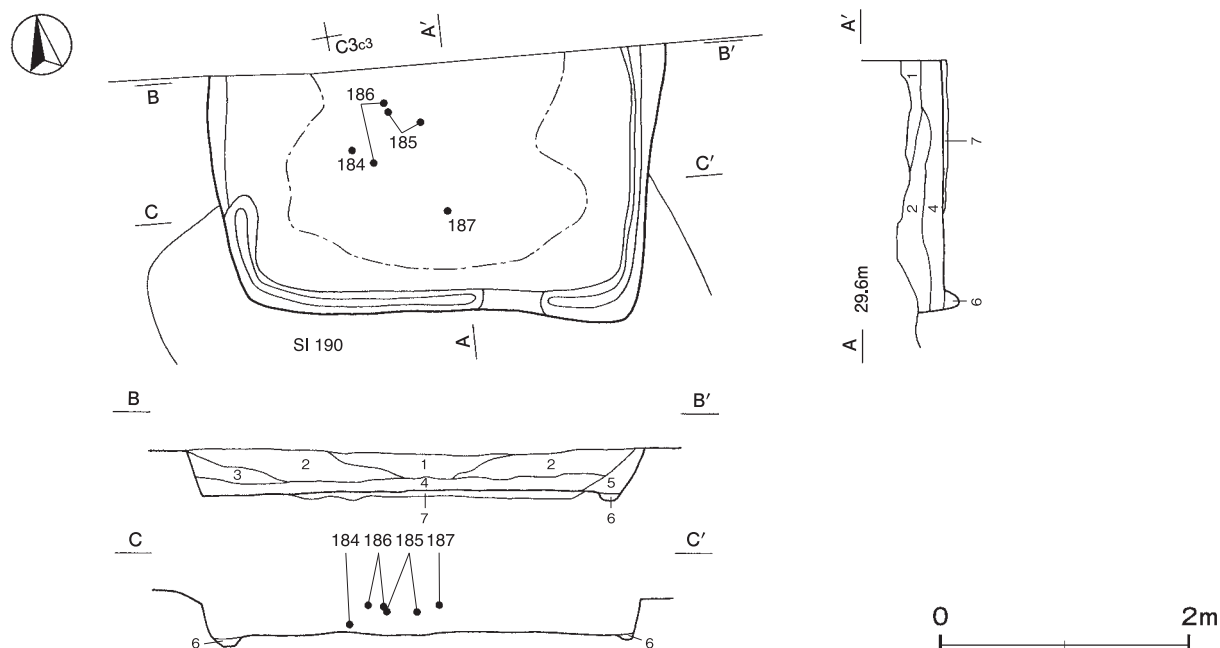
第202号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
175	須恵器	坏	[11.7]	(4.2)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部下端ヘラ削り	覆土中	10% 新治窯
176	須恵器	高脚坏	-	(3.7)	[7.7]	長石・石英・雲母	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10% 新治窯
177	須恵器	蓋	[16.0]	(1.6)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10% 新治窯
178	須恵器	鉢	-	(4.0)	[18.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黄	普通	体部下端ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	10% 新治窯 磨滅
179	土師器	甕	[16.0]	(10.9)	-	長石・石英・赤色粒子・細礫	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	床面	20%
180	土師器	甕	21.4	(32.0)	[9.4]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面磨き 内面ヘラナデ 底部木葉痕	床面	20% 二次焼成

第204号竪穴建物跡 (第78・79図)

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅵ区東部のC3c3区, 標高29.5mほどの台地平坦部に位置している。



第78図 第204号竪穴建物跡実測図

重複関係 第190号竪穴建物跡を掘り込み、第3号道路に掘り込まれている。

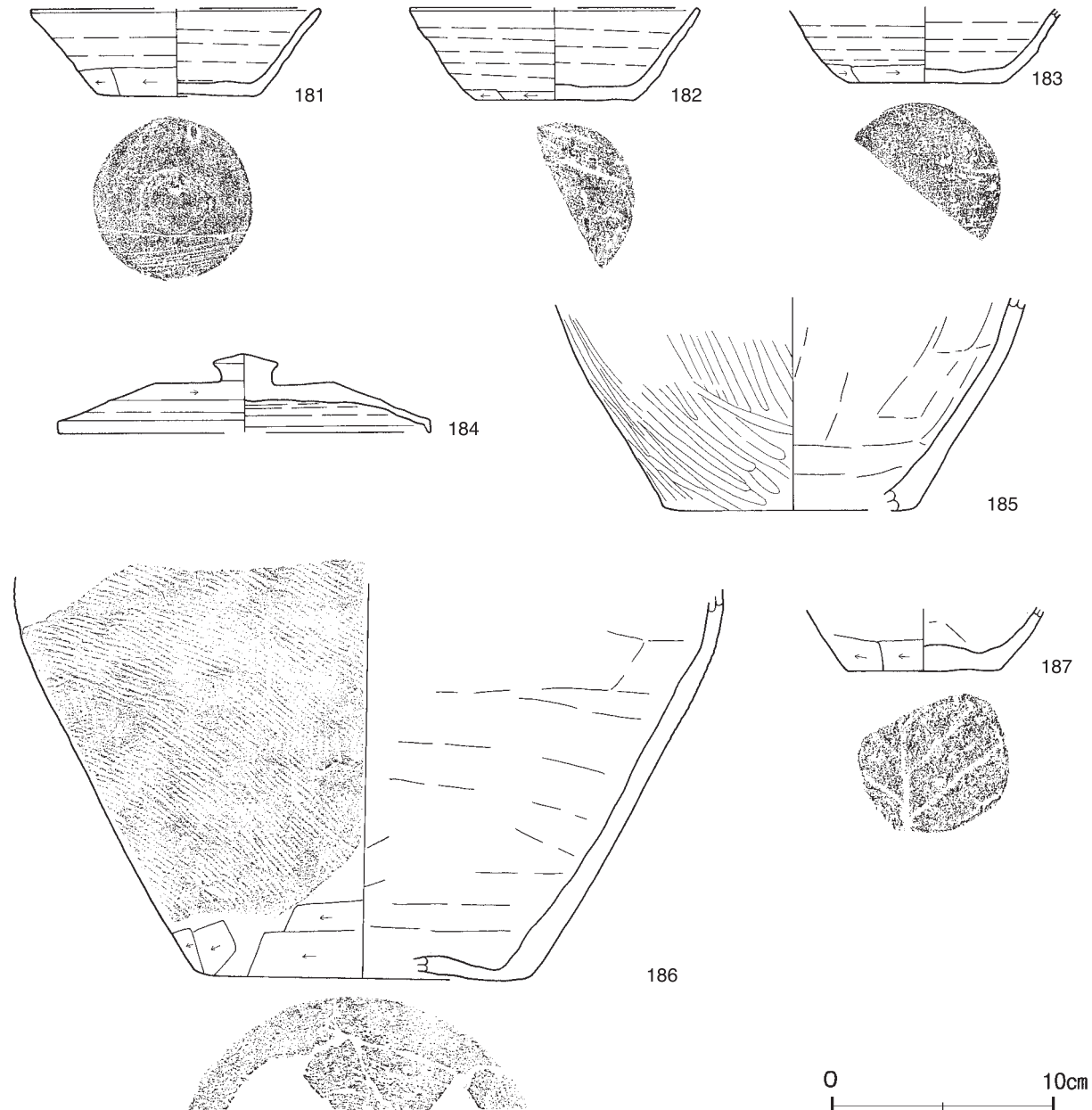
規模と形状 北部が調査区域外に延びているため、東西軸は3.50mで、南北軸は2.18mしか確認できなかった。方形あるいは長方形と推定され、南北軸方向はN-12°-Eである。壁は高さ25~39cmで、外傾している。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除く中央付近が踏み固められている。確認できた範囲では、南壁の一部と西壁の一部を除き壁溝が巡っている。貼床は、第190号竪穴建物跡の覆土上に、第7層を埋土して構築されている。

覆土 6層に分層できる。第1~4層はロームブロックがやや多く含まれている黒褐色土が主体で、第4層を水平に埋め戻した後、ロームブロックがやや多く含まれている第1~3層で埋め戻している。第6層は壁溝の堆積土、第7層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子・粘土粒子微量 (壁溝覆土) |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子中量, 粘土ブロック・炭化粒子少量 | 7 橙色 | ローム粒子多量 (貼床構築土) |
| 4 黒褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | | |



第79図 第204号竪穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 12 点（甕類），須恵器片 5 点（坏 3，蓋 1，甕 1）が出土している。遺物は全域に散在し，主に覆土中層から出土している。184 は床面から，185～187 は中央付近の覆土中層から出土しており，埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は，出土土器から 9 世紀前葉と考えられる。

第 204 号 竪穴建物跡出土遺物観察表（第 79 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
181	須恵器	坏	[13.0]	3.9	7.2	長石・石英・雲母・細礫	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	60% PL19 新治窯
182	須恵器	坏	[13.0]	4.1	[7.0]	長石・石英・細礫	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中層	40% 新治窯
183	須恵器	坏	-	(3.3)	[6.8]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土中	20% 新治窯
184	須恵器	蓋	[16.4]	3.5	-	長石・雲母	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	床面	20% 新治窯
185	土師器	甕	-	(9.5)	[10.8]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面磨き 内面ヘラナデ	覆土中層	10%
186	須恵器	甕	-	(17.6)	[15.0]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	外面平行叩き 下端ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土中層	20% 新治窯
187	土師器	甕	-	(2.8)	6.8	長石・石英・赤色粒子・細礫	褐	普通	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部木葉痕	覆土中層	10%

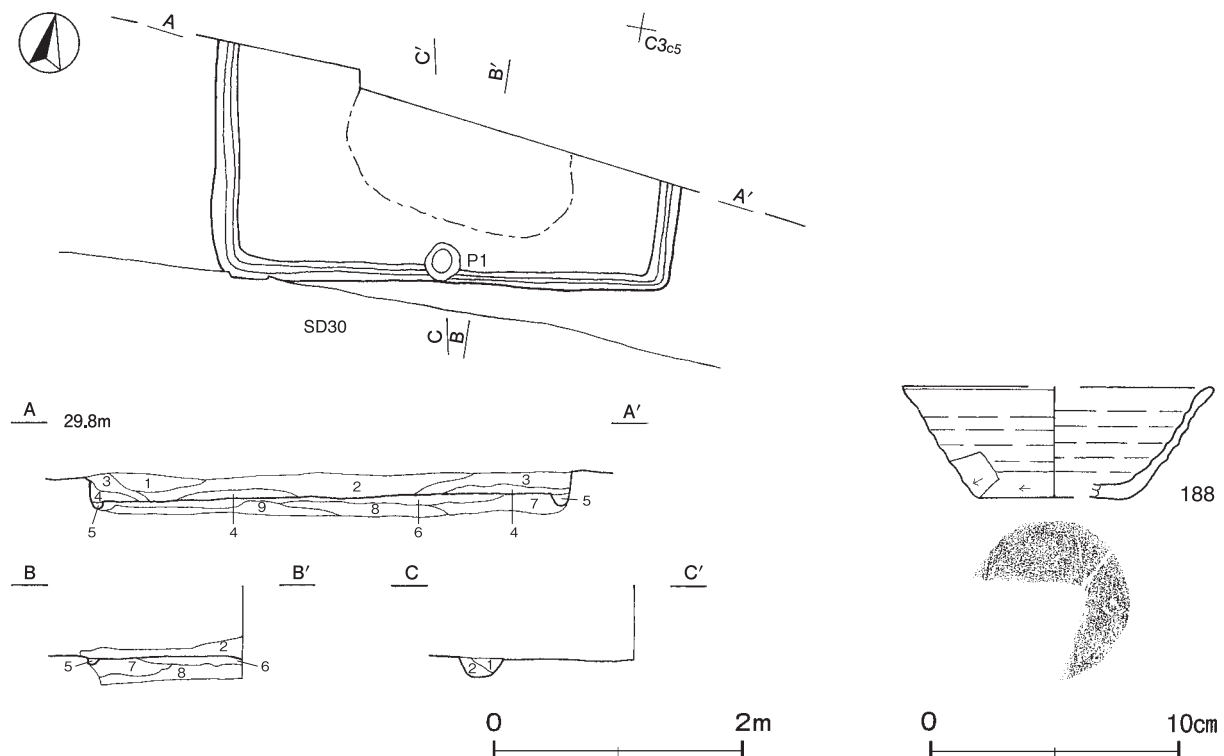
第 205 号 竪穴建物跡（第 80 図）

調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅵ区東部の C 3c4 区，標高 29.5 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 30 号溝，第 3 号道路に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びているため，東西軸は 3.70 m で，南北軸は 1.72 m しか確認できなかった。方形あるいは長方形と推定され，南北軸方向は N - 8° - W である。壁は高さ 16 ~ 22 cm で，ほぼ直立している。
床 ほぼ平坦な貼床で，中央付近が踏み固められている。確認できた範囲では，壁溝が全周している。貼床は，全体を 20 cm ほど掘りくぼめて，第 6 ~ 9 層を埋土して構築されている。



第 80 図 第 205 号 竪穴建物跡・出土遺物実測図

ピット P1は深さ20cmで、位置から出入口施設に伴うピットである。

P1土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

覆土 5層に分層できる。第1～4層はロームブロックがやや多く含まれている黒褐色土が主体で、埋め戻されている。第4層はロームブロックが多く含まれている褐色土で、床面上や壁際に堆積している。第5層は壁溝の堆積土である。第6～9層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量 (壁溝覆土)
- 6 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 (貼床構築土)
- 7 極暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 (貼床構築土)
- 8 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量 (貼床構築土)
- 9 褐色 ローム粒子多量 (貼床構築土)

遺物出土状況 土師器片7点(甕類), 須恵器片10点(坏7, 甕類3)のほか, 剥片1点(石英)が出土している。遺物は散在し, 覆土上層から出土していることから, 埋め戻す過程で投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第205号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
188	須恵器	坏	[12.2]	4.5	[6.2]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方向のヘラ削り	覆土上層	50% PL19 新治窯

第206号竪穴建物跡 (第81図)

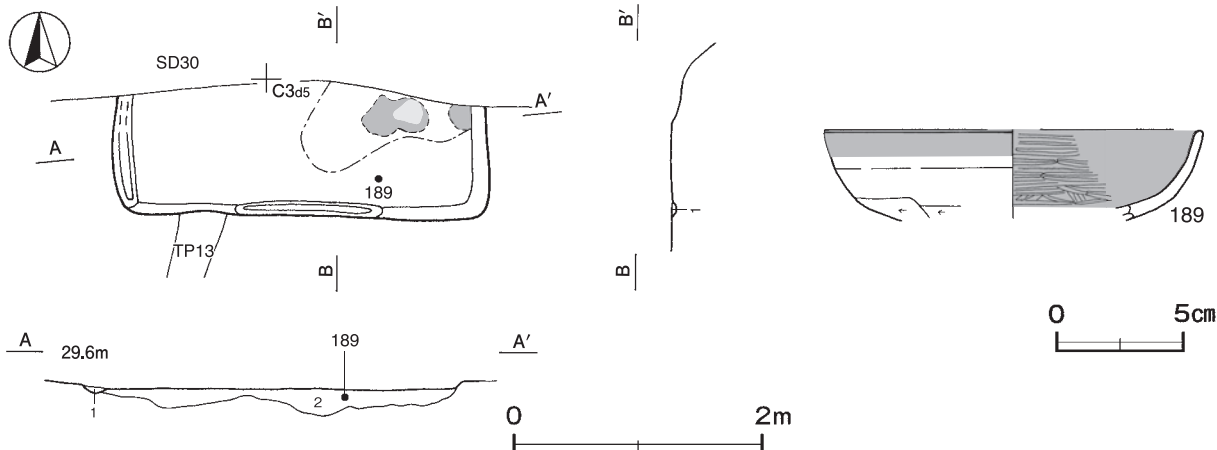
調査年度 平成25年度

位置 調査VI区東部のC3d4区, 標高29.5mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第13号陥し穴を掘り込み, 第30号溝, 第3号道路に掘り込まれている。

規模と形状 北部が第30号溝に掘り込まれているため, 東西軸は2.98mで, 南北軸は1.06mしか確認できなかった。方形あるいは長方形と推定され, 東西軸方向はN-89°-Eである。壁はほとんど確認できず, 高さは5cm程度である。

床 ほぼ平坦な貼床で, 東壁際が踏み固められている。西壁と南壁の一部に壁溝が巡っている。貼床は, コーナー部付近を一段深く掘りくぼめて, ロームブロックを含む第2層を埋土して構築されている。



第81図 第206号竪穴建物跡・出土遺物実測図実測図

竈 確認できなかったが、東壁際に火熱を受けて赤変硬化する部分があり、竈の火床面の可能性がある。ただし、袖部や煙道部の壁外への掘り込みは確認できなかった。

覆土 確認面がほぼ床面であったことから、覆土を捉えることができなかった。第1層は壁溝の堆積土である。第2層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量（壁溝覆土）
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量（貼床構築土）

遺物出土状況 土師器片 14 点（坏類 6、甕類 8）、須恵器片 2 点（坏、甕）が出土している。遺物のほとんどは床面から出土したもので、小破片が全域に散在している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉と考えられる。

第 206 号 竪穴建物跡出土遺物観察表（第 81 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
189	土師器	坏	[14.8]	(3.6)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面磨き	床面	10%

表 8 平安時代 竪穴建物跡一覧表

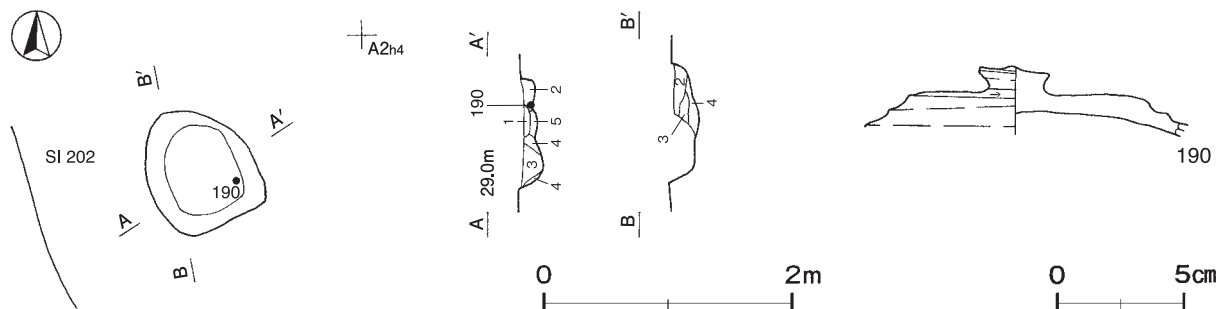
番号	位置	主軸方向	平面形	規模	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)				主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
169	C2c6	N-7°-E	方形	4.00×4.00	2~18	貼床平坦	全周	-	1	2	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀前葉	本跡→SD30・31, SF 3 SK266と新旧不明
185	H4b4	-	[方形・長方形]	[5.00×5.00]	-	傾斜	-	-	-	3	北壁	1	-	土師器	9世紀中葉	
191	E4g5	N-98°-E	[方形]	3.90×(1.71)	10~30	平坦	全周	-	-	2	東壁	-	自然	土師器, 石製品	10世紀中葉	
192	E4f4	N-12°-E	[長方形]	2.88×(2.74)	22~26	平坦	全周	-	-	-	-	-	自然	土師器, 須恵器, 土製品, 石器	10世紀中葉	本跡→SD29
193	E4g3	N-8°-E	[方形]	(3.78)×3.52	24~38	貼床傾斜	全周	-	1	3	北壁東壁	-	自然	土師器, 須恵器, 石器	9世紀中葉	SI194・198→本跡
194	E4f2	N-8°-E	方形	3.60×3.48	20~24	貼床平坦	全周	-	-	1	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石器	9世紀中葉	SI196→本跡→SI193, SD29
195	E4f2	N-81°-w	長方形	3.80×2.45	5~16	平坦	-	-	-	7	北東隅	-	人為	土師器, 須恵器, 石器	9世紀中葉	SI196, SK272→本跡
201	A2f4	N-2°-E	方形	2.94×2.74	24~38	貼床平坦	全周	-	-	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器, 鉄製品	9世紀代	
202	A2g3	N-18°-W	[方形]	3.25×(3.22)	9	貼床平坦	一部	-	-	-	北壁	-	自然	土師器, 須恵器	9世紀前葉	SK263・264→本跡
204	C3c3	N-12°-E	[方形・長方形]	3.50×(2.18)	25~39	貼床平坦	一部	-	-	-	-	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀前葉	SI190→本跡→SF 3
205	C3c4	N-8°-W	[方形・長方形]	3.70×(1.72)	16~22	貼床平坦	全周	-	1	-	-	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀中葉	本跡→SD30, SF 3
206	C3d4	N-89°-E	[方形・長方形]	2.98×(1.06)	5	貼床平坦	一部	-	-	-	東壁	-	-	土師器, 須恵器	9世紀後葉	TP13→本跡→SD30, SF 3

(2) 土坑

第 263 号 土坑（第 82 図）

調査年度 平成 25 年度

位置 調査 V 区南部の A 2h3 区、標高 29 m ほどの台地平坦部に位置している。



第 82 図 第 263 号 土坑・出土遺物実測図

重複関係 第202号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.98 m、短径0.96 mの不整円形で、長径方向はN - 28° - Wである。深さは9 cmで、底面には凹凸がある。壁は外傾している。

覆土 5層に分層できる。焼土ブロックが含まれている層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1	褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	3	赤褐色	焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子・粘土粒子微量
2	褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	4	赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、ローム粒子微量
			5	赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片22点（甕類）、須恵器片6点（坏3、蓋1、甕類2）が出土している。遺物は覆土中層から下層に多く、190は底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。性格は不明である。重複する第202号竪穴建物とほとんど時期差が認められないことから、床下土坑など、建物に付属する施設の可能性も考えられる。

第263号土坑出土遺物観察表（第82図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
190	須恵器	蓋	-	(2.7)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転ヘラ削り	底面	70%新治窯

第264号土坑（第83図）

調査年度 平成25年度

位置 調査V区南部のA2g3区、標高29 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第202号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.90 m、短径0.81 mの楕円形で、長径方向はN - 27° - Wである。深さは57 cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

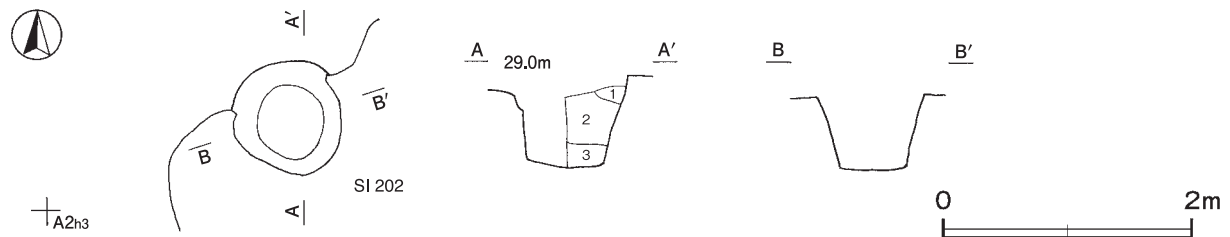
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれている層が堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	3	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック少量			

遺物出土状況 土師器片5点（甕類）、須恵器片1点（甕類）が出土しているが、いずれも小破片のため図化できない。遺物は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器と重複関係から9世紀前葉以前と考えられる。9世紀前葉となる場合、重複する第202号竪穴建物とほとんど時期差が認められないことから、床下土坑などの建物に付属する施設の可能性がある。



第83図 第264号土坑実測図

第270号土坑（第84図）

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅵ区東部のC3d6区、標高29.5mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第31号溝、第3号道路に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外に延びているため、東西径は0.80mで、南北径は0.54mしか確認できなかった。円形と推定され、深さは50cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

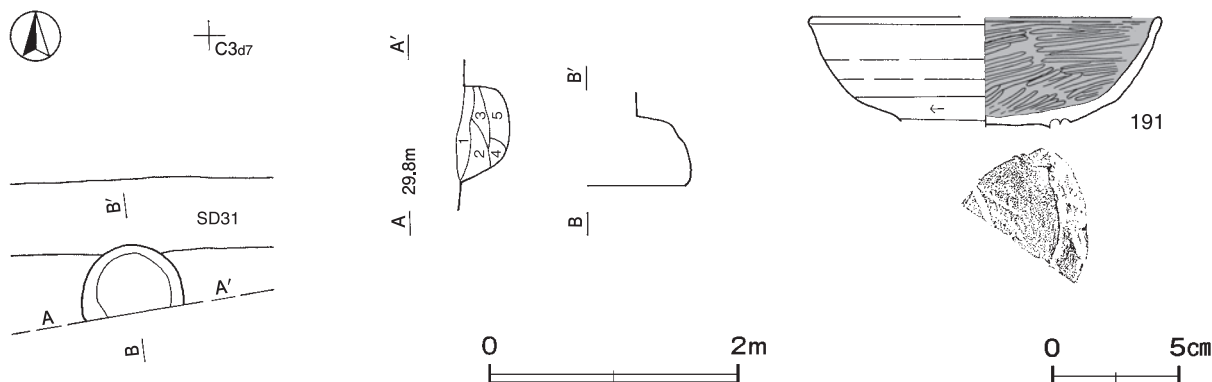
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれている層で埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物出土状況 土師器片3点（坏類1，高台付碗1，甕類1）のほか、陶器片1点（碗）が出土している。191は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第84図 第270号土坑・出土遺物実測図

第270号土坑跡出土遺物観察表（第84図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
191	土師器	高台付碗	[13.8]	(4.5)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面磨き	覆土中	30% 刻書

表9 平安時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
263	A 2h3	N-28°-W	不整円形	0.98×0.96	9	凹凸	外傾	人為	土師器、須恵器	本跡→SI202
264	A 2g3	N-27°-W	楕円形	0.90×0.81	57	平坦	ほぼ直立	人為	土師器、須恵器	本跡→SI202
270	C 3d6	-	[円形]	0.80×(0.54)	50	平坦	緩斜	人為	土師器	本跡→SD31, SF 3

(3) 溝跡

第36号溝（第85図）

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅴ区北部の-Z1i8～-Z2i5区、標高29mほどの台地上に位置している。

規模と形状 東部及び西部が調査区域外に延びているため、長さは29.2mしか確認できなかった。-Z2i5

区から西南西方向（N - 105° - W）にほぼ直線的に延び、上幅 120 ~ 205cm, 下幅 45 ~ 95cm, 深さは 42 ~ 58cmである。底面はU字状で、東から西に向かって緩やかに傾斜している。壁は外傾している。

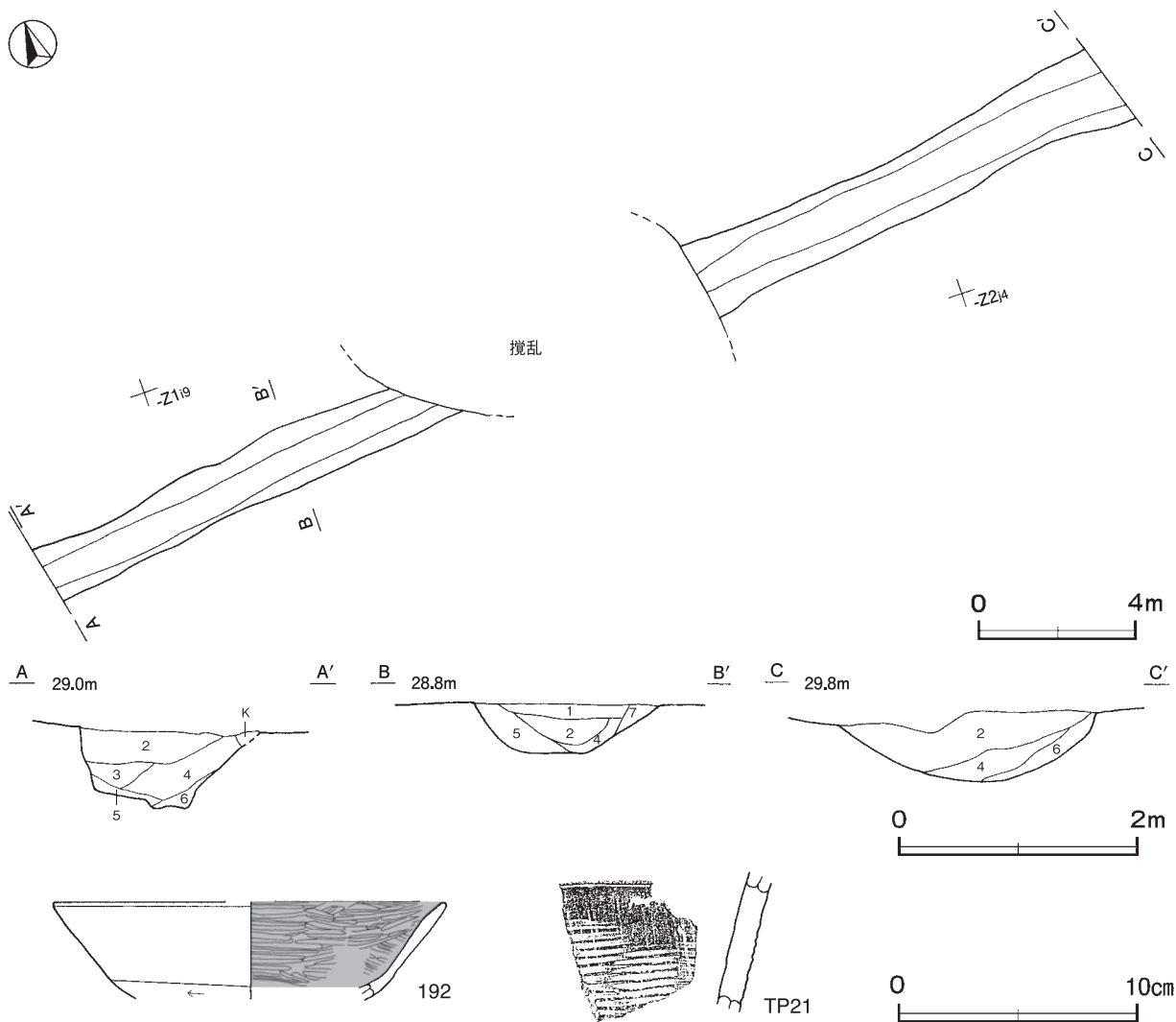
覆土 7層に分層できる。ローム粒子が含まれている暗褐色土が主体で、レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量, 炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 3点 (坏類 2, 甕類 1), 須恵器片 94点 (坏 3, 甕類 91) のほか、弥生土器片 3点 (広口壺) が出土している。遺物は覆土中から出土しており、埋没時に流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 9世紀後葉と考えられる。集落範囲の最北地点に位置していることから、集落域を区画する溝の可能性が考えられる。



第 85 図 第 36 号溝跡・出土遺物実測図

第 36 号溝跡出土遺物観察表 (第 85 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
192	土師器	坏	[16.4]	(4.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面磨き	覆土中	20%
TP21	須恵器	甕	-	-	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	外面平行叩き 内面ヘラナデ	覆土中	新治窯

6 鎌倉時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、掘立柱建物跡1棟と土坑1基、ピット群1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第86・87図)

調査年度 平成24年度

位置 調査Ⅷ区中央部のH4d5区、標高21mほどの台地斜面部に位置している。

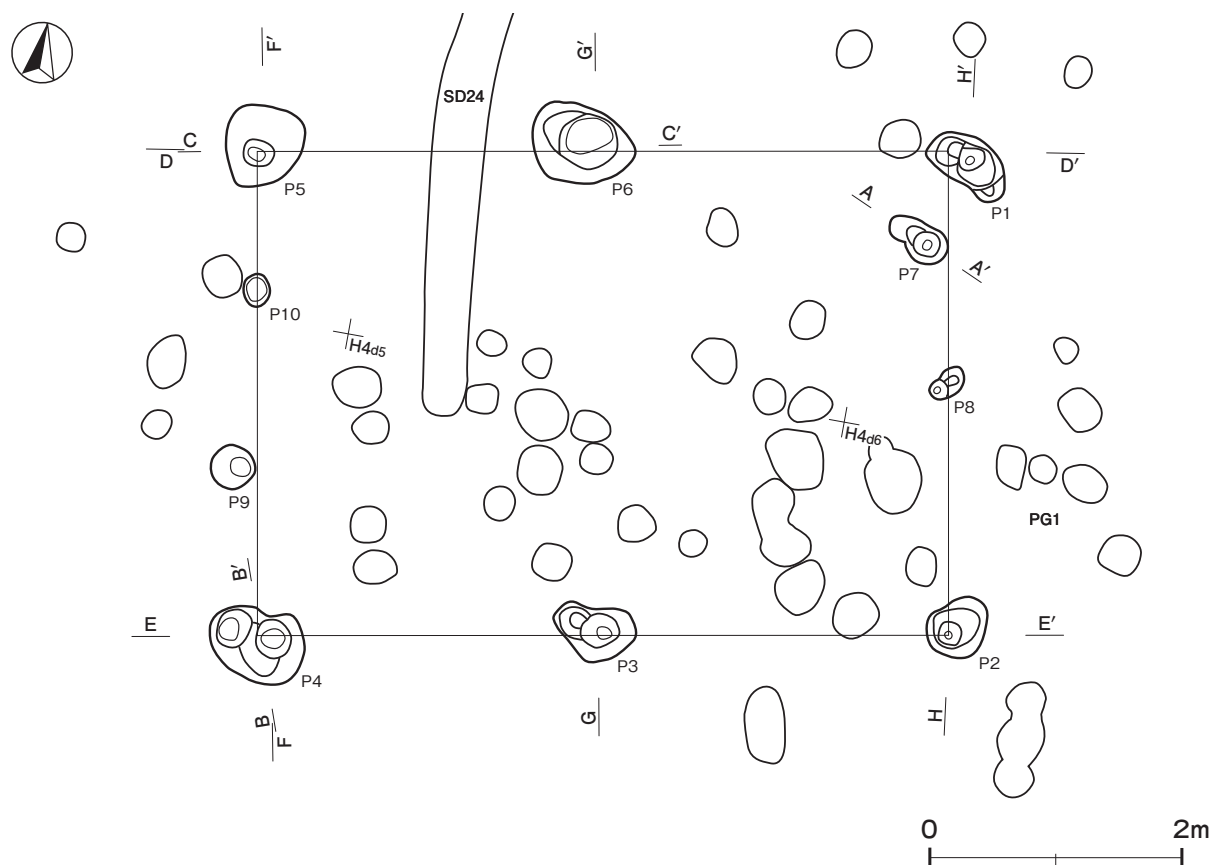
重複関係 第24号溝跡、第1号ピット群と重複しているが、新旧関係は確認できなかった。

規模と形状 桁行2間、梁行1間の側柱建物で、桁行方向がN-81°-Eの東西棟である。規模は桁行5.60m、梁行3.80mで、面積は21.28㎡である。柱間寸法は桁行が2.7m(9.0尺)、梁行が3.8m(12.6尺)で柱筋もほぼ揃っている。東と西の妻にはP7~P10の小ピットが存在するが、ピット間是不整で、柱筋も揃っていないことから、伴うものか不明である。

柱穴 10か所。平面形は円形または楕円形で、長径26~94cm、短径20~60cmである。深さは10~62cmで、掘方の断面はU字状である。P9は深さ10cmである。P1・P3・P4は、ピットが重複していることから、柱の立て替えの可能性はある。第1~3層は柱抜き取り後の堆積層、第4~6層は埋土である。

柱穴土層解説 (P4~P7共通)

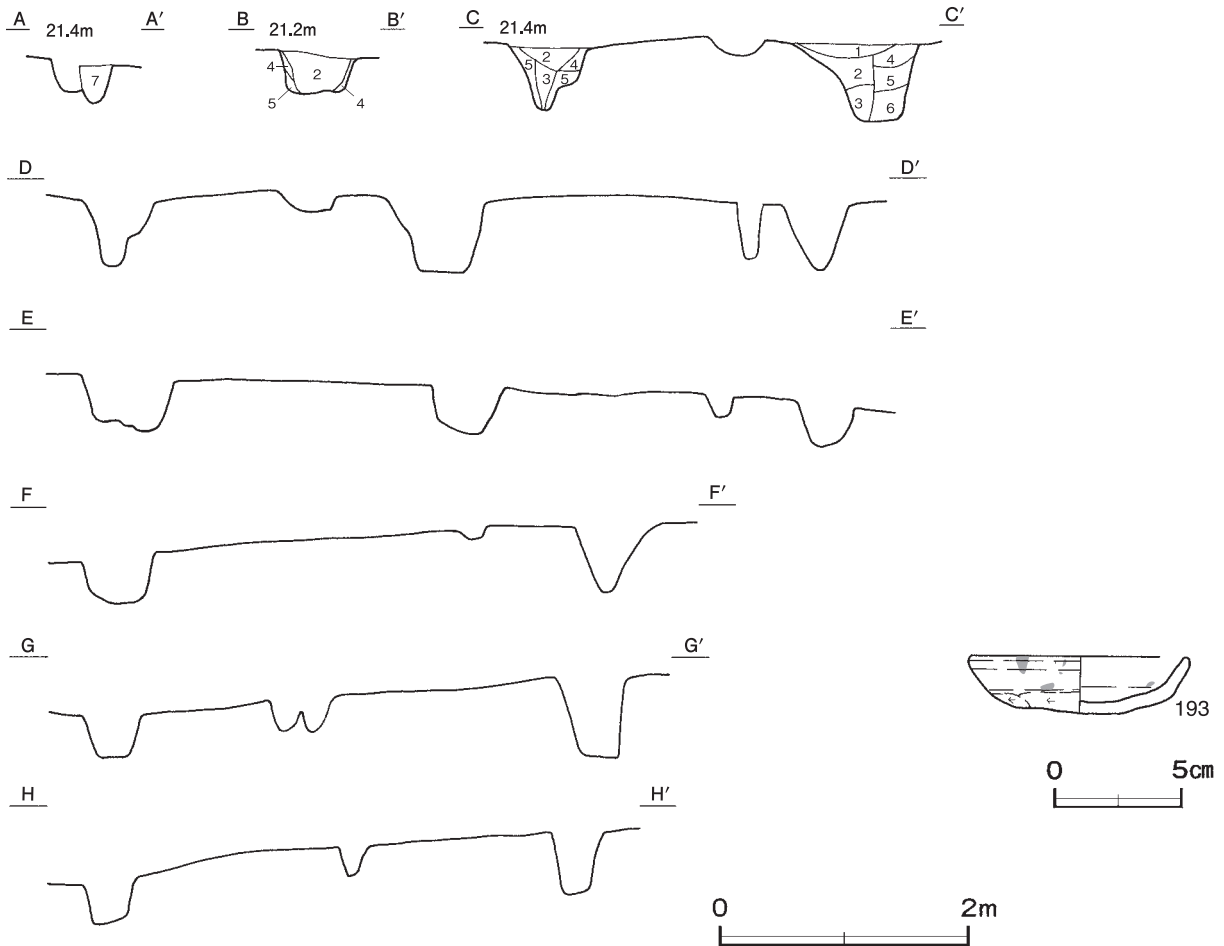
- | | |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 黒褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子微量 | 6 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| | 7 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量 |



第86図 第1号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片 8 点（小皿）のほか、弥生土器片 2 点（広口壺）が出土している。193 は P 1 の覆土中から出土している。また P 2・P 3・P 5 の覆土中からも、同時期の土師質土器小皿片が出土している。

所見 時期は、出土土器から 13 世紀後葉から 14 世紀前葉と考えられる。重複している第 1 号ピット群から出土している遺物もほぼ同時期であることから、何らかの関係があったものと考えられる。性格は、倉庫のような簡易的な建物と考えられる。



第 87 図 第 1 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第 1 号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第 87 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
193	土師質土器	小皿	8.6	2.3	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	非ロクロ成形 口縁部外・内面横ナデ 体部外 面指頭ナデ 内面横ナデ	P 1 覆土中	80% PL20

(2) 土坑

第 251 号土坑（第 88 図）

調査年度 平成 24 年度

位置 調査Ⅷ区南部の H 4 f1 区、標高 21 m ほどの台地斜面部に位置している。

規模と形状 長径 1.05 m、短径 1.02 m の円形である。深さ 12cm の平坦な底面で、南に向かって傾斜している。壁は緩やかに立ち上がっている。

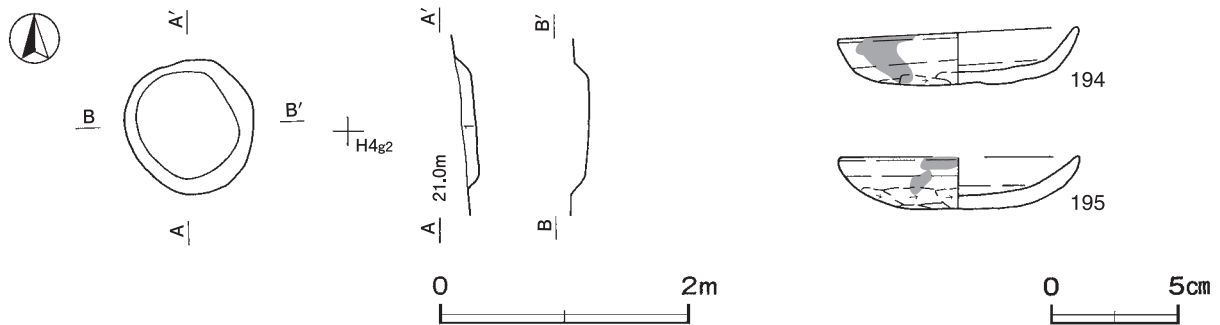
覆土 単一層。粘土ブロックやローム粒子が微量に含まれている黒色土の自然堆積である。

土層解説

1 黒色 粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 出土遺物はないが、本跡の南 30cm から土師質土器 2 点（小皿）が出土している。

所見 時期は、出土した遺物がないため明確ではないが、本跡の周辺に置かれるように出土した土器が、何らかの関連があるものと推測されることから、13 世紀後葉から 14 世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第 88 図 第 251 号土坑・出土遺物実測図

第 251 号土坑出土遺物観察表（第 88 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
194	土師質土器	小皿	9.4	2.4	-	長石・石英	橙	普通	非ロクロ成形 口縁部外・内面横ナデ 面指頭ナデ 内面横ナデ	体部外	周辺 90% PL20
195	土師質土器	小皿 [9.4]	2.1	-	長石・石英	にぶい橙	普通	非ロクロ成形 口縁部外・内面横ナデ 面指頭ナデ 内面横ナデ	体部外	周辺 50% PL20	

(3) ピット群

第 1 号ピット群（第 89 図）

調査年度 平成 24 年度

位置 調査Ⅷ区中央部の H 4 b6 ～ H 4 d4 区、標高 21 m ほどの台地斜面部の東西 9.9 m、南北 8.0 m の範囲から、ピット 52 か所を確認した。

重複関係 第 1 号掘立柱建物跡、第 24 号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は長径 19 ～ 61cm、短径 19 ～ 43cm の円形または楕円形で、深さは 9 ～ 105cm である。ピットの分布状況から、建物跡は想定できない。

覆土 P 5 ・ P 21 ～ P 23 ・ P 35 はいずれも単一層で、黒褐色土や暗褐色土の自然堆積である。

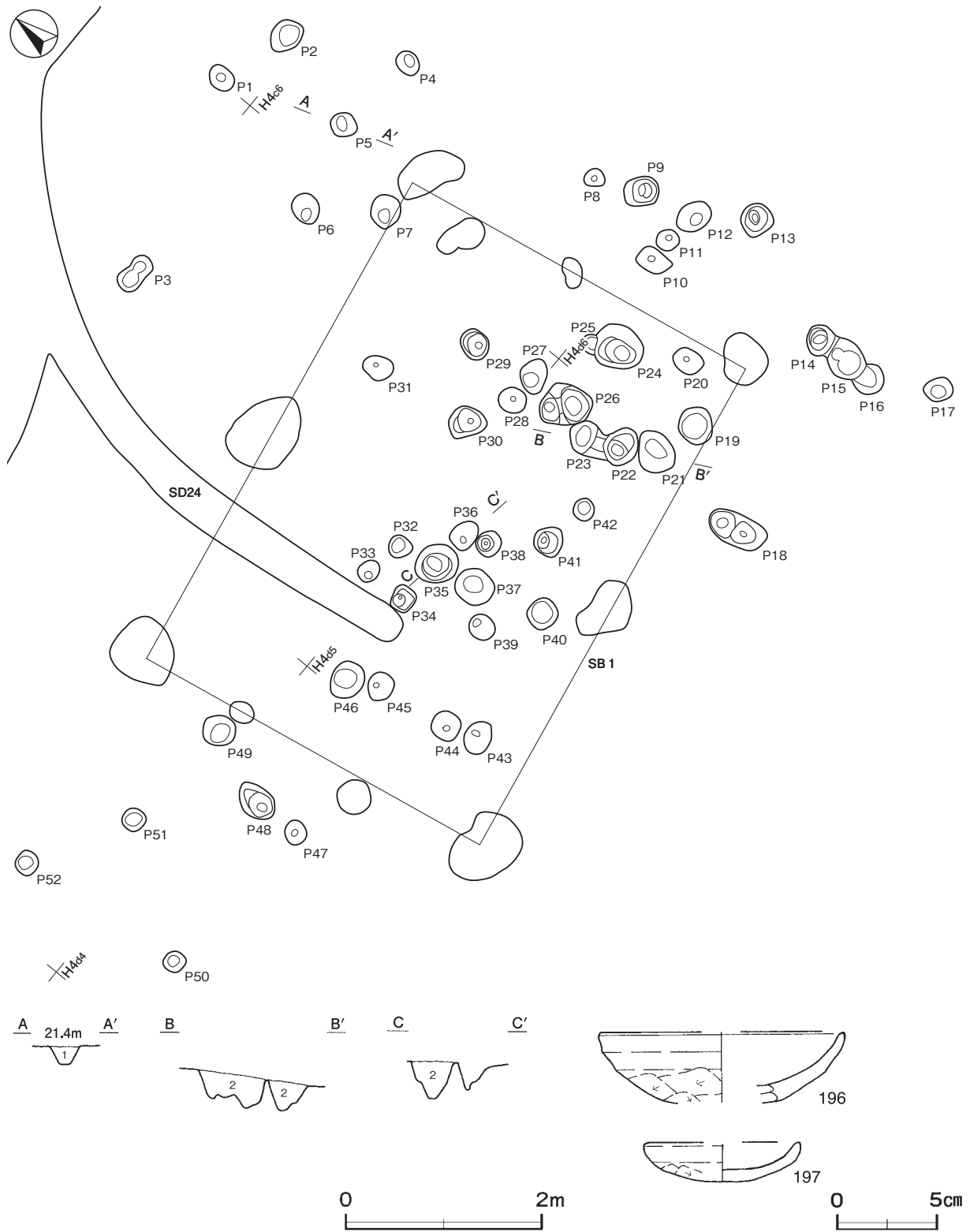
ピット土層解説（P 5 ・ P 21 ～ P 23 ・ P 35 共通）

1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量

2 極暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片 11 点（小皿）のほか、陶器片 2 点（甕）が出土している。196 は P 6 から、197 は P 3 から出土している。このほか、P 4 ・ P 9 ・ P 17 ・ P 23 ・ P 31 ・ P 33 ・ P 40 の覆土中からも、同時期の土師質土器小皿片が出土している。

所見 時期は、出土土器から 13 世紀後葉から 14 世紀前葉と考えられる。性格は不明である。P 10 ～ P 12 ・ P 27 ・ P 28 ・ P 32 ・ P 33 ・ P 49、P 14 ～ 16 ・ P 18 は東西方向に並んでおり、また P 10 ～ 12 ・ P 14 ～ 16、P 18 ・ P 22 ・ P 23 ・ P 27 ・ P 28、P 43 ～ 46 は南北方向に並んでいることから、何らかの構築物があった可能性がある。



第 89 図 第 1 号ピット群・出土遺物実測図

第 1 号ピット群出土遺物観察表 (第 89 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
196	土師質土器	小皿	[12.4]	(3.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	非ロクロ成形 口縁部外・内面横ナデ 面指頭ナデ 内面横ナデ	P 6 覆土中	40%
197	土師質土器	小皿	[7.8]	2.0	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	非ロクロ成形 口縁部外・内面横ナデ 面指頭ナデ 内面横ナデ	P 3 覆土中	30%

第1号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	H 4 b6	楕円形	30	22	14	19	H 4 d6	楕円形	38	32	73	37	H 4 d5	楕円形	39	34	94
2	H 4 b6	楕円形	38	28	16	20	H 4 d6	楕円形	31	23	42	38	H 4 d5	円形	25	24	64
3	H 4 c5	楕円形	42	19	9	21	H 4 d5	不整楕円形	46	37	31	39	H 4 d5	楕円形	27	23	51
4	H 4 c6	楕円形	26	22	43	22	H 4 d5	楕円形	40	33	33	40	H 4 d5	円形	33	30	70
5	H 4 c6	楕円形	29	24	19	23	H 4 d5	[不整円形]	(35)	35	30	41	H 4 d5	円形	32	31	68
6	H 4 c5	楕円形	33	26	31	24	H 4 d6	楕円形	51	43	49	42	H 4 d5	円形	23	22	58
7	H 4 c6	楕円形	35	31	63	25	H 4 d6	[楕円形]	19	(14)	17	43	H 4 d5	楕円形	34	26	48
8	H 4 c6	楕円形	22	19	50	26	H 4 d5	不整楕円形	53	41	41	44	H 4 d5	円形	31	30	40
9	H 4 c6	楕円形	35	29	60	27	H 4 c5	楕円形	36	26	25	45	H 4 d5	楕円形	29	25	40
10	H 4 d6	不整楕円形	37	23	34	28	H 4 c5	楕円形	28	25	21	46	H 4 d5	楕円形	39	32	26
11	H 4 d6	円形	23	21	27	29	H 4 c5	楕円形	33	27	30	47	H 4 d4	円形	25	23	40
12	H 4 d6	楕円形	36	27	60	30	H 4 c5	不整楕円形	38	30	27	48	H 4 d4	楕円形	43	30	43
13	H 4 d6	円形	31	31	56	31	H 4 c5	楕円形	31	25	14	49	H 4 c4	楕円形	35	31	11
14	H 4 d6	楕円形	31	26	105	32	H 4 c5	円形	24	22	42	50	H 4 d4	円形	23	21	25
15	H 4 d6	[楕円形]	(43)	35	95	33	H 4 c5	楕円形	24	19	51	51	H 4 c4	円形	25	24	15
16	H 4 d6	[楕円形]	33	(23)	84	34	H 4 d5	不整円形	29	27	57	52	H 4 c4	円形	25	23	27
17	H 4 d6	楕円形	30	23	28	35	H 4 d5	楕円形	44	38	40						
18	H 4 d5	楕円形	61	32	86	36	H 4 d5	楕円形	31	24	30						

7 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、炭窯跡3基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

炭窯跡

第1号炭窯跡（第90・91図）

調査年度 平成24年度

位置 調査Ⅷ区中央部のH3c0区、標高23mほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第23・28号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南部が第23号溝に掘り込まれているため、短軸は1.63mで、長軸は3.38mしか確認できなかった。主軸方向はN-23°-Wである。

炭化室 長さ2.0m、幅1.54mである。平面形は楕円形で、天井部は遺存していない。壁は高さ60～100cmで、直立している。ローム層を利用した底面は、北から南にかけて緩やかに傾斜し、火熱を受け赤変硬化している。ローム層の壁体は、火熱を受け、厚さ30cmほどが赤変硬化及び青灰色に還元変化している。

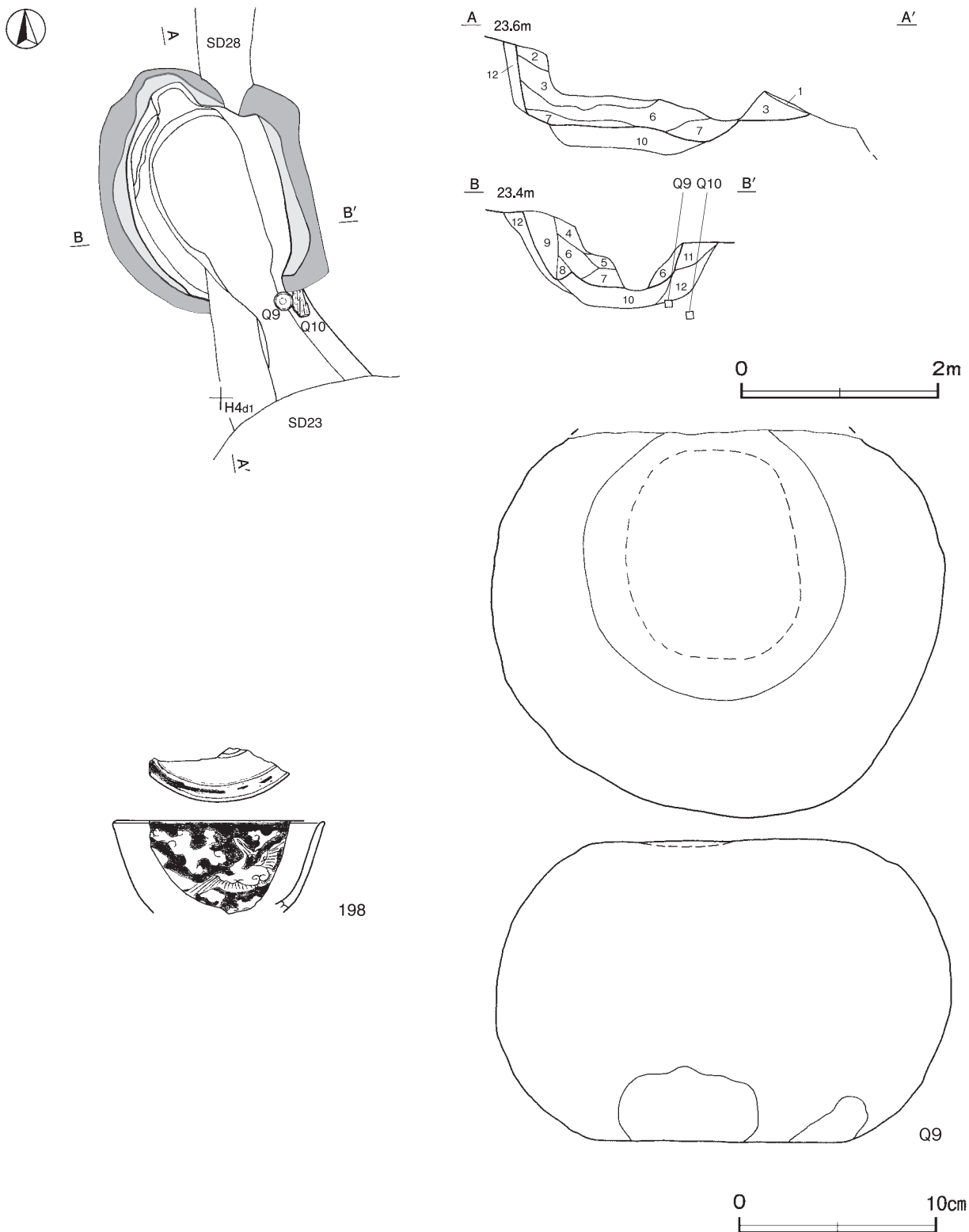
点火室 南部及び西部が第23・28号溝に掘り込まれているため、長さは1.0mで、幅は0.9mしか確認できなかった。平面形は溝状で、壁は高さ16～33cmで外傾している。底面は炭化室とほぼ同じ高さで、火熱により赤変硬化している。

煙道部 奥壁の中央部に位置している。長さ0.36m、幅0.4mで、壁は高さ70～78cmで炭化室からはほぼ直立している。煙道部の壁は火熱を受け、厚さ10～15cmほどが赤変硬化及び青灰色に還元変化している。

覆土 9層に分層できる。第7層は木炭層である。焼土ブロックや炭化物が含まれている層が煙道部から流れ込むように堆積している。覆土中には多量の凝灰岩切石片や礫が含まれていることから、破壊された後、自然に埋没したものと考えられる。10層は掘方への埋土、第11・12層は地山のローム層が火熱を受けて赤変硬化及び青灰色に還元変化したものである。

土層解説

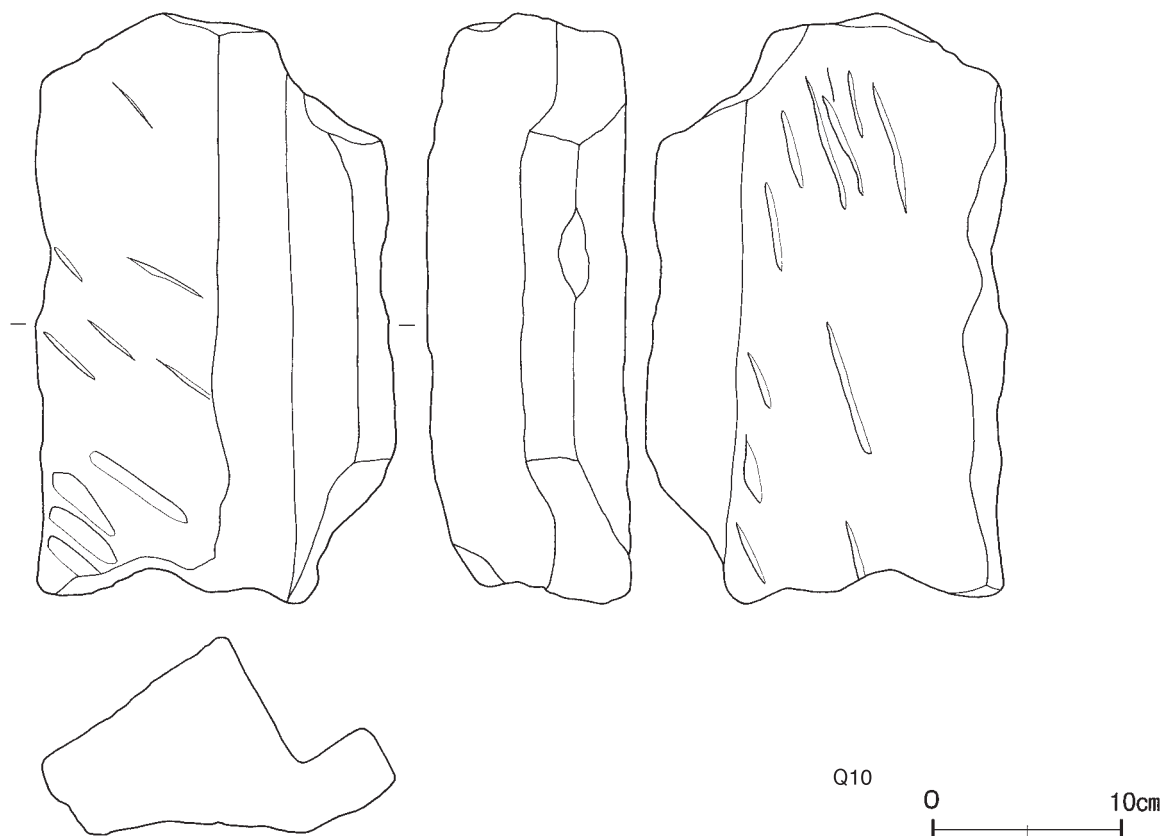
- | | | | |
|--------|---------------------------|---------|-------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 7 黒色 | 炭化粒子多量, 焼土粒子微量 (木炭層) |
| 2 褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量 | 9 暗赤褐色 | 粘土粒子中量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 10 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量 | 11 暗赤褐色 | ローム土 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 12 暗赤褐色 | ローム土 |



第90図 第1号炭窯跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 陶器片4点(碗1, 皿1, 甕2), 磁器片1点(碗), 土師質土器片4点(小皿1, 鍋3), 瓦片5点, 石製品1点(五輪塔), 凝灰岩切石片1,317点(76.0kg), 礫71点(21.88kg)のほか, 弥生土器片26点(広口壺), 土師器片16点(甕類), 須恵器片5点(甕類)が出土している。Q9・Q10は点火室の壁際から出土している。また構築材の一部と考えられる凝灰岩切石片や礫が, 炭化室の覆土中や点火室, 掘方内から多量に出土している。

所見 構築材と考えられる凝灰岩切石片や礫が出土していることから石窯構造と推測されるが, 出土した遺物は原位置を留めているものではなく, 窯の構造等を復元することはできなかった。時期は, 出土土器から19世紀前半以降と考えられる。



第91図 第1号炭窯跡出土遺物実測図

第1号炭窯跡出土遺物観察表(第90・91図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
198	磁器	碗	[10.6]	(4.6)	-	緻密 灰白	染付 外面雲形文 鳥文 内面山水文 二重圈文	透明釉	肥前	覆土上層	40% PL21

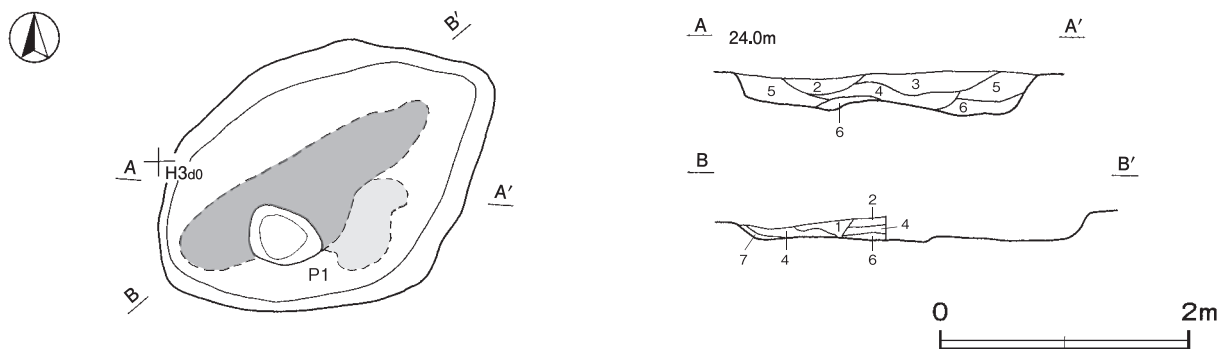
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	五輪塔	(19.5)	22.8	15.3	(10.700)	閃緑岩	水輪 窯の構築材として利用	点火室	PL21
Q10	構築材	31.0	18.5	10.4	4.250	凝灰岩	表裏面に鑿痕 一部火熱による焼成痕	点火室	PL21 二次焼成

第2号炭窯跡(第92図)

調査年度 平成24年度

位置 調査Ⅷ区中央部のH3d0区, 標高24mほどの台地斜面部に位置している。

規模と形状 削平のため, 確認できたのは炭化室のみである。長径3.02m, 短径2.12mの楕円形で, 長径方



第 92 図 第 2 号炭窯跡実測図

向はN-58°-Eである。天井部は遺存していない。壁は高さ16～33cmで、外傾している。底面は地山を利用し、やや凹凸があり、火熱を受けて赤変硬化している。中央付近は木炭層のため、煤けている。中央やや南寄りに、径50cmのピットが確認でき、除湿に関わる施設と想定される。

覆土 7層に分層できる。焼土ブロックや炭化物が含まれている層がレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土ブロック中量、炭化物・焼土粒子微量 | 6 にお赤褐色 | 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量 | 7 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量 | | |
| 4 黒色 | 炭化粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量 | | |
| 5 にお赤褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量 | | |

遺物出土状況 凝灰岩切石片 116 点 (7.65kg) が、覆土中から出土している。

所見 時期の確定できる遺物がないため不明瞭であるが、第 1 号炭窯跡と同様の凝灰岩切石片が出土していることから、石窯構造で、第 1 号炭窯跡とほぼ同時期の 19 世紀前半以降と考えられる。

第 3 号炭窯跡 (第 93 図)

調査年度 平成 24 年度

位置 調査Ⅷ区中央部の H 4 c1 区、標高 22 m ほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第 23 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 第 23 号溝に掘り込まれているため、炭化室の一部である東西径 1.92 m、南北径 0.76 m しか確認できなかった。楕円形と推定され、南北径方向は N-18°-E である。天井部は遺存していない。壁は高さ 5～20cm で、緩やかに立ち上がっている。底面は地山を利用し、南東方向に傾斜している。底面や壁の赤変硬化は確認できなかった。

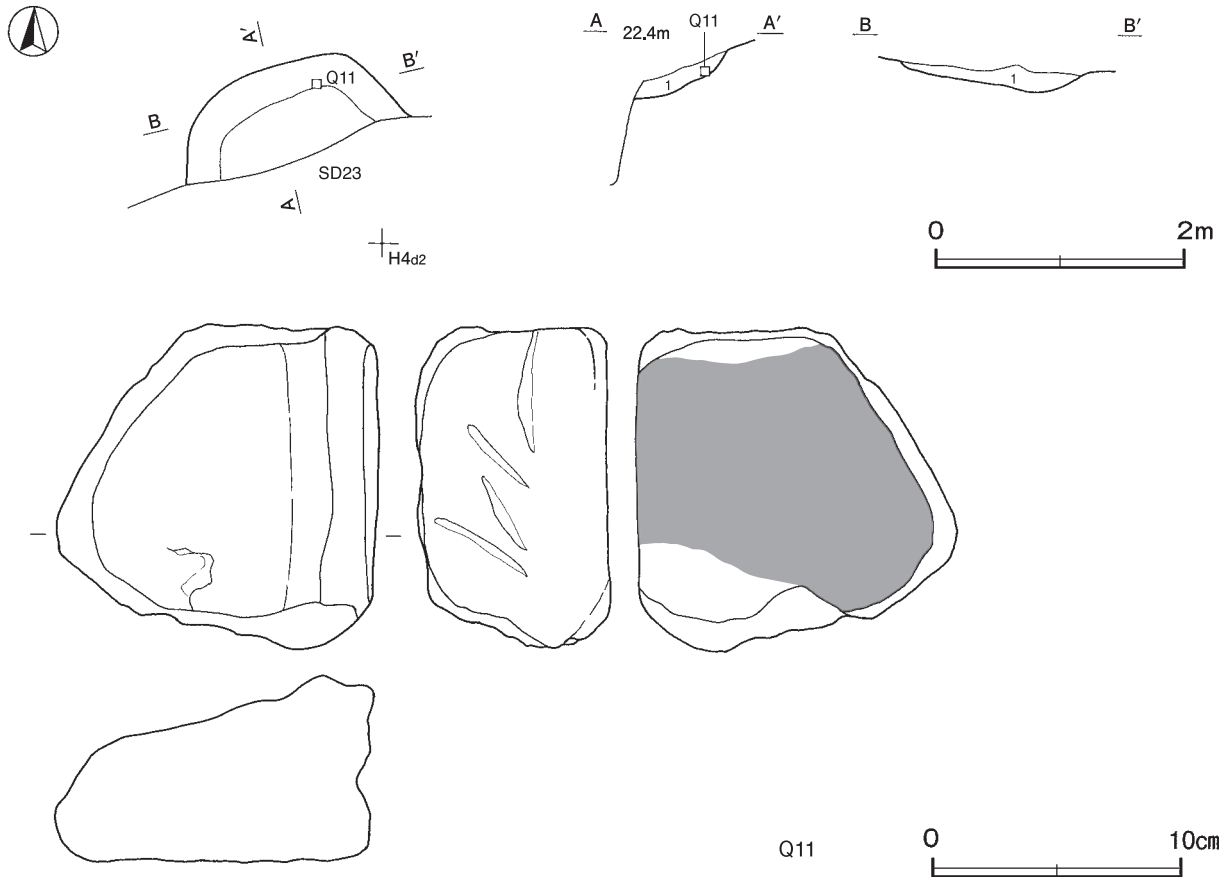
覆土 単一層。炭化粒子が多く含まれている黒色土の自然堆積である。

土層解説

- | | |
|------|-----------------------|
| 1 黒色 | 炭化粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子少量 |
|------|-----------------------|

遺物出土状況 磁器片 1 点 (碗)、凝灰岩切石片 158 点 (3.92kg)、礫 31 点 (13.61kg) が、覆土中から出土している。

所見 窯壁や木炭層が確認できなかったため、明確に炭窯跡と言いつい難い部分もあるが、確認した位置や、覆土中から構築材と想定される凝灰岩切石片や礫が出土していることなどから、石窯構造の炭窯跡とした。時期は、出土遺物がほとんどないため不明瞭であるが、第 1 号炭窯跡と同様の凝灰岩切石片が出土していることから、ほぼ同時期の 19 世紀前半以降と考えられる。



第 93 図 第 3 号炭窯跡・出土遺物実測図

第 3 号炭窯跡出土遺物観察表（第 93 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 11	構築材	12.9	12.8	7.9	902.0	凝灰岩	側面に鑿痕	炭化室	二次焼成

表 10 江戸時代炭窯跡一覧表

番号	位置	軸方向	平面形	全長 (m)	炭化室			点火室			煙道部			覆土	主な出土遺物	備考		
					奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)	底面	奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)	底面	奥行 (m)				幅 (m)	深さ (cm)
1	H 3 c0	N - 23° - W	[鍵穴状]	(3.38)	2.0	1.54	60~100	傾斜	(1.0)	(0.9)	16~33	平坦	0.36	0.4	70~78	自然	陶器、磁器、土師質土器、瓦、石製品、構築材、礫	本跡→SD23・28
2	H 3 d0	N - 58° - E	楕円形	3.02	3.02	2.12	16~33	凹凸	-	-	-	-	-	-	自然	構築材		
3	H 4 c1	N - 18° - E	[楕円形]	(0.76)	(0.76)	(1.92)	5~20	傾斜	-	-	-	-	-	-	自然	磁器、構築材、礫	本跡→SD23	

8 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期や性格が明確でない堅穴建物跡 1 棟、炭窯跡 2 基、土坑 23 基、溝跡 17 条、道路跡 3 条、段切遺構 1 か所、ピット群 2 か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。なお、平成 9 年度の調査において、VI 区東側で第 137 号堅穴建物跡、VII 区中央部で第 83 号堅穴建物跡を確認したが、今回の調査では確認できなかった。

(1) 竪穴建物跡

第 197 号竪穴建物跡 (第 94 図)

調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅵ区東部の E 3 e5 区, 標高 29 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 86・189 号竪穴建物, 第 3 号ピット群に掘り込まれている。

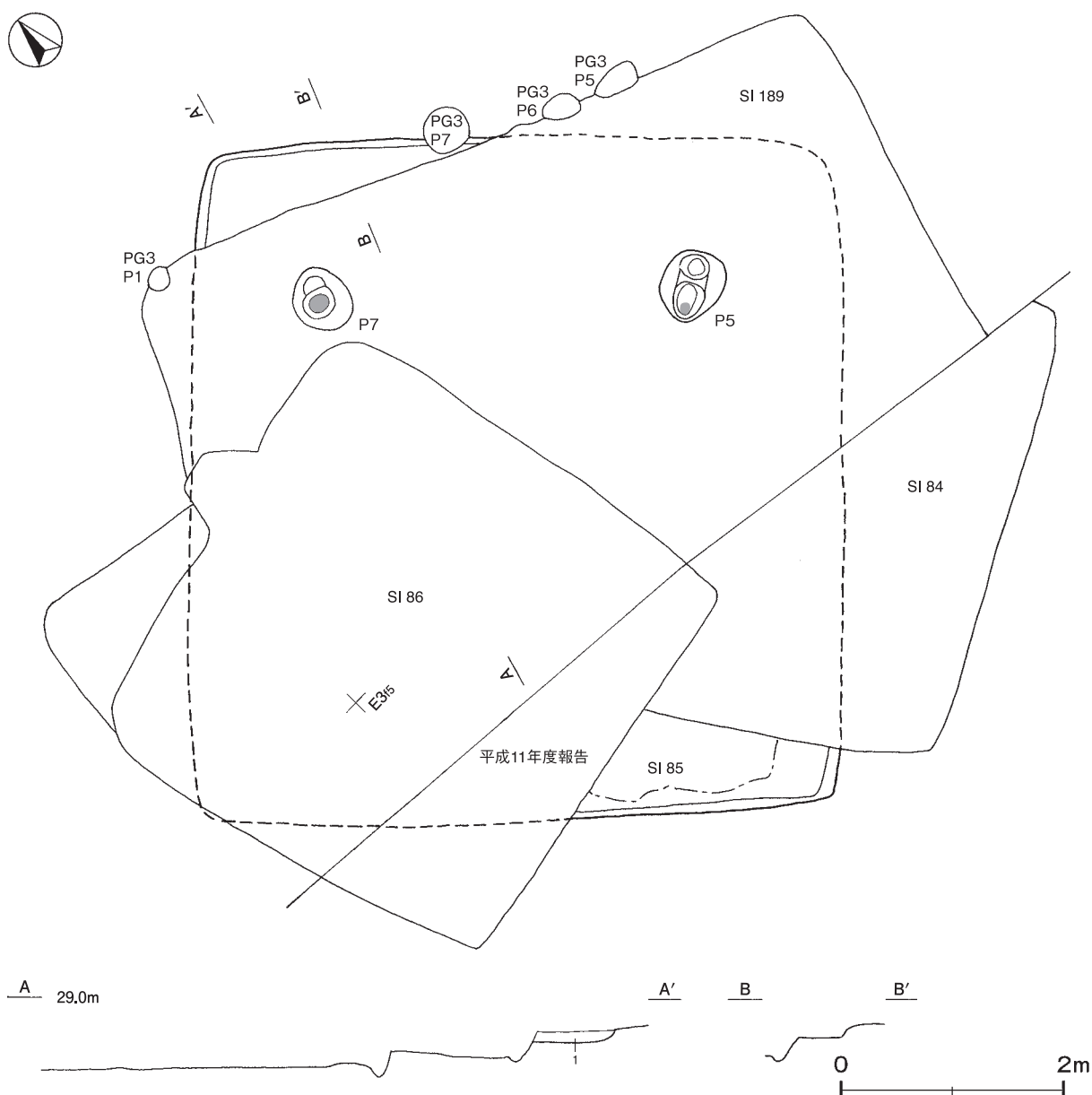
規模と形状 大部分が第 189 号竪穴建物に掘り込まれているため, 北コーナー部にあたる東西軸 2.18 m, 南北軸 0.88 m しか確認できなかった。方形あるいは長方形と推定され, 東西軸方向は $N - 43^\circ - W$ である。壁は高さ 10cm で, 外傾している。

床 ほぼ平坦で, 硬化面等は確認できなかった。

覆土 単一層。粘土ブロックや焼土粒子がやや多く含まれている暗褐色土の自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量



第 94 図 第 197 号竪穴建物跡実測図

所見 北西コーナー部のみの確認で、掘り込みが浅いため、竪穴建物跡とするには躊躇する部分もあるが、前回調査した第85号竪穴建物跡と軸方向を同じくしており、同一の遺構の可能性はある。その場合、東西5.7m、南北6.1mの方形で、床面の高さが第85号竪穴建物跡では20cmほど下がっていることから、床面が南に傾斜している状況となる。第189号竪穴建物跡に帰属させたP5・P7を本跡の主柱穴とした場合の床面からの深さは、P5が83cm、P7が75cmとなる。出土遺物がないため、時期を明確にできなかったが、第85号竪穴建物跡が第84号竪穴建物跡に掘り込まれていることなどの遺構の重複関係から、5世紀後葉以前と考えられる。

(2) 炭窯跡

第4号炭窯跡 (第95図)

調査年度 平成25年度

位置 調査V区北部のA1a8区、標高29mほどの台地平坦部に位置している。

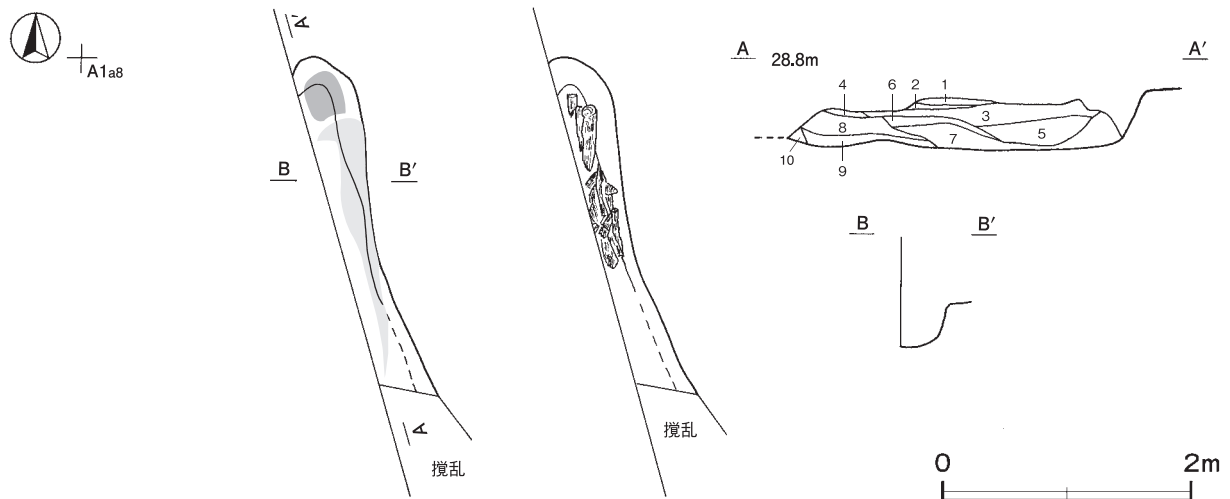
規模と形状 西部が調査区域外に延びており、また南部が攪乱を受けているため、炭化室のみである長径2.82m、短径0.64mしか確認できなかった。楕円形と推定され、長径方向はN-19°-Wである。天井部は遺存していない。壁は高さ44cmで、外傾している。底面は地山を利用し、やや凹凸があり、火熱を受けて赤変硬化している。炭化室の底面からは多量の木炭が出土している。

覆土 10層に分層できる。第4・6・8層は焼土ブロックが含まれている層、第7層は炭化材が含まれている層で、互層に水平に堆積していることから、天井部が崩落したものと考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量, 炭化物微量 | 6 赤褐色 焼土ブロック少量, 炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 焼土ブロック・炭化物・ローム粒子少量 | 7 黒褐色 炭化材中量, 焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 褐色 ローム粒子中量, 炭化物・焼土粒子微量 | 8 橙色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 4 赤褐色 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 5 褐色 ローム粒子中量, 炭化物少量, 焼土ブロック微量 | 10 暗褐色 焼土粒子少量, 炭化物・ローム粒子微量 |

所見 炭化材が残されていたことから、製炭中あるいはその直後に、天井部が崩落したものと考えられる。凝灰岩切石片や礫が出土していないことから、土窯の可能性はある。時期は、伴出する遺物がないため不明である。



第95図 第4号炭窯跡実測図

第5号炭窯跡 (第96図)

調査年度 平成25年度

位置 調査V区中央部のA2d1区、標高29mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 炭化室のみを確認した。長軸4.60m、短軸1.54mの隅丸長方形で、主軸方向はN-0°である。

天井部は遺存していない。壁は高さ10～14cmで、緩斜している。底面は地山を利用し、ほぼ平坦で、火熱を受けて赤変硬化している。底面には、多量の木炭片が残存していた。南西コーナー部が35～40cmほど張り出しており、煙道部の可能性がある。

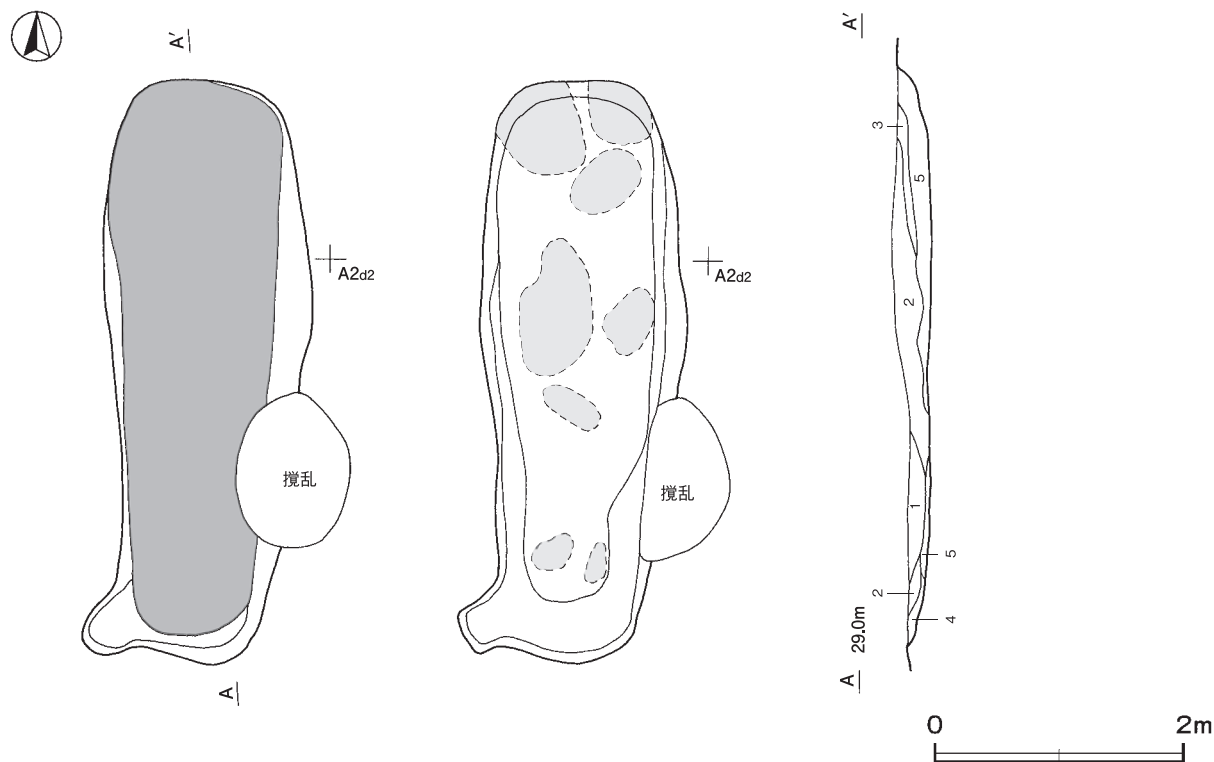
覆土 5層に分層できる。第5層は炭化材片が含まれている層である。第1～4層はロームブロックや焼土ブロックが含まれている層で、レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|----------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量, 焼土ブロック・炭化物微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック・炭化物少量, 焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 | 炭化材中量, ロームブロック少量, 焼土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 凝灰岩切石片1点(7.95g)のほか、土師器片1点(甕)が覆土中から出土しており、いずれも埋没過程で流れ込んだものと考えられる。

所見 凝灰岩切石片や礫がほとんど出土していないことから、土窯の可能性はある。木炭層が残されていたことから、製炭して炭を取り出した後に放置され、自然に埋没したものと考えられる。時期は、伴出する遺物がないため不明である。



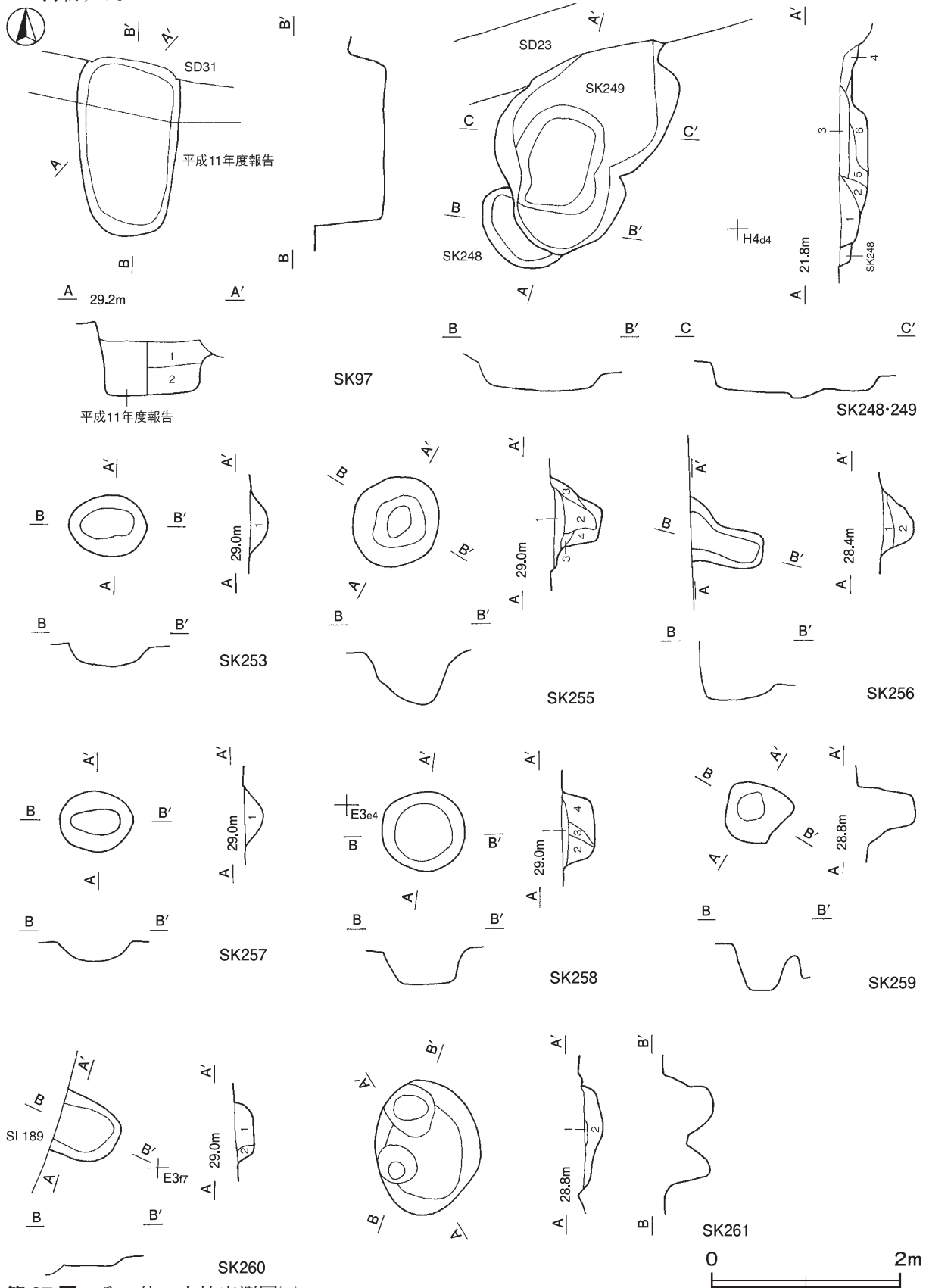
第96図 第5号炭窯跡実測図

表11 その他の炭窯跡一覧表

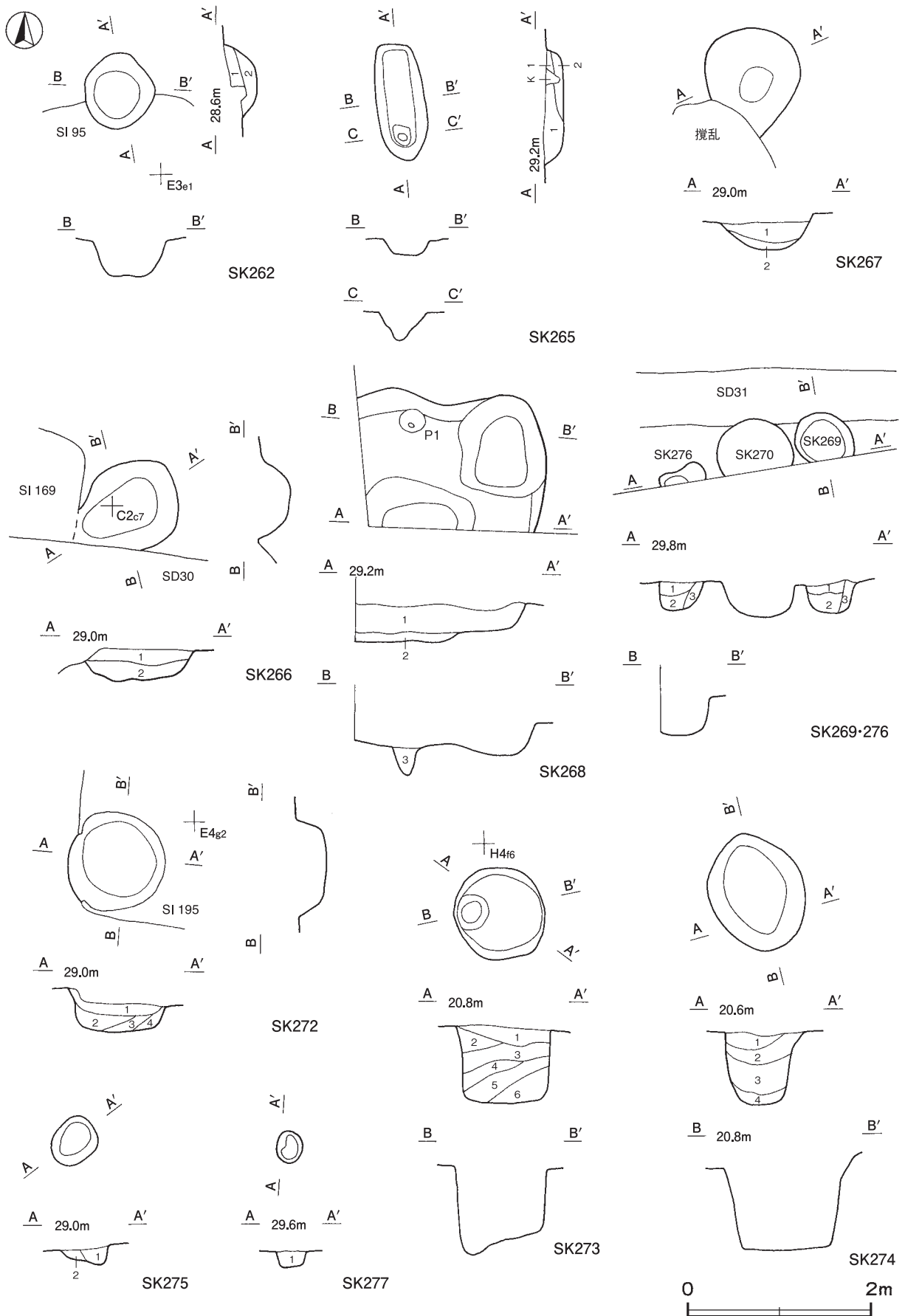
番号	位置	軸方向	平面形	全長 (m)	炭化室				点火室				煙道部			覆土	主な出土遺物	備考
					奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)	底面	奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)	底面	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (cm)			
4	A 1 a8	N - 19° - W	[楕円形]	(2.82)	(2.82)	(0.64)	44	凹凸	-	-	-	-	-	-	-	自然		
5	A 2 d1	N - 0°	隅丸長方形	4.60	4.60	1.54	10~14	平坦	-	-	-	-	-	-	-	自然	構築材	

(3) 土坑

今回の調査で、時期や性格が不明な土坑 23 基を確認した。以下、実測図（第 97・98 図）及び一覧表を掲載する。



第 97 図 その他の土坑実測図(1)



第 98 図 その他の土坑実測図(2)

第 97 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量

第 249 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 2 暗 褐 色 粘土粒子中量, 砂粒少量
- 3 黒 褐 色 砂粒少量, 粘土粒子微量
- 4 黒 褐 色 砂粒少量
- 5 極 暗 褐 色 粘土粒子・砂粒少量
- 6 黒 褐 色 粘土粒子・砂粒微量

第 253 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第 255 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 極 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第 256 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第 257 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量, 焼土粒子微量

第 258 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化物微量

第 260 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐 色 ローム粒子多量

第 261 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第 262 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第 265 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

第 266 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量

第 267 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐 色 ローム粒子中量

第 268 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第 269 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子中量, 焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ロームブロック中量
- 3 褐 色 ローム粒子多量

第 272 号土坑土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 極 暗 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第 273 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 2 極 暗 褐 色 粘土ブロック中量, ロームブロック少量
- 3 に_い黄褐色 粘土ブロック多量, ローム粒子少量
- 4 に_い黄褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子少量
- 5 黒 褐 色 粘土ブロック少量, ローム粒子微量
- 6 褐 灰 色 粘土ブロック中量

第 274 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 2 黒 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 3 極 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 4 に_い黄褐色 粘土ブロック中量, ローム粒子少量

第 275 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ローム粒子中量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量

第 276 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗 褐 色 ローム粒子少量
- 3 暗 褐 色 ローム粒子中量

第 277 号土坑土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック・粘土粒子少量, 炭化粒子微量

表 12 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
97	C 2 c5	N - 4° - E	[楕円形]	(1.90)×1.04	56	平坦	直立	自然		本跡→SD31, SF 3
248	H 4 c3	N - 37° - W	[楕円形]	0.95×(0.42)	24	平坦	緩斜	-		本跡→SK249
249	H 4 c3	N - 30° - E	[不整楕円形]	(2.42)×1.50	30	平坦	緩斜	人為		SK248 →本跡 →SD23
253	E 3 e7	N - 89° - W	楕円形	0.82×0.64	24	平坦	緩斜	自然	土師器, 須恵器	
255	E 3 e3	N - 28° - E	楕円形	1.00×0.90	48	皿状	緩斜	人為	土師器	
256	E 2 e7	N - 72° - W	[不定形]	(0.78)×0.55	34	平坦	緩斜	自然		
257	E 3 e6	N - 89° - W	楕円形	0.76×0.62	22	皿状	緩斜	自然		

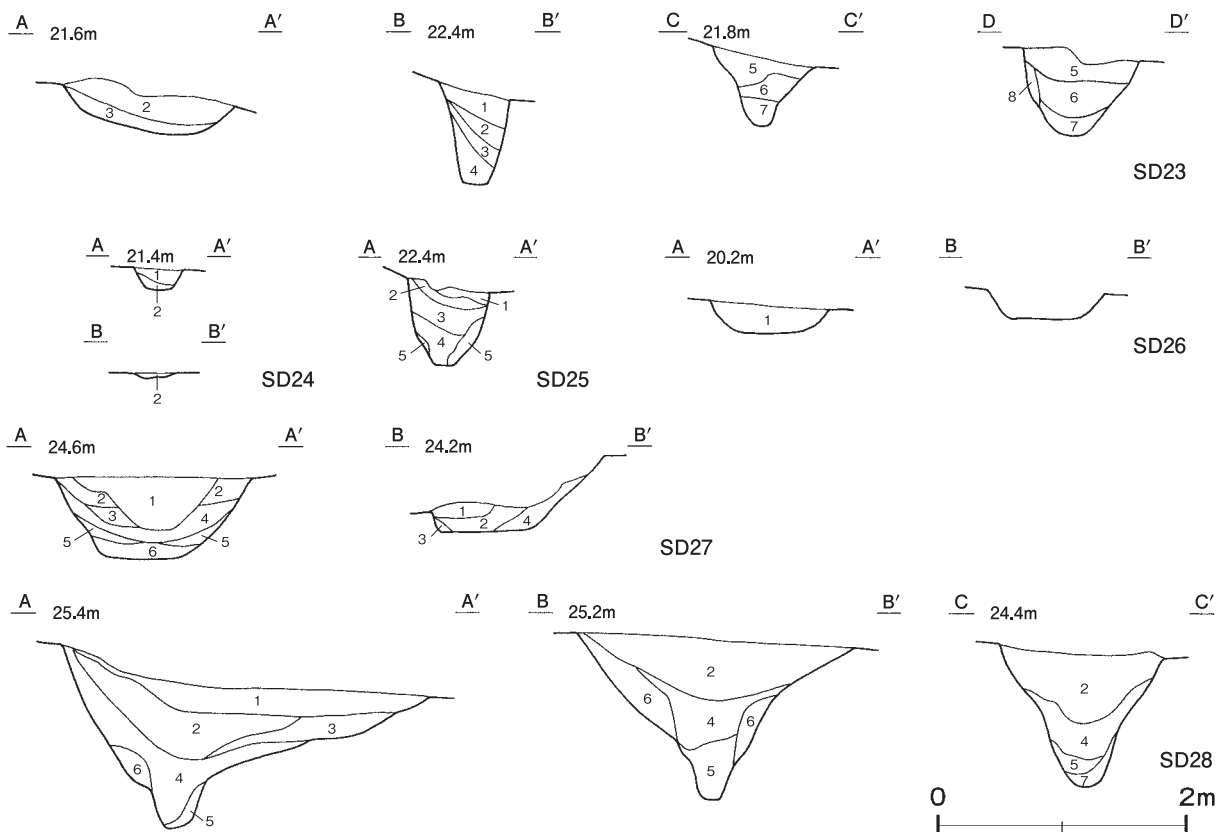
番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
258	E 3 e4	-	円形	0.89×0.87	17	平坦	外傾	人為	土師器, 須恵器	
259	E 3 e3	-	不整形円形	0.75×0.71	45	平坦	外傾	-		
260	E 3 e6	N - 73° - W	[楕円形]	(0.62)×0.62	10	平坦	緩斜	自然	土師器, 剥片	SI189と新旧不明
261	E 3 e3	N - 3° - W	楕円形	1.44×1.08	48 ~ 50	皿状	緩斜直立	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器	
262	E 2 d0	-	円形	0.82×0.77	34	平坦	外傾	自然	土師器, 須恵器	SI95 → 本跡
265	-Z 2 g3	N - 5° - W	楕円形	1.27×0.51	20	平坦	外傾	自然		
266	C 2 b7	N - 62° - E	[楕円形]	(1.30)×0.95	32	凹凸	外傾	自然		本跡 → SD30 SI169と新旧不明
267	E 3 f0	N - 34° - W	[楕円形]	(1.07)×1.03	30	平坦	緩斜	自然		
268	E 3 g0	N - 85° - E	[方形]	(1.95)×(1.44)	36	凹凸	外傾	自然	石器	
269	C 3 d7	N - 69° - W	[円形・楕円形]	0.66×(0.52)	40	平坦	緩斜	人為		本跡 → SF 3, SD31と新旧不明
272	E 4 g1	-	[円形]	(1.05)×1.05	32	平坦	外傾	人為		本跡 → SI95
273	H 4 f6	N - 54° - W	楕円形	1.05×0.98	85	平坦	直立	人為		
274	H 4 f5	N - 14° - W	楕円形	1.27×1.04	85	平坦	直立	自然		
275	E 3 f0	N - 55° - E	楕円形	0.54×0.46	24	凹凸	外傾	自然		
276	C 3 d6	N - 82° - E	[不定形]	(0.49)×(0.22)	32	平坦	直立	人為		
277	C 3 c5	-	円形	0.32×0.30	18	平坦	直立	自然		

(4) 溝跡

今回の調査で、時期や性格が不明な溝跡 17 条を確認した。以下、実測図（第 99 図～第 104 図）及び一覧表を掲載する。



第 99 図 その他の溝跡実測図 (VIII区) (1)



第 100 図 その他の溝跡実測図 (Ⅷ区) (2)

第 8 号溝跡土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

第 12 号溝跡土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

第 20 号溝跡土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 にぶい褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子・砂粒微量
- 6 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子・砂粒微量

第 23 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 粘土ブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子・粘土粒子少量, ローム粒子微量
- 3 暗褐色 粘土粒子少量, 炭化物微量
- 4 暗褐色 炭化粒子・粘土粒子少量, 焼土粒子微量
- 5 明赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子・砂粒微量
- 6 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子・砂粒微量
- 7 褐色 ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子・砂粒微量
- 8 褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量

第 24 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 2 極暗褐色 砂粒少量, ローム粒子・粘土粒子微量

第 25 号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 にぶい黄褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量, 炭化物微量
- 3 褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量
- 4 褐色 粘土粒子中量, ロームブロック・砂粒少量, 炭化粒子微量
- 5 褐色 粘土粒子中量, ロームブロック・砂粒少量

第 26 号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量

第 27 号溝跡土層解説

- 1 にぶい褐色 ロームブロック・粘土粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック・粘土粒子少量
- 3 褐色 粘土粒子中量, ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子少量
- 5 褐色 ロームブロック・粘土粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量

第 28 号溝跡土層解説

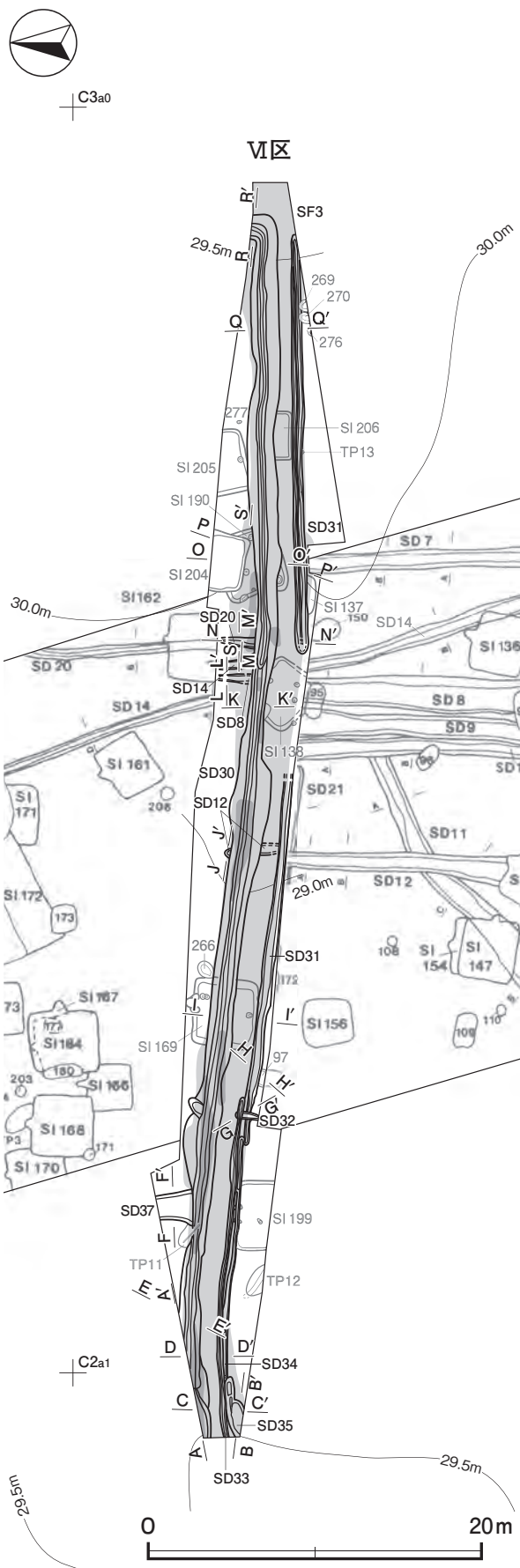
- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量 (2層より暗)
- 4 褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 褐色 ロームブロック中量, 粘土粒子少量
- 7 褐色 ロームブロック中量

第 29 号溝跡土層解説

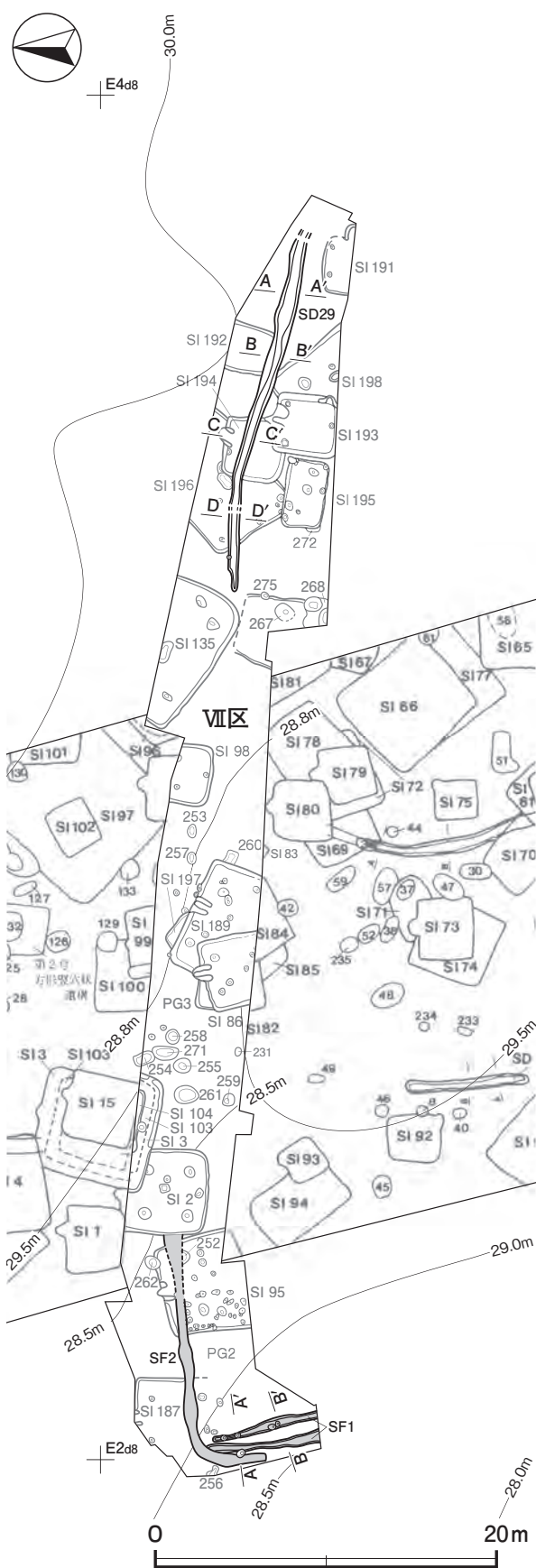
- 1 黒褐色 ロームブロック少量

第 32 号溝跡土層解説

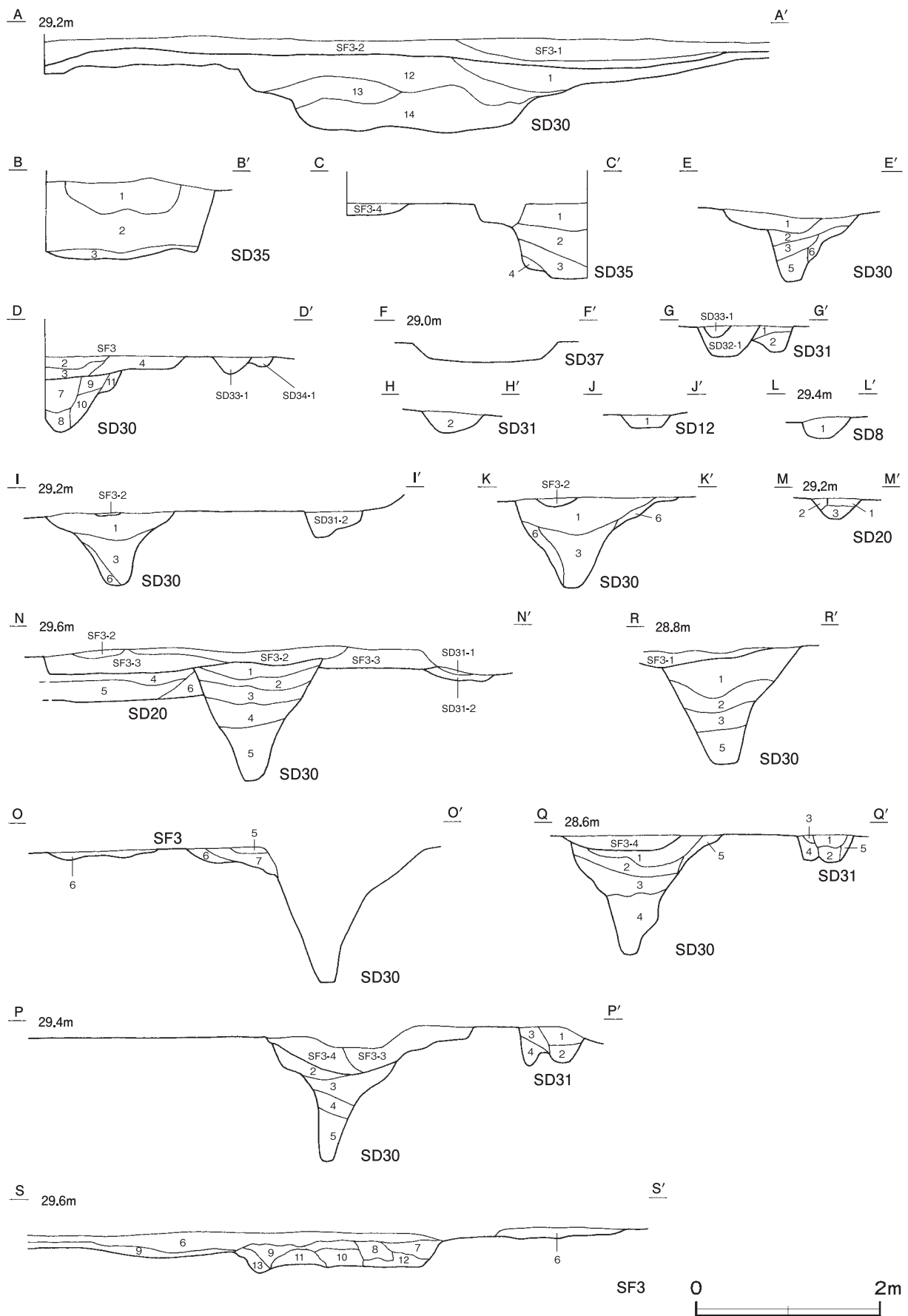
- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量



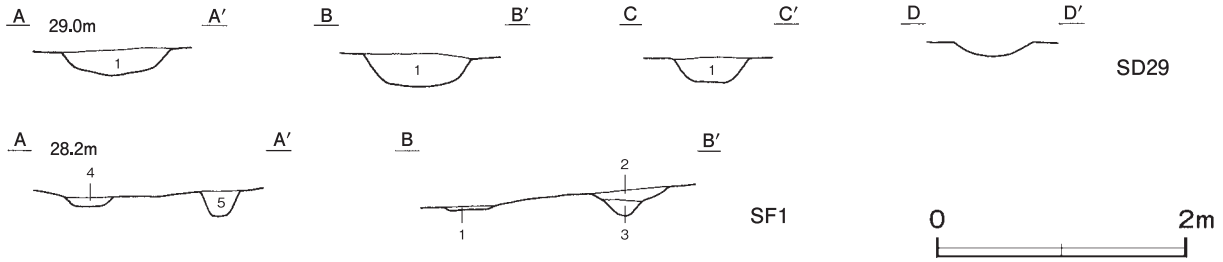
第 101 図 その他の溝跡・道路跡実測図(1)



第 102 図 その他の溝跡・道路跡実測図(2)



第 103 図 その他の溝跡・道路跡実測図(3)



第104図 その他の溝跡・道路跡実測図(4)

第30号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 11 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 12 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 13 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 14 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第31号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第33号溝跡土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第34号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

第35号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

表13 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
8	C 3 c1	N - 170° - W	直線	(1.44)	0.38 ~ 0.56	0.24 ~ 0.36	23	U字状	外傾	自然		SI138・162 → 本跡 → SD30, SF 3
12	C2c8 ~ C2d8	N - 170° - E	[直線]	(3.00)	0.36 ~ (0.54)	0.38	15	逆台形	緩斜	自然		本跡 → SD30・31, SF 3
20	C 3 c1	N - 167° - W	直線	(1.65)	0.42 ~ 0.74	0.16 ~ 0.25	23	U字状	緩斜	自然		SI162 → 本跡 → SD30, SF 3
23	H3f0 ~ H4b6	N - 110° - W N - 170° - W	L字状	(32.90)	0.50 ~ 0.94	0.10 ~ 0.42	56 ~ 73	逆台形 U字状	外傾 直立	自然		SK249, SY 1・3 → 本跡, SD24・25・28 と新旧不明
24	H4b5 ~ H4d5	N - 175° - W	直線	4.95	0.43 ~ 0.33	0.17 ~ 0.26	17 ~ 27	逆台形 U字状	外傾	自然		SB 1, SD23, PG 1 と新旧不明
25	H3d9 ~ H3d0	N - 100° - E	直線	(3.90)	0.50 ~ 0.73	0.14 ~ 0.19	64	U字状	外傾	自然		SD23 と新旧不明
26	H4h5 ~ H4h7	N - 100° - W N - 161° - E	L字状	(10.45)	0.92 ~ 1.53	0.43 ~ 1.28	23	逆台形	外傾	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器, 土師質土器, 陶器	
27	H3a8 ~ H3c9	N - 168° - W	直線	(8.37)	1.21 ~ 1.56	0.75 ~ 1.00	33 ~ 66	逆台形 U字状	外傾 緩斜	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器	
28	G3h9 ~ H3c0	N - 168° - E	直線	(24.80)	0.68 ~ 3.0	0.12 ~ 0.28	104 ~ 129	U字状	外傾	自然	土師器, 須恵器, 磁器	SY 1 → 本跡, SD23 と新旧不明
29	E3e0 ~ E4f5	N - 100° - E	直線	21.60	0.33 ~ 1.10	0.10 ~ 0.77	12 ~ 27	U字状	外傾 緩斜	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器	SI192・194・196・198 → 本跡
30	C1b0 ~ C3c8	N - 0° N - 84° - W	L字状	(73.20)	0.70 ~ 2.38	0.20 ~ 0.34	60 ~ 128	U字状	緩斜	自然	弥生土器, 土師器, 須恵器, 土師質土器, 陶器	TP11・13, SK266, SI138・169・190・205・206, SD12・14 → 本跡 → SF3
31	C2c4 ~ C3d8	N - 86° - W	直線	(54.79)	0.40 ~ 0.80	0.10 ~ 0.34	33 ~ 42	U字状	外傾	自然	土師器, 須恵器, 陶器, 磁器	TP13, SI138・169, SK97・270 → 本跡 → SD32, SF 3, SK269・270, SD33・34 と新旧不明
32	C 2 c4	N - 173° - W	直線	(1.40)	0.30 ~ 0.44	0.14 ~ 0.34	33	逆台形	外傾 緩斜	自然		SD31 → 本跡 → SD33, SF3
33	C1c0 ~ C2c5	N - 87° - W	直線	(20.20)	0.20 ~ 0.40	0.10 ~ 0.18	20	U字状	外傾 緩斜	自然	土師器	SI199, SD32・34 → 本跡 → SF 3, SD31・35 と新旧不明
34	C1c0 ~ C2c4	N - 87° - W	直線	17.80	0.20 ~ 0.40	0.10 ~ 0.14	10 ~ 12	U字状	外傾	自然		SI199 → 本跡 → SD33, SF 3, SD32・35 と新旧不明
35	C 1 c0	N - 84° - W	直線	(3.24)	0.58 ~ 0.90	0.12 ~ 0.40	72 ~ 83	逆台形	外傾	自然		本跡 → SF 3, SD33・34 と新旧不明
37	C 2 b3	N - 170° - E	直線	(2.20)	1.44 ~ 1.92	1.10 ~ 1.58	20	逆台形	緩斜	自然		TP11 → 本跡 → SD30, SF 3

(5) 道路跡

第1号道路跡 (第102・104図)

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅶ区西部のE2e8～E2g8区、標高28mほどの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第187号竪穴建物跡を掘り込んでいる。第2号道路跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 E2e8区から南(N-168°-E)に向かって延びている。2条の浅い溝が、約2mの間隔で平行している。南部が調査区域外となるため、東側の溝1は長さ6.10m、上幅0.22～0.64m、下幅0.08～0.42m、西側の溝2は、長さ6.64m、上幅0.29～0.84m、下幅0.21～0.66mしか確認できなかった。深さは4～10cmで、底面は平坦で、南に向かって傾斜している。壁は外傾している。

覆土 いずれもロームブロックが多く含まれている暗褐色土が主体で、硬化している。

土層解説

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 5 褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量 | |

所見 2条の溝が平行し、硬化した土が堆積していることから、轍跡の可能性はある。時期は、遺物がないため不明であるが、現在の道路と軌道と同じくすることから、近世以降と考えられる。

第2号道路跡 (第102図)

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅶ区西部のE2g7～E3e1区、標高28mほどの台地緩斜面部に位置している。

重複関係 第2・95・187号竪穴建物跡、第252号土坑を掘り込んでいる。第1号道路跡、第2号ピット群と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 硬化面が確認できたのみである。確認できた硬化面の長さは17.1m、幅0.4～1.10mで、E3e1区から西(N-97°-W)に向かって12.8m延び、E2e8区で南(N-90°)に屈曲し、4.3mほど延びている。硬化面はほぼ平坦で、南に向かって傾斜している。

所見 第1号道路跡と一部連続している部分があることから、同一の遺構の可能性はある。時期は、遺物がないため不明であるが、現在の道路と軌道と同じくすることから、近世以降と考えられる。

第3号道路跡 (第101・103図)

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅵ区のC1c0～C3d8区、標高29mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第138・169・190・199・204～206号竪穴建物跡、第97・269・270号土坑、第8・12・14・20・30～35・37号溝跡、第11・13号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状 第30・31号溝跡上で硬化面が確認されたため、道路跡とした。東部及び西部が調査区域外に延びているため、確認できた長さは75.0mである。C3d8区から西南西(N-97°-W)へ34.2m延び、C2c9区で北(N-87°-W)へわずかに屈曲し、39.2mほど延びている。硬化面はほぼ平坦で、東側に向かって傾斜している。

覆土 溝跡の上位に、ロームブロックが多く含まれている暗褐色土が主体の層がレンズ状に堆積している。堆積層は硬化しており、道路としての使用によるものと考えられる。第190号竪穴建物跡付近では、ロームプロ

ックが多く含まれる層が不自然に堆積していることから、補修の痕跡と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量	7 におろ黄褐色	ロームブロック・粘土粒子中量
2 褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂粒微量	9 黒褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	10 におろ黄褐色	ロームブロック中量
5 黄橙色	ロームブロック多量	11 褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	12 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・粘土粒子少量, 炭化粒子微量
		13 褐色	ローム粒子多量

所見 地割溝の可能性がある第30・31号溝跡と方向を同じくしており、第30・31号溝が埋没した後、土地の境界部分を道路として利用していたものと考えられる。時期は遺物がないため不明であるが、現在の道路と軌道を同じくすることから、近世以降と考えられる。

表14 その他の道路跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	E2e8～E2g8	N-168°-E	直線	(6.10～6.64)	0.22～0.84	0.08～0.66	4～10	U字状	外傾	自然	土師器, 須恵器, 磁器	SI187→本跡 SF 2と新旧不明
2	E2g7～E3e1	N-97°-W N-90°	L字状	(17.1)	0.4～1.10	-	-	-	-	-		SI 2・95・187, SK252→本跡 SF 1・PG 2と 新旧不明
3	C1c0～C3d8	N-97°-W N-87°-W	直線	(75.0)	3.0～3.6	-	-	-	-	自然 人為	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 土師質土器, 陶器, 磁器, 瓦, 金属製品	SI138・169・ 190・199・204～ 206, SK97・269・ 270, SD 8・12・ 14・20・30～ 35・37, TP11・ 13→本跡

(6) 段切遺構(第105図)

調査年度 平成24年度

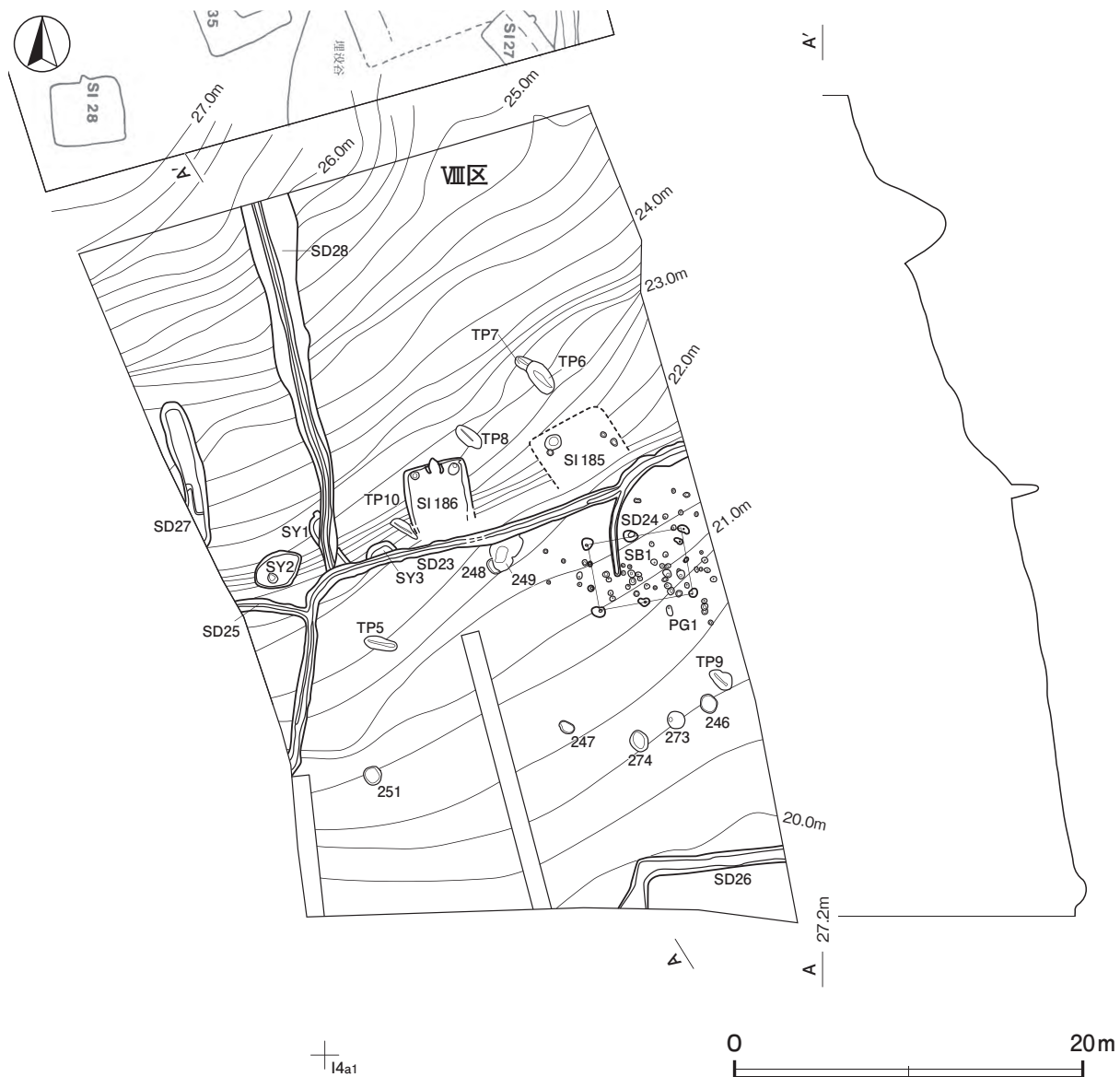
位置 調査Ⅷ区中央部のH 3 d0～H 4 a5区, 標高21～23 mほどの台地斜面部に位置している。

重複関係 第186号竪穴建物跡の床面を削平している。段差上には第1～3号炭窯が形成されている。

規模と形状 北部から約18度の傾斜で南下する斜面部が, H 3 d0区からE 4 a5区で, 約45度に傾斜を変え, 約1.2 mほどの段差を有し, これより南部では約8度の緩やかな傾斜となり, 平坦面を形成している。この段差は東西27 mの長さで, 調査区域外の東部・西部にも延びており, 全体の規模は確認することができなかった。段差の直下には, 第23～25号溝跡が, 段差に沿うように巡っている。また, 段差南部の緩やかな平坦面には, 13世紀代の土器が出土する第1号掘立柱建物跡や第1号ピット群, 第251号土坑などが位置している。標高21.0 m以南の緩やかな斜面部は, 埋没谷による浸食を受けており, 埋没谷の堆積土以下からは縄文時代の陥し穴や弥生時代の土器棺墓などが確認されている。

所見 斜面部に約1.2 mの段差を有している点や, 斜面の傾斜が大きく変化していることなど, 自然地形とするにはやや不自然であり, この段差と段差南側の平坦面は人工的な掘削によるものと考えられる。掘削の時期は伴う遺物がないため不明瞭であるが, 第186号竪穴建物跡を削平していることから, 8世紀前葉以降と考えられる。第1号掘立柱建物跡や第1号ピット群は段差のすぐ南側にあり, これらの配置と段切や平坦面の構築は, 何らかの関係を有するものと考えられる。第1・3号炭窯は, この段差を利用して登り窯のような炭窯として構築され, 斜面を利用した製炭作業がなされ, のちに第23号溝に掘り込まれたものと考えられる。第23～25号溝は, 第1・3号炭窯を掘り込んでいることから, 少なくとも19世紀前半以降に構築されたものと考えられる。段切遺構と平行して構築されているため, 段切遺構を利用し, 土地の区画等を行ったものと捉えら

れる。したがって、本遺構は13世紀後半以降に掘削され、19世紀代以降まで機能していたものと考えられる。



第105図 段切遺構実測図

(7) ピット群

第2号ピット群 (第106図)

調査年度 平成25年度

位置 調査Ⅶ区西部のE2e8～E2f0区、標高28mほどの台地平坦部の東西7.8m、南北4.0mの範囲から、ピット23か所を確認した。

重複関係 第95・187号竪穴建物跡を掘り込んでいる。第2号道路跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

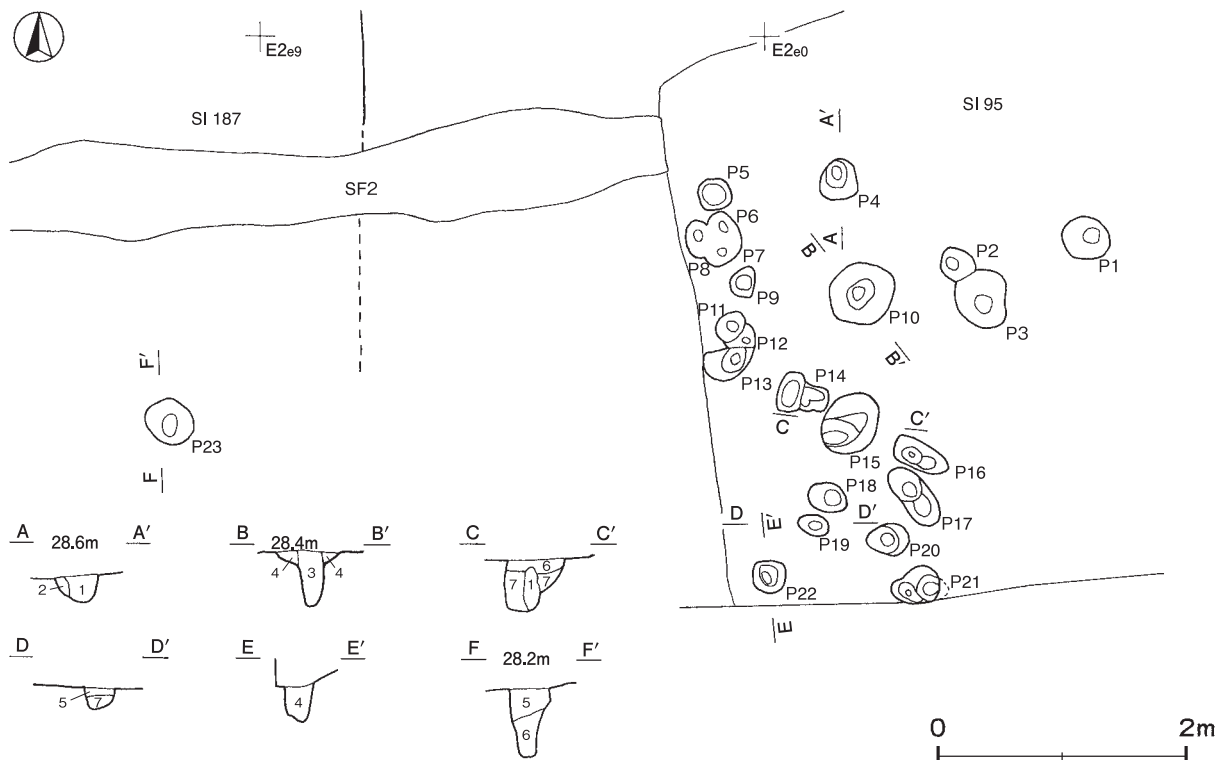
規模と形状 平面形は長径23～56cm、短径17～49cmの円形または楕円形で、深さは15～62cmである。ピットの分布状況から、建物跡は想定できない。

覆土 7層に分層できる。P10・P15・P23は柱穴状で、第1・3層は柱痕跡の可能性がある。

ピット土層解説 (P 4・P 10・P 15・P 19・P 22・P 23 共通)

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| | | 7 黒褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子微量 |

所見 時期・性格は不明である。



第 106 図 第 2 号ピット群実測図

第 2 号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	E 2e0	楕円形	38	33	28	9	E 2e9	不整楕円形	23	19	22	17	E 2e0	楕円形	54	23	15
2	E 2e0	[楕円形]	(26)	24	26	10	E 2e0	楕円形	56	49	42	18	E 2e0	楕円形	31	23	16
3	E 2e0	[不整楕円形]	(47)	40	27	11	E 2e9	楕円形	26	20	30	19	E 2e0	楕円形	25	17	16
4	E 2e0	円形	31	31	33	12	E 2e9	[楕円形]	23	(10)	30	20	E 2e0	楕円形	34	25	15
5	E 2e9	楕円形	28	25	28	13	E 2e9	[不整楕円形]	32	22	36	21	E 2f0	不整楕円形	33	29	17
6	E 2e9	[円形]	(25)	(25)	20	14	E 2e0	不整楕円形	41	32	22	22	E 2f0	楕円形	25	24	27
7	E 2e9	[楕円形]	30	(20)	32	15	E 2e0	楕円形	52	42	47	23	E 2e8	楕円形	39	33	62
8	E 2e9	[楕円形]	30	(19)	28	16	E 2e0	楕円形	46	20	22						

第 3 号ピット群 (第 107 図)

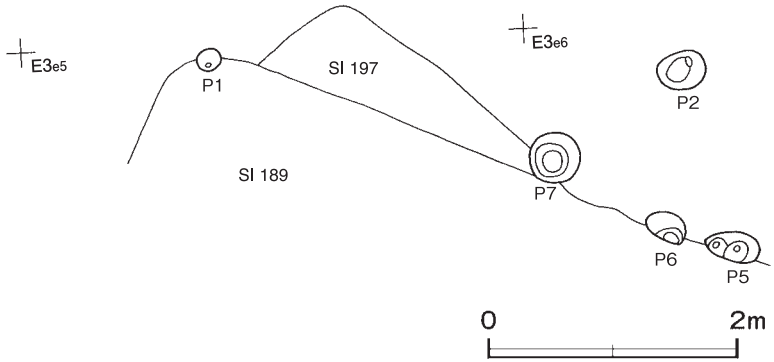
調査年度 平成 25 年度

位置 調査Ⅶ区中央部の E 3d4～E 3e6 区, 標高 29 m ほどの台地平坦部の東西 9.5 m, 南北 3.8 m の範囲から, ピット 7 か所を確認した。

重複関係 第 189・197 号竪穴建物跡と重複するが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 平面形は長径 20～45cm, 短径 18～40cm の円形または楕円形で, 深さは 9～38cm である。ピットの分布状況から, 建物跡は想定できない。

所見 時期・性格は不明である。



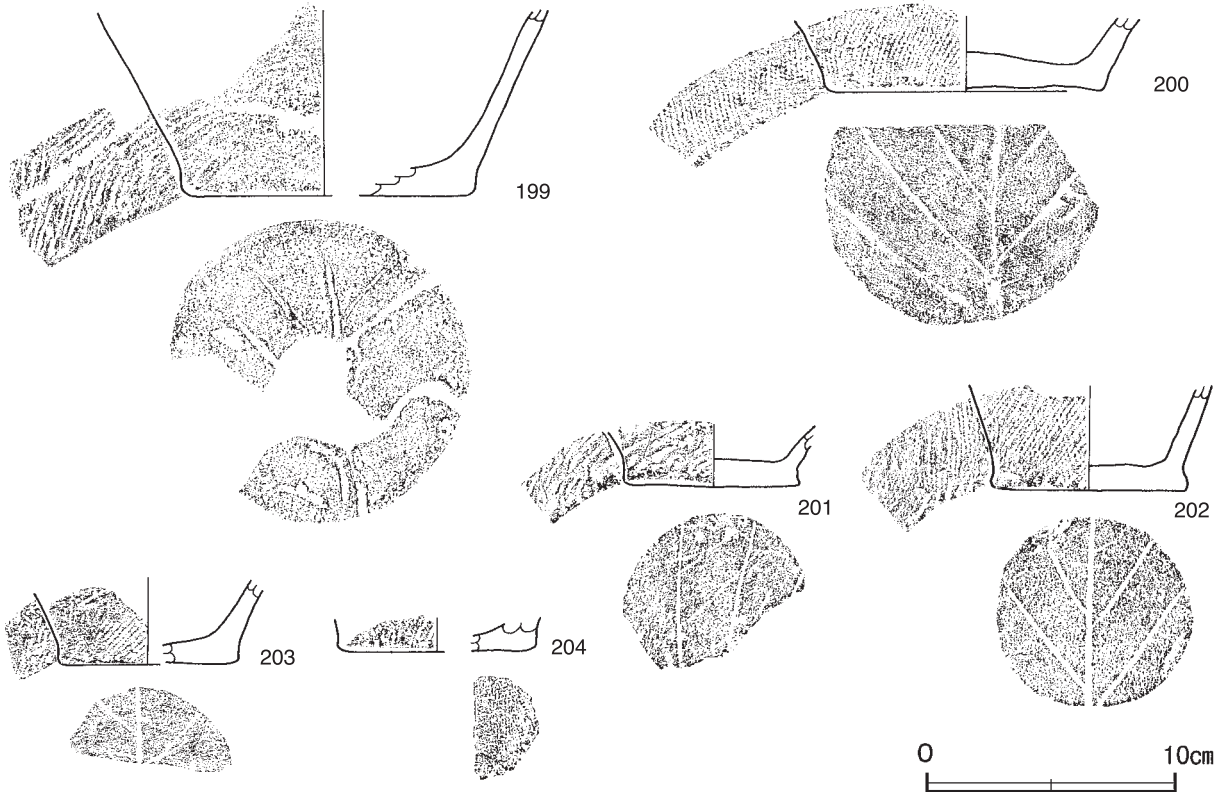
第 107 図 第 3 号ピット群実測図

第 3 号ピット群ピット計測表

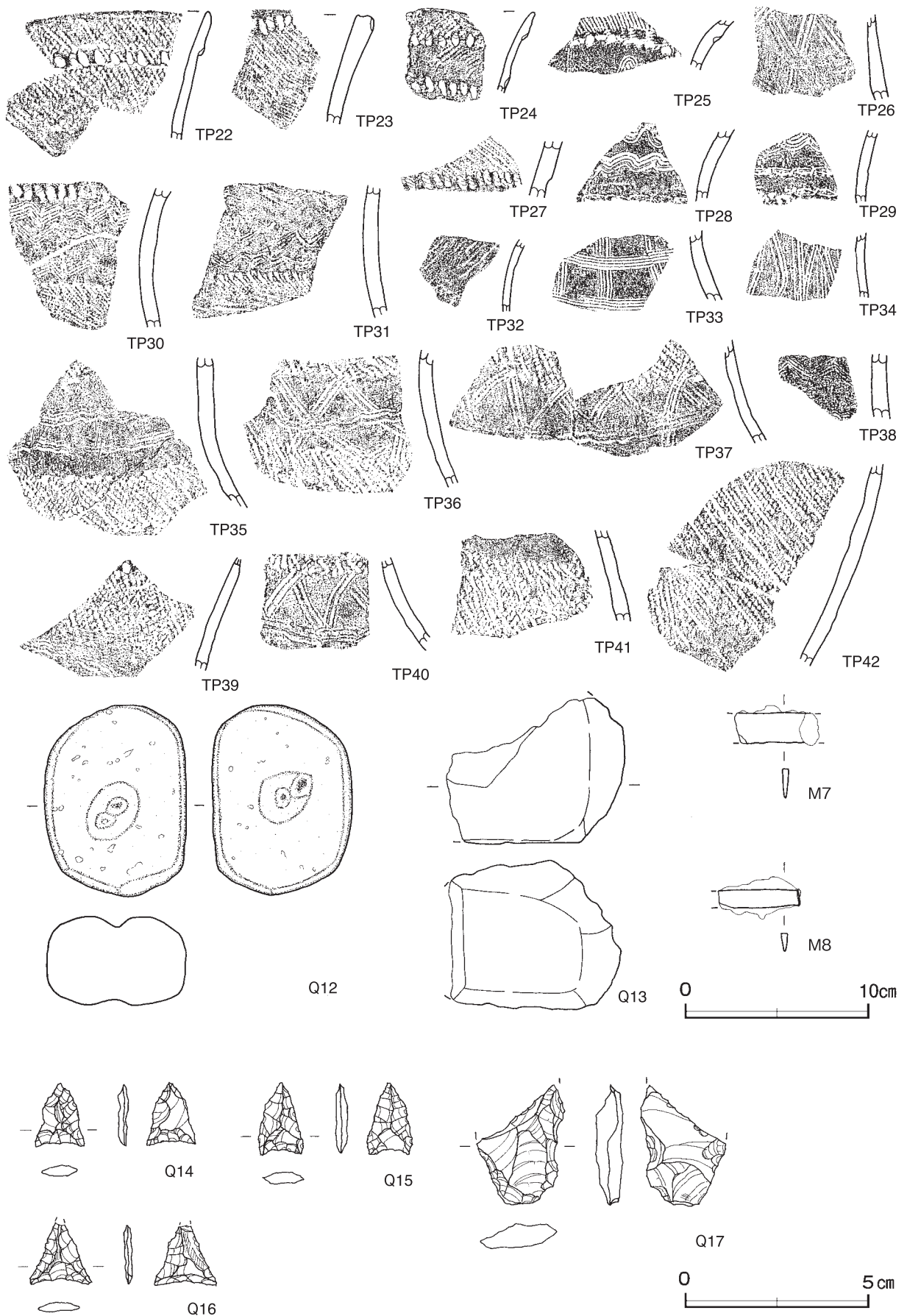
番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)			番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ				長径	短径	深さ				長径	短径	深さ
1	E 3 e5	楕円形	20	18	10	4	E 3 d4	楕円形	44	40	23	7	E 3 e6	円形	40	40	38
2	E 3 e6	楕円形	38	30	30	5	E 3 e6	楕円形	44	22	9						
3	E 3 d4	楕円形	45	33	16	6	E 3 e6	楕円形	33	20	36						

(8) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については、実測図(第 108・109 図)と観察表を掲載する。



第 108 図 遺構外出土遺物実測図(1)



第 109 图 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表（第 108・109 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
199	弥生土器	広口壺	-	(74)	11.3	長石・石英	黄橙	普通	附加条1種 (LR + 2R) 底部木葉痕 磨滅	表土	10% PL20
200	弥生土器	広口壺	-	(29)	11.0	長石・石英・雲母・細礫	橙	普通	LR 縄文 底部木葉痕	表土	5% PL20
201	弥生土器	広口壺	-	(26)	6.7	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	附加条1種 (LR + 2R) 底部木葉痕	表土	5% PL20
202	弥生土器	広口壺	-	(42)	7.6	長石・石英・細礫	赤褐	普通	附加条1種 (LR + 2R) 底部木葉痕	表土	10% PL20
203	弥生土器	広口壺	-	(34)	[7.0]	長石・石英	橙	普通	附加条1種 (LR + 2R) 底部木葉痕	表土	5% PL20
204	弥生土器	広口壺	-	(14)	[7.2]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	附加条1種 (LR + 2R) 底部布目圧痕	SI169	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP22	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	明褐	1段の複合口縁下端に原体圧痕 直前段反撚 RLL	表土	PL20
TP23	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	明褐	口縁部原体圧痕 附加条1種 (RL + 2L)	表土	PL20
TP24	弥生土器	広口壺	長石・石英	褐	2段の複合口縁下端に原体圧痕 附加条1種 (LR + 2R)	表土	PL20
TP25	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい褐	複合口縁下端に原体圧痕 撚紋 L 頸部櫛描波状文	表土	PL20
TP26	弥生土器	広口壺	長石・石英・赤色粒子・細礫	にぶい黄橙	頸部櫛描格子目文 波状文	表土	PL20
TP27	弥生土器	広口壺	長石・石英・赤色粒子・細礫	赤褐	複合口縁下端に原体圧痕 附加条1種 (RL + 2L)	表土	PL20
TP28	弥生土器	広口壺	長石・石英	橙	頸部櫛描波状文 結節文	表土	PL20 TP29 と同一個体 _ナ
TP29	弥生土器	広口壺	長石・石英	橙	頸部櫛描波状文 結節文	表土	PL20 TP28 と同一個体 _ナ
TP30	弥生土器	広口壺	長石・石英	橙	複合口縁下端に原体圧痕 頸部櫛描山形文 胴部附加条1種 (RL + 2L)	表土	PL21
TP31	弥生土器	広口壺	長石・石英	橙	頸部櫛描山形文 胴部附加条1種 _カ	表土	PL21
TP32	弥生土器	広口壺	長石・石英	褐	頸部附加条1種 _カ	表土	PL21
TP33	弥生土器	広口壺	長石・石英	橙	頸部櫛描格子目文	表土	PL21
TP34	弥生土器	広口壺	長石・石英	明赤褐	頸部2条一単位の櫛描文	表土	PL21
TP35	弥生土器	広口壺	長石・石英	赤褐	頸部櫛描波状文 胴部直前段反撚 RLL	表土	PL21
TP36	弥生土器	広口壺	長石・石英	赤褐	頸部直前段反撚 RRL _カ 櫛描格子目文 波状文 胴部直前段反撚 RRL _カ	表土	PL21 TP37 と同一個体 _ナ
TP37	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	明褐	頸部直前段反撚 RRL _カ 櫛描格子目文 波状文	表土	PL21 TP36 と同一個体 _ナ
TP38	弥生土器	広口壺	長石・石英・赤色粒子・細礫	橙	頸部櫛描波状文	表土	PL21
TP39	弥生土器	広口壺	長石・石英・赤色粒子・細礫	赤褐	複合口縁下端に原体圧痕 直前段反撚 RLL _カ 頸部櫛描波状文	表土	PL21
TP40	弥生土器	広口壺	長石・石英・赤色粒子	橙	直前段反撚 RLL _カ 櫛描格子目文 波状文	表土	PL21
TP41	弥生土器	広口壺	長石・石英・赤色粒子	橙	胴部直前段反撚 RLL _カ	表土	PL21
TP42	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	橙	胴部直前段反撚 RLL _カ	表土	PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M7	鎌 _ナ	(4.6)	1.6	0.2~0.3	(8.27)	鉄	刃部 両端欠損	SF 3	PL22
M8	刀子 _ナ	(4.5)	1.3	0.1~0.4	(7.32)	鉄	刃部 両端欠損	表土	PL22

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q12	磨石	10.2	7.6	4.8	573.1	安山岩	表・裏・側面磨痕 表・裏面敲打痕	SK268	
Q13	五輪塔	(7.0)	(9.6)	8.1	(875.0)	閃緑岩	水輪 上面・側面敲打成形 下面に平坦面	表土	
Q14	鎌	1.7	1.4	0.3	0.54	黒曜石	凹基無茎鎌	SI195	PL22 信州産 _ナ
Q15	鎌	1.9	1.3	0.4	0.79	チャート	凹基無茎鎌	SD30	PL22
Q16	鎌	(1.7)	1.7	0.3	(0.69)	チャート	凹基無茎鎌 先端部欠損 表・裏面磨滅	SF 3	PL22
Q17	搔器	(3.3)	2.4	0.6	(4.99)	珪質頁岩	両側縁加工	SF 3	PL22

第4節 ま と め

1 はじめに

今回の調査では、縄文時代の陥し穴9基、弥生時代の竪穴建物跡2棟、土器棺墓2基、古墳時代の竪穴建物跡6棟、土坑2基、溝跡1条、奈良時代の竪穴建物跡12棟、土坑1基、平安時代の竪穴建物跡12棟、土坑3基、溝跡1条、鎌倉時代の掘立柱建物跡1棟、土坑1基、ピット群1か所、江戸時代の炭窯跡3基のほか、時期不明の竪穴建物跡1棟、炭窯跡2基、土坑23基、溝跡17条、道路跡3条、段切遺構1か所、ピット群2か所などを確認した。また、出土した遺物は、後期旧石器時代の搔器から江戸時代の陶磁器類、五輪塔など、多時期及び多種にわたっている。ここでは、縄文時代から江戸時代の遺構と遺物について概観し、まとめとする。

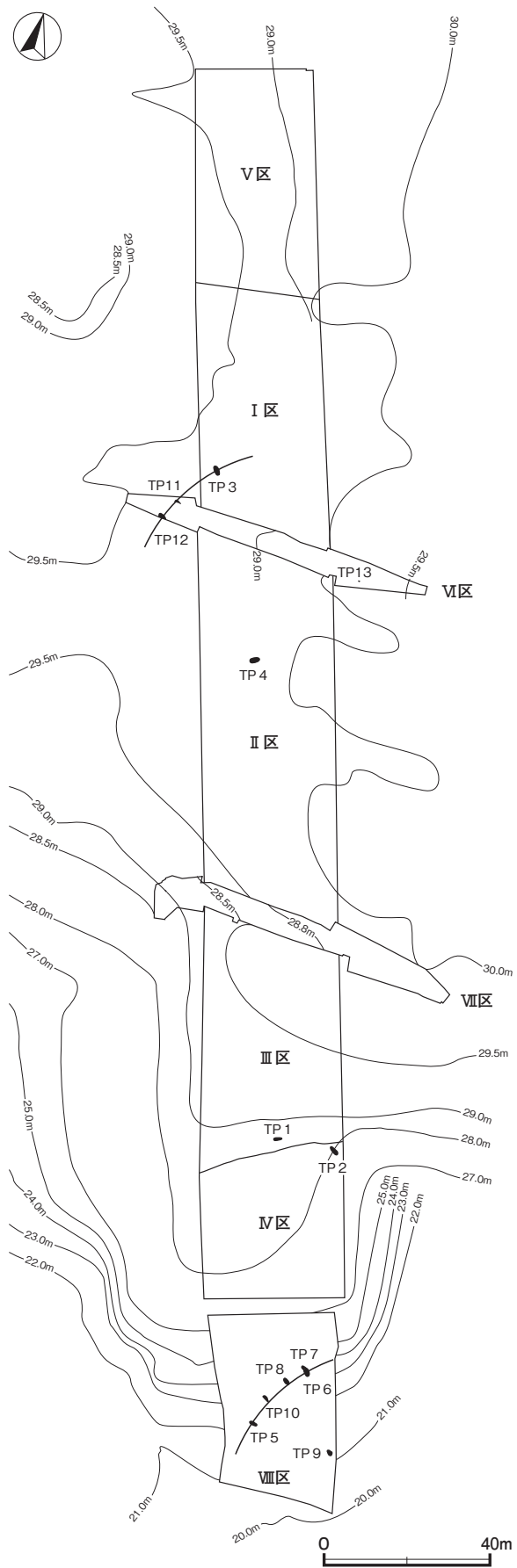
当遺跡は、平成9年度に発掘調査が行われ、その成果は平成11年度に『当財団調査報告』第164集¹⁾として調査報告書が刊行されている。今回の調査は、前回の調査区の北側(V区)及び南側(VIII区)と、前回の調査時点では農道として利用されていた部分(VI・VII区)であり、調査範囲としては遺跡のごく一部に留まっている。また、前回の整理報告では多数の遺構と多量の遺物から詳細な分析がなされており、今回の調査成果に通じる部分が多い。そこで、ここでは今回の調査成果について、前回の調査成果を合わせて概観し、集落変遷や遺物の出土状況などを時代ごとに再確認する作業を行う²⁾。

2 旧石器時代・縄文時代

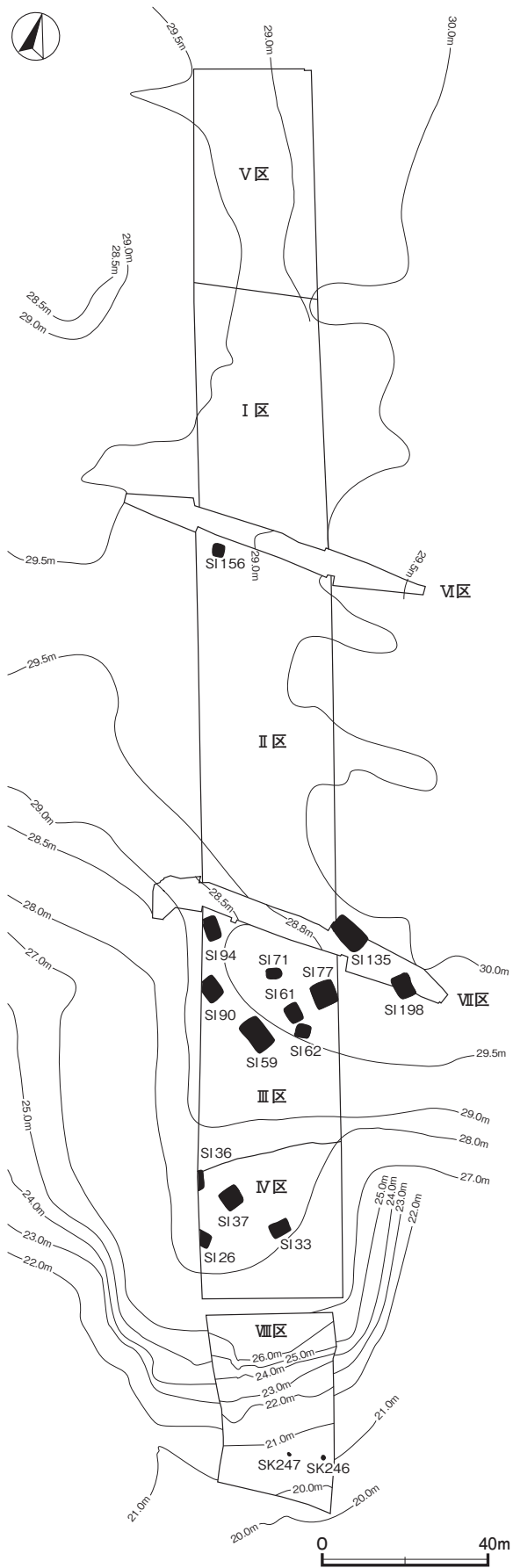
今回確認した旧石器時代の遺物は、珪質頁岩製の搔器1点のみであった。縄文時代の遺構は、陥し穴が9基で、前回の調査成果と合わせると13基が確認されている。いずれも出土遺物がないため、楕円形の平面形で漏斗状の断面形を呈すること、長軸方向がオーバーハングすることなどの形状の特徴から、縄文時代のものと推測した。調査I・VI区のTP3・TP11・TP12、及び調査VIII区のTP5～8・10は、尾根筋を谷部に向かって、約6～8m間隔で弧状に配置されており、2つの列の距離は約220mである。中村信博氏は関東地方の陥し穴を集成し、形状分類と時期の比定、狩猟対象獣の推測、配列から狩猟方法について推測されている³⁾。それによれば、今回確認した陥し穴は、形状から「溝型陥し穴」で、草創期後半から早期初頭に比定されるものが多い。オーバーハングする断面形は、落ちたシカの逃亡を防ぐための施設であり、台地上に広く間隔をもって列状に配置される点は「待ち」の狩猟法で、シカの「わたり」の道に設定した自動罠の可能性があるという。今回の調査も含めて、縄文時代では陥し穴以外の遺構は確認できず、また、縄文土器も早期後葉から後期前葉の破片が少量確認されている程度である。当該期は、当遺跡を含む台地全体が狩猟場として利用されていたと考えられる。

3 弥生時代

今回確認した弥生時代の遺構は、竪穴建物跡2棟、土器棺墓2基で、前回の調査成果と合わせると竪穴建物跡は14棟である。時期はいずれも後期前葉で、地形的には、舌状台地の先端部近くに占拠している様子がうかがえる。III・IV・VII区で2か所の竪穴建物跡のまとまりが看取されており、大きく2つの単位集団の存在が想定される。後期前葉の竪穴建物跡の特徴は、平面形は方形・隅丸方形・隅丸長方形のものもあるが、長方形のものが多く、規模は8m級の大型、4～5m級の中型、3m以下の小型の3つの類型に分けること



第 110 図 縄文時代陥し穴配置図



第 111 図 弥生時代遺構配置図

ができる。支柱穴は4か所で、出入口施設は南壁際に設置されるものが多い。貯蔵穴は14棟中3棟で確認でき、南東壁あるいは北東壁寄りに作られている。燃焼施設は地床炉で、炉石を伴うものがある。

今回の調査で確認した2棟は、いずれも調査区域外に延びているため不明瞭な部分があるが、第135号竪穴建物跡では長軸が8.53mの長方形、第198号竪穴建物跡も確認できた長軸が5.65mの長方形と推測され、いずれも大型の部類に入るものである。長軸方向はⅢ区に位置している竪穴建物跡と同様、北からやや西に振れている。支柱穴はおそらく4か所で、第135号竪穴建物跡では出入口施設が主軸方向の南壁際に位置し、建物の内部方向へ傾斜して掘り込まれている。支柱穴の特徴としては、建物跡の主軸方向と直交する長方形の掘方を有することであり、これは前回に調査した第90号竪穴建物跡や第94号竪穴建物跡のほか、笠間市新善光寺跡⁴⁾や大洗町千天遺跡⁵⁾でも確認されている。やや大型の竪穴建物跡に見られる傾向があり、後期の竪穴建物跡の特徴の一つと捉えることができる。燃焼施設の地床炉は床面のほぼ中央部に位置し、平面形はいずれも主軸方向に長い楕円形で、火熱による赤変硬化が顕著である。第135号竪穴建物跡では、原位置を留めてはいるが、炉石と考えられる礫が出土しており、前回のまとめでも指摘されているように、県内では古い段階の炉石を有する例となる。

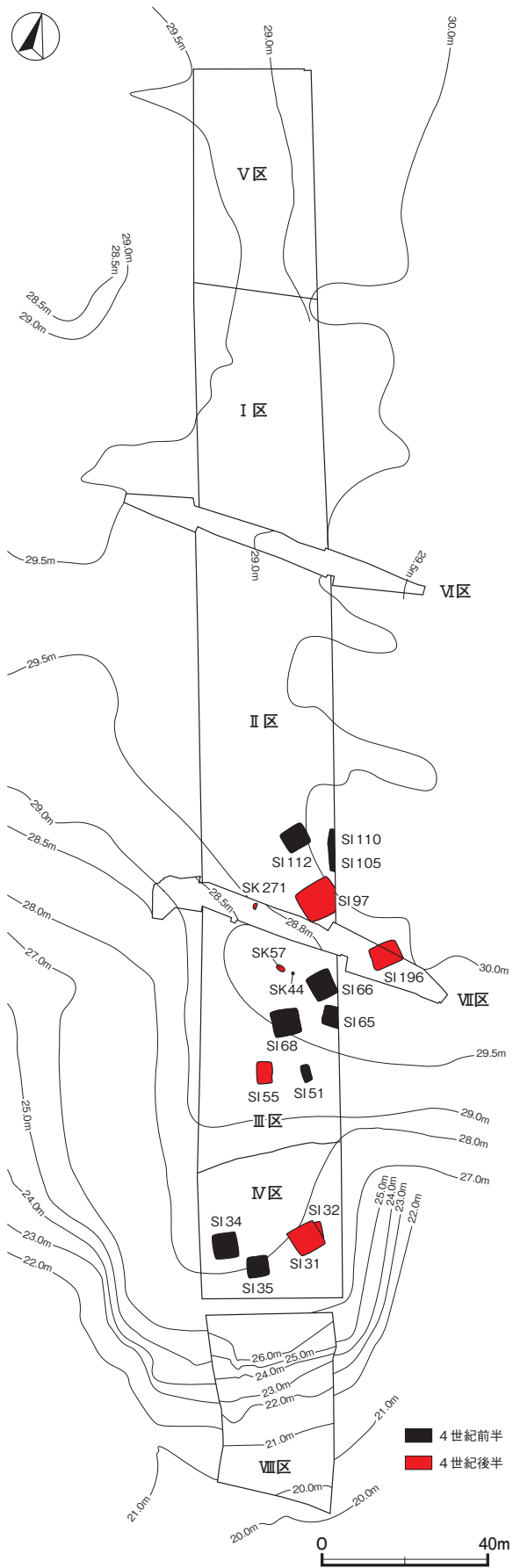
なお、今回確認した2棟の覆土上層からは、4世紀後葉の土器群が比較的まとまりをもって出土しており、棒状浮文を貼付した壺なども含まれている。覆土下層および床面から出土する土器とは時間差があることから、当該建物跡に帰属するものではない。第135号竪穴建物跡の南東2m、第198号竪穴建物跡の北西3mに位置する第196号竪穴建物跡の土器群に様相が類似していることから、当該遺構は廃絶後窪地状態にあり、その窪地に、周辺で生活を営んでいた古墳時代前期の人々が不用品を廃棄したものと考えられる。

今回の調査では、南部の台地斜面部で土器棺墓が2基確認できた。後世の削平により上部が失われているものの、第246号土坑と第247号土坑はともに長径1m前後の楕円形で、広口壺の体部下半から底部にかけて、正位及び斜位の状態で出土した。第247号土坑の広口壺は、底部が意図的に打ち欠かれている。時期は出土した土器から中期後葉と考えられ、竪穴建物跡よりもやや遡るものである。

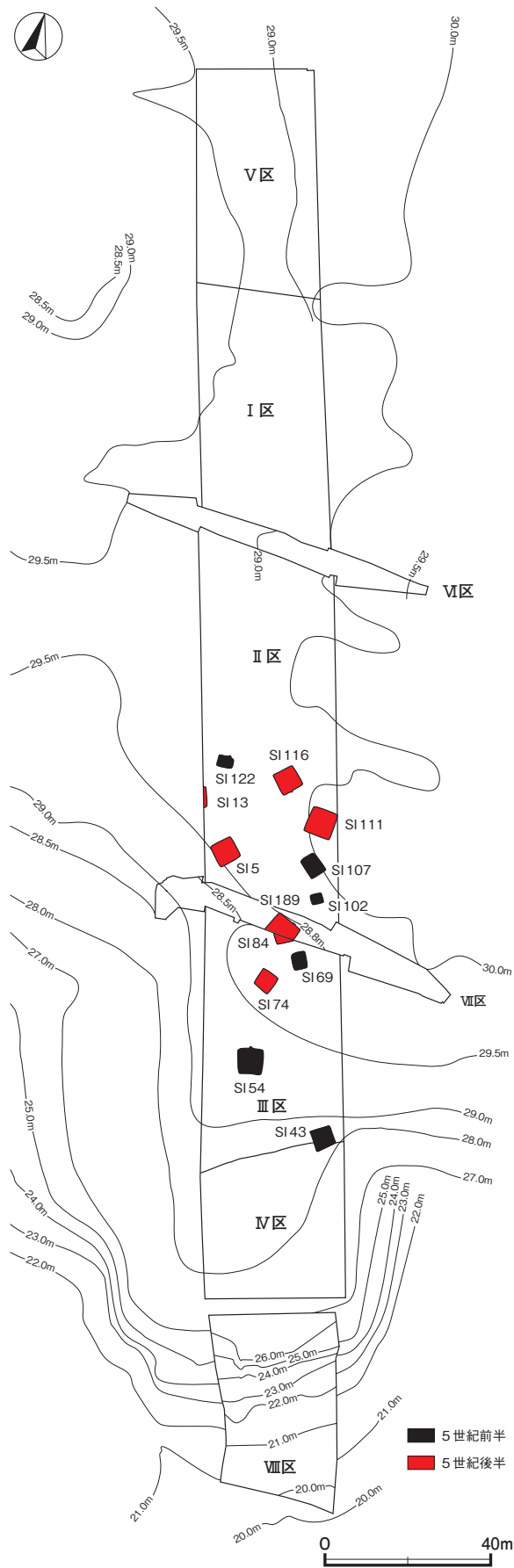
この土器棺墓周辺の斜面部下位の表土層中から、弥生土器片140点がまとまって出土している。ほとんどが後期前葉で、谷津の浸食等で遺存状況はよくないが、遺物包含層が形成されていた可能性がある。当遺跡出土の弥生土器に関する前回の報告では、次のような特徴が指摘されている。「口唇部には縄文原体、棒状工具による押圧がなされ、口縁部は多段化、幅広の複合口縁が見られる。頸部には横走文、連続山形文、連続弧文、波状文などの多条櫛描文が施されている。単線による縦区画を有するものがあり、無文部と格子文が見られる。胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、底部には木葉痕が残っている。」このような土器群は、二軒屋式土器の流れをくむ在地の土器と捉えられている。今回も同様の特徴の土器群が出土しているが、二軒屋式土器とは頸部文様や縄文原体などで異なる部分も多く、これらの型式論的位置付けは今後の課題である。今回の調査の成果から、当遺跡は中期後葉に墓域として土地利用が始まり、後期前葉には、台地先端部に集落が営まれ、斜面部に遺物包含層が形成されている様子が捉えられ、低地部への進出が推測される。

4 古墳時代

今回確認した古墳時代の遺構は、前期後葉の竪穴建物跡1棟、中期後葉の竪穴建物跡1棟、後期前葉から中葉の竪穴建物跡3棟、後期後葉の竪穴建物跡1棟と、前期後葉・後期後葉の土坑各1基、後期後葉から奈良時代にかけての溝跡1条である。



第112図 古墳時代前期の遺構配置図

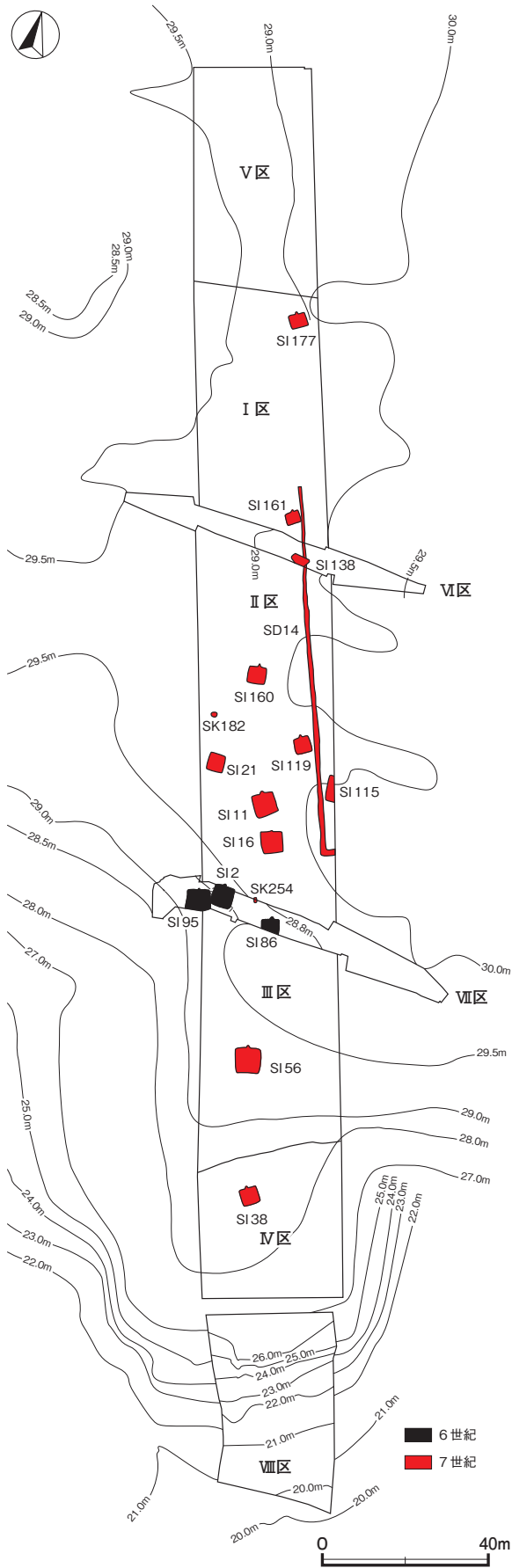


第113図 古墳時代中期の遺構配置図

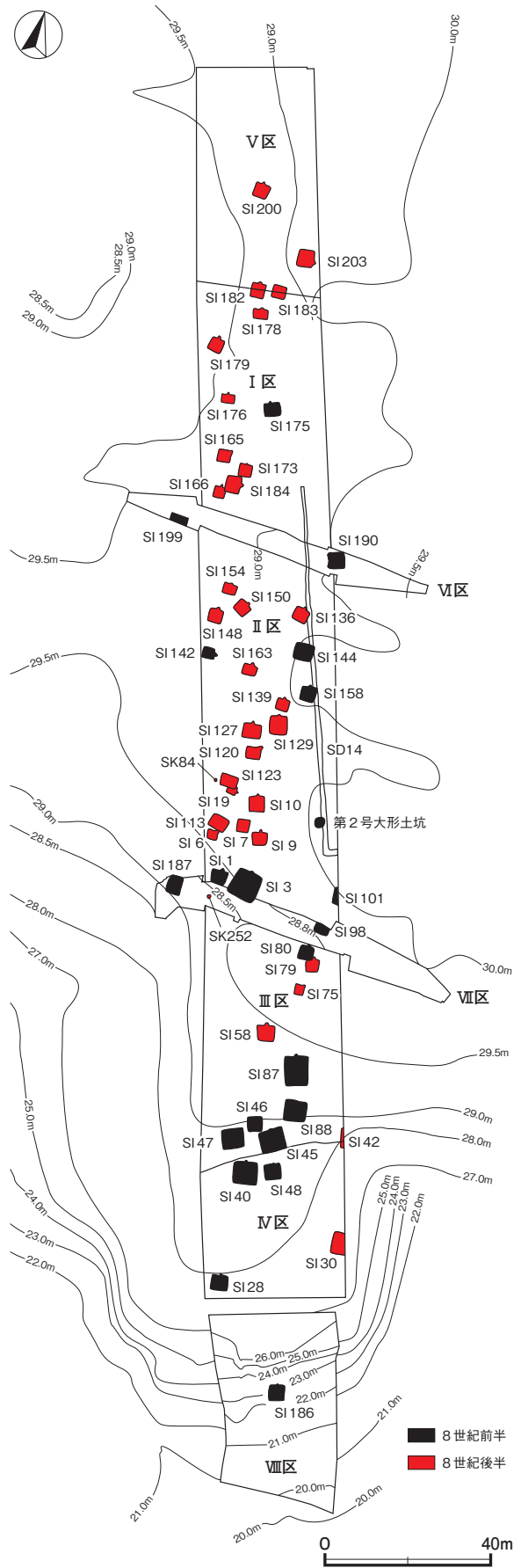
前期の竪穴建物跡は、前回の調査成果を合わせると、4世紀前半が9棟、4世紀後半が5棟の合計14棟と土坑3基である。遺構の占地は、調査Ⅱ・Ⅲ・Ⅶ区の台地先端部付近と、Ⅳ区南側の緩斜面部の2か所にまとまりが見られ、大きくは弥生時代後期の占地と変わらない。前期の竪穴建物跡の特徴をまとめると、平面形は方形あるいは長方形で、規模は大型・中型のものが多く⁶⁾。主柱穴は4か所で、南壁側に出入口施設を有している。床面の中央付近に地床炉が造られ、壁溝や貯蔵穴を有するものが多くなる。今回確認した第196号竪穴建物跡は、8mを超える長方形と推測でき、大型に属する。壁溝はなく、床面中央部に付設された楕円形の地床炉は作り替えられている。貯蔵穴は確認できず、当遺跡の弥生時代後期前葉の竪穴建物跡と類似する形状である。

中期の竪穴建物跡は、5世紀前半が6棟、5世紀後半が7棟の合計13棟である。調査Ⅱ・Ⅲ・Ⅶ区の台地先端部で、前段階よりやや北側に位置する。5世紀前半の竪穴建物跡は主柱穴の配置や施設の有無などが多様であるが、5世紀後半になると平面形が方形で壁溝を有し、4か所の主柱穴と出入口施設、貯蔵穴の配置が定型化していく様子がうかがえる。5世紀後半の7棟の内、2棟でベット状遺構が確認されるとともに、焼土施設に変化が見られ、7棟の内1棟に類竈（第5号竪穴建物跡）、3棟（第13・116・189号竪穴建物跡）に竈が付設されるようになる。今回の調査でも第189号竪穴建物跡において、導入期の竈が確認できた。第189号竪穴建物跡は、南部は確認できなかったが、東西軸が6.8mの中型で、方形の竪穴建物跡である。竈は北壁中央部やや東寄りに設置され、細長い袖部と、壁外にほとんど掘り込みを持たない煙道部が特徴で、前回は調査した第13号竪穴建物跡の竈と類似する。第13号竪穴建物跡では、使用状態がわかるような遺物の出土状況が確認でき、第189号竪穴建物跡では竈廃棄時の祭祀の様子をうかがうことができた。第116号竪穴建物跡は、竈が東壁南寄りに付設され、南東コーナー部に設置された貯蔵穴の周囲には周堤が巡っている。出入口施設は竈と直交する位置の南壁際が想定されており、竈導入期の室内空間の多様性を見ることができ。前回の報告の中で、「茨城県域における竈の導入という点でも、最も古い段階の一群に位置付けることができる。」と指摘されており、今回の事例も貴重な資料となった。また、5世紀後半期は焼失建物跡が多く確認できる点も特徴で、今回の調査成果も合わせると、7棟中6棟で炭化材や焼土が出土している。第189号竪穴建物跡では、床面に少量の炭化材や焼土ブロックが散在し、床面上で出土した高坏や椀などは、数は少ないが残存率もよく、二次焼成を受けている。覆土中には炭化材や焼土がほとんど含まれていないことから、建物の廃棄後、炭化材が生じないほど十分に焼失したか、あるいは焼失後の片付け行為が行われた可能性がある。このことは、焼失率の高さとともに、意図的な火災の可能性を示唆している。

後期の竪穴建物跡は、6世紀前半が1棟、6世紀後半が2棟、7世紀前半が11棟の、合計14棟が確認されている。遺構の占地を見ると、6世紀代は台地中央部の調査Ⅶ区にまとまっている。7世紀代になると、台地先端部、台地中央部、台地北部と、大きく3つのまとまりが見られ、台地上に広く展開している様子が捉えられる。後期の竪穴建物跡の特徴は、中型で、前段階に定型化した形態を踏襲しているが、7世紀代の竪穴建物跡では、貯蔵穴を設置しているものが未確認である点が特徴である。今回確認した6世紀代の竪穴建物跡は、4～6mの中型で、平面形は方形が主体である。壁溝はほぼ全周し、4か所の主柱穴と南壁際に出入口施設が配置されている。竈は北壁中央付近に付設され、第86号竪穴建物跡では竈の主軸が建物跡の主軸に対しやや西に振れている。貯蔵穴は第2号竪穴建物跡に見られるのみで、貯蔵穴の設置が一般化しない点は7世紀代の様相と類似している。第95号竪穴建物跡の覆土中からMT15型式に併行する須恵器坏が出土している。第2・86号竪穴建物跡では、床面や覆土中から小型化した須恵器蓋模倣の土師器坏や長胴化の傾向が推測される土師器甕などが出土しており、6世紀後葉に比定できる。前回の調査では、6世紀代



第 114 図 古墳時代後期の遺構配置図



第 115 図 奈良時代の遺構配置図

の竪穴建物跡が確認できず、中期から後期後半に集落の断絶期の存在が指摘されていたが、今回の調査で当期の竪穴建物跡が確認できたことによって、小規模ながら集落が継続していたことが明らかになった。

5 奈良時代

今回確認した奈良時代の遺構は、8世紀前葉の竪穴建物跡6棟、8世紀中葉の竪穴建物跡1棟、8世紀後葉の竪穴建物跡3棟のほか、8世紀代とだけ捉えられる竪穴建物跡2棟、8世紀後半の土坑1基である。

前半期の竪穴建物跡は、前回の調査成果と合わせると21棟である。台地上の全域に広く展開しており、南部斜面部のⅧ区にも確認できる。竪穴建物跡は中型で方形のものが多く、壁溝は全周している。主柱穴は4か所で、北壁に竈を有し、竈に対峙する壁際には出入口施設を有するものが一般的となる。貯蔵穴が見られない点は前段階と同様で、当遺跡の特徴の一つと言える。第98号竪穴建物跡は、主柱穴が2か所である。第203号竪穴建物跡は主柱穴が見られず、出入口施設のみが確認されており、竈は東壁に付設されている。

後半期の竪穴建物跡は、前回の調査成果と合わせると32棟である。遺構の占地は前段階同様、台地上に広く展開し、より北側（台地奥部）まで分布するようになる。竪穴建物跡の形態は前段階の特徴を踏襲しているが、主柱穴が2か所のもの、及び主柱穴が見られないものが増加し、竈は北壁に設置されるものが主体である。しかし、東壁に付設されるものが1棟、北東コーナー部に付設されるものが4棟に増加する。

以上のように、8世紀代の竪穴建物跡は全部で53棟が確認でき、当集落の最盛期といえる。遺構の分布から、いくつかの単位集団的なまとまりを捉えられそうではあるが、線状の調査区のため、全容を把握できない。特筆される遺物として、8世紀前葉の第186号竪穴建物跡から出土した銅製品（M4）がある。

M4は確認できた長さ3.8cm、幅2.8cmの板状の銅製品で、周囲は欠損し、先端部と側面の一部のみが残存している。残存重量は3.05g、厚さは1mmほどで均一であり、緩やかに弧状にカーブしている。上部に幅1mmほどの貫通孔が3か所確認できるが、本来の機能に由来するものか、劣化によるものかは判断できない。表面には部分的に鍍金の痕跡が認められ、裏面には繊維状の付着物が確認できる。本遺物は斜面部に位置する第186号竪穴建物跡の覆土中層から出土したもので、これを含めた遺物の出土状況から、埋没過程で投棄されたものと考えられる。M4は、形状などから「銅匙」の受部の可能性がある。

「匙」は仏具の一種と考えられており、仏を供養する燈・華・香を基本とした器物や飲食具の供養具の一つで、古墳時代終末期に権威の象徴として地方豪族や有力者の墓に副葬されることもあるが、多くは奈良時代以降の宮都の寺院や、地方の郡家隣接寺院などの仏教関連遺跡で出土している⁷⁾。

7世紀末から8世紀の「匙」は、奈良県東大寺正倉院宝物や法隆寺献納宝物、興福寺金堂の鎮壇具に伝世している⁸⁾。東国における発掘調査での出土例は、東京都武蔵国府関連遺跡や神奈川県平塚市山王A遺跡（相模国府関連遺跡）、茅ヶ崎市下寺尾廃寺・居村B遺跡（下寺尾官衙遺跡群）など、官衙関連遺跡及び仏教関連遺跡から出土する例が確認できる⁹⁾。この頃、郡を管理する役所として郡家が設置され、在地の豪族が郡司に任命され、郡家の近くには郡司が造営した寺院が確認されることが多い。初期の仏教文化の地方への拡散には、「鎮護国家」などの政治的な側面のほか、地方豪族による古墳造営に代わる権力の象徴でもあり、最先端の文物を保持することをアピールするものでもあったと考えられている。

また、古代集落においては仏堂と考えられる遺構が確認されることがあり、一部の集落では村落内の有力者や下級役人、私度僧、庶民らによる「村落内寺院」の運営があったとされている。「村落内寺院」では、竪穴建物跡主体の建物構成の中に少数の掘立柱建物跡が確認され、仏鉢形土器や浄瓶、水瓶、灯明皿、瓦塔などの仏具が出土する¹⁰⁾。集落遺跡から「匙」が出土する遺跡は、周辺地域では、栃木県宇都宮市大志白

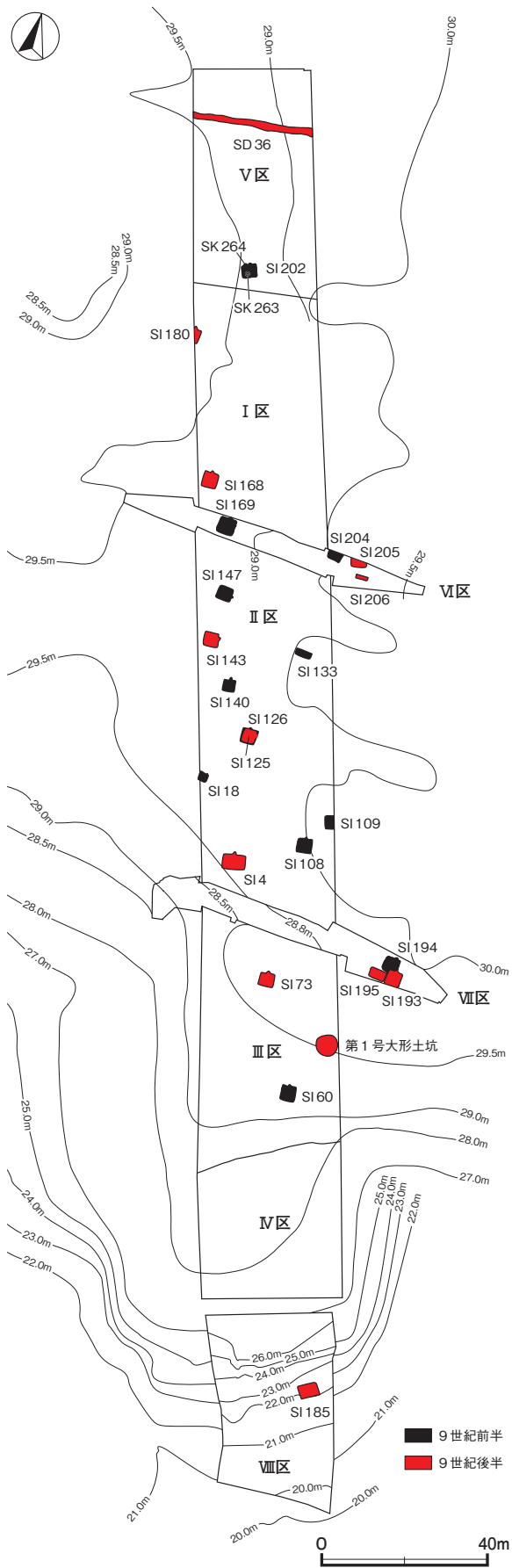
遺跡第 11 号住居跡（鉄製・7 世紀後半）¹¹⁾、同益子町星の宮ケカチ遺跡 A 区 2 号住居跡（銅製・9 世紀後半）¹²⁾、群馬県前橋市松峯遺跡第 62 号住居跡（鉄製・8 世紀後半）¹³⁾、千葉県千葉市高沢遺跡 091 号住居跡（銅製・9 世紀前半）¹⁴⁾、同市原市萩の原遺跡第 4 号柱穴列（青銅製・8 世紀後半）¹⁵⁾、同袖ヶ浦市永吉台遺跡群西寺原地区第 26 号住居跡（鉄製・9 世紀後半）¹⁶⁾、神奈川県川崎市宮添遺跡 16 b 号住居跡（鉄製・9 世紀前半）¹⁷⁾ などが確認されている。

当遺跡では、古代の掘立柱建物跡は確認されていないが、前回の調査では灰釉陶器（折戸 10 号窯段階）の水瓶（第 120 号竪穴建物跡）、灯明をあげるために使用されたと考えられる坏（第 6 号竪穴建物跡）・高台付坏（第 127 号竪穴建物跡）、供物を供えるための器として使用されたと考えられる三足盤（第 123 号竪穴建物跡）などの仏教関連遺物が出土している。また、墨書土器の中に「寺」（第 9・127 号竪穴建物跡）、「上寺」（第 127 号竪穴建物跡）、「佛」（第 139 号竪穴建物跡）、「光」（第 120・139 号竪穴建物跡）、「千万」（第 19 号竪穴建物跡）など、仏堂的な建物の存在を推測させるものや吉祥語と思われるものが多いことなどから、「村落内寺院」の存在が示唆されている。7 世紀後半から 8 世紀代に機能していた第 14 号溝についても、部分的な確認ではあるものの、南北方向に 100 m ほど延びており、方形に区画していると推測されることから、仏堂に関連するものと想定されている。今回の調査では、仏教関連遺物や墨書土器は確認できなかったが、「匙」の可能性のある銅製品の確認は、当遺跡に「村落内寺院」が存在した可能性を補強する資料になると思われる。ただし、古代集落内では、特に仏堂施設等が見当たらなくても仏教系遺物が出土する遺跡もあり、集落内の小規模な祈りの場や僧侶の住宅、儀式に伴う仏具の持ち込み、集落内の有力者宅内の仏事に関わる遺物である可能性もある¹⁸⁾。今回の出土資料は、破片のため可能性の域を出ないが、8 世紀前半という当地域ではかなり早い段階に、一般集落への仏教信仰の普及がある程度進んでいたことがうかがえる事例と考えられる。

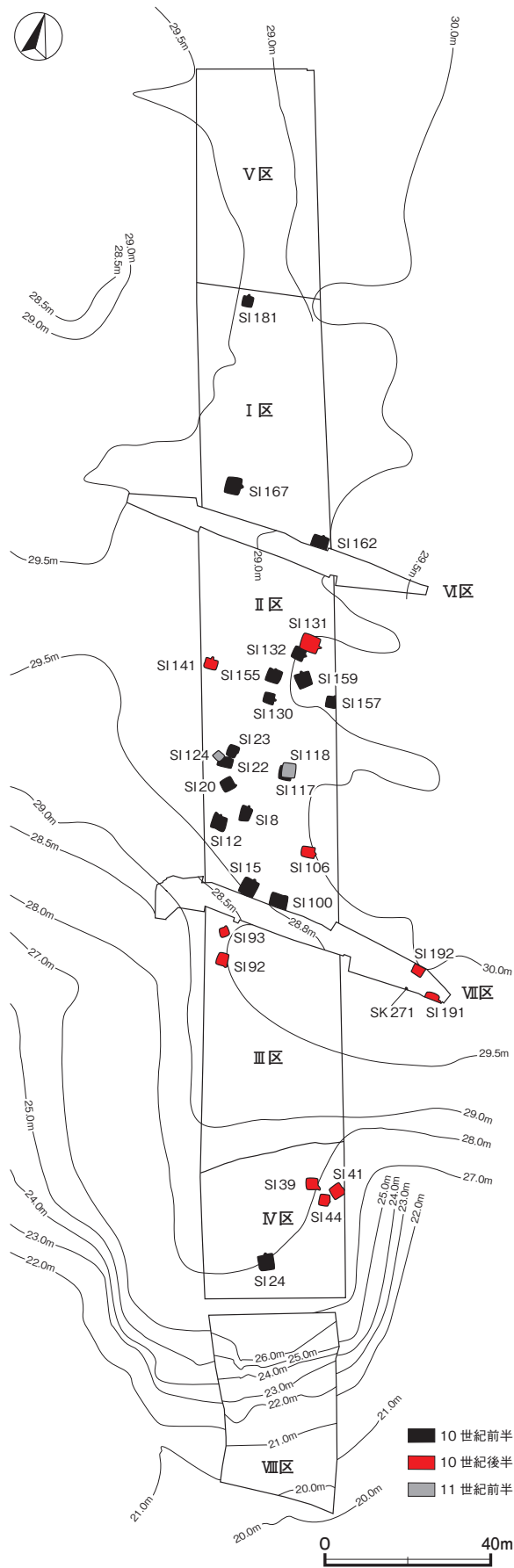
6 平安時代

今回確認した平安時代の遺構は、9 世紀前葉の竪穴建物跡 3 棟、土坑 2 基、9 世紀中葉の竪穴建物跡 5 棟、9 世紀後葉の竪穴建物跡 1 棟、溝跡 1 条、10 世紀前葉の土坑 1 基、10 世紀中葉の竪穴建物跡 2 棟である。

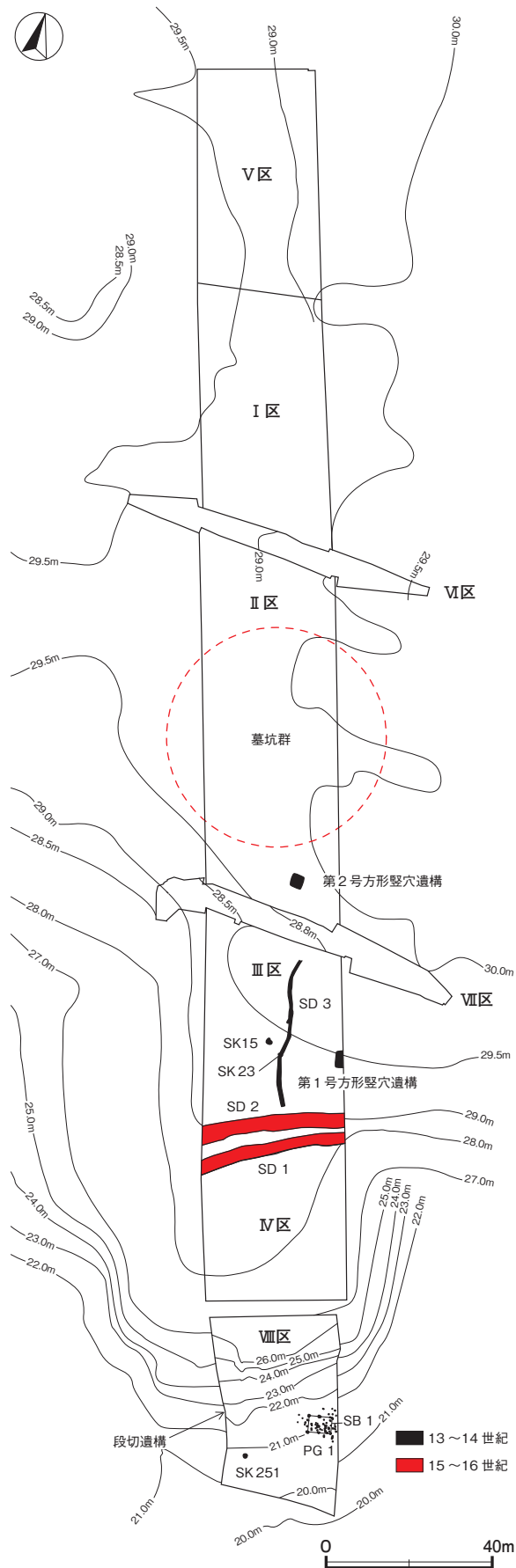
前回の調査成果と合わせると、9 世紀前半の竪穴建物跡は 12 棟、9 世紀後半の竪穴建物跡は 11 棟である。これらは台地上の全域に広く展開しており、斜面部にも確認できるが、8 世紀代に比べると遺構の分布密度は低くなっている。竪穴建物跡の特徴は、中型で方形のものが多いが、8 世紀代に比べると小型化している傾向がある。多くが壁溝と、竈と対峙する壁際に入出口施設を有する。主柱穴は 4 か所のもの、2 か所のもの、確認できないものなどがあり、小型化するにつれて、主柱穴が少なくなる傾向がある。貯蔵穴はほとんどのものに確認できず、前段階の特徴を踏襲している。竈は北壁に付設されるものが多いが、東壁中央部や東コーナー部に付設されるものが増加する。今回調査した第 193 号竪穴建物跡も含めて、棚状施設を有するものが 3 棟で確認できた。第 195 号竪穴建物跡は、長軸 3.80 m の長方形で、北東コーナー部に竈の痕跡が認められるものである。本遺構は、床面の中央部が火熱により赤変硬化している点と、竈周辺に火熱を受けて赤変した約 25cm の雲母片岩製の大型砥石が確認されている点から、何らかの作業場的な施設の可能性がある。また、調査区北端の台地中央部で、調査区を横切るように第 36 号溝跡が確認できた。幅約 1 m、深さ約 50 cm の断面形が U 字状の溝で、9 世紀代の土器片が覆土中から多量に出土している。覆土の堆積状況からは水の流れたような痕跡はなく、集落の北端に位置すること、及びこれより北側では遺構や遺物も見られないことなどから、当集落を区画する溝である可能性がある。



第 116 図 平安時代前期の遺構配置図



第 117 図 平安時代後期の遺構配置図



第118図 鎌倉時代の遺構配置図

10世紀前半に比定できる竪穴建物跡は、前回の調査で17棟確認されており、9世紀後半よりやや分布密度が高くなり、台地中央部に集中している。竪穴建物跡はより小型化が進み、それに伴い主柱穴は少なくなる傾向にある。竈は北壁に付設されるものが多いが、東壁及びコーナー部に付設されるものが増加する。また、棚状施設を付設するものが3棟、貯蔵穴を付設するものが3棟ある。

10世紀後半の竪穴建物跡は、今回の調査で2棟確認でき、前回の調査成果と合わせると10棟になる。小型化の傾向は変わらず、平面形は方形のほか、長方形のものが増える傾向がある。主柱穴の配置や竈の付設位置などは、前段階と同様で、貯蔵穴を付設するものが5棟確認できるなど、10世紀代に貯蔵穴の付設率が高くなる点が特徴である。棚状施設は1棟で確認できる。第191号竪穴建物跡は、東壁に竈を付設しているが、竈の支脚に加工痕のない自然石をそのまま利用している。当遺跡では全体的に支脚の使用が低調であり、8世紀前半の第40・87・98・158号竪穴建物跡で、土製支脚が出土している以外は確認できない。また、竈の構築についても、袖の芯材や補強材等はほとんど用いられていない傾向がある。

11世紀代の遺構は、前回の調査で竪穴建物跡が2棟確認されているのみであり、壁溝・主柱穴・貯蔵穴・竈がなく、床面中央部に炉跡が確認されるのみとなる。その調査報告からは、囲い炉的な、上部構造を伴う炉が付設されたとしており、建物構造や火処の設置等に大きな変化がうかがえる。

7 鎌倉時代以降

13世紀代の遺構としては、調査VIII区の南面する斜面部に掘立柱建物跡1棟、土坑1基、ピット群1か所を確認した。この時期になると、確認できる遺構は激減し、台地上でも前回の調査で、方形竪穴遺構2基、土坑2基、溝跡1条が確認できたのみである。第1号掘立柱建物跡は、桁行2間、梁行1間の簡易的な建物跡である。これと重複する第1号ピット群は、建物跡は想定できなかったが、ピット数か所が並ぶように位

置ることから、何らかの構造物の存在が想定される。これらは、斜面中位の傾斜が急激に緩やかになる平坦部に位置しており、この平坦部を人為的に形成された段切遺構と判断した。段切遺構の時期は、伴う遺物がなく明らかにできなかったが、平坦部に13世紀後半の遺構が存在することから、13世紀代に構築されたと考えられることもできる。平坦部にはこのほかに、土師質土器小皿がまとまって出土した第251号土坑がある¹⁹⁾。それぞれの遺構の性格を明らかにすることは難しいが、この時期の前後に、地形を改変して生活域を確保し、低地面に進出している様子が見えてくる。

15世紀から16世紀には、前回の調査で、台地中央部に墓壇と堀跡が確認されている。その後は19世紀後半以降に斜面を利用した炭窯が造られている程度で、他に生活の痕跡を確認することができなくなる。

8 おわりに

以上、明石遺跡の竪穴建物跡の分布と特徴を中心に再確認し、明石遺跡の集落構造を検討した。当遺跡では後期旧石器時代に生活痕跡が認められはじめ、縄文時代草創期や早期には狩猟場として利用されている。本格的に集落が営まれるのは弥生時代後期前半からで、桜川中・下流域に大型古墳が築造される基盤となったものと考えられる²⁰⁾。古墳時代前期から後期にかけて、集落は弥生時代後期とほぼ同規模のまま継続されるようである。前回の調査では6世紀代に集落の断絶期が推定されたが、今回の調査で当期の竪穴建物跡を確認し、継続した集落設営が確認できた。奈良時代に入ると遺構が急増し、且つ台地上に広域に展開し、集落の最盛期を迎える。水瓶や匙の可能性のある銅製品、「寺」の墨書土器などの仏教関連遺物が出土しており、「村落内寺院」の存在も示唆され、奈良時代でも早い段階に、仏教の民間へのある程度の普及が考えられる事例といえる。また、8世紀前半には径2.5m、深さ1.96m、9世紀後半には径5.5m、深さ2.48mの大型土坑が1基ずつ確認されている。多量の遺物とともに馬歯が出土している点から、祭祀的な意味合いを持つ土坑と考えられているが、同様な土坑はつくば市島名熊の山遺跡や阿見町小作遺跡²¹⁾など、各郡内の中心的な集落で確認されるようである。限られた調査区域内での推測ではあるが、当遺跡においては竪穴建物跡は多数確認される一方、掘立柱建物跡は確認できない点など、官衙的な要素は顕著ではない。しかし、通時的な遺構の存在と希少な遺物の出土から、当遺跡が筑波郡諸蒲（すがま）郷の中心的な集落であった点はまちがいないものと考えられる。当遺跡が盛行するのは10世紀代までで、その後は墓域などとして利用され、江戸時代以降は製炭作業などが行われた山谷となる。

当遺跡の調査は、道路新設によるため、台地上に広がる明石遺跡のほぼ中心をトレンチ状に切り取ったにすぎない。全容を推し量るには不十分であるが、集落の大きな流れと画期は捉えることができたと思う。今回は調査成果の確認に留まったが、社会・政治情勢をふまえた上で、古代の「郷」内における中心的な集落の在り方や、集落内の単位集団の把握など、周辺遺跡の検討も含めて今後の課題としたい。

註

- 1) 寺門千勝 大関武「主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書 明石遺跡 明石北原遺跡 上白畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第164集 2000年3月
- 2) 弥生時代以降の細別時期の比定について、本報告では1世紀を前葉・中葉・後葉の3段階に、前回の報告では第1～4四半期の4段階に区分しているが、ここでは集落変遷を確認することが目的であることから、前半・後半の2段階に区分した。また、大別時期のみで細別時期が不明のものについては、集計から除外している点を了解されたい。
- 3) 中村信博「関東の溝型陥し穴盛行期に見られる二つの配置形態」『栃木の考古学』塙静夫先生古希記念論文集「栃木の考古学」刊行会 2003年11月

- 4) 稲田義弘「新善光寺跡 穴戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第256集 2006年3月 後期後半の新善光寺跡第7号住居跡で確認できる。また第1号竪穴住居跡は、古墳時代前期初頭に比定されるが、同様の支柱穴の形状を呈している。
- 5) 寺内久永「千天遺跡 主要地方道大洗友部線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第384集 2014年3月 後期後半（十王台1式期）に比定されている第8・11・15・18・19号竪穴建物跡で確認できる。
- 6) 竪穴建物跡の規模は、長軸方向が7～8m級を大型、4～6m級を中型、4m以下を小型とし、奈良時代・平安時代の竪穴建物跡についても同様の基準で分析した。
- 7) 神奈川県教育委員会・神奈川県立歴史館・茅ヶ崎市教育委員会『発掘された御仏と仏具－神奈川の古代・中世の仏教信仰－』2014年12月
- 8) 上野川勝「宇都宮丘陵における古代の開発と生産の展開－律令期における山の住居の出現と消滅－」『唐澤考古』23 唐澤考古学会 2004年5月 正倉院南倉には、佐波理匙345枚が伝世している。また興福寺金堂の鎮壇具には、金延板・金塊・砂金・和同開珎・各種の金銅製品とともに、銀製匙2点がおさめられていた。
- 9) 註7に同じ。
- 10) 註7に同じ。
- 11) 上野川勝・茂木孝行・穴澤義功他『大志白遺跡群発掘調査報告書（古代・中近世編）』河内町教育委員会 2000年3月 大志白遺跡は、鍛冶工房跡や池跡などを伴う律令期の集落で、丘陵地における開発・生産に関わる集落と考えられている。鉄製匙は、現存最大長16.2cm、柄部長11.2cm、受部長5.0cm、受部幅3.3cm、受部厚3mmである。
- 12) 川原由典他『星の宮ケカチ遺跡』益子町教育委員会 1978年3月 星の宮ケカチ遺跡は、石帯や水晶製品、墨書土器が出土しており、富豪層の集落と見られている。鉄製匙は、現存最大長21.2cm、柄部長16cm、受部長5.2cm、受部幅3.2cm、受部厚1.5mmである。
- 13) 中澤充裕ほか『松峯遺跡発掘調査報告書』前橋市教育委員会 1982年3月 松峯遺跡第62号住居跡は、完形の奈良三彩の小形壺や「宅」と墨書された坏などが出土している。鉄製匙は2点出土しており、一つは現存長10.0cm、柄部長4.8cm、受部長5.1cm、受部幅4.6cm、受部厚3mm、他の一点は受部のみの残存で、残存受部長5.2cm、受部幅3.2cm、受部厚2.5mmである。
- 14) 佐久間豊他『千葉東南部ニュータウン17－高沢遺跡－』財団法人千葉県文化センター 1990年3月 高沢遺跡は、竪穴建物跡が主体の集落跡で、第091号住居跡から出土した銅製匙は、受部の一部のみである。
- 15) 千葉県文化財センター「古代仏教遺跡の諸問題－重要遺跡確認調査の成果と課題1－」『研究紀要』18 1997年9月 萩の原遺跡は、基壇建物跡と大型の掘立柱建物跡を中心とした寺院跡である。青銅製匙は平安時代の遺物とされている。
- 16) 笹生衛他『千葉県袖ヶ浦市永吉台遺跡群』財団法人君津郡市文化財センター 1985年3月 永吉台遺跡群西寺原地区は竪穴建物跡や小規模な掘立柱建物跡からなる集落で、仏堂と考えられる3間4面の掘立柱建物跡が確認されている。鉄製匙は9世紀後半の竪穴建物跡から出土しており、現存最大長8.8cm、柄部長4.3cm、受部長4.0cm、受部幅2.6cm、受部厚1mmである。
- 17) 玉口時雄他『川崎市麻生区黒川地区遺跡群報告書Ⅶ』黒川地区遺跡調査団 1995年3月 宮添遺跡は、竪穴建物跡主体の集落内に、側柱建物跡が1棟確認され、その周囲から瓦塔の破片や「寺」の墨書土器、浄瓶、仏鉢形土器、水瓶、鉄製匙が出土している。鉄製匙は9世紀前半の竪穴建物跡から出土しており、現存最大長9.1cm、柄部長2.6cm、受部長6.2cm、受部幅3.5cm、受部厚3mmである。
- 18) 註7に同じ。
- 19) 川村満博「茨城県内出土の非ロクロ成形かわらけ編年案」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集－』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年3月
- 20) 滝沢誠「桜川流域の古墳と古代の筑波－筑波のクニの考古学－」（巡回企画展「つくばの地形と歴史」記念講演会資料）つくば市教育委員会 2015年12月
- 21) 小島敏他「（仮称）島名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第133集 1998年3月 ほかにも『第166集』『第280集』などで8基ほど報告されている。
清水哲 舟橋理「小作遺跡 主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第346集 2011年3月 このほか稲敷市神屋遺跡やつくば市下平塚蕪木台遺跡からも同様の大型円形土坑が確認されている。

写 真 图 版



明石遺跡出土土器

調査区遠景
(南から)



調査区遠景
(北から)



調査Ⅷ区全景
(上空から)



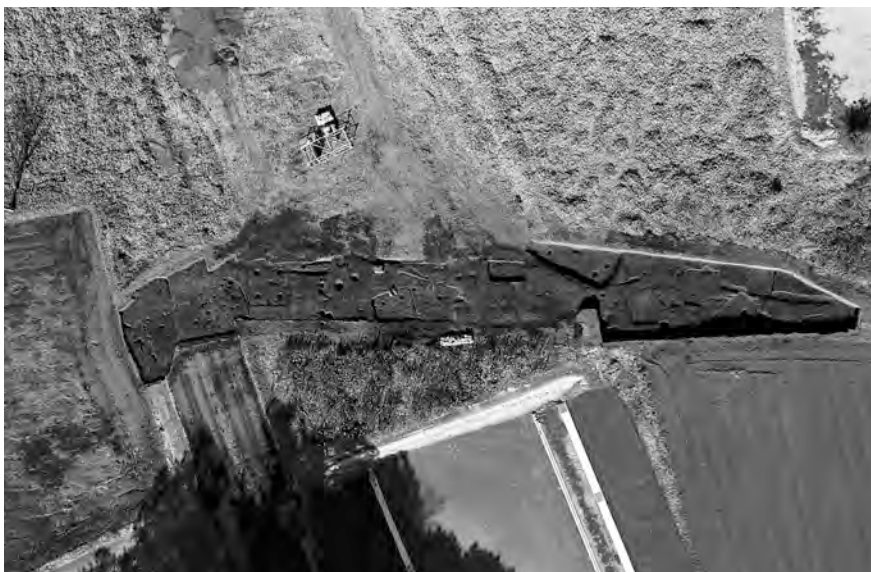
PL2



調査Ⅴ区全景
(上空から)



調査Ⅵ区全景
(上空から)



調査Ⅶ区全景
(上空から)



第6・7号陥し穴完掘状況



第9号陥し穴完掘状況



第10号陥し穴完掘状況



第11号陥し穴完掘状況



第12号陥し穴完掘状況



第246号土坑遺物出土状況



第247号土坑遺物出土状況



第263号土坑遺物出土状況

PL4



第135号竖穴建物跡
完掘狀況



第198号竖穴建物跡
完掘狀況



第2号竖穴建物跡
完掘狀況

第86号竖穴建物跡
完掘状況



第95号竖穴建物跡
完掘状況



第138号竖穴建物跡
完掘状況





第138号竖穴建物跡遺物出土状況



第189号竖穴建物跡遺物出土状況



第189号竖穴建物跡竈遺物出土状況



第189号竖穴建物跡竈遺物出土状況



第196号竖穴建物跡遺物出土状況



第199号竖穴建物跡遺物出土状況



第199号竖穴建物跡遺物出土状況



第191号竖穴建物跡竈遺物出土状況

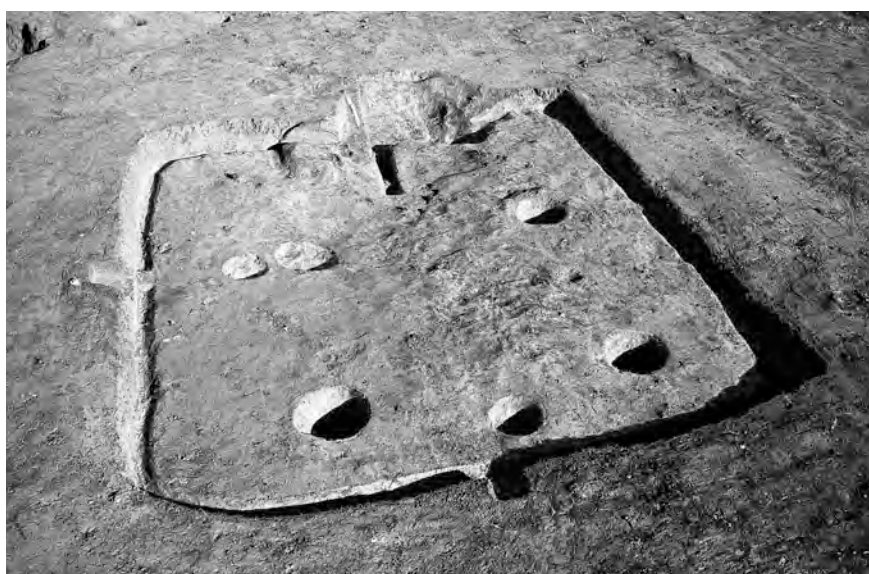
第189号竖穴建物跡
完掘状況



第196号竖穴建物跡
完掘状況



第182号竖穴建物跡
完掘状況



PL8



第186号竖穴建物跡
完 掘 状 況



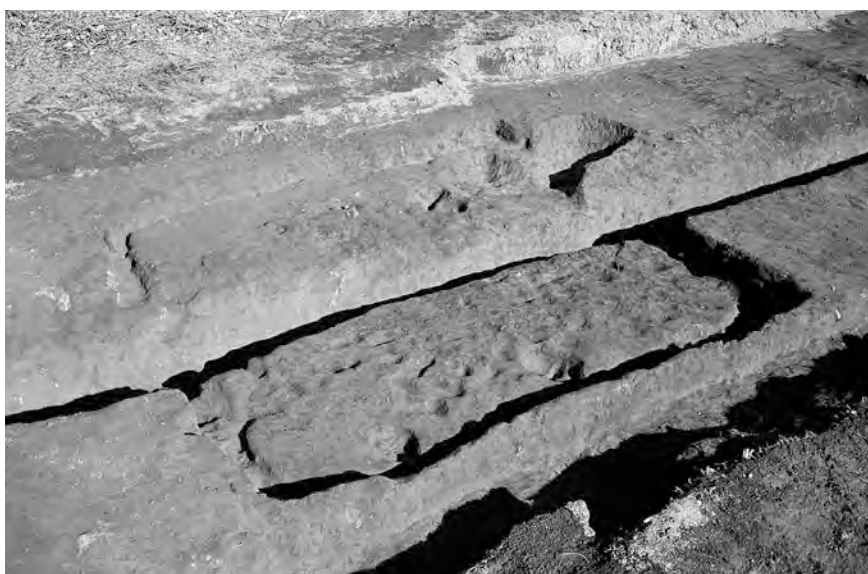
第199号竖穴建物跡
完 掘 状 況



第200号竖穴建物跡
完 掘 状 況



第203号竖穴建物跡
完掘状況



第169号竖穴建物跡
完掘状況



第191号竖穴建物跡
完掘状況

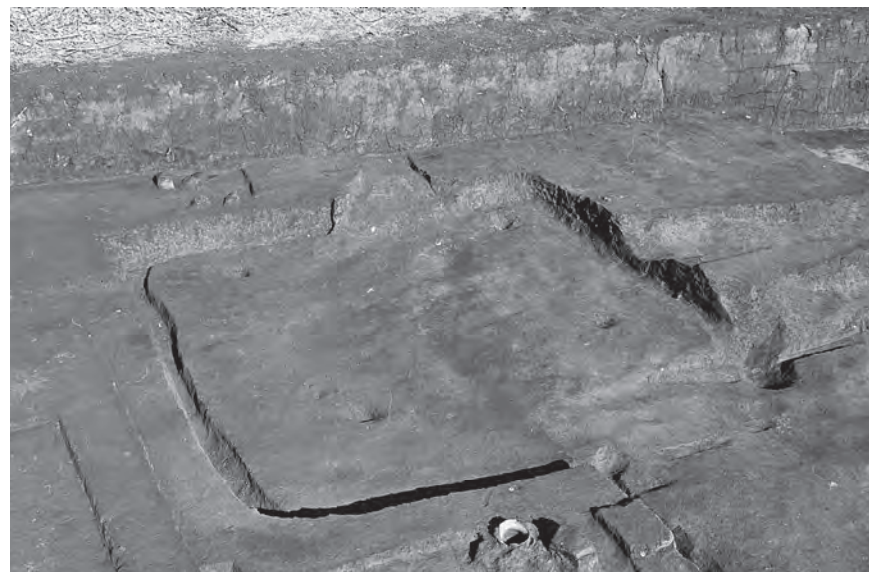
PL10



第192号竖穴建物跡
完掘狀況



第193号竖穴建物跡
完掘狀況



第194号竖穴建物跡
完掘狀況

第195号竖穴建物跡
完掘状況



第201号竖穴建物跡
完掘状況



第202号竖穴建物跡
完掘状況



PL12



第204号竖穴建物跡
完掘状況



第205号竖穴建物跡
完掘状況



第206号竖穴建物跡
完掘状況



第200号竖穴建物跡遺物出土状況



第200号竖穴建物跡竈遺物出土状況



第192号竖穴建物跡遺物出土状況



第192号竖穴建物跡焼土確認状況



第193号竖穴建物跡遺物出土状況



第195号竖穴建物跡遺物出土状況



第201号竖穴建物跡竈遺物出土状況



第202号竖穴建物跡遺物出土状況

PL14



第190・204号竖穴建物跡完掘状況



第1号掘立柱建物跡完掘状況



第29号溝跡完掘状況



第36号溝跡完掘状況



第30～35号溝跡完掘状況



第1号炭窯跡完掘状況



第5号炭窯跡炭化材出土状況



第1号道路跡完掘状況

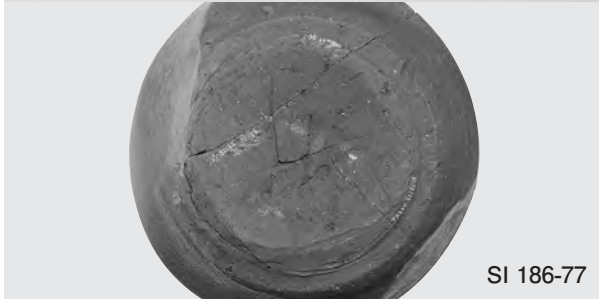


第189·196号竖穴建物跡，第246·247号土坑出土土器

PL16



第98・186・189号竖穴建物跡出土土器



第186・187・199・200号豎穴建物跡出土土器

PL18



第191・192・199・200・203号竖穴建物跡出土土器

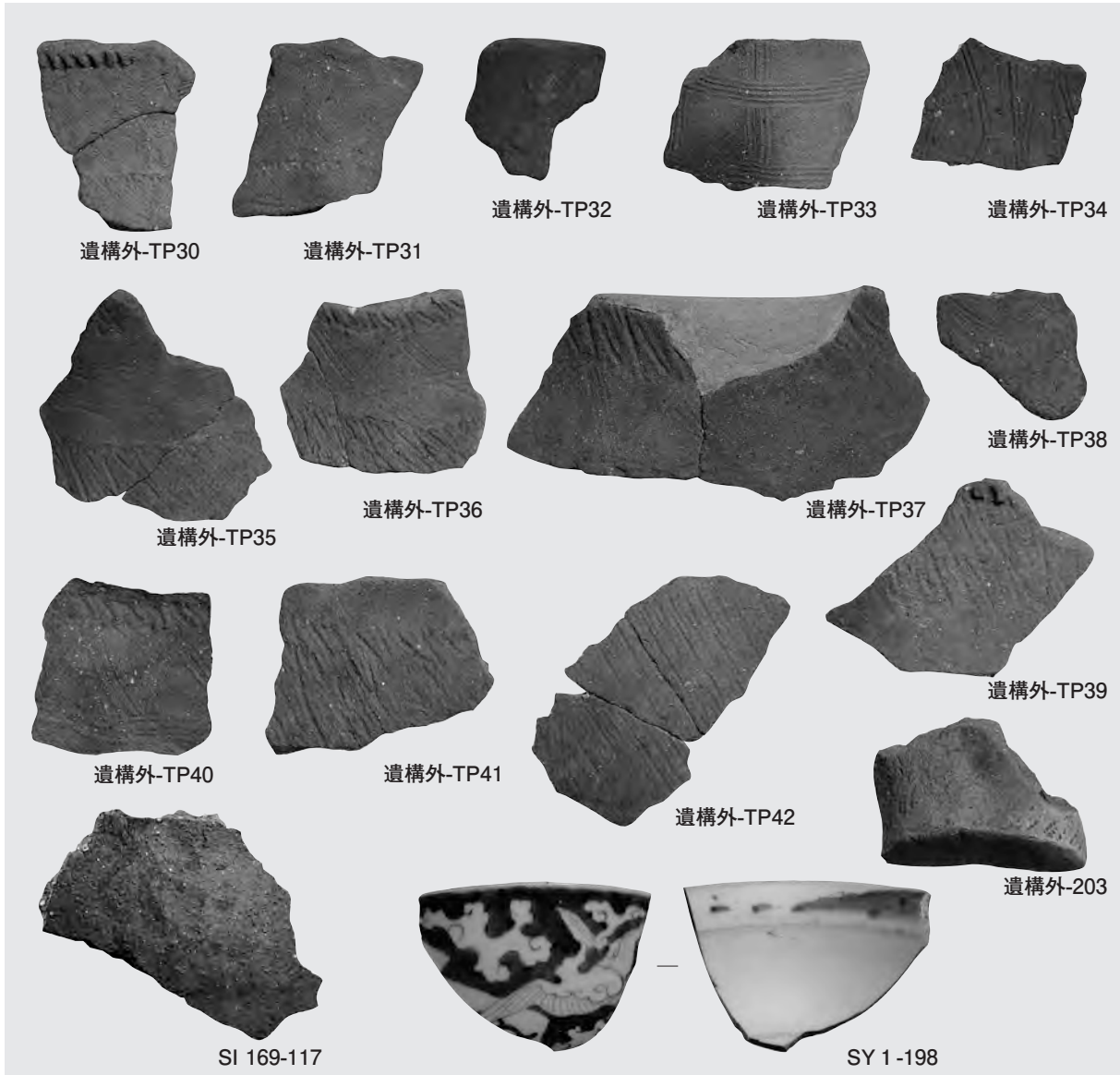


第192~195・204・205号豎穴建物跡出土土器

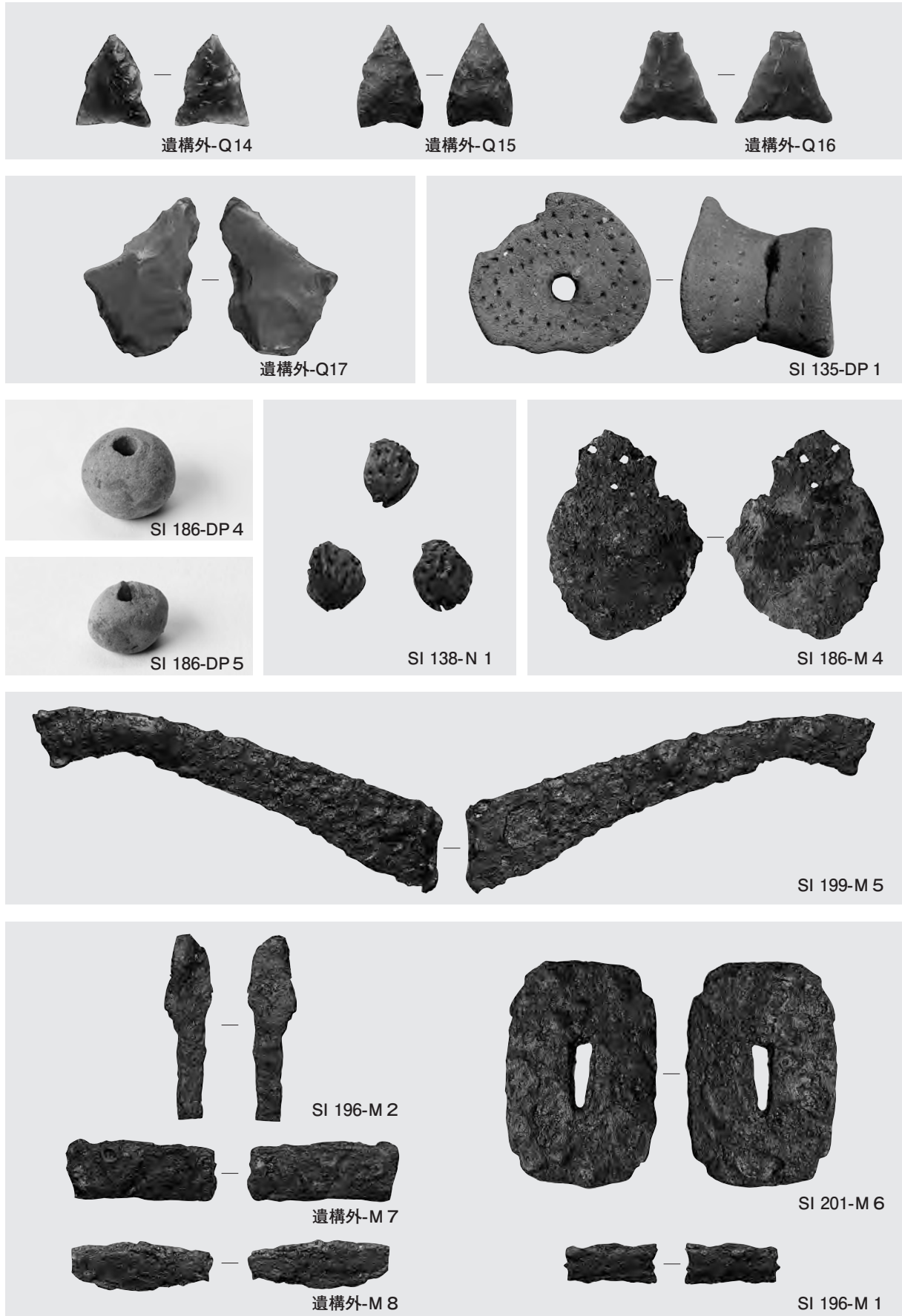
PL20



第135・198号竖穴建物跡，第1号掘立柱建物跡，第251号土坑，遺構外出土土器



第169・193～195号竖穴建物跡，第1号炭窯跡，遺構外出土遺物



第135・138・186・196・199・201号竖穴建物跡，遺構外出土遺物

抄 録

ふりがな	あけしいせき2								
書名	明石遺跡2								
副書名	主要地方道つくば真岡線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第413集								
著者名	江原美奈子								
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行日	2016(平成28)年3月18日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
明石遺跡	茨城県つくば市 明石686-2番地 ほか	08220 - 171	36度 10分 50秒 (36度 11分 02秒)	140度 03分 24秒 (140度 03分 13秒)	20 ~ 30m	20121001 ~ 20121031 20131101 ~ 20140131	1,365㎡ 2,038㎡	主要地方道つくば真岡線バイパス整備事業に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
明石遺跡	狩猟場	縄文	陥し穴 9基						
	集落跡	弥生	堅穴建物跡	2棟	弥生土器(広口壺), 土製品(紡錘車)				
		古墳	堅穴建物跡	6棟	土坑 2基	土師器(坏・碗・埴・器台・高坏・鉢・壺・甕・甑), 須恵器(坏), 土製品(支脚 _カ), 鉄製品(刀子・鏃)			
	鎌倉	奈良	堅穴建物跡	12棟	土坑 1基	土師器(坏・甕), 須恵器(坏・蓋・甕), 土製品(土玉), 石器(砥石), 鉄製品(鎌), 銅製品(匙 _カ)			
		平安	堅穴建物跡	12棟	土坑 3基	土師器(坏・碗・鉢・甕・甑), 須恵器(坏・蓋・盤・短頸壺・甕・甑), 石器(砥石), 石製品(支脚)			
	江戸	鎌倉	掘立柱建物跡	1棟	土坑 1基	土師質土器(小皿)			
		江戸	炭窯跡	3基	ピット群 1か所	磁器(碗), 石製品(五輪塔)			
	その他	時期不明	堅穴建物跡	1棟	炭窯跡 2基	弥生土器(広口壺), 石器(搔器・鏃・磨石), 石製品(五輪塔), 鉄製品(刀子 _カ ・鎌 _カ ・鐔)			
溝跡			23基	17条					
道路跡			3条						
段切遺構			1か所						
ピット群			2か所						
要約	旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。当遺跡は弥生時代後期前半から本格的に集落が営まれ、奈良時代に最盛期を迎える。村落内寺院の存在も示唆され、古代筑波郡諸蒲(すがま)郷の中心的な集落であったと考えられる。								

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Professional ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS4
	図版作成	Adobe Illustrator CS4
	写真調整	Adobe Photoshop CS4
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
	図面類	RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第413集

明石遺跡 2

主要地方道つくば真岡線バイパス整備事業
地内埋蔵文化財調査報告書

平成28(2016)年 3月15日 印刷

平成28(2016)年 3月18日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社高野高速印刷

〒310-0853 水戸市平須町1822-122

TEL 029-305-5588